

# もう一人のサイヤ人が 桃白白の弟子になる話

麻寿津士

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

悟空以外にもう一人、サイヤ人が地球にたどり着いて、桃白白に拾われたらという話。

▼桃白白と鶴仙人中心に捏造かなり多いです。二人とも丸くなるかも。▼アニメと原  
作、ゲームの設定が混ざっています。一応原作沿いの予定です。

# 目次

プロローグ								
序 月夜の怪猿								
序二 鶴仙人と桃白白								
序三 フレイと鶴仙流								
レツドリボン軍編								
其之一 ジングル村のフレイ	—							
其之二 いどめ！マツスルタワー		—						
27								
其之三 ムラサキ曹長の誤算	—	33						
其之四 怒れる総帥！狙われた二人								
43								
其之五 南の島の亀仙人								
50								
其之六 フレイと鶴仙人								
其之七 海賊たちの洞窟								
其之八 遣された番人								
其之九 対決！ブルー將軍！								
幕間 ジャングルの修行								
其之十 決着！ブルー將軍								
其之十一 恐るべき男								
其之十二 とある二人組								
其之十三 聖地の番人								
其之十四 超聖水、そして保護者								
129								
其之十五 強いぞ！桃白白！								
146	139							
其之十六 願い事一つ								
122	113	104	96	88	80	73	65	58

其之十七 お待ちかねのお説教

154

幕間 戰場にて

ピッコロ大魔王編

其之十八 鶴仙流の弟子

其之十九 餃子と鶴仙流

其之二十 大会前夜

其之二十一 天津飯

其之二十二 孫悟空ＶＳフード

201

其之二十三 大勝利！天下一武道会！

其之二十四 武道会の後で

221 210

其之二十五 武泰斗の弟子

248

其之二十六 龜仙人と鶴仙人

241 230

其之二十八 毒か秘薬か超神水

258

其之二十九 恐怖！ピッコロ大魔王

266

其之三十 処刑開幕・戦闘開始

274

其之三十一 大魔王のフルパワー

其之三十二 300年の勝利

291

其之三十三	もう大丈夫			其之四十二	恐怖と矜持		
幕間	つかの間の平和			其之四十三	ピツコロとフーアの秘策		
其之三十四	一難去つて			其之四十四	霹靂		
其之三十五	また一難			其之四十五	目指せ界王星		
其之三十六	天津飯の夢			其之四十六	銀の弾丸		
其之三十七	私を天まで連れてつて			幕間	ランチと鶴仙人		
335				其之四十七	信用と信頼		
其之三十八	殺の師弟			其之四十八	遊戯開催・戦闘開始		
サイヤ人襲来編				433			
其之三十九	故郷からの使者			425	416	408	399
其之四十	悟空の生まれ、フーアの由	349		416			
來				408			
其之四十一	共闘	366	357	408			
其之五十	作戦と思い付き	447	440	399	391	383	375

其之五十一 ばいばい拳

—

其之五十二 覚悟の差

—

其之五十三 勝利のために

—

其之五十四 手がかり

—

其之五十五 薄氷を踏む

—

其之五十六 宇宙の話をしよう

496 487 476 466 457

505

其之五十七 部隊編成

—

幕間 踊る阿呆ども

—

幕間 教えて！鶴先生！

—

其之五十八 ドロップ・オア・ベット

—

541

531 523 514

# プロローグ

## 序 月夜の怪猿

「な、なんだ…あれは……」

桃白白は世界一の殺し屋としてのプライドも武道家としての自負も忘れ、ただ茫然と目を見開きぽかんと口を開けた。

こうこうと光る眩いほどの満月が、ビルほどもある巨大な怪物の姿をどこまでも鮮明に浮かび上がらせる。

毛むくじやらの体と長い尻尾、毛の無いつるりとした顔と手足は、確かにどうみてもサルの類だった。

不気味に赤々と燃えるように輝く瞳と鋭く突き出た牙は、その顔つきを恐ろしく粗暴なものにしている。

大の大人一人分はありそうな拳をふるたび、硬い岩の崖は崩れ、砕け、こんもりとした土山になる。

だんだんと足を踏み鳴らせば重機でならしたような、なだらかで平らな不毛の地が出来上がる。

咆哮は車ほどもある氣弾となり、着弾した一帯は更地と化す。あたりに広がる荒野はこうして作られたものだと嫌でも気づかされ、度肝を抜かれた。

思わずぐくりと生唾を飲み込み、息を整えようとする。

冷たい汗が一筋背中を伝つた。

桃白白が元々この地を訪れたのは、「化け物を退治して欲しい」という依頼を受けたからだ。

いつもの唸るほど金だけは持つてゐる悪党たちと違い、今回の依頼人は近隣の善良な村人たちだった。

周囲の村々から根こそぎかき集めただらう1億ゼニーを見たときから、ある程度の脅威を予想はしていた。

無力な集団から捧げられたそれは、単純な対価ではなく、覚悟の表れに他ならなかつたからだ。

「まさかこれほどとはな……」

岩陰に隠れ様子を窺いながら、いつこの岩も石ころになるかわからない、と眉をひそめた。

勝てない、とは思わない。しかし真正面からやり合えばただでは済まないだろう。

グレネードランチャーでも持つてくれば別だろうが、生憎今は持ち合わせがない。中途半端な手りゆう弾では悪戯に注意を引くだけだ。

生き物としての作りが余りにも違ひすぎる。

僅かな手の震えを感じ、どつと心臓がなつた。

もしかすると人生初めての怯えに近い衝撃を感じ、汗ばんだ手を握り締める。やみくもに手を出せない相手ならば、やるべきことはまず観察だ。

よく見れば動きは酷く単純で直線的であり、隙だらけだつた。

いわば狂暴な獣でしかなく、武術に通じるような洗練された技術は何も感じられない。

攻撃も避けるのは難しくないだろうが、如何せん範囲が広すぎる。

そんな風に殺す算段を立てはじめたところで、

バチリ

と、目が合つた。

「チツ」

舌を鳴らし、その場から飛びのく。

(気配は消しているつもりだつたが、野獣の勘と言つたところで)  
やみくもに振り回された腕の、裂くような暴風が肌に当たる。

ドスドスと緩慢にも見える動きで近づき、手を伸ばしてくる。

大きい分動作は読みやすいが、一挙一動も当然大きい、距離はだんだんと縮まり始めている。

(いつそここで仕掛けるか)

雨が近いのか分厚い雲がにわかに立ち込め、空を隠す。

昼間のように降り注いでいた月光が遮られると、まとわりつくような夜闇が辺りを包む。

指先に込められた気が、ライターのように仄かに淡く光る。

「どどん波——!!」

雷のような鋭い一閃が突き刺さるように放たれ——虚空へ吸い込まれた。

「何イ!?

避けられたわけではない。それどころか大猿の動きは硬直している。

いや、既に大猿と呼べる大きさではなかつた。

ぽつぽつと振り始めた雨の中、溶けるように怪物はみるみるうちに縮んでいく。

「どういうことだ……?」

警戒しながら近づくと、大猿がいたはずの場所には小さな肌色の塊がうずくまつてい る。

それは、どこからどうみても、殆ど赤ん坊に近い幼い子供だつた。

怪物の姿など影も形もない。ただ、そうであつたと主張する様な長い尻尾がくるりと体に巻き付いているだけ。

「……」

雨に打たれながらすやすと眠る子供を眺め、桃白白はじっくりと考えた。

じつくりと顎を擦つて考え、懐にあつた風呂敷で子供をくるむと荷物のように結び目を掴む。

依頼主の元を訪れた殺し屋は、怪物をこの地から追い払いはしたもの殺してはいないという理由で1億ゼニーは受け取らなかつた。

そうして彼は粗暴な子供を連れて、姿を消した。

## 序二 鶴仙人と桃白白

「ふー……」

うららかな日差しの中、一人の老人が縁側に座りお茶をすすっている。彼の名は鶴仙人、鶴仙流の創始者にして桃白白の実の兄であり、彼を一人前の殺し屋に育て上げた師匠でもある。

鶴仙流は才能のあるものには広く門戸を開いており、時には幼い子供であつても弟子としてこの道場に住まわせることがある。

のだが、いかんせん「自己を鍛え上げる」というよりも「敵を倒す（殺す）」ことに特化した流派であるため、なかなかにひとつをえらぶ。

そもそもこの道場自体かなりの山奥にあるため、訪れることが自体が至難の業でもあり、弟子入り希望者を含め、来訪者はかなり少ない。

そんなわけで今のところ鶴仙流には修行中の弟子が誰もおらず、鶴仙人はだだつ広い道場のだだつ広い縁側で、一人穏やかに昼下がりを楽しんでいた。

「平和だのう……」

柔らかな風が木の葉を揺らし、山鳥たちがそこここで愛らしい鳴き声を響かせる。

そんな風雅な庭先に！突如謎の飛来物が！

ドンッ

3mはゆうにありそうな石造りの柱が、自立するほど深く突き刺さる。

直撃すればほとんどの人間が、なすすべなく即死するであろう隕石を目の前にしても  
鶴仙人は動じず、むしろまたかと顔をしかめた。

「桃白白！」

「アロ～～～ハ～～～」

「アローハーじゃないわい！庭に穴が開くからその方法で帰つてくるのはやめろといつ  
も言つとるじゃろうが！」

「急ぎの用だつたんで、つい」

「まつたく、後で片付けておけよ」

「りょ！」

「……お前のそういう言葉はどこで覚えてくるんじや」

元気よく返事をした桃白白に、鶴仙人は隠す様子もなく深いため息をついた。

咄嗟に手で塞いだおかげで、土煙から守られた湯呑の残りをぐいっと飲み干す。  
「で、急ぎのようとは一体何事だ？」

「これだ」

ずいっと風呂敷を持ち上げる。

「ん？ スイカか何か？」

「ガキだ」

「ガキじやと!?」

サングラスの奥の瞳を皿のようにして、弟と風呂敷とを見比べる。

この中に収まるサイズなら赤ん坊に近いような、かなり幼い子供だろう。

対して目の前の男ときたら、人相はお世辞にもいいとは言えない（鶴仙人も似た顔つきなのだが）、性根の方も脱サラして殺し屋を始めるぐらいにはひねくれている。

とてもではないが、そんな可愛らしい存在と桃白白が結びつかず、鶴仙人は恐る恐る風呂敷に手を伸ばした。

ガチンツ

「ひょつ」

並びのいい歯を見せつけるように、あどけない顔つきの子供がこちらを睨んでいる。

思わず引っ込めた手をみつめ、思わず指の数を数える。

ひいふう、みいよお、どうやらくなつてはいないうだ。

「手を出すな、噛み付くぞ」

「言うのが遅いわい！」

ガチガチと歯を鳴らす小さな頭を、桃白白がゴンツと一発殴りつけるとややおとなしくなる。

あまり手加減していないように見えたが、子供の方はケロリとして——いや、かなりうらめしそうな顔で頭上の殺し屋の顔を睨んでいる。

数も数えられない年頃だろうに、立派に殺氣を放つ様子はどこか間が抜けていて、同時に空恐ろしさを感じさせた。

「一体どこで拾ってきたんじや」

おつかなびつくりな様子の兄を見て、何故か桃白白は得意げに口の端を吊り上げる。

「今度の仕事は化け物退治だと言つただろう?」

「ああ、何でも10mもある大猿だつたそうじやないか」

「それがこいつだ」

「なにつ?」

確かに鋭い犬歯をむき出しにして威嚇する様子はなるほど、猿に見えないこともない。

凶暴さもかなりのもので、武術の心得のないものなら殺されていたかもしれない。

しかし目の前の子供はどう見ても、一抱え程度の大きさしかなかつた。

顔つきもそれほど猿に似てているわけではない。年に似合うふくふくとした人間の顔

つぎだ。

「儂にも理由はわからんが、目の前で大猿がこのガキに姿を変えたのは確かだ。現に、それらしい尻尾も生えていた」

「生えて“いた”？」

「ううむ、掴むととたんに大人しくなるものだから、しつぽを持つて運んではいるところうちブツンと根本から……」

「おつ、お前なあ」

呆れてものも言えない様子の鶴仙人に、桃白白もややバツの悪そうな顔をした。

その間にも子供は風呂敷の中に手足を包まれたまま、元気に暴れている。

「痛めつけられておかしくなったんじやないか？」

「違う、もとからだ、こいつのこれは」

「ふーむ……」

押さえつける桃白白の腕にはそれなりに力がこもつており、それだけでこの子猿の力強さがわかる。

そのへんの大人の男なら簡単に腕をねじ切つてしまえそうだ。

今度は十分に警戒し、鶴仙人はすいとシワまみれの顔を近づけた。

何かを感じ取ったのか、子供はサングラス越しの瞳を真正面からにらみ返した。

伸び放題の髪の下から、くすんだ灰色の2つの目がギラギラと熱に満ちた殺意を向ける。

しかし、鶴仙人が目の前で何か手を揺らめかせ、何事かつぶやくとすっかりその指先に夢中になつた。

「ぼおつとした生氣の抜けた顔で指先の動きをおい、首を揺らす。

とんつと額を叩かれた時には噛み付く様子もなく、こてりと氣を失つてしまつた。

「何をやつた？」

桃白白はつまらなそうに、柔らかい頬をつまんだりつついたりする。

やめんか、とその手を払つて鶴仙人はなれた手付きで子供を抱いた。

「どうやら洗脳、とまではいかんが何か刷り込まれておつたようだ。それを消してやつたんじやよ。

安心せい、それがこやつの強さの秘訣ではあるまい」

「バレてたか」

「お前の考へていることぐらいお見通しだ」

今度は鶴仙人の方がきゅつと口角をあげる。

「弟が弟子をとる日が来るとはな」

「私が『師匠』に免許皆伝を与えられてからもう数年もたつからな」

「ひつひつひつ……」

「ふふふ……」

ひとしきり二人で怪しく笑いあうと、桃白白はくるつと背を向けて柱を引っこ抜き、再び投げる構えをとる。

「ではよろしく」

「なつ、おい、ちょっとまで！」

「ガキの世話の仕方は分からん。兄ちゃんに任せる」

「お前、そういうところは本当に変わらんな……おつ」

ぱち、と目を覚ました子供にはもう、狂ったような闇雲の戦意は感じられない。きよとんとした顔をして、去ろうとする背中へ向かつて無防備に手を伸ばす。

「もう手懐けているようじやのう」

「ふん」

一度柱を置いてから子供と向かい合い、桃白白はじっくりと考えた。

顎をさすりながらじっくりと考え、ふつと口にする。

「名前はフ<sub>灰</sub><sup>色</sup>ーイにしよう」

「フリーイ…フリーイか」

意味もまだ分からぬだろうに、たつた今付けられたばかりの名前で呼ばれ、子供は

不思議 そうに首をかしげる。

「フリーイが物心つくまでは頻繁に顔を出せよ。忘れられても知らんぞ」

「そうだな」

頷いて見せると一度だけ、不慣れな手つきでガシガシと頭を撫でる。

そして桃白白は再び柱を構えると、今度は勢いよく空に向かつて投げ上げた。  
ひよいつと軽々飛び乗つて、みるみるうちにその姿は小さくなつていく。

「さて、飯でも作るか」

よしよしと子供をあやしながら鶴仙人は道場の中へと戻つていった。

### 序三 フーイと鶴仙流

「4676、4677、4678」

「3312……3313……3314……」

板張りの床が汗ばんだ素足で踏みしめられ、汗が当たりに飛び散る。

100人は入れそなほど広く立派な道場のなか、老人に見守られ叱られながら、たつた2人の子供が『鶴』とかかれた揃いの服を着て竹刀をふるつていた。

「フーイ！姿勢が歪んどる！それではなんの意味もないぞ！あと500回追加！天津飯！ペースを乱すな！」

「ゲツ」

「はいっ！」

「フーイ！返事が聞こえんぞ！」

「はいっ！」

フーイと呼ばれた方は12歳ぐらいだろうか、背は低く、髪を短く整えていて、こちらだけ、『K I L L お前を殺す Y O U !』と非常に物騒な文言が背中に踊る。

勢いよく腕を動かしているものの、集中力がすっかり切れているようで、灰色の瞳は

落ち着きなくあたりのあちこちをきよろきよろ見回す。

動作は鋭いが荒っぽさがあり、そのせいで先程から何度か回数の追加を言いつけられた。

もう一人の天津飯と呼ばれた少年はやや年上で、身長が伸び始めた頃だろう。フーィよりは頭一つほど背が高い。

こちらは頭をすっかり丸めており、額の3つ目の目が目を引く。

疲れ始めているのかやや腕や足にぶれと震えがでているが、それでもすっと背を伸ばし、正しい姿勢で真面目に取り組んでいる。

「敵を倒す（殺す）」ことを目的とする鶴仙流では、徒手空拳だけでなく武器の扱いも重要な修行の一つである。

剣はもちろんのこと重火器や爆発物まで最終的には一通り使えるようにならねばならない。

流石に年端も行かない未熟者に本物を握らせるわけには行かないため、基礎体力訓練も兼ねてこのように素振りを行つていているというわけだ。

ちなみに竹刀の重さだけは本物と同じかそれ以上である。

「4731、4732、4733……あつ！」

突然、ピクリと耳を震わせ、フーアは竹刀を放り出し弾丸のようになつて、縁側向き

の障子をすりぬけるようにして外に飛び出す。

「3336・3337・えつ？」

「な、おい！こら！待たんか！」

少しして天津飯と鶴仙人にも飛行機の音が聞こえ始めた。

田舎に住む個人用の、四人用小型飛行機にかなりの違法改造を施したその機体は、エンジン音すら驚くほど小さい。

人間よりも敏感な鳥たちや木々でさえ油断してしまい、気がついたときにはすでに近くへ到着している。

「フーイのやつめ……！」

鶴仙人が障子をスパンツと開けたときにはすでに飛行機のハッチは開き、持ち主は今まさに地面に降り立とうとしているところだつた。

庭にフーイの姿はない。建物や飛行機のあたりにも、茂みにも、見当たらない。ふつと影が落ちる。さては屋根の上か——いや、違う。

頭上だ。

「桃白白白白！」

飛び上がつたその小さな姿を直視できないのは、太陽を背にしているからだ。重力を味方につけ、眼下の男に狙いを定める。

日光で姿を隠し、全身を矢のようにして鋭いケリを放つ。

高さと重さがそのまま破壊力に還元される、必殺の一撃を不意に食らい、男は——  
——わずかに体を傾けると、わざと腹が来るであろう位置に膝を置き、鳩尾に一撃食らわせた。

「ぐふうつ」

「様をつけんか、様を」

顔から地面に落下し、ベチャ、と潰れた饅頭のように地面に倒れ伏す。

ピクピクと指先を震わせる姿は、踏み潰された虫にも似ている。

と、たつぱり20秒ほど待ってあつさりと起き上がった。

「くつそー！ 今日こそはいけたと思つたのに！」

「まだまだ修行が足りんわ」

顔や体についた土を軽く払い、フライはニカツと上を向いて笑う。

「おかげり！」

無言でぐりぐりと節くれだつた手が荒っぽく頭を撫でる。

髪が乱れるのも気にせず、まだ幼い彼女ははしゃいだ様子で笑い声をあげた。

「なー、桃白白」

「なんだ?」

ただでさえ周囲に人影らしい人影もない山奥は、夜になれば一層暗い。

暗いが、さほど静かでもない。あちこちでフクロウやカエルの鳴き声がひつきりなしに聞こえてくるし、木の葉のかすれ合う音も思いの外大きい。

怒り心頭の鶴仙人にこつてり絞られ、夕飯抜きの上道場の掃除を一人で命じられたフーイは、僅かな明かりの中あまり気にせず元気に雑巾がけをしていた。

桃白白の手の中にあるおにぎりを物欲しそうにちらちら見てはいるが、見られている方は全く気にせずむしやむしや頬張っている。

「私も桃白白みたいに外いでて強い奴と戦いたいよー」

「外には僕より強い奴はおらんぞ」

「知ってるけど、そういうことじゃなくて、ジッセンケイケンつてやつ大事じやん

「一理ある」

ソフトボール大のおにぎりをあつという間に平らげ、指についた米粒をべろりと舐めとる。

「鶴仙人のじいちゃんにも言つたんだけど、絶対ダメだつて」

「兄ちゃんは過保護だからなあ」

「カホゴなのかあ」

水の入ったバケツに雑巾をぱちやばちやとつっこみ、きつく絞り上げた。床はピカピカに磨き上げられており、これが最後の一往復だ。さつさと済ませてしまおう、と手足に力をこめる。

「どうしても武者修行がしたいなら、勝手にしたらどうだ？」

そう言われてフーアイは虚をつかれたようにきょとん、とした。

「勝手に行つてもいいの？」

「良くはないだろうが、儂は止めんぞ」

行くにしても掃除ぐらいは終わらせてから行けよ。といつた桃白白はどれだけ本気だつたのか。

何にせよ、数日中の内にフーアイは着の身着のまま、夜中の内に道場を離れることになる。

桃白白がさつさと次の仕事に出かけてしまつたため、『さがさないでください』の置手紙をみて悲鳴のような奇声を上げた鶴仙人を、一人おろおろと天津飯が宥めていたのもまた、別の話。

# レツドリボン軍編

## 其之一 ジングル村のフーアイ

さて、意氣揚々と武者修行のたびに出たフーアイだつたが。

「さ、さむ～い！」

あつという間に迷子になつていた。

「せつかくだから聖地カリンつてどころに行こうと思つてたのになあ。桃白白のアレを真似したのがいけなかつたかなあ」

そうつぶやく彼女のすぐそばには、丸太が一本、地面に突き刺さつている。

あたりをいくら見回しても白、白、白。

一步踏みしめるたび、くるぶしのあたりまでずつぶりと雪に埋もれる。

遠くに見える山々はノコギリの歯にも似た銀色で鋭く尖つっていた。

晴れ渡る空の青色が目に突き刺さる。

冷たい空気の澄んだ匂いが、つんつと鼻の奥を刺激した。

「このままだと凍えちゃうよ、どつか建物でも洞窟でも見つけないと……あつ！」

こんもり積もつた冷たい丘の向こうから、黒い人影がいくつかどすどすと走つてくる

る。

大声で呼びかけようとしかけて、フレイはキュッと口を結んだ。

近づいた分、段々と姿がはつきりと見え始める。

軍隊らしい格好をした男たち3人は手に手を銃を持ち、殺氣立つた表情で目をギラつかせていた。

「おい！動くなよ！」

まだそれなりに距離はあるが、すでにこちらへ銃口を向けている。

「こいつが例のガキか」

「大人しくドラゴンボールとレーダーをこつちによこせ！」

「えーっと、おじさん達誰かと勘違いしてない？」

「なんだと？しらばつくれるつもりか？」

「しらばつくれるもなにも、ドラゴンボールって何さ」

——タアン——

言い切るよりも先に、思いの外軽い音が当たりに響いた。

小さな足先から数センチズレた場所にくつきりと穴が開く。

男は苛ついた様子で、細く白い煙をたなびかせる銃口で少女の額に向かた。

「あまり大人を舐めるなよ、次は当てるぞ」

その言葉を聞き、彼女はニイッと笑う。

「おじさん、今、私を攻撃したの？」

「ああ、そうだ。なんだ、怖くておかしくなったのか？もつと恐ろしい目に会いたくなかつたらさつさとドラゴンボールをよこせ！」

「そつか、じやあ手加減しないよ」

「そういうふうに教わったから」

ヒュツと空気を裂く独特の音がした、次の瞬間には数メートル先のもみの木がボキボキと嫌な音を立てて根本のあたりから折れる。

二人の男が自分の仲間の姿が消えたのに気付くのは、ひと呼吸おいてからだった。

少女に蹴られた彼が吹っ飛び、木に当たつて幹をへし折つたのだと分かるのは、更に数秒経つてから。

その数秒の間に一人は踵落としをくらい雪の中に深く沈み、もう一人は銃を奪われ銃床で横つ面を殴られ、銃口を突きつけられる。

「変なことするなよ、おじさん。私、こういうの持つの初めてだから、つい撃つちやうかも」

「わ、わかつた……」

「よーし、じゃあまずはコートを脱いでこっちにちようだい。

それから、おじさんたちのアジトを教えてよ。これだけいいものを持つてるんだから、まだまだ仲間がいるんだよね？」

「わかつたから銃口で背中をつつかないでくれ！ 言うとおりにするから！」

「あと、ドラゴンボールつてやつについて教えてよ」

「……本当に知らないのか？」

「知らないーい」

奪い取ったからグリグリ押し当てるな！」

「人違ひだつたのか…」

「いいから早く教えろよー」

「わかつたからグリグリ押し当てるな！」

道々聞いた話によれば、ドラゴンボールとは伝説の存在らしい。

七つ集めるとどんな願いでも叶うといわれている。

自分達レッドドリボン軍が何故それを集めているかはわからないが、恐らく世界征服を願うためではないか、と。

「ふーん、悪い奴らなんだね、おじさんたち」

そうこうしているうち、周囲の景色に似合わない立派な建物が見えてくる。

巨大なレンガ造りの塔で下半分が出っ張つており、その上に現代的な砲台が備え付け

られていた。

一番上は指令室らしき部屋と数メートルはありそうなパラボラアンテナが乗つかつてゐる。

「ふつふつふつふつふ、そうだ、おじさんたちは悪い奴らなのさ」

急に男は余裕ぶつた笑みを浮かべ、フーイの方を振り返つた。

「どうかした？」

「馬鹿め！　ここまでくればマツスルタワーは目と鼻の先！　お前みたいなクソガキの弾なんぞあたらんわ！」

言うが早いか猛ダッシュで走り出し、塔へ向かつて大声をあげる。

しかも、狙いが定まりにくいうようにわざわざジグザグに走る念の入れよう。

「おーい！　助けてくれー！」

「ちょっと！　あー、もうしようがないなあ」

早々に銃を撃つことを諦め、槍のように持つと思いつきり男に向かつて投げつける。ゴギつと嫌な音がして雪の中に姿が消えた。

建物の中からはわらわらと兵隊たちがあふれるようになってくる。

「ホワイト将軍！　兵がガキに襲われました！　例のこどもでしようか？！」

一番上の階、大きく開けられたはめごろしの窓から、セーターアイ姿の男が下を覗く。

「バカめ！ わざわざ死にに来たか！ やれっ!! ぶち殺せいつ!!」

パパパパと軽快な音を立てて数えきれないほどの弾丸が飛んでくる。

フレイは雪を巻き上げ姿を隠し、コートを脱ぎ捨ておとりにした。

その間に背を低くし、塔のすぐそばまで一気に距離を縮める。

リスのように壁を駆けあがると、砲台に手をかけた。

「仕留めたぞ！」

「違う！ おとりだ！」

「どこにいった！？」

「あそこだ！」

「ニヒツ」

「あ、あわわわ……」

見よう見まねで撃たれた砲弾は直撃こそしないものの、無差別に発射されるだけで階下の人間をあつという間に無力化する。

「さてと」

力任せに土台を捻じ曲げ、頂上の部屋を狙う。

しかし、至近距離から撃たれたにもかかわらず、レンガはおろか窓ガラスすらびくと

もしない。

「ちえつ」

つまらなそうに舌打ちをすると、じつと見上げる。

ホワイト将軍はにやりと余裕たっぷりに笑い、マイクを手に取った。  
「聞こえるか小僧!! わがマツスルタワーにようこと!! がはは!!  
ところで小僧!! 何故 この塔に乗り込んできたのだ!!」

「武者修行」

にやりと笑い返し、フーアイはカメラゴシにホワイト将軍を指さす。

その仕草はどん波によく似ていた。

丁度その頃、一人の少年が村長を助け出そうと一軒の家を飛び出した。

彼の名は孫悟空。亀仙人の弟子、孫悟飯の養子こどもであり、自身も亀仙人に教えを受けて  
いる。

そして、フーアイと同じ星からきた同じ種族であることを、今はまだ、誰も知らない。

## 其之二　いどめ！マツスルタワー

「あれれ？　どうなつてんだ？」

悟空がマツスルタワーについた時には、既に大勢の人が辺りに倒れていた。壊された砲台からは黒い煙がもくもく上り、正門らしき扉も開きっぱなしになつている。

建物の方からは重たい打撃音が聞こえてくる。

と、突然爆発音が辺りに轟き、壁に大きな穴が開いた。

「だれか、オラより先に戦つてんだな、よし！」

如意棒を伸ばして高飛び棒のようにつかい、穴から建物の中へ滑り込む。

目の前に立ちはだかる大男に怯む様子もなく、悟空は正面から怒鳴りつけた。

「やいレツドリボン軍！　村長さんを返せ！」

最上階ではホワイト将軍と、もう一人忍者のような格好をした男が監視カメラを眺めている。

予想もしなかつた乱入者に二人は首を傾げた。

「うん？　なんだ、あの小僧」

「さつきのガキの仲間でござろう。村長がどうとか言つておりますが」「村の誰かにでも頼まれたんだな。がははは、仲間が死んだとも知らずにのこのこやつてきたのか」

ぐいっとマイクを握りホワイト将軍は勝ち誇った声で笑う。

「おい小僧! 村長ならいちばん上の階にいるぞ!」

お前はここまであがつてこれるかな!? がつはつはつは!」

「よおし! いつてやら!」

「メタリック軍曹! そいつも殺つてしまえ! さつきのガキと同じようにな!」

そう言われると大男は片足を一步後ろへ引き、ぎゅっと拳を握り締める。

応じる形で悟空も素早く構えをとつた。

戦いが始まる直前の一呼吸分にも満たない静寂が張り詰める。

「死ね!」

子供など簡単に握りつぶせそうな手が、車のような猛スピードで振り下ろされた。

瞬間。

「死ぬのはお前だ! どんどん波——!」

部屋の端、太いパイプの影から鋭い閃光が正確に男のこめかみを射抜く。

そして、彼の頭部は爆発した。

「えっ!?」

「へっ!？」

どこをどう確認しても、首の根元から先はきれいさっぱり無くなっていた。

攻撃の途中の、不自然な恰好のまま動きを止め、ピクリともしない。

光線が飛んできた方を見ると、悟空と同じぐらいの歳の子供が突つ立っていた。真緑色の胴着に鶴の文字が特徴的な彼女は、ぽかんと口を開けている。

「い、今のお前がやつたんか? えげつないことするなあ……」

「ちがつ! 爆発なんて、どんどん波はそんな技じやない!」

必死に首をぶんぶん横に振っていたが、はつとして悟空の方を指さす。

「後ろ!」

「え……わたっ!!」

咄嗟に横に飛びのくと、先ほどまで悟空がいたあたりを拳がかすめた。

それは腕の長さをこえて、地面にごとりと落下する。

と、今度は反対側の手が大きく開かれ、彼を叩き潰そうと勢いよく降ってきた。

なんとか避けると後ろに引いて、距離をとる。

大男の首なし死体が——今は片手もないが——こちらへ向かつて襲い掛かつてくる。

「手がとれた!」

「どど……どうなつてんの!?これ……!」

「がつはつは!メタリック軍曹はロボットだつたのだ!」

頭上のスピーカーから再び、ホワイト将軍の高らかな声する。

「さあ殺れつ!ぶつ殺せいつ!!」

「よおーし!」

応えるように悟空が張り切つて構えをとる。  
が。

「あ……あれ?……」

切なげな機械音をか細く鳴らし、勇ましく足を踏み込んだ体勢のまま、メタリック軍曹は再び停止した。

「また動かなくなつちやつた……」

「……電池切れかな」

「電池つてなんだ?」

「知らないの?」

子供たちはお互いに顔を見合わせる。

しげしげと眺め合つて、先に口を開いたのは少女の方だつた。

「そ、ういや、お前だれ?」

「オラか？ オラは孫悟空！ お前は？」

「私はフリー！」

「フリーも村長さんを助けに来たんか？」

「違う違う！ こここの連中に襲われたから、修行ついでに潰してるんだ」

「じゃあ下で倒れてたやつらも、みんなフリーが倒したんか」

「まあな。 けど悟空も結構強そうじやん？」

「オラ、亀仙人のじつちゃんのところで修業したからな！」

「亀仙人？ 私の師匠の一人は鶴仙人っていうんだけど、なんか似てね？」

「もしかしたらじつちゃんの弟とかか？」

「えー、多分違うと思うけど、だつて鶴仙人のじつちゃんの弟はさ……」

「お前ら！ いつまで仲良くしやべってるんだ!!」

スピーカーからしごれを切らしたのか怒声が飛ぶ。

はつと慌てて階段を上り始めた二人を見送り、指令室のイスに深く腰掛け、緊張感のない奴らめとブツブツ呟いた。

その隣でムラサキ曹長が深く頷いてみせる。

「全くでござる」

「お前もだ！ さっさといつて4階をまもれいっ!!」

ケツを叩かれ急いで階段を駆け降りる忍者の背中に、ホワイト将軍は深い深いため息をついた。

「ねえ、悟空。ここはキヨードーセンセンと行こうじやん」

「なんだ? そのキヨードーセンセンって」

背の高い木々に、土と草のかおり。

和風の小屋は風情のある佇まいで、その奥には池まで設けられていた。

頭上に青い空ではなく、白い、照明の取り付けられた天井があることだけが、ここが室内だと語る。

4階につくと、そこには外と見間違うほど立派な室内庭園が広がっていた。

「協力して戦うつてこと」

「わかつた」

ふつと左右に分かれて飛ぶ。

先ほどまで悟空とフーアイがいたあたりには何本かの苦無が刺さっていた。

反応速度も、避ける動作も、二人はほとんど同時であまり差がない。

フーアイはそのことに満足そうに微笑む。

「じゃ、決まり」

試合開始の合図の代わり、ムラサキ曹長の通りの良い笑い声が響き渡った。

# 其之三 ムラサキ曹長の誤算

「これまでに、このオレさまを倒したものはおろか、姿さえ見たものはおらぬ！お前たちはここで死ぬのだ！ははははは……！」

飛んでくる手裏剣を避けるため、二人はそれぞれ違う岩陰に隠れる。

あたりを見回すが、少なくとも目立つところに人影はなかつた。

「そこだつ！」

「ぎやつ！！」

何かに当たる硬い音がして、木の上から忍者姿の男が受け身も取れずどさつと落ちる。

「みーつけた！」

「やるじやん」

「ひい——つ、ひいい——つ！！」

顔を押さえてひとしきり痛がつたあと、ムラサキ曹長はぐつところえた様子で不敵な笑みを浮かべてみせた。

「ほ……ほほう……よくわかつたな、まぐれだろ……！」

「まぐれじやないよ、ちゃんと見えたもんね」

「ちゃんと当たつてたじやんね」

「ねー！」

「嘘をこけつ！ シロウトのお前に見えるはずがないっ！」

さつと懐からなにやらボールのようなものを取り出し、地面へ投げつける。

「ではもう一度試してやろう」

「わっ！」

たちまち白い煙が辺りに立ち込め、視界が塞がた。

目くらましが散つたころにはムラサキ曹長の姿は消えて……

……いなかつた！ おもいつきし木のそばで何故かアメリカの国旗で体を覆うように持つて立つている！

「どうだ小僧ども!! 今度こそ見つけられまい!!」

と、ここ歩いて指さそうとする悟空をフーアイがジエスチャーで下がらせ、頭があるのであろうあたりに向かつて思いつきり苦無を投げた。

「うおつ！」

「チツ！」

ギリギリで避けられ、布だけが幹に縫い留められる。

外側から自分が隠れていた場所を見たムラサキ曹長はあつと大きな声をあげた。

「しまった！ 模様を間違えていたつ！」

「へー、コレ、反対側は木みたいな模様になつてんのかあ」

「こらー！ 触るなー！ 引つ張るなー！」

切れ目の入つてしまつた布を悟空の手から奪い取ると、再び彼は格好をつけたポーズで腕組みをし、一人を見下ろした。

「子供だましはこれまでだー！ 次はもつとハイレベルな隠れ技をみせてやるー！ 目をつぶつて30数えろー！」

そう聞くといわれるがまま悟空は顔を覆い、かくれんぼの鬼のようにおとなしく數を数え始める。

様子を確認したムラサキ曹長も、さささと静かに素早く動き、姿を隠そうとする。

が、フレイの方は一切気にすることなく、根こそぎ拾つた手裏剣と苦無をどんどん投げ始めた。

「おい！ こら小僧！」

「なあに？」

「お前じやないー！ もう一方の方だー！」

流石はレッドリボン軍と言ったところか、頬や髪のあたりをかすめてはいるものの、残念ながらまだ一つも命中はしていない。

悟空はまだ素直に目をつぶっている。

「おのれちよこまかと……」

「貴様！ルールつてものを知らんのか！」

「殺し合いにルールもへちまもあるか！」

悟空！30なんて数えてる暇ないよ！村長さんを助けるんだろう!？」

「あ、そうだった！」

「この、ガキどもめつ!!」

飛んで一気に距離をとり、仕切りなおすとムラサキ曹長はすらつと刀を抜いた。

悟空も如意棒を掴み、フーアイは残り1枚の手裏剣をぎゅっと構える。

「お遊びはここまでだ……本気でゆくぞ！」

「いいよ！」

「やつてみな」

「ふふふ……死ぬがいい。つおつ!! ッ!?」

ムラサキ曹長が掛け声と共に高く、かつこよく跳躍する直前、フーアイが再び手裏剣を投げた。

嫌らしいタイミングでの攻撃を、何とか無理やり体をひねつて避けたものの、ジャンプ 자체はかなり不格好なものとなる。

落ちてきそうな場所にあたりに悟空が如意棒を突き刺し、構えていたが、ふらふらとした軌道とポーズで微妙に位置がずれ、お尻……ではなく脇腹のあたりに勢いよく棒のぶち当たった。

「ぐおおお〜〜〜〜〜!!」

あまりの痛みに刀を取り落とし、もんどううつてのたうち回る姿を、悟空はケラケラと笑つて如意棒を拾う。

フリーがここぞとばかりに追撃を狙うが、それよりも先にムラサキ曹長が飛び起きた。

「ゆるさんぞ！ てええ〜〜〜い!!」

刀を拾つて勢いよく斬りかかるが、難なく悟空は受け止める。

「ちいっ！」

「フリー、こいつはオラ一人で十分だから、先に行つてくれ」

「オッケー！」

「何を?! いい気になりおつて〜つ。おい! 待て!」

慌ててフリーの方へ行こうとするムラサキ曹長に、悟空は足払いを仕掛ける。

「貴様つ」

「今度はオラからいくぞ！」

回る、回る、演舞のように赤い棒が鮮やかに回る。

薙ぎ払い、突き、斬るように叩く。

全ての動きが軽やかで、切れ目なく、重く鋭い。

曹長はただ受け止めることすらままならず、押されるままドンドン後ろに下がつてしまふ。

「たあつ！！」

ビュツとひときわ力強く如意棒が振り下ろされると、刀はあつけなく折れた。

「ああつ！！おつ俺様の名刀『笛錦』がつ！！」

「オラの如意棒にはかないつこないさ！まだやる気か!!」

「……仕方がない。かくなる上は」

甲高い口笛が響き渡る。

階段に向かつて走つていたフーイも思わず足を止めた。

「なんだよなんだよ!?」

「この忍者ムラサキとつておきの忍法を披露してやろう、ひひひ……」

「ちょええええええええつ！！ 分身の術——つ」

「えつ!?あれつ!?!」

「なになに!?!」

印を結ぶと掛け声と、共にムラサキ曹長の姿がぶれた。

いや、ぶれたのではない、全く同じ顔、同じ姿のムラサキ曹長が五人いる。

そのうちの二人はフリーの行く手を塞ぎ、三人は悟空を取り囲んだ。

「どうだ小僧共!!どれがホンモノかわかるまい!!」

「あれ…!?ど…どいつだ!?みんなホンモノにみえる……!!」

「全員ぶつ殺しちやえば同じだろ！」

「なるほど、よ——し！」

「ふははは！できるかな!?!」

一人のムラサキ曹長が悟空に斬りかかるが、刀は悟空をすり抜ける。

「へつ!？」

「本物はこっちだよ——！」

思いつきり如意棒で殴られ、吹っ飛んだムラサキに当たつてフリーの目の前にいたムラサキの一人が気絶する。

「えつ!？」

「くそ、よくも兄弟を!!」

「は!?」

「我々は5つ子ちゃんの忍者だったのだ!!」  
「そんなのありかよ!?」

「そうか、みんなホンモノか。おかしいと思つたよなー!」

フレイが戸惑つてゐる中、悟空は合点した様子で構え治す。  
と、瞬きする間に残りの二人を氣絶させ、如意棒を高飛び棒のようにしてフレイのすぐ隣に降り立つと、最後の一人も勢いよく蹴飛ばした。

「やるう」

「よし、早くいこう!」

「うん!」

二人が階段を走る後ろで、よろよろとムラサキの内の一人が立ち上がる。

「こ、このままで済まさんぞ……」

そして二人が通り過ぎた檻の鉄格子を握り締め、中にいる何者かを怒鳴りつけ、扉を開く。

「でろつ!人造人間8号!あのガキをやつつけるんだつ!」

「ん?」

「え?」

のそりと出てきた大男は、なんとなくメタリック軍曹にシルエットが似ていた。目つきは悪く顔中傷だらけで、血色も悪い。

「ぐひやひや！ 強いぞ強いぞ！ こいつは強いぞ！」

「でつけえやつだな……」

「さあ、やれっ！ たたきのめせっ！ ぶつ殺してしまえ！」

「やるかつ」

「やだ」

「えっ！？」

さつとフリーイが構えたのに対し、人造人間8号は突つ立つたまま、何をする様子もな  
く大人しくしている。

「ま…まさか…いま嫌だつて言つたんじゃないだろうな……」

「生き物ころす、いけない。オレわるいこときらい」

「なつ、何をバカなことをいつとるんだ！」

「オレ、貴方たちがいけないことしてゐるの知つてゐる。村のお爺さん人質にして、皆を困  
らせている」

悟空とフリーイはぽかんとした顔のまま、二人の言い合いを眺めるしかない。

「生意氣なことを言うんじやない！ いいか、人造人間8号！」

お前の体にはもしもの時のためには爆弾がしこんであるのだ！

俺様がこのリモコンのスイッチを押せばお前は木つ端みじんになる！

そうなるのがいやだつたら素直に言うことを聞くんだ！わかつたか！』

「…………、ヤツパリ、オレ悪いことできない』

「な、なんだと!? この役立たずめ！では望み通り爆破してやるつ!!』

だつと走つて人造人間8号を突き飛ばすと、ムラサキはリモコンを握り締め、爆発からのがれようと距離をとる。

スイッチを押そと構え、人造人間8号がギュッと目をつぶつたその瞬間。  
「そうはさせるかっ!!』

勢い良く飛び上がり、如意棒を振り上げ悟空がバク宙を決める。

リモコンを叩き落とし、踏みつぶすと目の前の男を厳しい目で睨みつけた。

「こ……のガキめリモコンを……!』

「ジャーンケーン……』

「グ——!!』

鼻つ面を全力で殴られたムラサキ曹長は今度こそ氣絶する。

人造人間8号にはつちやんという名前を付け、三人はさらに塔の上を目指した。

## 其之四 怒れる総帥！狙われた二人

フリーと悟空、はつちゃんはホワイト将軍の罠にかかりながらも、なんとかこれを撃破。

往生際悪くホワイト将軍は村長を人質に取ろうとするが、武器に気づいたフリーが未然に阻止。

はつちゃんがドラゴンボールを持っていたことがわかり、彼の優しい勇気に感銘を受けた村長は、自分の家に住まわせることにした！

「あら、フリーちゃん！ 片付けなんてしなくていいのよ、あなた達は大事なお客様なんだから」

「え、あつ」

無意識のうちに空の食器をまとめようとしていた手を引っ込め、フリーは少し恥ずかしそうに頭をかいた。

「つい、癖で」

「そんなに普段からおうちの手伝いをしてるなんて、いい子なのね」

「別にそういうわけじや……」

「ま、ま、言ひ淀むと、ついに「お先に」と言つて逃げるよう寝室へ引つ込んでしまう。

母親は微笑ましそうにニコニコとしていたが、悟空たちが部屋に行くとフリーの表情は少し沈んでいた。

「どうしたんだ? 腹でも痛えのか?」

「いやいや、そういうわけじやなくて……じつちゃん、怒つてるかなあと思つてさあ」

「じつちゃんつて、フリーの師匠の鶴仙人のじつちゃんか?」

「そうそう。武者修行なんて危ないから駄目だつていわれてて、黙つて出てきちゃつたからなあ」

ゴロンと寝そべるフリーに、はつちちゃんとスノは心配そうな顔をする。

「それは、良くな」

「帰らないの?」

「ここで帰つたら本当にただの家出だよ」

フリーはぐつと勢いよく起き上がり、あぐらをかくと悟空の方を見た。

「悟空はなんでドラゴンボール集めてんの?」

「ドラゴンボールの四星球が、おらのじいちゃんの形見なんだ」

「……そりや大事だなあ」

「うん。ジングル村のも違つたから、他のところも探さなくちゃ」

「次はどこいくつもり?」

「えつと次は……」

そう言うと風呂敷から丸い機械を取り出してカチカチとスイッチを押す。  
が、画面は真っ暗なまま、うんともすんとも言わない。

「どうしたの?」

スノもベッドから起き上がり、手元を覗き込む。

「ぶつ壊れちゃつてる……」

「えー?」

「参つたな……! 懐に入れたまま戦つてたからだあ〜〜!」

「オレに見せて。オレ機械詳しい」

学習ライトの明かりをつけ、机の上にはつちゃんが部品を広げるのを、3人で覗き込む。

ドライバーを使いしばらく様子を見ているようだが、しばらくして顔を上げ、首を横に振つた。

「ダメだ、ものすごい構造! このレーダー作つた人めちゃくちゃ天才!」

「そつか……それじやあブルマン家に行つて直してもらうしかないなあ」

「そのブルマつてどこに住んでんの？」

「確か、西の都つて言つてたな」

「よーしわかつた！」

むくつと立ち上がるとフーイは悟空をまつすぐに指差す。

「私も悟空についてつてドラゴンボールを探す！」

「んで、最後に聖地カリンに行つてからじつちやんとこに帰る！」

「わかつた。いいよ！」

物分りよく、悟空はコクリと頷いた。

「けど、聖地カリンつてなんだ？」

「武道の聖地で、ここにあるカリン塔に登れば、何倍も強くなれるんだつてさ。

私は最初そこを目指してて、間違つてここに来ちゃつたんだ」

「へー、そんなどこがあるんだ。オラもいきたい！」

「二人でいこうよ、どつちが先に頂上につけるか競争な！」

「うん！へへ、楽しみだなあ」

いつまでも話をやめる様子がない二人に、スノは呆れた様子でもうつと腰に手を当てた。

「楽しみなのはいいけど、二人とももう寝ないと明日起きれないわよ？」

叱られてきよとんとしたあと、フーアは突然ケラケラと笑い出す。

笑われたスノは怪訝そうに眉をしかめて腕を組んだ。

「何よ」

「スノ、じつちゃんみたい」

「あははは、ほんとだ、オラのじいちゃんともそつくりだ」

「なによ！ 失礼ね！ せめてお母さんみたいって言つてちようだい！」

「はーい！ おやすみなさい」

「おやすみなさいー」

コロンと横になるとあつという間に四人は眠りに落ちた。

雪はしんしんと降り積もる。

静かに、静かに、音を吸い殺して、白く白く染め上げていく。

— · — · — · — · —

「なんで！ 私は！ 筋斗雲にのれないんだよ！」

「だから言つたじやん。フーアはいい子じゃないから乗れないって」

「おい悟空、本当のことなら何でも言つていいわけじやないんだぞ」

「フリー、自覚あつたのか」

「はつちやん！聞こえてるからな！」

――――――――――

空も、山々も、青く透き通る美しい景色。

緑が生い茂る荘厳な景色の中、城と呼ぶにふさわしい広大で堅牢な建物が姿を現す。古典的なレンガ造りの様式に赤い屋根が鮮やかに映えるが、そのさらに上には不格好なパラボラアンテナがいくつも乗っている。

ここはレッドリボン軍本部。荘厳な装飾で飾られた広い指令室では、壁一面を使い世界地図が――いや、ドラゴンボールレーダーが設けられている。

「なんで奴は西の都なんぞにいったのだ!?」

レッドリボン軍の指導者、レッド総帥は遅々として進まないドラゴンボール集めに、すっかり腹を立てていた。

「あんな所にドラゴンボールはないはずだぞ!!」

「総帥！ホワイト将軍から送られていた映像より、敵がわかりました！」

「何!?」

差し出された写真は二枚。

一枚は特徴的な髪形に、山吹色の胴着をまとつた尻尾の生えた少年。

もう一枚は灰色の瞳で鋭く睨む、真緑と黄色の胴着を着た少女。

二枚を見比べ見つめるうち、小さな手がぶるぶると震えだす。

「二つ、こんなガキどもにシルバーもホワイトも全滅させられ、ドラゴンボールも持つていかれたというのか……！」

ついに怒りが頂点に達した総帥は葉巻を食いちぎらんばかりに歯を食いしばり、腹の底から怒鳴り声をあげた。

「各部隊にガキの写真を送り、見つけ次第殺す様に言え！いいな！」

「ははっ！」

忠実な彼の軍隊はその命令に雄々しい敬礼で答える。

ドラゴンボールを示す二つの点は、その間にもピカピカと光り、確実にもう一つの点へ向かつて進んでいた。

# 其之五 南の島の亀仙人

「ワンツー、ワンツー」

「ワンツー、ワンツー」

どこを見ても、どこまでも青い青い空と海が広がる。

白い染みのような孤島には、ぽつんと赤い屋根の家が立つていてきりだつた。

家中ではつるりとした頭の老人が、テレビの前でエクササイズに励んでいる。

彼は亀仙人、亀仙流の創始者にして、悟空やその育ての親である悟飯の師匠もある。

「か、亀仙人様～！」

「なんじや、どうした？」

激しく玄関を叩く音に、一度ビデオを止め、扉を開ける。

文字通りのウミガメが慌てた様子で「大変です、亀仙人様！」とひれをばたつかせた。

「ものすごい勢いで何かこっちに向かつて飛んできます！」

「クリリンとランチさんが帰つてきたんじゃないのか？」

「全然違います！このままだと家に命中しちゃいますよ～～！」

ウミガメに引っ張られるようにして無理やり引っ張り出されると、ちょうど見上げる

ほども高い水しぶきが上がり、花火のような音が空気を叩いた。

どうやらその“何か”が砂浜のすぐそばに落水したらしい。

水滴は亀仙人の足にもほんの少しだけかかつた。

「命中はせんかつたようじやのう」

「あわわわ……」

波間にぶつかりと丸太が浮かぶ。

と、すぐ後ろから見慣れた姿が雲とともに現れた。

「あら、悟空お坊ちゃん！」

真つすぐ亀ハウスに向かつて飛んでくるかと思いきや、途中で海面すれすれを飛び、波の上から何か拾う。

足のあたりにぶら下がっているそれは、近づいてくると悟空と変わらない年頃の子供のようだつた。

ぱつと体を振つて砂浜に彼女が着地すると、同時に悟空も雲から飛び降り、どこからともなくブルマも姿を現す。

「おーい！じっちゃん！」

「な、な、な」

突然現れたブルマと、少女の胴着に書かれた鶴の文字を、亀仙人は首が千切れるので

はないかというほど、何度も何度も交互に見つめた。

サングラスの奥の瞳は皿のようになり、口はあんぐりと空いている。

「じつちゃんどうした？」

「いや……」、ごくう、その子は一体誰なんじや？」

しばらく迷つてから、鶴の文字の方を優先することにしたらしい亀仙人が問い合わせる。

「私はフリー。よろしく、亀仙人のおじいちゃん」

ずぶ濡れのまま少女はニカッと笑つた。

「えへへ！ それじゃあ、亀仙人のじつちゃんと鶴仙人のじつちゃんはライバルだつたんか！」

「すつざい偶然じやない！」

「昔の話じやよ」

ふんつと不機嫌そうな顔をする亀仙人は、あいつまだ生きとつたんかとブツブツ言つてゐる。

が、フリーはこてんと首を傾げた。

「じつちゃんのライバル？」

「うむ」

「なのにはスケベなの？」

思いつきりするつとずつこけ、亀仙人は全身砂まみれになつた。

「それは関係ないじやろうが！ というか誰が言つたんじやそんなことを！」

ピツとフーイは隣を指さす。

指さされたブルマは苦笑いをこぼし、亀仙人がむむむと口ひげを動かした。

ウミガメは諦めた顔で溜息を吐き、悟空はきよどんとしている。

「ごほん、そんなことはないぞ」

「本当？」

「本当だとも。どうしてそんなに距離をとるんじや」

「スケベな奴には近づくなつて言われてるし」

「だから違うつての！」

大体あいつの方こそごによど、なかなか思うところもあるようである。

とはいえ、年端も行かない他所の子供の前でそれを口にしない程度には、亀仙人も良

識がある。

——下手に暴露して自分が墓穴を掘るのを警戒しているだけかもしれないが。

「なんかろくでもないお願ひを聞かないと、何もしてくれない、けちんばつて聞いたけ

ど

「そんなことはない！」

「本当かなあ？」

「フリー、あんまりじっちゃんのこと疑うなよ」「ごめんごめん」

すこし口を尖らせた様子の悟空に、素直に頭を下げてフリーが詫びる。

この空気なら、とブルマはぱんっと手を合わせて亀仙人を上目遣いで見つめた。

「あ、あの亀仙人さん、潜水艇を持つていらっしゃらないかしら……  
ちよつとだけ貸してほしいんだけど……」

「潜水艇か、そりやもつておるがどうするんじや？」

「ドラゴンボールが海の底にあるんだけど、凄く深いからオラでもフリーでも潜れねえ  
んだ」

「なるほどのう。ええぞい、貸してやつても」

「その代わり？」

と、フリーが言う。

その代わり、と出ようとした声を慌ててぐくりと飲み込み、代わりなんぞ要らん、と  
亀仙人は言い切った。

「本当!?

「ホントだ本当」

ブルマが嬉しそうに顔を明るくする。

色々な感情や欲望が脳みそを駆け巡ったが、亀仙人はそのすべてをキッパリと切り捨てた。

どうしてかと言えば、フーイと呼ばれる鶴仙人の弟子が、悟空とよく似て一切隠し事をできない、しないタイプに見えたからだ。

ここで何かしらの要求をしようものなら、どういうお願いをどういう表情でどういう風にしたかまで、事細かに鶴仙人へ伝わるだろう。

そして、万一まだ次に会うことがあれば、聞いたことを使つて鶴仙人に一体どんな嫌みを言われ、勝ち誇られるか分かつたものではない。

それはとつても、とつても、とつても嫌だつた。

「潜水艇は今ちょうどクリリンとランチが買い物に乗つていつておるのじや。

もうすぐ帰つてくるはずじやから待つておれ」

「はーい」

「その間に、暇つぶしと言つては何だが、フーイ」

「なに?」

「鶴のやつの話を聞かせてくれんか?」

「いいよ」

(よしつ!)

敵を知り、敵に知られなければ百戦危うからず。

亀仙人がそんなことを考えているのと同じころ、遠い遠い山奥で、鶴仙人がくしやみをした。

再びレッドリボン軍本部、レッド総帥は、飽きもせずにレーダーにうつされた、青と水色の世界地図を見つめる。

眺めれば眺めるだけやきもきするようで、ぎりっとまた葉巻を噛みしめた。

「なんであのガキども、ドラゴンボールを手に入れないままあんな所に移動したのだ?」  
「ううむ」

その隣には、背の高い、落ち着いた様子の男が一緒になつて画面を観察している。

彼はブラック補佐。レッド総帥の側近であり、レッドリボン軍のN.O. 2にあたる。  
「私はどうも前からおかしいと思つていたのですが、あのボウズ達には仲間がいるよう  
ですな……」

あんな子供が優れたレーダーを作れるとは思えませんからね。

多分、凄い科学者と組んでいるはずです……」

「なるほど……では、今おるとこがそいつらの本拠地か」

「恐らく」

領くブラック補佐に領き返すと、レッド総帥は通信兵に向かつて檄を飛ばした。

「よし！ブルー將軍に連絡しろ！アノ場所を偵察させて敵のアジトを見つけるんだ！」

通信の先、断崖絶壁の合間、入り江に設けられた仮設基地の中で、一人の人間が受話器を持っている。

その名前の通りの美しく透き通った青い瞳。

輪郭はしゆつと整つており、金髪は短く刈られている事がもつたいなく思えるほど鮮やかだ。

軍服も、長い手足で格好良く着こなしている。

しかし特徴的なのは、テノールとアルトの中間のような、中性的な声だろう。

「何ですって！ええ……ええ……了解！すぐにそこを偵察させるわ！」

“彼”こそがブルー隊のトップ、ブルー將軍である。

# 其之六 フーイと鶴仙人

鶴仙人はよくフーイの名前を呼ぶ。

「フーイ！どこに行くつもりじゃ！」

「フーイ！何度も言つとるだろが！わしのことはキチンと、鶴仙人様と呼ばんか！」

「フーイ！腕が下がつとるぞ！なんのための修行か考えい！」

「フーイ！こここの部屋のものには勝手に触るなど言つとるだろが！」

「おいこら！フーイ！！」

それは大抵怒つている声だが、時に焦りのようなものも感じられる。

が、そういうことに限つて、フーイには自分が怒られている理由がピンとこない。

だから、キヨトンと首を傾げて、サングラスの奥の瞳を真つ直ぐに見つめる。

すると鶴仙人の意地の悪そうな唇がますますひしやげ、次の瞬間には怒涛のようなお説教が始まる。

その一番長いお説教には、大抵『危ないから』という言葉が嫌というほど含まれていた。

危ないから裏の山の奥まで行くな。

危ないから桃白白の武器庫には入るな。

危ないからやたらと高いところに登るな。

危ないから一人で山を降りるな。

危ないから、危ないから、危ないから。

けれどいつも、フリーには肝心の『危ないから』というのがよくわからない。

おそらく戦闘民族としての本能によるものなのだろうが、彼女には危険を避けるという考え方があのままなかつた。

大体、この星にフリーの脅威となりうるものなどあまりない。

「裏の山だつて、そこにじいちゃんの言つてたピツコロ魔王つてのが出てくるなら話は別だけさ」

と、いつも心の中でつぶやく。

「精々動物ぐらいのもんじやんか」

明け方、まだか細く薄暗い光の中で、3m程はありそうな真っ黒い熊が2本の足で立ち上がる。

縄張りを侵されて気が立つてゐるのだろうか。荒々しく鼻を鳴らし、四つん這いに戻ると勢いよく右の手を振り上げる。

と、フリーはその手を掴んで思いつきり空の彼方へぶん投げた。

吹つ飛んでいく姿はさながらホームランといったところか。

「こんなのは全然、危なくないよ」

ふうっと息を吐いて、また大声で自分を呼ぶのが聞こえ、仕方なく山を下りる。

けれど、フーイとしても別に鶴仙人の事が嫌いなわけではないし、うざつたく思う気持ちも、それほどはない。

そもそもその前提として、フーイは親代わりでもある鶴仙人のことが、大好きだつたし、心配されることは嬉しくもあつた。

どれほど強かろうが関係なく大事に扱われることは、こそばゆい気恥ずかしさと、愛されている実感に近い感情を抱かせる。

ただ、大丈夫だよと言つてやりたい気持ちもあつた。

そんなに一生懸命心配しなくとも、フーイとしてはどんな怪我も負うつもりはなかつたし、彼の目の前からいなくなるつもりも毛頭ない。

酷い矛盾にはなるが、自覚がなくとも、この武者修行の旅でフーイは鶴仙人を安心させたかつた。

大丈夫だといえるだけの根拠が欲しかつた。

そうすればきっと、もうあんな、自分がまるで死んでしまうかのような顔はさせずに済むと思つたのだ。

フーアの話を聞いて、悟空は何処かうらやましそうに感心し、ブルマは話半分に聞き流し、亀仙人はとつても微妙な顔をした。

そもそも亀仙人がフーアに話をねだったのは、何かしら鶴仙人の弱みが聞き出せないか、という目論見があつたからだ。

しかし、話に出てくるかつてのライバルは、悪の道にありながら、どこかまともに生活を送っている。

厭味つたらしく口うるさいが、根は眞面目で心配性なその姿は、記憶にある若い頃と全く変わっていない。

ムカつくような安心するような、なんとなく座りの悪い感情に包まれる。

「鶴仙人のじつちゃんはカホゴなんだなあ」

「カホゴなんだよ」

「過保護なのねえ！」

余り過保護過保護言わないでほしい、と亀仙人は口ひげを引くつかせる。

恥ずかしいのは鶴仙人だけであるはずなのに、どうして自分までいたたまれない気持ちにならなければいけないのか。

大きく咳払いをすると、三人の若者が一斉にこちらを向く。

何を言おうか迷つてゐるうちに、タイミングよく外からまたウミガメが玄関を叩いた。

「クリリンさんたちがかえつてきましたよ！」

「おーい、悟空～！」

「クリリン！」

はしゃいで飛び出す小さな背中に続いて、三人もどやどやと外に出る。

亀仙人はちらりと盗み見て、フーイの胴着に書かれた『鶴』の一文字を確認した。

どうしてそうしたのか、本人にもわからない。

その拍子に背中に書かれた『K\_o I\_L\_L\_ Y\_O\_U !』の文言が目に入り、ほんの少しだ

け心臓が飛び跳ね、隙間風のような息を漏らした。

悟空との再会を喜ぶクリリンとランチは、けれど突然の彼の来訪と見知らぬ少女に驚いてもいた。

これこれこういうわけでとブルマが説明すると、ランチはあらまあと声をあげ、クリリンは納得した様子で頷き、そういえばと言葉をつづけた。

「そのあたりの海だつたらついでに海賊のお宝も見つかつたりして」「かいぞく？」

「の」

「お宝!?

クリリンの言葉に悟空たちは言葉を分け合つて驚く。

「宝があるらしいのつてそのあたりの海でしたよね」

「そういえばそうじゃな」

「なんでも亀仙人の話によれば、昔、一帯の海を荒らしまわった海賊がいて、その宝がどこかに隠されているらしい。」

その一帯の海、というのがどうやらドラゴンボールが沈んでいるあたりのことなのだ  
という。

「ううん、口マンね！ 素敵！ 宝物を探すのもいいわね！」

「面白そうだな〜、オレもついていこうかな」

「ほんとか!? 危なくとも知らねえぞ」

一応心配する言葉を口にしてはいるものの、クリリンがついてくると聞いて悟空は心底嬉しそうにする。

「武天老師様、行つてもよろしいですか？」

「うむ、よからう。悟空を手伝つてやれ」

こうしてクリリンを仲間に加え、潜水艇は出発する。

手を振り見送る亀仙人、ウミガメ、ランチ。

しかし、三人には黒い——いや、赤い影が確かに忍び寄っていた。

## 其之七 海賊たちの洞窟

「わわわっ！」

「なつ、なんだ!?」

海中、ドラゴンボールを探し海底洞窟に入ろうと試みていたところ、突如岩壁が爆発する。

いやちがう、魚雷に襲われたのだ。

4人乗りの小型な潜水艇は爆風と塵にあおられ、洗濯機に放り込まれたハンカチのようにゆらゆらと頼りなくぐらつく。

「ど、どういうことだ!?」

クリリンたちが振り返ると、そこには青い青い暗闇が鎮座している。

茶色い岩肌や海藻をかき分け、白い泡の筋を追った。

そのずっと奥、ぽつりとまるでチョウチンアンコウの明かりにも似た、何かを見つける。

それは自分達が乗るもの十数倍はあるであろう、鯨のような潜水艦だった。

「あいつらが撃つたんだわ！」

「レッドリボン軍のやつらかな」

「あいつらしつつこいなあ」

「えっ!?」

うんざりした様子のフリーイと悟空へ思わず目をやつて、ブルマとクリリンの二人は顔を見合せた。

恐る恐るブルマの方が問いかける。

「ちょ、ちょつと待つてレッドリボン……つて。あのレッドリボン軍……!?」

「知つてんの? あいつらもドラゴンボール探してるらしいんだ」

「そういや悟空はジングル村の連中が初めてじやないんだつけ」

「うん。オラが邪魔らしくて、いつも喧嘩を仕掛けてくるんだぜ」

「じよ、冗談じやないぜ!」

潜水艇の操縦かんを握り締めたままクリリンは声を張り上げた。

「お前らそんな奴に狙われてるのか!? レッドリボンつていったら世界最悪の軍隊だぞ！」

「ちょっと、よそ見しない！」

後ろから無理やり手を伸ばし、フリーイが操縦かんを奪い取る。

ぐうつとせかされるように動き出す船の後ろから、再び魚雷が迫つて来ていた。

「また撃つてきた！」

「だからそういういつてるじゃん！」

「言つてはないだろ！」

クリリンを押しのけ操縦席に座つたフリーイは、操作盤をみてあれつと驚く。

「この船マシンガンとか魚雷とか、水中ライフルとか積んでないの!?」

「積んでるわけないだろそんな物騒なもの！」

「普通ついてるでしょこういうやつには！」

ごたついている間にも、猛然と魚雷は近づいてくる。

白い泡を飛行機雲のように後ろに伸ばし、ただ一直線に。

十分目視できるスピードなのが返つて恐怖をあおる。

「いいから、早く洞窟に隠れるのよ！」

悟空たちが船を進め、狭い穴の奥まで入り込むと、それを追つてブルー将軍たちも小型艇に乗り込み後を追う。

ドラゴンボールをめぐる、奇妙な鬼ごっこが始まった。

＼・＼・＼・＼

一方その頃、カメハウスでは……

ブルー將軍の別動隊があつという間に亀仙人の返り討ちに遭い、無様に撤退していた。

ヽ・ヽ・ヽ・ヽ

水路が行き止まりになり、敵も味方も船を捨てて洞窟の中をひた走る。

湿つた冷たい岩の壁を、人工的な明かりが寒々と照らした。

頭上へ張り巡らされた電線は、ここが誰か意図を持った人間に、しかもかなり長期にわたつて使われていたことを、これ以上ないほど実感させる。

「わかつたぞ！」

突然、クリリンは目を見開いて立ち止まつた。

それに合わせて他の三人もとりあえず足を止める。

「出発する前に言つただろ、大昔の海賊の宝がこのあたりのどこかに隠してあるはずだつて！」

それがここだよ！」

「えつ！」

きよとんとした顔のフリーと悟空を置いて、ブルマもポンと手を叩いた。

「なるほど……」なら滅多に見つかりっこないわ！」

「まさかこんなところにあつたなて……すごい大発見だ！」

急に眼の色を変えて万歳三唱をするクリリン。

次の瞬間にはすっかりレツドリボン軍の事など忘れて、意氣揚々と歩きだす。と、

——カチツ——

その低い頭の上ギリギリを何かがかすめた。

ちらつと眼をやると、銛が震えながら突き刺さつている。

それも、硬いコンクリートで固められた壁の片側に、自立するほど深々と。

「……い？」

恐らく後数センチ背が伸びていれば、頭蓋骨の右から左を貫通していただろう。ぶわりと脂汗が吹き出し、血の気が引く寒気が襲う。

「な…なんだよ、これ／＼つ！」

見てみれば、急に四角く整えられた通路の床にはびつしりとスイッチのようなものが敷き詰められていた。

「侵入者から宝を守るための罠よ！」

床にあるボタンをふむと横の穴からヤリが飛んでくる仕掛けだわ！」

「じゃあこの奥に宝があるのは確実つてことか」

「でもこれじやあ通れっこないわよ！」

「ようするにさあ」

狼狽するブルマに、悟空がなんてことないかのように言う。  
「下にある丸いのを踏まなきやいいんだろう？」

「孫くんつたら何言つて……」

彼女が言いきるよりも、彼が動く方がずっと早い。

びゅっと風のようにはけだすと勢いよく足を踏みしめる。  
放された矢のように低く、長く、遠く、悟空が飛んだ。  
とんつと着地すると三人の方を振り返つて手を振る。

「お——い！お前たちも飛べよ！」

「あ、呆れた……20メートルはあるのに……！」

「その手があつたか、よーし！」

だつとクリリンも勢いよく駆け出し、思い切りよく地面をける。

が、勢いが良すぎて天井に思いつきり頭をぶつけ、スイツチの地雷原のギリギリの位置にひっくり返つた。

ない鼻先のあたりを2、3本の銛がかすめる。

「次はブルマの番だ！さあ飛べ——つ！」

「冗談じやないわよ！飛べるわけないでしょ——つ！」

怒鳴り声を張り上げるブルマの足元で、フーアも頷いた。

「私もブルマには無理だと思う」

「ね、そうよね！私ったら孫くんたちとは違つてか弱い乙女だし」

「だから、さ」

につと少女はいたずらっぽく笑つた。

そこには気遣いはない。優しさもない。

ただ、興味本位で蝶の羽をちぎるような、残酷な無邪氣さと加虐心があつた。

「私が投げてあげるよ！」

「へ？」

ブルマが言葉の意味を理解するよりも早く、小さな手がまるで発泡スチロールのように、自分よりも背の高い女性の体を持ち上げる。

「ちよ、ちよつと！フーア！ま、待つてよ！」

「暴れると落ちるよ。落ちると刺さるよ」

混乱する悲鳴を聞いて、余計に楽しそうにウキウキとする。

「体育座りみたいにぎゅっと丸まつて。大丈夫、悟空とクリリンが受け止めてくれるし」

「だからちよつと待つてよ！そ、そうだ、そんなことしなくても如意棒を使って……」

「そ——れつ！」

「キヤ————つ！」

金切り声をあげながらも、言われた通り防御姿勢をとつたブルマは、ある意味とても冒險向きなのかもしれない。

一直線に近い弧を描いてあつという間に彼女の体は地雷原を越え、待ち構えていた二人によつてキヤツチされる。

まもなくフリーも、軽々その隣に降り立つた。

「ちよつと！あんたねえ！」

「でも、早かつたし安全だつたじやん？」

「ね？」と首を傾けるその仕草に、悟空とはまた別の話の通じなさを感じて、ブルマは諦めて口を閉じた。

## 其之八 遺された番人

先ほど見たレッドリボン軍のものより一回り二回り大きな潜水艦。

ガソリンスタンドで見るような給油機に、ガソリンタンク車。

メンテナンスのためだろうか、巨大なクレーンや鉄橋のような通路もあつた。

高い天井の下には比喩ではなく、三階建てのビルがそのまますっぽり収まっている。

そこは紛れもない、立派な港だつた。

「すづめーーー！」

「ひやくーつ！」

「海賊たちの港だわ！」

「こ、こんなところに……！」

狭い通路を抜けた先、突然広がつた巨大な空間に悟空たちは驚きというより、感嘆に

近い声をあげる。

「うわ、でかい奴だけじゃなくて、ちつさい潜水艇まで何台がある！

ドラム缶は、これ、燃料？」

「ほら穴の中にこんなすげえとこがあつたんだなあ」

「これじやあ海賊の基地が絶対に発見されなかつたわけね……！」

「これで宝物が締まつてあるのは確実になつたつてわけだ！」

意氣揚々とあたりを見て回つていると、ブルマが立ち止まり潜水艦を見上げる。

「ここにこれがあるつてことは、まだほかに洞窟の出口があるんだわ」

「え？」

「なんで？」

「だつて、昔はカプセルがなかつたのよ。小さくして持つていけないわ」

「あく、じやあこの港を潜つていくと、どつかでまた海に出るのかあ」

「そういうこと」

それをじつと隅で聞いている人影が一つ。

軍服姿に涼やかな顔、あのブルー将軍である。

海賊たちの隠し扉を使い、悟空たちとはまた別のルートでこの港にたどり着いていた。

なお、部下たちは例の通路で全滅した。

念のため補足しておくが、彼らが間抜けなわけではない。ブルー将軍が優秀なのだ。

少なくとも、罠を抜けるためのスイッチの存在を見抜いた洞察力は、かなりのものと言える。

そして、彼は戦闘面においてもかなりの自信があつた。

にもかかわらず、こうして姿を隠している理由もきちんとある。

「今ここでガキたちを殺してしまうより、ドラゴンボールを宝を奴らに発見させた方がおりこうさんね……」

そうぽつりと溢したところ、

「ん!? 何かいるぞ!」

悟空の言葉を聞き、さつと壁に張り付く。

「レッドリボン軍か!?」

「違う！ 人間の気配じゃねえ！」

「そこだ！ どんづ」

ピッとフライの指先が真つすぐビルの入り口を指さす。

「波ア!!」

真つすぐにとんだ光線の先で、何か硬いものが割れる音がした。と、洞窟全体がぐらつく。

「わわっ」

パラパラと降つてくる小石に思わず頭を覆うと、ひゅつと何かがブルマの目の前をかすめた。

「きや、きやああああ!!」

髑髏の顔、長く伸びた頭、長い尻尾、ローラーで走る姿は明らかに生き物ではない。恐らくは海賊が侵入者対策に使っていたロボットなのだろう。足のあたりには番号が入っている。

左腕にはマシンガン、右腕には剣。が、剣は根元のあたりからポツキリ折れている。先ほどフリーのドドン波が当たつたのはどうやらこれらしい。ブルマに届かなかつたことで武器が壊れている事を認識したのか、ロボットはあつさりと柄の部分を捨てた。

息つく間もなくマシンガンを構え、弾をバラまき始める。

咄嗟にクリリンとフリーは飛びのき、悟空はブルマを抱えて横へ避けた。  
「こいつ！」

「ダメよ！」

再びドドン波を撃とうとするフリーをブルマが止める。

「あんたがまたさつきのを使つたら、洞窟が持たないわ！」

「うげえつ、めんどくさい！」

「わかった！こんなにやろ！」

つぶてのようくに悟空が駆けだし、勢いよく蹴りつける。

クリリンもその動きに答えるように腕を殴りつけた。

息の合った動きで二人はロボットへ交互に攻撃を加え続ける。が、ロボットはびくともしない。

鋼鉄の拳が素早く動き、クリリンの方を吹っ飛ばす。

「大丈夫かクリリン！」

「イテテ……あ、ああ……！」

あいつかなり強いぞ！』

「やるなあ！」

と、動きを止めた二人を狙つて再びロボットがマシンガンを撃ち始めた。

四人はそれぞれ車や木箱の影に隠れ、なんとかやり過ごす。

「ねえつ！悟空はここに私と残つて！

クリリンとブルマは先にドラゴンボール持つてきてよ！」

「大丈夫なのか!?」

「いいこと思いついたからダイジョブ！」

「よーしつ！」

クリリンの問いかけにぐつと親指を突き立てたフリー。

それを見て悟空は再び勢いよくロボットへ飛び蹴りを食らわせ、注意を引く。

「いまだ、いけ！」

「がんばれよっ」

奥の通路へ向かつて走り出した二人を見送り、フリーと悟空はロボットと正面から対峙する。

そのすきをついてもう一人、通路へ駆け込んだがそれには気づかない。

「で、いい考え方ってなんだ？」

「ようは、洞窟が壊れなきやいいわけじゃん」

突進を同時に避け、各自構えをとる。

ゴニヨゴニヨと告げられた言葉に、悟空は力強くうなずいた。

「じゃつ、よろしく！」

フリーは勢いよく飛び上がり、そのまま潜水艦の上をめがけて壁を駆け上がる。骸骨の節穴じみた目がその動きを追つて武器を構える。

しかし、

「こつちだつ！」

よそ見をした間に悟空がそのしつぽを掴み、思い切つて水中へ向かつて投げた。重たい体は水に沈んでいく。

それを確認し、彼はフーアから言われたとおり如意棒を使つて遠くからその体を固定した。

水中でも動けるのか、棒を動かそうと作り物の手足をバタつかせている。  
「残念でした！」

水面へ穴を開けるように、光線が真っ直ぐに伸びる。

頭部を正確に撃ち抜かれたロボットは、ビクッと震えるように動きを止めた。

次の瞬間、ひと呼吸おいて水柱が上がる。

あとには浮かんですら来ない、鉄のクズや部品たちが静かに港の底へ沈んでいった。

「イエーイ！」

思わず二人はハイタッチを交わす。

「よし、急げこう！」

「うん！」

ブルマたちの後を追つて通路へ走り出す。

途中分かれ道があつたものの、地面に書き残された矢印の方向へ迷いなく進んだ。

それが、書き換えられたものだと知らずに。

# 其之九 対決！ブルー将軍！

「ま、まざいよかなり崩れ始めてきた！」

「急がないと！」

パラパラと小石やほこりが降つてくる中、クリリンとブルマは必死に足を進める。走り続けているうち通路は行き止まりになつてしまつたが、代わりにポツンと井戸があつた。

二人は水の中に飛び込み、さらに先へと進む。

水からあがるとこじんまりとした、岩肌の空間に出る。

目の前には今までの警備からすれば随分と無造作に、人が入れるほど大きな宝箱がおかれていた。

蓋を開ければ縁のあたりギリギリまでみつちりとお宝が投げ込まれている。

色とりどり、大きささまざまの宝石、ネックレス、金塊、中にはサーベルや王冠まで。

「わわわわ——っ！」

「す……すげ……!!やつた——っ！」

「こ、これ物凄い金額になるわよ！」

「ほつほつほ……」

手を取り合つて喜んでいる後ろから、ゆっくりと近づく金髪碧眼の男。

「残念ながら、その宝はレッドリボン軍が頂くわよ」

「えつ!?!」

「レ、レッドリボン……!？」

得意げだが穏やかに、ブルー將軍は微笑んだ。

「ふつふつふ……戦うつもりなら、やつてやつてもいいぞ……でも相手が悪かったようだな」

自信満々にクリリンが立ちふさがり、不敵な声で言う。

「ほう……大した自信ね……」

「さあ、こいよ」

お互に構え、鋭く跳ぶ。

しかし、クリリンの拳が届くよりも先にブルー將軍が素早く顔を殴る。小さな体が岩にぶつかり、ブルマの甲高い悲鳴が響く。

「うぐぐ……」

「ほ——つほつほつ、威勢が良かつた割に実力はそんなものなの!?!」

「よ……よ……し……」

何とか起き上がるとなきな体が勢い良く地面をけり、ブルー將軍の方へ突つ込んでくる

——動きのまま、停止する。

戸惑いで動きが止まるがそれも一瞬の事で、何かを悟った彼ははっと上を見上げた。しかし、クリリンもその一瞬を見逃さず、倒れるほど強く蹴りつける。

「へへんだ！ 恐れ入ったか！」

「く……くつ！……わ……私の美しい顔を……けけ……蹴つたわね……」

指の腹で地面を引っ搔き、弱弱しく起き上がったブルー將軍に、けれど目立った外傷はない。

ただ、何かが伝う感覚で思わず鼻に手をやると、赤い血がペたりと手のひらについた。

「血!? 鼻血!!」

異常に動搖した様子でブルー將軍は体をわなわなと震わせる。

「……この高貴で誇り高き私が……はははは……鼻血をたらして……鼻血を

……」

「ど、どうしたんだ？」

「最低つ！ 私つたら最低つ！」

立ち上がった彼は涼しい表情がすっかり歪み、殺氣立つた顔をクリリンに向かえた。

「よ……よくもやつてくれたわね……！ ゆ……許せないわ私許せない……！」

キツと睨んだその美しく、青く、澄んだ瞳が妖しく眩しく輝く。  
見つめられたクリリンはびくりと肩を揺らす。

そして、そのまま動けなくなつた。

目の前に敵がいるいうのに、腕一本、指一本自由にならない。  
「ぐ…………ぐぎ…………！」

一步、また一步とゆっくりブルー将軍は彼に近づく。

「ほほほほ…………いかがかしら？ 私の超能力は。

恥をかかせていただいたお礼に殺してあげるわ…………！」

そこからは完全に一方的だつた。

動けないクリリンの体をボールのように蹴り上げ、そのまま殴りつける。

受け身も取れずに壁にぶつかり、ずるずると岩肌をこすつて地面におちた。  
ぐつたりとした小さな体を見ても容赦することはない。

彼の頭より大きな岩を持ち上げ、しつかりと構える。

「さあ！ あの世にご招待するわ……！」

いつてらつしや————いつ！！」

勢いよく振り下ろされようとしたその時。

「バシュツッ！」

「むつ？！」

「ん！？」

「えっ！？」

二つの影が水辺から飛び上がった。

「孫くんっ！！フーィっ！！」

ブルマの声にこたえるように、二人は素早く着地する。

「そいつレッドリボン軍よ！私たち殺されるところだつたの！やつづけて！」

「レッドリボンか……」

「なるほどね……」

「どうとうお前たちがやつてきたのね……」

だらりと地面に倒れるクリリンをちらりとみて、悟空は鋭くブルー將軍を睨んだ。

「クリリンやつつけたのおめえかつ！」

「クリリン？ああこいつね。そうよ、これからとどめを刺すところなの」「

「ご…悟空……」

「こんにゃろ——つ!! 今度はオラがおめえをやつづけてやる！」

「ほつほつほ——つ！私の恐ろしさを知らないようね！いいわ教えてあげる！」

今度のドラゴンボールは頂きよ！」

きつと再び青い瞳が妖しく輝く。

不可思議な光が目の前のいる悟空と、死角から襲おうとしたフーアイを捉えた。「ああっ！孫くん、フーアイ、そいつの目を見ちゃだめ——っ！」

「えつ！？」

「いつ！？」

びくりと二人は肩を揺らしたきり、ピクリとも動けなくなる。  
「ど、どうなつちまつたんだ……！？」

「ここ、これは……！」

「ほつほつほつほつほ……！」

もう一度石を拾い上げ構えると、ブルー将軍はゆっくりと歩みを進めた。

悟空は必死に力んで体を動かそうとするが、ピクリともしない。

フーアイの方は静かに目を閉じてしまつて動こうとする気配すらない。

「いかがかしら？私の超能力は」

「ぐつ！ぐつ！」

「きえつ！」

勢いよく蹴り飛ばされ、軽々と悟空の体が宙に浮いた。

そのまま高く高く飛んで天井に勢いよく当たる。

「ぎやふつ！」

「孫くんっ！」

「うぎぎぎくく……」

「ほつほつほつ、さつきまでの威勢はどうしたの？」

ピクピクと痙攣する姿を満足げに眺めると、今度はフリーに向く。

「今度はお前の番よ！」

思いっきり拳を振りかぶったその顔に向かつて、勢いよく砂がかかった。

「な、なに!? めがつ!!」

「悟空!!」

「ジャ～～～ン、ケ～～ン～～……」

フリーの呼びかけに答えて素早く起き上がり、拳を構える。

「グ——ツ!!」

ズドンと鈍い音がしてブルー將軍の体が吹っ飛び、壁に当たつて地面に落ちる。

目を回してひっくり返つたその姿を見て、クリリンとブルマは両手をあげて万歳をし

た。

「すごいじゃないのフリー！ 超能力に勝つなんて！」

「片足だけだつたけどね。じつちやんに教わつたんだ」  
えへへ、と胸を張る姿に水を差すような轟音が響く。

「きやあああ——つ！」

「こりやもうだめだつ！逃げないと！」

「ブルマ！ ドラゴンボールはどこつ！？」

「そこの水たまりの底よ！」

「よ——しつ！三人は先に逃げててくれ！」

『言うが早いかどぽんと悟空は水の中へ飛び込んでしまう。

「あ……あのやろう……！」

「しようがないわ！先に行つて待つてましょ！」

その後、何とか悟空もドラゴンボールを手に潜水艇へ乗り込み、全員そろつて脱出した。

途中燃料切れになり、水路の途中で立ち往生してしまつこと也有つたが、悟空の機転により、かめはめ波を使つて海上へ。

筋斗雲にぶら下がるようにして、四人は空を飛ぶ。カメハウスに向かつて……。

きらきら、きらきらと波間が光る。

その間から、金色の何かが、ざぱりと浮かび上がつた。

## 幕間 ジャングルの修行

フリーイが旅に出る1、2年前のある日の事。

「今日から一週間は儂と特別訓練だ。嬉しいか?」

「うれしい!わーい!」

桃白白に言われるまま、彼女は両手をあげてバンザイした。

その様子に満足げに頷くと、ひよいつと小さな体を抱えて飛行機の助手席に乗せる。

慣れた手つきでよどみなく操作盤を扱い、スムーズに出発した。

眼下で見送る鶴仙人と天津飯が、見えなくなるまでフリーイは手を振っている。

ところで、桃白白は余り乗物を必要としない。

下手な車などよりも走った方がよっぽど早いからだ。

その辺にある柱や丸太を投げて飛び乗れば、ジエット機などよりもずっと早く移動できる。

では、何故飛行機を購入したのか?

理由は簡単。兄である鶴仙人にとっても怒られたからだ。

フレイを引き取つてから、仮にも拾つてきた者として、師匠として、桃白白はなるべ

く鶴仙流の道場へ帰るようにした。

それまでは年に2、3度だつた帰省はあつという間に月1に増やしたのだ。

困つたのは鶴仙人、もとい彼の庭である。

深々と突き刺さる柱が与える芝生と地面へのダメージも、年数回ペースならまだどうにかなつた。

しかし月1となるとそうもいかない。あつという間に穴ぼこだらけになり、あちこちで丸い形に草が禿げ上がる。

「いい加減に柱で帰つてくるのをやめろ」ととくとくと説教を受けた。

年甲斐もなく。

だから、特に必要もないのに飛行機を買つたのだ。

カスタマイズで様々な武器やギミックを仕込むのが楽しくなかつたとは言わない。

その為に操作盤にはマシンガンだの魚雷だの水中ライフルだの、物騒な文言が並んでいる。

ステルスを意識したかなりの静音使用もあり、こうして飛んでいる間も気にせず鳥が

すぐ近くを飛んでいく。

道場があつた山からは随分遠いところまできたようで、植物の様子がかなり変わつていた。

うつそうと木々が生え、うつすらと煙のように霧が舞う様子は森というよりジャングルと言った方が正しい。

「この辺でいいだろう」

「ここで修行するの？」

「ああ」

ぱかっとフーアイが座っている側のドアが開く。

身構える暇もなくあつといいうまに、力強く突き飛ばされ下に向かつて落下していく。

「えええ~~~~~っ！」

「6日後に迎えにくるぞ——!!」

バキバキと枝を折りながら、なんとか無傷で着地する。

「いてて……つきつきりでみつちりやつてくれるかと思つたら……放置なんて酷くない？」

ズレた悪態をつきながら起き上がりつた視界を、影が覆う。

雲でも流れてきたのかと見上げると、そこには巨大な爬虫類の頭があつた。

鱗に覆われた体、小さな手、長い尻尾。

まぎれもない恐竜が、その口をあんぐりとあけ、一飲みにしようと迫つてくる。

「ばーか」

のを、たつた一発で殺してしまう。

「今日の『飯はこれか。火つてどうつけるんだろ。氣でつくかな?』」

こうしてフーアイのサバイバル生活が始まった。

これといった強敵がいるわけではない。

本気を出さなくても一発でのせてしまう生き物ばかりだ。

とはいって、油断しつぱなしというわけにもいかない。

鋭い牙や爪で不意をつかれれば、流石に普通に痛いし怪我も負う。

それなりにボロボロになりながら、何かに気づく感覚もあつた。

鳥の羽ばたき、小さな動物たちのじやれ合いや何かの群れの遠吠え。  
様々な動物の足音から分かる、大体の大きさ。強さ。

何かを追っているのか、探しているのか、逃げているのか。

木の葉のかくれる音に混ざる息遣い。

ついでといっては何だが、武空術の練習も行つた。

前々から教えられてはいるのだが、中々できない。

氣弾が撃てるならそう難しいことではないと、鶴仙人も桃白白も言つている。

けれどできないのは、集中力のせいだとも、何度も指摘されていた。

全身に氣を巡らせる。

薄く、満遍なく、行きわたらせる。

それがどうしてもできない。

何ヵ所かに強くかたまるか、逆に完全に散つていつてしまう。今ならできそうな何かを掴めた気がしたのだが……。

「あ——！もう!!」

ゴロンと大の字になつた体を、象が器用に避けて通り過ぎていつた。

そうして、約束の6日目。

再びジャングルの上空に一機の飛行機が訪れる。

空中でホバリング状態のまま扉が開き、乗っていた男がひらりと飛び降りた。そのまま自由落下状態で真つすぐに――

いや、木々の間を微妙にすり抜けながら降りてくる。

物理法則を無視したかのような柔らかい着地で地面に着地しようとした、瞬間。

がさりと近くの草むらが揺れ、思わずそちらを見る。

と、音がしたのとは逆方向から弾丸のように鋭い体当たりが襲う。のを、くんつと体を浮かせて避け、そのまま上から踏みつぶした。

「ぐえつ！」

「なかなか元気な様だな。感心したぞ」

「お～もうい～！」

「何を言う、羽のように軽いだろうが、ほれほれ」

「ギブギブ！降参！」

ようやく下敷きから解放されたフーイは、服のあちこちが破け、ほつれ、かなりみすぼらしくなつてしまつていた。

が、本体の方はかなりぴんぴんしている。やせたり、やつれたりしている様子もない。どことなく雰囲気は変わつているようだ。無論、いい方へ。

「どうだ？私の特別サバイバル訓練は」

「寂しかつた！こんなに一人なの初めてだつたし」

「……そうか」

ずつこけそうになりながらも、いつものようにくしゃくしゃと頭を撫でてやる。

「さつきの奇襲はなかなかだつたぞ」

「通じなかつたけど」

「私を誰だと思つている」

「世界一の殺し屋、桃白白でしょ！ 知つてるよ！」

「そうだ。お前の不意打ちなんぞへでもないわ」

ひよいつと行きと同じように体を抱え、そのまま宙を飛んで飛行機の中へと戻る。

数日ぶりのクツジョンにフーアイは機嫌よく座り、感触を確かめた。

そのまま窓の外を眺めていると、緩やかに方向転換をしている事に気づく。回れ右にしては妙な動きだ。

「道場に帰らないの？」

「お前がホテルでひと風呂浴びてからだ」

「えー、道場のお風呂でいいじゃん」

「修行の褒美だ。レストランで今まで食べたことがないものを、思う存分食わせてやろう」

「ホント!？」

「ああ。兄ちゃんには今回の修行の事は秘密にしておけよ」

「うん!」

目を輝かせ、はしゃいだ様子のフーアイは、何も考えず簡単に元気よく頷く。

その言葉を聞いて桃白白はひそかにそつと胸をなでおろした。

ジャングルに落として数日放置したと知つたら、あの過保護な鶴仙人が一体どれだけ怒り狂うことか。

世界一の殺し屋だって師匠は怖いし、どれだけ強くなつても弟は兄に中々頭が上がら

ないのだ。

# 其之十 決着！ブルー将軍

「大人しくそれをこつちに渡しな」

ドラゴンボールと大粒のダイヤを入れ、喜びを分かち合う亀仙人とブルマ達を襲つたのは、生き残つていたブルー将軍——ではなく、くしゃみをしてしまつたランチだつた。

片手を差し出しながらもサブマシンガンの銃口を、しつかりと周囲の人間に向けている。

明らかに慣れた手つきと体裁きに、こういう時真っ先に手を出すであろうフレイすらぽかんとしていた。

飛び立つてしまつた彼女を見送つて、どういうこと？と呟く。

「亀仙人のじつちゃんと一緒に暮らしてゐる人じやなかつた？」

「半分は仲間だけど、もう半分は強盗なんだ……」

「だからどういうことなのさ」

「くしゃみをするたびにいい性格と悪い性格が入れ替わる変人なんだ」

「なんて？」

クリリンの告げた答えで余計に混乱し、頭を抱えてうんうん唸る。

その隣では唐突に手に入れたダイヤモンドを唐突に失い、亀仙人がすっかり気を落としていた。

「オラ、次のドラゴンボールを探しに行くよ。フリーも来るんだろう?」

「私はもう家に帰るわ。飛行機貸してくれる?」

対して、ブルマと悟空はマイペースに自分の用事を日々に話す。

「儂はもう飛行機は持つとらんよ」

「え!? ジやあどうやつて都まで帰るわけ!?」

「私がのんびり陸まで乗せていいってあげますよ」

「じいちゃん、ドラゴンボール預かつてくれな!」

「よからう」

思い思い、日々にわいわいがやがやおしゃべりしていると。

——しゆるるるるる——

「えつ!」

「わつ!」

「なつなんじや!」

突然、どこからともなく人数分の縄が現れ、逃げる間もなくひとりでに巻き付いた。

あつという間に全身を縛り上げ、その場に縫い付けられたように身動きができないな  
る。

何とか逃れようともがいてみようとするが、絶妙な縛り具合で上手く力を入れること  
ができない。

成す術の無くなつた悟空たちの前へ、高らかな笑い声と共に彼が姿を現した。

「ほつほつほ！ また会つたわね、いかがかしら？ 私の超能力第2弾は」  
「げげげつ！ レツドリボンの……！」

「生きてたのかつ！」

悟空が飛び掛かろうとするものの、やはり体が動かせず、そのばでぴょこぴょこジャ  
ンプするだけに終わる。

気にするものも阻むものもないブルー将軍は、ブティックを物色するかのように、カ  
メハウスの中をゆっくりと見て回つた。

無造作に置かれた小さなリュックを見つけ、そのなかにドラゴンボールを発見する  
と、満足げに見せつける。

「たしかに、ドラゴンボールが三つあつたわ。遠慮なく頂くわね」  
「ち、ちくしょう！」

「あんた達、ドラゴンボールを集めて何を企んでるのよつ！」

「さあね、レッド総帥のお考えは私たちの知るところじゃないわ」

悟空の悪態も勝気なブルマの怒鳴り声も意に介さず、優雅に受け答えする。

そしてポケットのあたりから何か取り出し、愛想よく美しく微笑んだ。

「貴方達にはいろいろお世話になつたし……ボールも頂いたしお礼にいいものあげるわ  
ね」

と、時計のようなそれの、文字盤とスイッチを見せつけるように掲げる。

「強力な时限爆弾ちゃんよ。5分後にセットしてあげたわ。

5分間たつぶりと恐怖を味わいなさいな」

「い!?

「……でも、その前に」

わざわざ一度、乗つてきたりしい飛行機の中へ戻つていく。

しばらくごそごそと何かを探つていたが、間もなくして戻つてきた。

立派なショットガンを両手に構えて。

一般的なものより、口径が一回り大きいように思える。

どんな屈強な男相手でも、頭も顔も、一瞬でミンチにして吹き飛ばしてしまえるであ  
ろう。

それを、立つたまま縛られて動けないフリーへ、容赦なく向けた。

眉間のあたりでピタリと狙いが定まる。

「どういうわけか、貴方は超能力をちょっとだけ無視できるようね。この縄が解けるとは思わないけど、もしも縄抜けなんてされたら、折角の爆弾ちゃんが台無しだもの」

貴方だけは、今ここで、しつかりと殺してあげる」

がちゃ、と持ち手の部分の何かを動かす。

銃弾が銃身に装填されたのだろう。

指先に少し力を籠めるだけで、引き金が動いて弾が出てしまう。

「やめろっ!!」

「よ、よせ！」

「そうよ、まだ小さな子供じやない！」

「卑怯だぞ！」

「ひきょう……いい言葉だわ……」

罵倒の言葉にも、ブルー將軍はむしろ嬉しげだった。

うつとりと自分の頬に手を添え、ほうつとため息をつく。

「貴方も何か言つてござらんなさい？」

「……」

フーアは黙つたまま、少しも口を開かない。

だからと言つて睨みつけているわけでもない。

しつかりと銃を見つめてはいたが、意識は別のところにあつた。

ただの銃弾ならあまり自分に効くとは思わない。

けれど大口径のショットガンを、これほどの至近距離で喰らつたらただでは済まないだろう。

ひよつとすると、あっさり死んでしまうかもしれない。

それは困る。とても困る。

黙つて飛び出した武者修行の旅で、死んでしまうなんて物凄くかつこ悪い。

鶴仙人だつてそれ見たことかと言いながら、きっと物凄く悲しんで泣いてしまう。

天津飯にだつて馬鹿にされるだろう。

けれど彼は優しいから、きっと鶴仙人に負けないぐらい涙を流すに違いない。

何よりも、桃白白は、きっと、間違いくなく、心底がつかりするだろう。

所詮は、この程度だつたのかと。

それは嫌だ。我慢できない。

誰よりも、何よりも強く、生まれてから一度も勝てない相手。

きつと世界で一番強い、自慢の師匠。

いつの日か、どんな手を使つてでも、勝つてやるのだと、物心ついたころから決めて  
いる。

その足元にも及ばないうちに死ぬなんて辛すぎる。  
だから、必死に思い出す。

修行の日々の間、頭で覚えたこと、体で覚えたこと。  
言われた言葉、掴みかけた感覚。

気弾を撃てるなら、決して難しくない。

コツは、全身に気を巡らせること。

過不足なく、満遍なく。

意識を広く持ちながら集中すること。

あの日、気を緩めながら警戒した、あの知覚。

「怖くて何も言えないの? つまらないわね。まあいいわ」

いよいよ冷たい鉄の筒の、切つ先が近づく。  
念入りに、ぴたりと額に当てられる。

「死ぬのよ!」

引き金がひかれかけたその瞬間、フリーの姿が消えた。  
いや違う、勢いよく空に向かつて浮かび上がった。

「なにつ!?」

咄嗟に上を見上げ、銃を構えなおそとしたブルー将軍は、しかし咄嗟に顔を覆つた。小さな体の姿を肉眼ではとらえきれない。

何故なら、彼女は照り付ける太陽を、背にしているから。

構えは取れないが、充分だ。

力を足先にこめ、全身を弾丸のように硬くする。

重力を味方につけ、眼下の男に狙いを定める。

高さと重さがそのまま破壊力に還元される、必殺の一撃を不意に食らい彼は——  
——ぐつと喉を潰した様な短い悲鳴を上げて、なすすべなく気を失つた。

# 其之十一 恐るべき男

「先にレツドリボン軍から片付けよう」  
見よう見まねでレツドリボン軍の飛行機を運転しながら、酷く冷静にフーアイは言った。

キツチリと縛り、目隠しまで施したブルー将軍はカメハウスに預けてある。

先ほど、街中くの公衆電話で通報してあるので、間もなく警察が来て回収してくれるだろう。

「賛成！」

「だよねー。悟空ならそう言つてくれると思つた！」

「でも、オラ、あいつらの家知らねえんだよな……フーアイはしつてんのか？」

「ふつふつふ、よくぞ聞いてくれました」

オートパイロットと書かれたボタンを押すと、ファイルボックスを「そごそ漁る。

そのなかから特に大きな地図を取り出して広げると、ある地点に赤い印がしてあつた。

三角形を二つくつつけたりボンのような図形の中には、「R・R」と書かれている。

「ここ」が本拠地に間違いないよ。ナビのマップにも記録してあるし」「よーし、それじゃあ筋斗雲で……」

「待つた待つた！」

外に飛び出そうとした首根っこをフーアイが慌てて捕まえた。

「最初はさ、この飛行機でゆっくり近づこうよ」

「なんだだ？」

「相手を油断させるためさ」

得意げに話す彼女の口ぶりには、独特的の雰囲気がある。

明らかに、人から聞きかじった知識を他人の前でひけらかす時のそれだつた。

「向こうも多分ドラゴンボールのレーダーを持つてるから、私達の大体の位置は知つてるはず」

「じゃあ急いだ方がいいんじやねえか？」

「チツチツ。敵はさ、私達の移動速度を見て、大体これぐらいで到着するだろうつて算段をつけるわけよ」

「うんうん」

「つてことは、その到着する時期に合わせて準備しようつて考えるじやん」

「そうだな」

「じゃあ、私達が相手の予定より先に到着したら？」

「……あいつらを不意打ちできる？」

「そういうこと！」

ニヤッと笑つてみせると操縦かんを握り直し、オートパイロットのスイッチを切る。  
あたりに丁度良さそうな広場を見つけると、そこへ向かつてゆつくりと機体を下降させた。

「そういうわけで、2、3日は途中でキャンプしながら目指そう。

日が暮れそうだし、今日はこの辺りでご飯にしようよ」

「お前、頑いいなあ！」

「でしょ～？」

ぴよいっと二人そろつて飛行機から下りると、備え付けのサバイバルバックから、寝袋やら何やらを取り出す。

ホイポイカプセルの中にきちんとしまい、フーアイがポケットへ大事に入れた。  
「じゃ、どっちがおつきい晩御飯を捕まえられるか勝負だ！」

「お——！」

揃つて小さなこぶしを突き上げる様子は可愛らしい。  
が、周囲の動物は恐怖を感じ、身を震わせたとか、震わせなかつたとか。

ゞ・ゞ・ゞ・ゞ

「よく来てくれたな」

近頃毎日のように入り浸つてゐる作戦会議室ではなく、レッド総帥は本来の定位置である執務室のイスに収まつていた。

とある、特別な来客を自ら出迎えるために。

長い三つ編みに可愛らしいリボン。

薄いピンク色と紺色の中華服。

それに似合わない、太い眉毛と口ひげを蓄えた、人相の悪い顔。

細く鋭いがどこか締まりのない目、とがつた鼻。

そして、胸のあたりには大きく丸に殺の文字。

背中にはストレートにKお前ILLを殺す YOすU！と書かれている。

そう、彼こそは紛れもない。

「世界」の殺し屋、桃白白だじよー」

桃白白本人だった。

「あらかじめ言つておきますが、私の仕事料は法外ですぞ」

「仕事をきつちりやつてくれさえすれば、いくらでも払う」

「一人始末するにつき、一億ゼニーいただきましょう」

「一億ゼニー……!!」

法外どころか、普通に生きていれば夢物語のような金額に、思わずブラック補佐は目を見開いた。

けれどレッド総帥は動搖することなく、寧ろ当然であるかのような態度で落ち着いている。

「しかし、貴方はとても運がいい。」

今年は私の『殺し屋さん20周年記念キャンペーン』で半額セールを実施中である。

「一人につき5千万ゼニーでサービスしましょう」

「…………ど……どうも……」

が、よどみなく告げられた、文章としては間違っていないものの、何かがちぐはぐな文言に、また違う様子で目を見開き、ぽかんと口を開けた。

どうにもゆるんだ独特の雰囲気に、ブラック補佐が疑わしそうに片眉をあげる。

「本当に貴方、桃白白さんでしようね……」

「試してみられるかな？」

睨んだわけではない。凄んだわけでもない。

ただ、どこか楽し気に、ニヒルに笑つてみせただけ。

それでも、何故か確信を抱かせる。

頷けば殺される。それも、小枝を折るように、アリを踏むように。

「い、いや別に……」

ほんの少し汗をかいて、ブラック補佐が顔の前で両手を振る。  
丁度その時、執務室の頑丈なドアが叩かれた。  
努めて控えめにしようとしているが、明らかに乱暴で、どうも焦った様子が感じられる。

「どうした、はいけ」

「失礼します！レツド総帥！」

息を荒げながらも、兵士はきつちりと規則通りの敬礼を見せる。

涙ぐましいほどの生真面目さだつたが、そんな彼をしても動搖は堪えきれない。

「例の子供らしき反応が、急速に近づいています！」

「なんだと!?」

「これまでの速度であれば、2日後に到着予定でしたが、今ままではつ」

「まさか明日にでも」

「い、いえっ！さ、さ、さつ……」

「3時間後か!?」

「30分後ですツ!!」

「な、なにいつ!?」

声をそろえて驚く二人を、どこか冷めた目で桃白白は眺めている。

「どうやら時間があまりないようですね。標的を教えてもらいましょうか」「こ、この二人です」

慌てて胸ポケットからブラック補佐が二枚の写真を取り出す。

一枚は特徴的な髪形に、山吹色の胴着をまとった尻尾の生えた少年。

もう一枚は灰色の瞳で鋭く睨む、真緑と黄色の胴着を着た少女。

その二枚をよくよく見つめ、特に二枚目を念入りに観察すると、桃白白は。

「ふ……くはっ！わはははは！」

笑つた。

先ほどの二ヒルな笑みよりもずっと深く、面白そうに、楽しそうに、心の底から。

決して明るいとは言えない。人相のせいか性格のせいか。

本人としては他意がないのに、恐ろしく邪悪に見える。

「わ、笑い事じやないんですよ！」

ただの子供だと思つたら大間違いです、並の強さじやありません！」

「知つている」

と、つとさざくれてごわついた指先が、彼に触れた。

そのままスponジか何かに突つ込んだように、指が体の中へ沈む。

一瞬、たつた一瞬で、ブラツク補佐は物言わぬ死体となつて崩れ落ちる。

真つ赤な毛の長い上等な絨毯へ、真つ赤な血が水たまりのように広がる。

「な、なにをつ、どうしたんだ桃白白！」

「どうしたものこうしたも、まさかこの私へ、弟子を殺せなどという馬鹿馬鹿しい依頼をする者が現れるとはな」

「なつ!？」

咄嗟に構えた兵士の銃は、一瞬で手元から消える。

びゅつと舌を長く突き出してキツツキのように頭を振ると、もう一つ死体が増えた。

「そ、そんなばかな……わ、わかつたぞ！ 貴様もドラゴンボールを狙つているんだな！ だからあのガキどもを」

「ドラゴンボール？」

「しらばつくれるな！ そうか、お前の手下ならあの強さもツ……！」

「何を言つてゐるか分からんが、心配するな」

「出血大サービスだ、貴様の分の代金はタダにしておいてやる」  
「こと、と背の低い男の頭が机の上へ落下する。  
胴体のほうは、椅子に座つたままいつまでも殺し屋の方を指さしていた。」

## 其之十二 とある二人組

「たア——！」

構えた銃を撃つよりも早く、悟空の蹴りが兵士の顎を襲う。

飛びかかった動作のまま相手を踏み台にして、奥の敵に向かっていく。そのまま足が弧を描くと、軌道上にあつた二つの顔を正確に仕留める。通り抜けたあとには気を失つた男たちが大勢のびている。

「あつちだ！」

ドラゴンレーダーを使い、司令官がいるであろう場所を見抜く。

いくらでも兵はあらゆるドアから湧いてくるが、それらを長く伸ばした如意棒でひと固まりになぎ倒した。

肉体の壁となり、行く手を阻もうとする連中は体当たりで吹っ飛ばす。決して足を止めることなく走り続ける。

ベランダの柵を越え、当たり前のように向かいの建物の屋根へ乗る。その後ろをついて行き、内心フライは舌を巻いた。

悟空は強い。少なくとも、突破力という点では自分は敵わないかもしけない。

弾丸のようすに弱点を撃ち抜くというより、ハンマーや大砲のようすに真正面からぶつかる。

あるいは、それこそが鶴仙流と、亀仙流の違ひなのかもしかつた。

「いたぞ！ あそこだつ！」

「ほつ」

こちらを狙う狙撃手を見つけると、悟空が壊したがれきの欠片を拾う。

思いつきり敵の足場向け投げつけられ、銃を構えたままの格好でなすすべなく地面へ落ちていつた。

更に、出撃しだした飛行機の隊列の、丁度真ん中あたりの機体をピツと指さす。

「どどん波ツ！」

燃料タンクと動力を貫かれ、最新鋭の戦闘機があつといふ間に花火に変わる。

火の玉は周囲を巻き込み、連鎖して近くにいた何機かももつれるよう墜落した。

こういう面に関しては、いくらかフレイに軍配が上がる、と本人は思つてゐる。

と、満足げに成果を少し眺めている間に悟空はあつといふ間に上つていた塔を飛び降りてしまふ。

慌てて彼女もそれに続いた。

「どつちに向かつてんの」

「この建物のはずだ」

「もつと上かな」

「でも階段がねえぞ」

「エレベーターがあるけど電気通つてるかな」

「えれべえたあ？」

「前見て！こつちでやつとくから」

如意棒が鳩尾をつく。

死角から殴りかかろうとした大男は、逆にフリーが背後から襲い締め落した。

ナイフを手に襲い掛かってきた男、両手を広げ捕まえようとするは、悟空が片方を踏み倒しながら片方へ肘うちをかます。

天井を足場にして加速すると、小さな体がバリケード代わりのテーブルで逆に相手を押しつぶす。

その間にフリーが天井に二人が通れるぐらいの穴を開けた。

「こつち！」

「うん！」

上の階にはライフルやランチャーを構えた兵が待っていた。

が、フリーに手りゆう弾を投げられ慌てて逃げ出す。

「なんだ？あれ」

「爆弾みたいなやつ。落ちてたから拾つた」

物陰では、怯えて縮こまつた男が一人、必死にトランシーバーに繋りついている。けれどどんなに喚いても、意味のある返答はない。

襲われていないはずの建物から、爆炎が上がる。

もともとならず者の集まりだ。余りの混乱に同士討ちが始まつたのかもしれない。

「司令部、応答してください！指示を！」

「総帥！レツド総帥！指示を出してください！」

ちくしょう、あんなガキどもに、天下のレツドリボン軍が！」

応答は、ない。

勢いよくドアが破壊され、一枚の板となつて鋭く部屋の中央へ向かつて吹つ飛ぶ。

室内でたつた一人息のあつた男は、慌てず騒がず首を振つた。

編まれた三つ編みではたかれた板は、当たつた部分から二つに裂けてその場に落下する。

「来たか。30分と聞いていたが、10分もたつていないんじやないか？」

「おまえ……」

「桃白白！」

すぐ隣に立っていた少女が大声をあげ、思わず悟空はぎょつとする。何事かと横を向いた時には、既に彼女の姿はない。

扉だつた残骸を勢い良く投げ、視界を塞ぐ。

相手が自分の姿を見失つた隙をついて、背後から襲い掛かる——が、あつさりとハイキックで木片ごと床へ叩きつけられた。

「あぐっ！」

「フーア、大丈夫か!?」

「あう……ごくう……」

「このやろう、よくもフーアを！」

射出されるように、小さな体が飛び出した。

が、真つすぐに銳くくり出した拳は、包むようにあつさりと捕まる。

そのままボールのように、悟空も床へ叩きつけられた。

「ぐぎっ!?

思わず呻き声を出し、とつさに起き上がる。

そのまま次の攻撃へ移ろうとして、

「あり？」

悟空は何かに気づいて動きを止めた。  
感触を確かめるように体を擦る。

どこも痛くない。

いや、まったく痛みがないわけではないのだが、想像したものに比べたら無に等しかつた。

明らかに目の前の男と自分には力の差がある。

もしも本気で投げられたなら、こんなものでは済まないはずだ。

見てみると、フリーの方もあっさりと立ち上がっている。

どころか、何事もなかつたかのように、寧ろ酷く親し気に男へ飛びついだ。

飛びつかれた方も、いつものことといった雰囲気で、くしゃくしゃと頭を撫でている。

「ど、どういうこと……？」

「あ！ごめんごめん、悟空、攻撃しないでって言おうとしたんだよ。

だつて敵じゃないし」

「うん……」

それは、流石に見ればわかつた。

「話してなかつたつけ？これが私のもう一人の師匠、桃白白」

「ボンジユ～～～ル～～～」

やたらと間延びした無駄に国際的なあいさつに、悟空は混乱して首を傾げた。  
桃白白はお茶目が滑つても気にしないタイプなので、特にフォローをするわけでもなく、真顔で黙っている。

「おっちゃんがフレイの師匠つてことはわかつたけど、じゃあレッドリボンの親玉はどうこに行つたんだ?」

「そういえば……あ」

きよろきよろと周囲を見回し、そこでようやく二人は部屋に死体が三つもあることに気がつく。

二つはドアの残骸の下敷きになつており、もう一つは机の影になつていたので、少しは仕方がなかつたかもしれない。

悟空は顔をしかめたが、フレイの方は気にすることなく桃白白がやつたの?と仏頂面を見上げた。

「わかつた、そういう依頼があつたんでしょ。こいつら恨み買つてそつだし」「……ま、そんなところだ」

「じやあさつさ」とドラゴンボールもつてつちやおうよ、悟空」「あ、うん」

力チカチとレーダーを弄ると、悟空は部屋の奥側にある絵画に手をかける。額縁を外すと頑丈そうな箱があつらえてあつた。

以外にも鍵はかかつておらず、簡単に蓋があく。

その中にはドラゴンボールが1つ、収まっていた。

丁寧に取り出して、悟空は中の星の数を数えてみる。

「星が5つだ。じいちゃんの四星球じやないや」

「そつか、残念だね」

「また次のやつを見つけないと」

力チカチ、とレーダーを操って表示を出す。

が、よく見るとレーダーには残り2つしか表示されていない。

ドラゴンボールはあと3つあるはずだが……。

「あれ…？」

「悟空、いくよ！途中まで桃白白が飛行機で送ってくれるって」

「わかった！」

さつさと歩きだしてしまった一人の後を追つて、悟空も歩き出す。

ふと、二人の背中に同じ文字が書かれているのに気付いた。

『K  
I  
L  
L  
Y  
O  
U  
!』といふ物騒極まりない文言の意味を、だが少年は知らない。

その時は、ただ、目の前の二人が本当に師弟なのだと、実感で理解しただけだった。

## 其之十三 聖地の番人

「よく聞け！子供を殺されたくなかったらボールを渡すんだ！」

虎の顔をした男、イエロー大佐が眼下に向かつて叫ぶ。

彼が乗る銀色の機体には、真っ赤な三角形のリボンマークがでかでかと描かれていた。

片手には、まだ幼い小さな子供が抱えられている。

完全に機体の外に出てぶら下がっているような状態で、その気がなくてもふとした拍子に落下してしまいそうだ。

「ひ…卑怯な……」

子供の父、ボラは呆然と飛行機を見上げる。

屈強な彼は一小隊を相手取つても軽々退けるほどの腕前の持主だった。

しかし、子供を人質にとられてしまつてはなす術がない。

「助けて父上——ツ!!

悲痛な叫び声が、深い森の上空にこだまする。

「あれ？なんだなんだ？」

それを聞いて、悟空は筋斗雲の上から周囲をきよろきよろと見回した。スピードを上げ、一気に飛行機へ近づく。

「このもよう、見たことあるぞ……」

「えつ!?

「そうか！お前レツドリボン軍だろ！」

言うが早いか機体へ飛び移り、乗っていた男を思いつきり殴った。

鈍く低い音が響き、男の体は一撃で空中へ投げ出される。

衝撃で落下してしまった子供を筋斗雲でキャッチし、につと悟空は笑つた。

「オツス！」

「…………」

「——いててつ、あいつ！」

運よく木に引っかかつてしまつたイエロー大佐は自分の姿が隠れているのをいいことに、懐から銃を取り出す。

ボラにもあの奇妙な小僧にも通用しないかもしれないが、もう一人の小さな子供の方

は本当に、ただの子供だつた。

当たれば死ぬだろう。そう考え、息をひそめて狙いを定める。

上空から勢いよく丸太が降ってきた。

「ん？木と一緒に何か踏んじやつたかな」

度々の失敗から学び、フーアイは今回、墜落するよりも先に地面へ降りていた。  
ちらつと後ろを振り返るが、興味なさげに悟空の方へ歩いていく。

「なんだつた～？」

「まだレッドリボンの連中が悪さしてたんだ」

「あー、本部がやつつけられたの知らないのかもね」

呆気にとられるボラの目の前にゆっくりと筋斗雲が下りてくる。

ボラの息子、ウパは涙を浮かべて父親に抱きついた。

それをしつかりと受け止め、抱きしめ、二人は無事を喜ぶ。

「息子を助けてくれてありがとう」

「オラ、レッドリボンのやつをやつつけるついでに助けただけだよ」

そう返した悟空だったが、ボラの手にあるオレンジ色の球体に目が釘付けになる。

「あつた！おじさんが持つてるのドラゴンボールだ！」

「えつ！」

「ねえ、みせてみせてっ！」

「お前たちもこの玉が欲しいのか……」

不思議そうな顔をしながらも、すんなりとドラゴンボールを手渡す。

中にある星の数を数えて、悟空は興奮と喜びで大きな叫び声をあげた。

「やつた——つ・四星球だ——つ!! じいちゃんの四星球が見つかつたぞ——つ!! 大事に握りしめて両手をあげ、やつほやつほと飛び跳ねる。

「一体どういうことだ? その玉は一体何なのだ?」

「おじさん、知らないで持つてたの? それはさ……」

ほんの数日前までは自分も知らなかつたくせに、まだ喜びに浸つている悟空に代わつてフーアイは事情を説明した。

「なるほど、その球にはそんな秘密が……それで奴らがムキになつて奪おうとしていたのだな……」

「でもオラは別に願い事なんてねえから、このじいちゃんの形見の四星球が手に入ればいいんだ」

「ここに来るまでの間にも一個拾つたけど、それも違つたもんね。よかつたよかつた」

にしても、と彼女はすぐそばに立つ塔を見上げる。

それは、建物というわけではなく、様々な彫刻が隙間なく施された柱のような形をしていた。

丸、三角、四角、波型に縦じま横じま、牛の骨……。模様はどこまでも際限なく続く。

頭の高さを越え、木々の高さを越え、鳥の高さを越え。  
ずっとずっとはるか遠く、雲の高さのその上まで。

「悟空のおじいちゃんの形見が、聖地カリンにあるとはね」

「知つているのか？」

「もちろん！元々、私はここを目指してたんだ。

「聖なる塔、カリン塔。てっぺんまで登れば、何倍も強くなれるって」

「ああ、そうだ」

ボラも、ウパも、悟空も、天に向かつてそびえたつ塔を見上げた。

余りにも高いので、殆ど空を見上げると変わらない。

「塔を自らの力で上り詰めると……その頂には仙人様が住むといわれ、その方よりいた  
だいた聖水を飲めば、己の力が何倍にもなるといわれている。

わたしの一族は先祖代々、この聖なる塔を守っている番人なのだ」

「おじさんも上つてみた？」

少女の問いかけに、番人は微笑んで応える。

その声はおおらかで、柔らかく優しい。

「まだ若い頃、一度挑戦してみたこともあつたがダメだった……まだ誰も頂を見たもの  
はない……」

「そうか、たけえもんな」

「何？怖気づいたの？」

「まさか！」

笑つてみせるフーイに、悟空も笑つて返す。

二人の言葉を聞き、ボラはほんの少し驚いた顔をした。

「お前たち、一人とも上のつもりなのか？」

「ああ！」

「仙人様に会つたら、おじさんの事紹介しといてあげる」

「そうか……」

感慨深げに頷くと、ウパにこう告げた。

客人をもてなす準備を手伝ってくれ、と。

「はい！父上！」

「お前たち、今日は我が家で休んでいくといい。息子を助けてくれたお礼だ」

「え、でも……」

「塔は逃げない。頂も、無くなりはしない。しつかりと休むのも、大切な準備だ」

待ちきれない様子の幼い挑戦者たちを諭し、テントの中へと案内する。

ボラは、本当は、カリンの塔の言い伝えを完全に信じているわけではなかつた。

力が何倍にもなるというのは、永い間そう語り継がれてきただけで、迷信かもしけない。

けれど、塔は確かに建つている。

多くのものが挑んでは、道半ばで諦めてしまうほどの、高い高い塔が。

塔が建つてゐるのだから、どんな形にしろ、その頂上があるに違いない。

そして、塔に挑んだ青年の時期を過ぎ、親となつて毎日塔を眺めるうち、ボラの中に一つの考えが浮かんだ。

仮に頂に仙人様がいなかつたとしても、力を高める聖水がなかつたとしても。己の力だけでこの塔を登り切つたのなら、きっとそれだけで力は何倍にもなつてゐるに違いない。

だから、彼は彼に出来る精一杯で、彼らを応援したいと思つた。

少しも自分自身を疑わぬ、塔を上りきれると言い切る、変わつた子供らに。

若き日の己を重ね、この二人ならひよつとすると、諦めてしまつた頂を、その目に映すのではないか、と。

聖地の番人として。あの日頂を目指した、一人の挑戦者として。

## 其之十四 超聖水、そして保護者

二人はボラとウパに見送られ、カリン塔へと登り始める。

何とか上りきつた頂上には仙人様ならぬ、仙猫様のカリン様がいた。力が何倍にもなる水、超聖水もたしかにあつた。

「あれ飲んだら力が何倍にもなるんでしょう？ 飲んでいいよね、上ってきたんだし」「ああ、やろう。ただし、ほい！」

今にも栓を抜き、水を飲もうとするフリーイを、どんつと杖でカリンが突き飛ばした。バランスを崩した彼女の手から、水差しが放り出される。

持ちてのわつかに上手く杖の先をひつけ、カリンは水差しを奪い取った。  
「わしの邪魔を逃れ、このツボを手にすることができるたら、いくらでも飲んでよいぞ」「え——つ！ なにそれ！」

「よ——し！」

反対側から飛びついた悟空も、杖で素早くはたき落とされる。

「……超聖水を飲めるのは一人づつじや。フリーイが先に飲むなら、お前は下に降りて待つていた方がいいかもしだ」

「どういうこと?」

「前にこの塔に上つたのは三百年前にたつた一人、それは悟空、お前の師匠の武天老師じゃ」

「ええつ!? ジャあ亀仙人のじいちゃんも昔ここに来たのかつ!?」

「そうじや」

思わず悟空は驚きで言葉を失う。

その間にもフリーイは挑みかかつていたが、軽くいなされて床に転がつていた。

「……ひよつとしてお前、凄く偉い奴なのか?」

「やつとわかつたか、これからはカリン様と呼べ!」

「そうじやなくてさ」

すぐにむくつと起き上がり、フリーイは興味なさげに胡坐をかく。

「私が飲むなら悟空が下りた方がいいって言うのはなんで?」

「武天老師がわしから水を奪うのには、三年かかつた」

「いふうつ!? 亀仙人のじいちゃんでもそんなにかかつたんか!? オラそんなに待てねえよ

!」

「大丈夫、そんなに待たせないから」

彼女はびしつと3本の指を見せつけた。

「私なら3日で取れる」

「ほう」

大見えを切つた彼女の言葉を、否定するでもなく、馬鹿にするでもなく、カリンは細い目を細めて頸を搔いた。

「やつてみるといい」

それから1日経ち、2日経ち。

とうとう3日目もそろそろ終わろうとしている。

かなり惜しい瞬間はあつたものの、フリーは未だ超聖水を飲めていなかつた。  
杖ごと奪おうと伸ばした手を胴体ごと払われ、ごろんと床に転がる。

すぐさま起き上がり、殴り掛かつて距離を詰めようとするものの、足払いを避けようとジャンプしたところを軽くはたかれた。

そのまま前転をするとまた飛び起きる。

「おぬしは本当に打たれ強いのう……」

「師匠が容赦ないからさ」

「なるほどな。だが、それだけでは三年経つてもわしからツボは奪えんぞ」

「わかってるよつ」

再び床を蹴つて、今度はいつになく直線的な動きで突つ込んでくる。

頂上の空気の薄さにもなれ、動きの無駄もかなり減った。

フェイントなどがない分、かなり速い。

が、どれほど素早くとも読まれてしまえば意味がない。

さらりと横へ避け、また杖をくらわそうとした、その瞬間。

避けた先のカリンの位置を、小さな指先がピタリと指さした。

「どどん波つ——！」

「なにっ!?」

そこまでやるか、と流石に驚いたカリンだつたが、しかし咄嗟に別方向へ避ける。

ツボに向かつて飛び込んでくる体の軌道を読み、それと重ならないよう器用にツボを空中へ放り投げた。

あとは彼女を蹴倒してツボをキヤツチするだけ、だつたのだが――

――ふわり、とフリーの体が空中では普通、考えられないような方向転換を見せる。

「な、しまつた！」

舞空術か、と思つた時にはもう遅い。

超聖水の入つた水差しを手に持ち、ニヤリと少女は得意げに、憎たらしく笑つた。

「この3日間、一度も氣弾も舞空術も使わんかったのはこのためじやつたか」

「ふふん、そのとおり！　不意打ちの方法は年がら年中考へてるからさ」

「勝ち誇った様子で「ぐくぐく」と水を飲み干す姿を眺めながら、カリンは内心舌を巻く。「すげえなフーアー！　なあ、どんな感じだ？　力が湧いてくる感じするか？」

ワクワクを顔中に張り付けて、悟空は興奮した様子でフーアーに尋ねる。

「……うん、あんまり？」

「え？　そうなんか？」

「これ本当に効いてるの？」

「効いておるとも、お主の力は既に何倍にもなつておる

さて、明日からはお主の番じゃぞ、孫悟空

「よ／＼し！」

怪訝そうな顔をするフーアーは放つておいて、カリンは今度は悟空と向き合う。

彼にとつては、この少年の方もなかなか予想がつかなかつた。

フーアーの挑戦の間にも、下の階や手すりの周りをグルグル走つたり、腕立て伏せをしたり。

かなり動いていたので既に体は酸素の薄さになれているだろう。

しかも、それをしていない間はじつと真剣な表情で二人を見ていた。

ただ暇つぶしで眺めているというには、随分と集中していたように思う。

(気を引き締めねばな……)

「という決意もむなしく、悟空が超聖水を手に入れたのは僅か2日後のことだった。

「やつた——つ!! ツボとつたぞ——!!」

「悔しい～～!! 私より早いじゃん！」

「へへ、フリーイとカリン様をよく見てたらさ、カリン様が次にどうするかちょっとわかる  
ようになつたんだ」

いうのは簡単だが、ただ見ているだけで動きは読めるようになつたりしない。  
しつかりとした実力に加え、かなりの観察眼も必要とされる。

(な……なんてやつらじや……フリーイもすごいが、悟空はそれ以上かもしけん……)

「飲んでいいんだろ!?」

「もちろんじや、飲むが良い」

「へへへ——」

ぽんつと栓を抜き、ごくごくごくと勢いよく飲み干す。

すっかり空になつた水差しを床に転がし、悟空は怪訝そうな顔で自分の体を眺めた。  
しばらく手を開いたり握つたりしていたが、納得のいかなそうに首をかしげる。  
「あり?……なあ、別にどうつてことねえような気がするぞ……」

「だよねえ。あんまりパツとしないというか……」

「そりやそうじやろ、超聖水はなんてことないただの水じや」

「ええ————つ!?」

少年少女は顔を見合わせて大声をあげた。

「オラたちのこと騙したのか!？」

「ひつどい！」

「にやつはっはっは！」

高らかな笑いがカリン塔の頂上に響く。

けれど、そこに嫌みなニュアンスはなく、寧ろ朗らかに聞こえた。

「別に騙してはおらん！お主の力はもうすでに何倍にもなつておる！」

「どういうこと?」

「え……あつ……！」

「悟空は気が付いたようじやな。カリン塔を上ること、このわしからツボを奪うこと

……

全てが力を倍増するための修行だつたのじやよ」

そういうと、つい、と杖で柱の下を指さす。

「下界に降りて修行の成果を試してくるがいい」

塔のはるか下、もう見えなくなつてしまつた地上の方で、何かがどんつと鈍く大きな

音を立てた。

ヽ・ヽ・ヽ・ヽ・ヽ

悟空が超聖水を手に入れる少し前、桃白白は柱に乗つて聖地カリンを目指していた。理由は単純、フレイに『聖地カリンでの用事が終わつたら一報入れるように』と言いつけていたにもかかわらず、肝心の連絡先を教え忘れていたからである。

飛行機で向かつても良かつたのだが、あたりに着陸できそうな場所がなかつたのもあり、近隣において来ていた。

第一、こつちの方がずっと早い。

どんつと鈍い音を立て、柱はカリン塔の近くに突き刺さる。

直ぐ近くにいた親子に危うく当たりそだつたものの、桃白白は勿論そんなことは全く気にしていなかつた。

ので、子供を抱きかかえ、警戒心丸出しのボラにも、ごく普通の調子で挨拶をした。

「グ〜〜テンタ〜〜〜ク」

「な、何者だお前は！」

「世界一の殺し屋、桃白白！」

物騒極まりない格好にお似合いの、物騒極まりない自己紹介である。

その上、口角の片方をくいと上げたニビルであくどい笑顔のおまけつき。

これで警戒するなどいうのは無理だった。実際、ウパの方はやや怯えている。

「殺し屋だと……？殺し屋がこの聖地カリンに一体何の用だ」

「ここに二人の子供がきただろう。数日ほど前のはずだ」

「彼らに何をするつもりだ」

「貴様には関係あるまい」

桃白白からすれば子供と子供の友人の居場所を尋ねたようなものである。

なのに、どうして見ず知らずの男にその理由を言わなければならないのか？

そういう意味では本当に、ボラには関係の無い話だった。少なくとも桃白白の方ではそう思つてゐる。

が、一方でボラにとつて桃白白は殺し屋でしかない。

何故ならそう名乗つていたし、そうとしか名乗つていなからだ。

そして、通常、殺し屋が特定の人物に用がある、とすれば考えられるのは一つきりである。

「関係ならある。彼らは私の息子の命を救つてくれた。

このまま黙つて立ち去らぬなら、私が相手になるぞ」

そういうとボラはウパを離れさせ、槍を構え、桃白白の前に立ちふさがつた。恩人が命を狙われていると分かつた以上、義理堅い彼としては当然とするべき行動だつた。

しかし、立ちふさがられた方は『なんで?』と思つていた。

息子の命を救われたのだから、二人の関係者だという言い分は桃白白にもわからないではない。

けれど、どうしてもそのことと自分が立ち去らなければ相手になる、ということがあ致しなかつた。

だがしかし、邪魔建てをするというなら容赦をするいわれも無い。

「ふつふつふ、馬鹿なやつだ。わざわざ死を選ぶとは……」

単にボラの啖呵への返答として、こういう風に告げた。

悲しいほど洒落にしかならないのに、洒落にならない殺し合いが始まつてしまふその直前。

「桃白白〜〜〜!!」

少女が天から降つてきた。

# 其之十五 強いぞ！桃白白！

いつもと同じ声、同じ相手。

相手の頭上を取る戦法は、フリーのお気に入りだつた。ただ、いつもと違うのはその高度と速度である。

桃白白は激しく動搖した。

明らかに人体が原型を留める範疇を超えていた。

いくら彼女が頑丈だったとしても無事では済むまい。

みるとうちに豆粒ほどの大きさから、どんどんフリーの体は近づき、大きくなつていく。

何を考えるよりも先に、半ば無意識にとにかく手を指しだそうとした瞬間。

ふわっと空中で彼女の落下は止まり、そのままゆっくりと地面に着地した。

「……舞空術を覚えたのか」

「へへー、結構大変だつたよ」

中途半端な格好で固まつた両腕は、目にも止まらぬ速さで引っ込められる。自慢げに胸を張る少女に感づかれなかつたのは幸いだつた。

その代わり、ボラにはバツチリと見られていたが。

真面目が故に純朴で聰い彼は、しばし戸惑つたものの、桃白白の狼狽えようとフーアのはずんだ表情を見てすべてを理解した。

心配を押し隠す様子には、暖かな眼差しすら向ける。

槍をしまうと律儀なことに、桃白白へ向かつて頭を下げた。

「申し訳ない、何か勘違いがあつたようだ。彼らと貴方は知り合いなのだな」「うん？ そうだが？」

勘違いの原因はおおむね殺し屋側にある。

が、本人がピンと来ていないため、返事もどこか曖昧になつてしまつた。

そうこうしているうちに、やや遅れて筋斗雲にのつた悟空も到着する。

塔の上はどんなだつたの？ というウパの純粋な質問に、悟空とフーアはほとんど同時に口を開いた。

「カリン様つて仙人様じやなくて仙猫様でさ」

「で、カリン様には亀仙人のじつちゃんもあつてて、じつちゃんも塔に上つてたんだ！」

「そうそう、鶴仙人のじつちゃんの若い頃だつたら、どのくらいでカリン様からツボを奪えたと思う？」

「カリン様つていじわるだからなあ！ 桃白白のおっさんも意地悪な顔してるけど」

塔での出来事を口々に話する二人に、桃白白は露骨にうんざりとした顔をする。ようやく本題らしき超聖水の話が出てきたところで、ピタリとフーイの鼻先を指さした。

ぽかんとした顔で、少女は付きつけられた指先を見つめる。

「力が何倍にもなつたなら、試してみるだろう？」

「……あはは、そうだつたそうだつた」

師匠からの宣戦布告に、彼女はにいと狂暴に微笑む。

そして、真正面からその懷に飛び込んだ。

「はあっ！」

「ふっ」

殆ど射出に近い動きは、けれど大きく後ろに跳ばれ避けられる。

なおも距離を詰めようとしたところを、素早いケリが何発も襲い掛かつた。

背を低くして軸足を狙おうとするも、大きくジャンプしてまた避けられる。

そのまま体重をかけ踏みつけようとする膝の動きを、地面を転がつてかいくぐつた。

「く…どうつ！」

「ほつ、はつ」

追撃をかわし、反撃に移るのではなく、頭上を飛び越えることで背後をとる。

回し蹴りをしゃがんで避けようとすると、そのままかかと落しを食らった。  
恥まずに足を掴んで投げようとするが、掴んだ靴がすっぽ脱げてしまう。

「うつそつ！」

「甘いわい」

無防備な横つ腹を丸太のような足がなぐ。

思いつきりカリン塔に叩きつけられ、掴んだ靴は宙を舞い、着地すると再び桃白白の足元に収まつた。

が、次の一呼吸の内にフレイは柱を足場にし、真横に向かつて飛んでくる。  
それを避け、頭が来る位置を狙い再び蹴りでカウンターを狙つたその時――

「！」

――くいつと彼女の軌道が上に向かつて歪んだ。

通常ありえない動きで桃白白の頭上を越え、真上の位置から指を突き出す。

必殺の一撃を繰り出そうとする。

が、太い腕が伸びるとあつという間に胸倉を掴まれ、地面にたたきつけられた。  
そのまま短い手足を器用に押さえつけられる。

「いたいたいたい！ ギブ！ ギブ！ 負けました！」

「ふん」

放された後もフーアイはしばらく地面を転がる。

それは痛がつているというわけではなく、ただをこねているのに近かつた。結構いい線いつてたのにとか、おしかつた、とかブツブツ言つている。

「わしに勝とうなど100年早いわ」

自信満々で笑つてみせる桃白白だつたが、内心かなり焦つていた。  
いい線行つていた、というフーアイの言葉は間違つていない。

少なくとも一瞬、確かに彼は無防備だつた。

勝敗を分けた反応速度は、単に経験と訓練の差に過ぎない。

そう、経験と訓練。

カリン塔に上り、カリン様との修行を終え、超聖水を飲み、力が何倍にもなつたフーアイが、何故桃白白に勝てなかつたのか。  
それは単純に、桃白白がめちゃくちや頑張つたからである。  
めちゃくちや！頑張つたのだ！

桃白白は間違いなく天才だつた。本来、彼にかなう相手などいない。  
多少腕に自信がある標的であつても軽い運動にすらならない。  
だから、殺し屋を続けていくうえで特別、努力など必要なかつた。  
そこへ現れたのがフーアイである。

彼女はみるみるうちに強くなる。

体も育つて力強くなっていくし、不意打ちのセンスも上がっていく。  
その成長を目の当たりにするにつれ、一つの疑念が頭をよぎった。

このままの調子で不意打ちされ続けていると、そのうち本当にやられてしまうのではないか？

まだこんな、自分の人生の20分の1しか生きていないような、小さな小さな弟子に。  
不意をつかれて一撃貰ってしまうのではないか？

それはものすごくかつこ悪い、と彼は思った。

ついでに、必死こいて避けるのも我慢ならないぐらいかつこ悪い、とも思つた。

弟子の攻撃ぐらい、余裕綽々でさばいた上、反撃で叩きのめすぐらい出来なくてはならない、と。

存外、彼はかつこつけなのである。

だからそのためにとっても頑張つた。

基礎的な体力づくりや筋トレ、型の練習は欠かさない。

優れた武闘家がいると聞けばこれを叩きのめし、強い集団がいると聞けばこれも叩きのめす。

戦場に首を突っ込んだこともあつた。

とある国では近頃、一夜にして一軍が消えたという怪談じみた伝説が囁かれているが  
原因はこの男である。

今日の勝利は、そんな地道な努力とプライドでつかみ取った勝利だった。  
恐らく慢心していれば、なすすべなく無様にひっくり返つていただろう。

今よりさらに腕をあげなければ、明日その日が来てもおかしくないのだが。

「やっぱり桃白白は強いなあ」

負けたくせに何処か嬉しそうで、満足げな少女は、決して知らぬことである。

ヽ・ヽ・ヽ・ヽ

「オラも桃白白のおっちゃん戦いてえ！」

「一億ゼニーだ」

「えっ!？」

「ああ、今なら20周年キャンペーンで半額の5千万ゼニーにしておいてやるぞ

「か、金どるんか……」

「プロの殺し屋さんだからな」

# 其之十六 願い事一つ

「ドラゴンボール、残り1個になっちゃったけどどうする?」

「どうするつて?」

「せつかくだから全部集めて願い事叶えようよ」

桃白白の飛行機の後部座席、二人の子供が何事か話し合っている。

武天老師に会つてみたいという彼の要望により、三人はカメハウスへと向かつた。

悟空の膝の上のリュックサックには、願い玉が3つ入つている。

預けている3つと合わせれば、あと1つでどんな願い事も叶うのだった。

「願い事つて言つてもなあ、フレイはなにがあるのか?」

「うううん」

腕組みをして、じっくりと考えを巡らせる。

が、次の瞬間には、実にあっさりとした口調で「ないなあ」と零した。

「ないなら集めたつて仕方ないじやないか」

「いや待つて待つて、なんかある、何かはあるから。」

だつてせつかくあと一つなんだし、使わないともつたいないじやん」

ドラゴンボールもそんな、期限切れ間近のクーポン券のような物言いをされる筋合いはあるまい。

操縦桿を握りながら、桃白白はそんなふうに思った。

子供同士の話に口を挟むつもりはなかつたが、聞こえてくるものは聞いてしまうのだから仕方がない。

ドラゴンボールの話も半信半疑ではあるものの、考えてみないほうが無理な題材ではある。

どんな願い事も一つだけ叶うとしたら、一体何を願うのか。

様々なアイディアが浮かんでは消える。

そして、こうした話は他人の意見も気になるものだつた。

自分では気づかなかつた、魅力的な願い事が聞けるのではないかと。

「あ、そうだ！」

「どうした？」

「桃白白の殺し屋さん20周年記念のケーキとかどう？」

「いらない、と彼は思つた。

神龍が作る、殺し屋さん20周年記念のケーキというものは見てみたい気もしたが、

それはそれとしている。

フレイの口ぶりは悟空に對してのもので、自分に對して提案しているふうではなかつたため、返事はしなかつたが。

「でもそれだと悟空に不公平か」

「別に構わねえけど、でもオラ、でつけえケーキは食べたいな」

「ケーキを頼んでみる？ 家ぐらいあるやつ」

きやつきやと話は弾んでいく。

でもケーキなら色んな種類が食べたい、ケーキだけじゃない食べ物も食べたい。

ああでもないこうでもないと話は進んでいく。

けれど、どれもピンとこないのか、中々願いは定まらない。

「あ、そうだ」

もう間もなくカメハウスにつくという頃合いで、フレイはこそぞ悟空に耳打ちをする。

少年はぱつと顔を輝かせ、それがいい、と頷いた。

ようやく結論が出た二人は、満足げな顔で微笑んでいる。

並外れた聴覚で囁きをバツチリ聞いた桃白白はと、こいつら七夕かなにかと勘違いしているのではないか、とやはり呆れた。

「アツサラ～ム」

「…………」

「…………」

最早どこの国の中かもわからないあいさつに呆気にとられ、沈黙のまま見つめる亀仙人。

桃白白もまた、沈黙で返す。

見つめ合う二人の老人の間を微妙な空気が漂った。

亀仙人としても、目の前の男が警戒するべき相手だと分かっている。

悔しいが、腕前では自身に勝るとも劣らないであろう。

が、古い馴染みの弟が、初対面でよく分からぬジョークを飛ばしてきた時の反応としてはこんなものである。

「ほ、本当にあなた、桃白白さんですか……？」

「試してみられるか？」

ほんの数日前に聞いたのと同じセリフをクリリンに言われ、全く同じ風に彼は返す。といつても、やはりこのジョークの笑いどころを理解しているのは本人以外いないのだが。

「本物だよー、サインもらう?」

「いやいいよ! 結構です!」

フレイの言葉に慌ててクリリンは顔の前で両手を振る。

「お前も亀仙流の弟子か?」

「そ、そ、うだ!……です……」

ただ見つめられているだけなのに、何となく少年はしょんぼりとしてしまう。

散々フレイからどれだけ強いのか凄いのか、そして容赦がないか聞かされていたが、実際に目の前にすると話に聞いていた以上だとわかつた。

殺し屋は興味があるのか分からぬ眼差しを向けると、ついつと亀仙人の方へ向き直る。

「武天老師、二人で少し話がある」

「……わかつた」

「大丈夫かな……」

心配そうな顔で見送るクリリンを、悟空とフレイはきよとんとした顔で見ていた。

カメハウスに入った桃白白は、勧められもしないのに自然な動作でソファへ腰かけた。飲み物を出すかどうか少し迷つて、結局何もせずそのまま亀仙人は向かいの席へ座つた。

た。

ただ座っているだけなのに、達人同士であるせいで妙に隙が無い。

先に口を開いたのは桃白白だった。

「悟空とかいうガキを育てたのはお前か？」

「いや、違う。悟空は、わしの弟子が拾つて育てた子供じや」

「そうか。なら、大猿については知つているか？」

「前回の天下一武道会を見ていたのか」

悟空が大猿に変身するところは大勢に見られていた。

殺し屋であつても、一角の武闘家なら知つっていても不思議はない。

だが、桃白白は首を横に振る。

「私が知つてるのは、フリーも大猿になるからだ」

「なにつ!?」

勢いよく立ち上がりたせいで、テーブルがガタリとゆれる。

サングラスの奥の目を大きく皿のように見開き、亀仙人は詰め寄った。

「どういうことじや」

「どうもこうも、そのままの意味だ。満月を見ると、あいつは変身する」

「しかし、あやつに尻尾は……」

「生えるたびに切つてある」

「……なるほどな」

「いくらか落ち着いたのか、元通りすとんと席につく。

顔を片手で覆い、額髪を撫でた。

肩に力が入っていたのを感じ、深々と息を吐く。

「その話をしに来たのか」

「そうだ、何か知っているのではないかと思つたが、無駄足だつたようだ  
「気になるのか、あやつらが何者か」

「大猿になると、恐ろしく強くなる。数倍、いや十倍程度か」

亀仙人は重々しく頷いた。

彼はつい先日、身をもつて体験している。

その上、大猿になつてしまえば理性も何もない。

最早彼らを止められる人間はいないだろう。

「月を壊したのは正解だつたな」

「……悟空もフリーも、怪物ではないぞ」

「そんなことは知つてゐる。あいつらがドラゴンボールに何を願うつもりか知つてゐる  
か？」

「なに?」

「亀仙人のじっちゃんと鶴仙人のじっちゃんと、桃白白がいつまでも元気に長生きしますように。だと」

そう言いおいて桃白白は席を立つ。

あとには笑えばいいのか喜べばいいのか呆れればいいのか、わからなくなつて間の抜けた表情の亀仙人だけが残された。

扉の向こうでは子供たちが3人でじやれ合つている。

彼らともう1人ヤムチャをくわえた4人が占い Baba の試練に挑むのも、再びピラフ一味の野望を阻止するのも、そして無事に7つ目のドラゴンボールを手に入れ願いを叶えるのも、また別の話。

## 其之十七 お待ちかねのお説教

帰りの飛行機の中でのフーアイは、ひどく静かでおとなしかつた。

座席に背中をくつつけて座り、物憂げに俯いて口をきつく結んでいる。おそらく、今までの人生の中で一番静かだつたのではないか。

その理由は勿論、

「鶴仙人のじっちゃん怒つてるよなあ～」

すでに確定しているお説教だつた。

「わかつてて行つたんだろうが

「それはそうなんだけど……」

ちなみに、桃白白が涼しい顔で正論を吐いているのは、既にお説教をすませた後だからだ。

フーアイをたきつけたのをしつかり見抜かれ、キツチリ叱られたのだ。

道場で正座させられたのは数年ぶりだつた。

なお、前回の正座は柱で庭をめちゃくちゃにした件である。

「何とか怒られないようにできないかなあ！」

逃げ場のない車内の中、少女はありもしない解決策を考え、頭を抱え続けていた。

＼・＼・＼・＼

つい昨日のこと、鶴仙人は不思議な体験をした。

天津飯に稽古をつけていたる最中、体の内側から暖かな光が溢れてきたのだ。突然の事に慌てふためいたものの、幸いというか、光はすぐに消えてしまった。何事かと訝しんだが、原因はさっぱりわからない。

しかし、それからとうもの不思議と体の調子がいい。

衰え始めていた体力が戻ってきたかのように、活力がみちみちている。

そのせいか、いつもの型の確認のための組手で、勢い余つてうつかり拳があたつてしまつた。

と、殴られた天津飯の体が軽く2mほどふき飛んだ。

あまりのことに、ふつとんだ方よりも、ふつとばしたほうが呆然としていた。

怪我はなかつたのが幸いである。

彼自身にも、直ぐ側で見ていた天津飯も、全く見当もつかないことだつた。

一時的なものかと思つたが、次の日に当たる今日、一夜過ぎて朝を迎えるが覚めて

も相変わらず、体の調子がすこぶる良い。

どういうわけだろうと思いながら、フリーの帰宅を待ち構えているのが今のこと。いつものようにとても静かに、飛行機は庭へ下り立つ。

氣負わぬ様子で桃白白はさらりと降りてきた者の、もう一人はなかなか顔を出さない。

しばらく待っていたが、一向に姿を現す気配がなく、しごれを切らして鶴仙人は低い声で名前を呼んだ。

「フリー」

終身刑を言い渡された囚人のような足取りで、のそのそと彼女は地面に足をつけた。恐る恐る鶴仙人を見上げ、悲しそうな眼差しで顔色をうかがう。

これは怒られることがわかっている事をやつた時の、一種の癖だつた。

そんなに叱られるのが嫌なら初めからやるなど、天津飯あたりは常々思つてゐる。「ごめんなさい……」

「何故謝る？」

「じつちやんの言うこと無視して、勝手に外へ修行しに行つたから」

「なるほど、自分が何をしたのかは分かつてゐるようだな」

しばらくの沈黙の後、鋭い怒声が飛ぶ。

「馬鹿者！そこに直れ！」

びくりと体を震わせ、彼女は行儀よく足をそろえて正座した。  
その後はお説教の始まりである。

勝手に家を飛び出したことは勿論、止めた理由もきちんと話していたのにそれを無視したこと、そもそも普段からしてフリーは言いつけを破りがちであること。  
更にはそこから続いて日常の振る舞いや修行での態度など。  
こまごまと、丁寧に丁寧に指摘する。

一々ごもつともなので、口をはさんだり反論をする余地はない。

「兄ちゃん、いつもより勢いがないか？」

こそこそと桃白白が天津飯に耳打ちをした。

万一聞かれようものなら、勿論、流れ弾は命中し飛び火が炎上する。

「昨日妙なことがあつてから、体調がいいみたいで」

「あ～」

同じくこそと耳打ちされた返答に、思わず気の抜けた声が出る。

間違いなくドラゴンボールのせいだろう。

桃白白だけでなく亀仙人も、昨日、同様の出来事を体験していた。

異様に体調がいいのも完全に一致している。

「心当たりがあるんですか、桃白白さん」

「まあまあ」

訳知り顔、というには何とも歯切れが悪い微妙な表情を浮かべた。

ここでそのことを鶴仙人に言つてしまつてもいいのだが、と兄を眺める。何でも願いが叶う——それこそ世界征服であつても——願い玉を使って、健康長寿を願われたとすれば、間違いなく説教は止まるだろう。

というか、恐らく驚きのあまり、消えてなくなる。

事情を?み込ませるには何度も繰り返し説明しなければなるまい。

実際に目にした桃白白ですら、信じがたい出来事だった。

真っ黒く染まる空、神々しい輝きと共に現れる神龍。

そして短冊に書かれるような、抽象的すぎる願い。

「たやすい願いだ」と言つた太い声が中々頭から離れない。

そりやあたやすかろう、と桃白白は思つた。

鶴仙人も亀仙人も桃白白ですら、年齢はすでに200歳を超えていた。

その上で拳銃程度ならもろともしない強さを誇つているのだから、既に十二分に『元気で長生き』なのだ。

それでも一応、相應の効き目というものはあつたようだが。

少し迷つて、桃白白は結局今ここでは言うのをやめた。

悪いことをしたのなら、しつかり叱られるべきだからだ。

そう思つて自分も叱られたのだから、中斷してやる義理はない。

「ところで天津飯」

「はい、なんですか？」

「お前も旅に出てみたいか？」

「えつ」

あからさまにドキリとした彼に、まだまだなど内心思う。

天津飯はフリーとは違う意味で素直過ぎ、また真面目過ぎた。

この性格のままでは殺し屋など夢のまた夢だろう。

鶴仙人の方では、そう思つていないかもしれないが。

心配するな。近いうち、そういう話が出るだろう。

お前はしつかりしているからな」

「はい」

憧れる人物に褒められ嬉しかったのか、天津飯はほんの少し興奮した様子で頷いた。

そうこうしているうちにお説教がひと段落したのか、フリーが立ち上がる。

少しくたびれたのかしなつてしまつた雰囲気の彼女。

鶴仙人にそれと、と声をかけられ肩が跳ねた。

「帰つてきたまゝ言うことがあるのではないいか？」

「……！」

ぱあつと顔を輝かせ、抱きついて叫ぶように言う。

「ただいま！」

「おかえり」

しわくちやの手が優しく、さらりと頭を撫でた。

# 幕間 戦場にて

「はあ……はあ……」

パラパラと破裂音が響く。

始めは聞くたびに鼓膜が割れんばかりに震えたが、今となつてはさほど氣にもならな  
い。

壁のひび割れたビルの一室は、以前は家族が住むアパートだつたのだろう。  
置き去られている写真立ての、そのどの顔にも青年は見覚えがなかつた。

空気が乾いていない割に土煙が上るのは、草の一本も生えていないせいだ。  
この争いがいつからのものなのか、もう覚えてはいない。

10年も前のような気がするし、つい昨日始まつたような気もある。

少なくとも、一人残らず民間人が消え去る程度には、長く続いているはずだった。  
壊れかけたこの町にはもう、兵隊しかいない。

——ブー……ブー……——

「チツ、またかよ」

酷く控えめになるブザーは、敵の爆撃機を発見した合図だつた。

つい聞き逃してしまった。その音量は、しかし思いつきり鳴らせばそれこそ敵に位置がバレて狙い撃ちにされるからだ。

なるべくバレないように敵の陣営に近づき、やり過ごさなければならない。

連中も味方のキャンプ近くには流石に攻撃しようがなかつた。

十数分後には、また更地とがれきが増えた。

「クソ、行くか」

重い銃を抱えなおし、ビルを出て走り出そうとしたところだつた。

ひゆるひゆると、何かが空を切る甲高い、口笛のような音が響く。

逃げなくていいくらいには、充分離れている。

何事かと恐る恐る顔を出すと、巨大な何かが空から降つてくるのが見えた。

「な……」

目と口をぽかんとあける。

みるとうちに近づいてくる何かが、件の爆撃機であることに気づくには数秒かかつた。

そして、その数秒の間に飛行機は地面と勢いよく衝突し、爆炎が上がる。

味方の飛行機や砲台が撃墜した、とは思えなかつた。

青年の所属する軍には、そんな余裕はない。金錢的にも、技術的にも。

では爆撃機の故障だろうか？

火や煙にひるまず、何人かの人影が機体の残骸に近づいていく。

敵が仲間を助けようとしているのか、味方が憎い相手を殺そうとしているのか。

「ふん、馬鹿が」

どちらにせよ危険なのは間違いない。

情報が欲しい青年は遠目から様子を観察することにした。

同じ考えの持ち主が多いのか、彼らが撃たれる気配はない。

が、一瞬のうちに彼らは一人を残して地に伏した。

いや違う、倒れたのは彼ら全員で、立っている男は彼らの内の誰でもない。

それがわかつたのは、そのたつた一人が余りにも戦場に似合わない格好をしていたからだ。

薄いピンクと紺色の服、長い三つ編みとリボン。

武器らしい武器と言えば、銀色にきらめく刀ぐらいだつた。

優美な曲線と幅の広い刀身が特徴的なそれは、柳葉刀と呼ばれるものなのだが、青年

は知らない。

驚きから目覚めた何人かが狙いを定めて引き金を引いた。

パラパラと破裂音が何重にも重なる。

四方八方から銃撃を受け、男は何を思ったのか刀を何度もふるつた。

一呼吸ののち、倒れていたのは男ではなく、男を撃った兵士達のほうだ。

「いつたいどうしたつていうんだ？」

警戒も忘れ、覗き込んでしまったのは物理的な距離が十分にあつたからだろう。そうではない者たちは半狂乱になつて撃ちまくる。

瞬きの間に男は姿を消し、一つ、また一つと銃撃の音が消えていく。

何人かまとまって潜んでいた連中は、ビルごと崩れ落ちた。

一体どういうトリックなのか、ただ一階の壁をひと蹴りしただけだというのに。間もなくして、ひとかたまりの集団が歪な隊列を作つて男へ向かつて突つ込んでいった。

が、それに向かつて少し走つた彼とすれ違うと、ごろごろとあたりに転がつていく。その体はひと固まりではなく、いくつかのパーティにぶつ切りされている。

「すげえ……」

青年はただ見ていた。見とれていたといつてもいい。

男が軽く跳べばあつという間にビルの屋上へ届いてしまう。

そして何度かステップを踏むだけで後には死体しか残らない。

バリケードごと一刀両断し、スナイパーの眉間に銃弾を返す。

朽ちかけた町のあちらこちらを、縦横無尽に動き回る。

踊るような動きに優雅さはない。ただ、余りにも軽やかなので踊つて いるようにしか見えない。

華やかさはまるでないが、研ぎ澄まされた刃のような、無駄の一切を削ぎ落した、飛びぬけた洗練だけがもつ美しさがある。

突然、ギヤリギヤリと何かを引きずる嫌な音が聞こえてきた。

はつと我に返り、辺りを見回す。

「あ、あいつら……！」

どこに隠していたのか、敵の戦車が姿を現した。

しかも1台ではなく、2台、3台といふ。

本当は決定的な瞬間までとつておきたかったのだろうが、余りの事に我慢できず持ち出してきたのだろう。

十分な距離をとつて、大砲の先端が男を狙う。

たつぶりと時間をかけて、おおよそ人に向けるものではない質量が打ち出される。のだが、あつさりと男はそれを受け止めて、投げ返した。

見間違ひではない。投げ返したのだ。

しかもその砲弾は戦車を貫通し、風穴を開ける。

燃料タンクにでも命中したのか勢いよく爆発し、あつという間に火の玉に代わった。残りの2台の中からわらわらと男たちが出てきたが、それも見過ごされることはない。

もはや阿鼻叫喚となり、兵士たちには敵も味方もなくなつた。半数は我先にと背を向けて逃げ出す。

あれほど長い間、殺し合いといふものと向かつてきのにもかかわらず。しかし、半狂乱になつたもう半数は、死に物狂いで男へ襲い掛かる。

ある者は手榴弾を、ある者は銃を、ある者はナイフを、ある者は素手で。

より恐ろしく絶対的なものの前では、人は手と手を取り合えるのかもしれない。しかし悲しいかな、やはり結果は同じだつた。

三つ編みがたなびき、銀色の光がきらめいて、一人も残さず死んでいく。青年はどうやらでもなく、その様子をただ見ていた。

大事に抱えていた銃は最早ぬいぐるみ程度の意味も持たなかつた。

撃つべきものはただ一つ以外なくなつたのに、そのただ一つは撃つたところで意味がない。

気がつくと、自分の目の前に誰かが立つていた。

それが先ほどまで見つめていた男だと、気がつくのには少し時間がかかつた。

彼は、確かに多少は悪人面だつたが、それだけで、思つたよりもずっと普通の人間の  
ように見えた。

「どうしてこんなことをしたんだ？」

殺されるかもしれない、ということをすでに青年は受け入れていた。

それは、ほんの数時間前までの戦場での覚悟とは全く違う。

例えるなら、災害を目の前にした時の諦めに近い。

「たまには少し激しい運動をせねば、体がなまるからな」

それだけ言つて、男は姿を消した。

青年は地面にへたり込んで、笑つた。

ただ笑つた。

辺りには死の匂いが立ち込めていたが、それ以上増えることはなかつた。

その後、一夜にして一軍が滅んだという怪談じみた噂がある国に広まる。

青年は噂を聞いた時、また笑つた。

そして、噂についてたつた一つだけ訂正した。

一夜ではない。これ以上ないぐらい晴れ渡つた、明るい、真昼の事だつたと。

# ピツコロ大魔王編

## 其之十八 鶴仙流の弟子

それほど昔の話でもない、数年前の事。

庭をボコボコにした罪で説教を食らった桃白白に、当時3歳程度だったフーアイはてちてち近づいた。

無邪気に膝に手を置かれ、彼が身じろぎ一つしなかつたのは、しばらく正座するように言いつけられていたからだ。

沂い顔を下から覗くだけに飽き足らず、フーアイは舌足らずに聞いた。

「どうして正座してるの？」

よく殺されなかつたものだが、当時の彼女は純粹に疑問だつたのだ。  
別に彼を煽るつもりはなかつたし、怒られた理由を尋ねているわけでもない。

鶴仙人よりも桃白白の方がずっと強い。

戦闘民族の血だろうか、そのことが本能的にわかつていた。

それなのに、どうして自分より弱い相手に従うのか？

質問の表面でなく本質をくみ取つたのか、桃白白は軽くため息を吐いた。

何に対してのものなのかはよく分からぬ。

とにかく、彼は幼く無知な弟子に一つだけ教えて、それを質問への答えとした。

「師弟と兄弟は、単に強いとか弱いとかいうものではない」

やはり意味が分からず、少女と呼ぶにも幼すぎる彼女は首をかしげる。

が、間もなくして鶴仙人がやつてきて、両手で抱えられ回収されていった。

そのころのフリーはまだ、力づくでもしわくちゃの手を振り切れなかつたのだ。

そして、現在、フリーが旅から帰つて来てひと月もたたない頃の事。

「そろそろお前も旅に出るか」

食後のお茶をすすりながら鶴仙人はそう言つた。

言われた天津飯は驚きと喜びで声を張り上げて元気よく返事をする。

眼差しにはやや誇らしげな輝きも感じられた。

そして、それを聞いたフリーはあからさまにぶすくれる。

「何で天津飯にはあつさりオッケーてるの！」

「なぜなのか本当にわからんのかお前は！」

唸るように上げた抗議の言葉は、倍の勢いで押し返された。

しまつたと思つた時にはもう遅い。

くどくど語られる内容はいつもと同じで、それは結局フリーが何一つ変わつていない

ことを示している。

「そもそもお前は何事に対しても注意力散漫で、集中力の持続が短すぎる。身の回りの事もずさんに過ぎる。あんなに少ない持ち物でどうしてあんなに部屋を散らかせるんじや。

一人で旅をするということは、武術の心得以外にもそういう自立する力が求められるのだ。

大体な……」

長い長いお説教を、何も言われずともフレイはちよこんと正座して聞いている。  
そうしないという発想はそもそも存在しない。

最も、もつと注意を惹くもの——例えは久々に帰ってきた桃白白とか——が現れば、あつという間にそのことで頭がいっぱいになつて飛び出してしまうのだが。

彼女はもうすでに、鶴仙人よりも強い。戦わなくともわかる。

既に実戦から遠ざかって長い老爺と伸び盛りの彼女では、比べ物にならなく、なり始めている。

だから、別にフレイが彼の言葉を黙つて聞く必要はないし、背筋を正す理由もない。けれど実際は違う。彼女は黙つて殊勝に話を聞いているし、必要とあれば罰も謹んで

うける。

ある種すりこみに近い面もあるだろう。

何といつても鶴仙人はフレイの育ての親であるのだし。  
しかし、もつとも強い理由は、とある感情である。

一般的に敬愛と呼ばれるが、その言葉 자체をフレイは知らない。

彼女は自分の五感や心の動きに素直過ぎて、一つ一つの名前や定義に関しては全くの無頓着だった。

一通り説教を終えると、鶴仙人は天津飯に向き直った。

「よいか、旅とはいえ修行の一環じやからな。

行き先と経路ぐらいは決めて、儂に相談の上、きちんと準備をしてから出発するよう  
に」

「もちろんです」

心強い返事に、鶴仙人は満足げにうむ、と頷く。

「ところで、既に目的地の候補はあるのか？」

「……カリンというところへ行つてみたいと思います。

私もフレイがあつたという仙人様の元で修行がしたいのです」  
ちら、と正座したままの姉弟子を見た天津飯。

師匠からは死角の位置で、彼女はニヤツと自慢げに笑つた。

いわゆるドヤ顔である。彼はフーイへ目を向けたことを後悔した。

「なるほどのう。確かに、こやつの話を聞く限り、よい経験になりそうだ」「詳しい位置や移動手段を知りたいので、地図をお借りしたいのですが」

「わかつた。後でわしの部屋にくるといい」

「ありがとうございます」

この時点ですでに、見切り発車（というか射出）で見当違いの雪景色へ突っ込んだフライとは雲泥の差がある。

ますます鶴仙人は天津飯に感心した。

これなら安心して送り出せるというものだ。

とはいっても、万一一ということもあるから、と、あるものを彼に手渡す。

「これは、小型の発信機のようですが……」

「道なき道もあるう、自分の居場所を見失うと人は容易く遭難する。

そうでなくとも、自分がどこにいるかわかるのは旅をするうえで重要なことじゃ」「確かに、おっしゃる通りです。ありがたく頂戴します」

「それから」

と、機械の端についたピンク色の、リボンのような部分を指さす。

「命の危機を感じるときには、この紐を引くのだぞ」

「そうすると何がどうなるのですか？」

「桃白白がくる」

桃白白が、くる。

天津飯はやや気恥ずかしそうにし、フリーはうらやましそうにしている。

彼らにとつては保護者がすつ飛んでくる防犯ブザーのようなものだから、当然といえば当然の反応だ。

鶴仙人にとっても、そういう認識だつた。

が、残念ながら桃白白はただの保護者ではない。

名実ともに、押しも押されぬ世界一の殺し屋である。

しかも、慢心せず研鑽を重ねた結果、今や一人で小国的一大隊と対等以上にわたり合う実力をつけている。

少年の一人旅の防犯としては過剰戦力だつた。

彼がどこかの軍隊とやり合つつもりなら話は別だが。

残念ながら、姉弟子が実際に軍隊を潰しているが故に、可能性を否定しづらい。とにかく、長旅の準備を整えた彼は、最終兵器めいた防犯ブザーを手に出発した。幸いなことに、紐を引く機会はなく、実に順調に旅は進んだ。

堅実にカリン塔にも上り、ツボを奪う試練にも挑んだ。

余りにも真面目な様子と愚直な性格に、カリン様から「本當にお主、フーアイの弟弟子か？」と聞かれる一幕もあつた。

いくらか日数をかけたものの、試練をパスし、見事超聖水を勝ち取つた。  
そして、見違えるように成長した彼は、道場へ帰還する。

一人の子供を連れて。

「え、なんで？」

と、出迎えたフーアイが言つた。

鶴仙人は頭を抱えた。

## 其之十九 餃子と鶴仙流

わざわざ出迎えに出た玄関先で、筆舌に尽くしがたいほど微妙な空気が流れている。

「何それ」

「それじやない！……」「いつは餃子だ」

無遠慮に指をさすだけでなく、何だのそれだのもの扱いするフーリに天津飯は不機嫌になる。

が、自分のしたことの重大さも理解しているため、後半はつい語気が弱くなつた。

頭が痛そうにしている鶴仙人の方を見ると、あからさまに表情が歪む。

その間もずっと、餃子は彼の足の後ろに隠れ、しがみついていた。

「なぜその子供をここに連れ帰ってきた？」

「それが……」

もごもごと口を動かし、何があつたのかひとつひとつ丁寧に話す。

けれど、それは要約してしまふと、行き倒れていたので助けた、というだけの話だつた。

人里離れた場所で、そのまま放置していれば死んでいたに違いないというから、なる

ほど、天津飯から離れないほど懷いているのも領ける。

「天津飯……」

元のところに帰してこい、と今にも言いそうな鶴仙人は非道だ。見捨てる云々以前に、犬猫か何かと同じ認識をしている。

というのも、彼の目から見て餃子にはそれほど武術の才能が有りそうには見えなかつた。

鍛えればそれなりにはなるかもしれないが、それなり程度の才能なら世の中にごまんといる。

興味の無さと呆れ具合を隠そそうともしない彼の態度に、天津飯は酷く慌ててまくしてた。

「違います！鶴仙人様！確かに私が餃子を助けたのは、行き倒れていたからですが、連れ帰ったのは力があるからです！」

「力？」

「簡単なものが超能力が使えるんです。餃子、やつてみせてくれ」

促され、餃子は恐る恐るといった様子でフーアに向かつて手を向けた。

「おろ？」

ふわ、とフーアの体が宙に浮いた。

高さはそれほどでもないが、動きは安定している。

「なるほどのう」

サングラスの下、細い目つきが興味深そうにその様子を眺める。

しばらく彼女はされるがままになっていたが、ふと胸いっぱいに息を吸い込んで吐く。

すとんと勝手に地面へ着地したのを見て、餃子は目を見開いた。

「私を狙つたつて言うのが気に食わないなア」

「……！」

びくりと肩を震わせ、きつく天津飯の足に抱きつく。

その様子を見てフリーはため息に近いものをこぼし、頭を搔いた。

調子が狂う、と顔に書いてある。

怯えた餃子の様子もしつかり見られているのを感じ、天津飯は促す様に彼の背中を押した。

おずおずと前へ出ると、不安げに服の袖を握り締め、探るように老人を見上げる。

それを容赦なく見下ろし、鶴仙人は低い声で問いかけた。

「餃子と言つたな」

「はい……」

「お主、鶴仙流を学ぶ意思はあるか?」

「あ、あります!」

意外にもしつかりとした口調でそう答える。

「ほう、それはなぜだ?」

「他にいくところもないし……それに、鶴仙流に弟子入りしたら、ボクも強くなれるって……天さんみたいに……」

「ふむ……」

老爺は吟味する様子で顎鬚を擦つた。

沈黙の中、一番暗い顔をしていたのは餃子であり、一番気をもんでいたのは天津飯だろう。

二人にとつては、永遠にも思えそうな時間が流れる。

「まあよからう

と、結局鶴仙人はそう言つた。

ぱあつと天津飯の顔が明るくなる。

「やつたな! 餃子! 鶴仙流へ弟子入りできるぞ!」

「うん! 天さん、ありがとう!」

「ただし!」

手を取り合つて喜ぶ二人を、一喝して彼は再び餃子と向き合つた。

「勘違いするなよ、お主をここへおいてやるのは、天津飯が連れてきたからでも、行き場がないからでもない。

お主が鶴仙流の使い手として、才能があるからじゃ」

「…………」

「分かつたなら返事をせい！」

「はい！」

「よろしい」

くるつと後ろを向くと、建物へ向かつて足を進める。

ちよこちよことフリーイもその背中を追つた。

いつの間にか口は既に傾き始めている。

「風呂は沸かしてある。天津飯と餃子はまず身を清めるようにな。

フリーイ、夕飯の支度を手伝え」

「はーい」

「今度は皮むきを忘れた野菜をそのまま鍋に入れるなよ」

「ゼンシヨします」

「何が善処じや！妙な言葉ばかり覚えよつて……」

ぶつぶつと呟きながら玄関を開け、中に入る。

まだ突っ立つたままの餃子の手を引き、天津飯も後に続いた。彼らが敷居を跨ごうとした瞬間、鶴仙人がくるりと振り返る。

「ようきたな、餃子。それから、天津飯、よく戻った」

「は、はい！」

「ただいま帰りました、鶴仙人様」

ヽ・ヽ・ヽ・ヽ

「ん？なんだこのこまいのは」

餃子は動搖していた。

道場に居ついてからしばらく、思つたより居心地はよかつた。

修行は厳しかつたが、生活にも慣れ始めていた。

しかし、今日はなんだかおかしかつた。

まず、いつも落ち着きがない姉弟子がいつにもまして落ち着きを無くすと、突然、弾

丸のような素早さで庭へ出ていった。

正直、修行をはじめて日が浅い餃子には目で追いかれない速さだつた。いつにない全

速力である。

それなのに天津飯は、またか、という顔をしている。

鶴仙人も怒鳴りながら、その声にはどこか諦めに近いものがあつた。

障子を開けた時には、もうフリーの姿はどこにもない。

少しして、庭に見知らぬ飛行機が降りたつ。

薄いピンク色の機体には、大きな字で殺と書かれている。

中からはまたしても知らない男が現れる。

長い三つ編み、飛行機と同じ薄いピンク色の服に殺の文字。

細く筋張つた頸のラインは、鶴仙人と似ているような気もする。

と、無防備な様子の彼にフリーが襲いかかる。

隠れていたらしき草むらが揺れた、と思つたらそれとはまた別方向から現れ、と思うと動きが止まる。

視線を動かした先でもまた姿はあれど動きは止まつており、奇妙に停止したフリーが男の周りを取り囲んだ。

残像拳、という技だと教わったのは後の事だ。

幾人ものフリーに囲まれても、彼は動搖するどころか身じろぎする様子すら見せない。

やがて分身の中の一人が動く——と、一気に頭を下げ腰を落とし、小柄を生かした低い位置から攻撃を放つ。

殺す気だ、と餃子は思つた。そのぐらいフーアイは真剣だつた。  
が、あつさりとかわされ、それだけではなく腕を掴まれ思いつきり地面にたたきつけられ、ひっくり返つてしまつた。

強い。強すぎる。

すっかり怯える餃子と違い、天津飯と鶴仙人は平然としている。  
それどころか親し気に声をかけさえする。

分からぬ。

鶴仙流を襲いに来た敵ではないのか？

違うならばなぜフーアイはあれほど手の込んだ不意打ちを？

混乱しきりのところ、男はいかにも意地悪そうな目をちらりと餃子へ向けた。  
勝手にびくりと肩が震えてしまう。

そこで言われたのが、先ほどの「このこまいの」という台詞だつた。

「新しく弟子をとつてな、餃子という」

「ふうん」

「ほら餃子、桃白白様に挨拶しろ」

「は、初めまして……餃子、です……」

「すい、と男——桃白白の顔が近づく。

思わず後ずさりしてしまったが、彼は気にしていないようだ。いや、わからない。中々意地の悪そうなやつだな、と言われたから、本当は気に触つたのかもしれない。

「よかつたね餃子、褒められたじゃん」

むくつと何事もなかつたかのように起き上がり、フーアイが言ってくる。

褒められてはいない、と餃子は思った。

このように、餃子はもう一人の鶴仙流の師と、極めて衝撃的な初対面を果たしたのである。

主に8割がたはフーアイのせいで。

## 其之二十 大会前夜

「そこまで！」

鶴仙人の高らかな声が響く。

それを合図にフリーは天津飯から手を放し、二人は距離をとつて一礼する。

近頃組み手は道場ではなく、もっぱらこの裏山の空き地で行われていた。

理由は簡単で、本気でやり合うと建物が持たないからだ。

舞空術などを活用して思いつきりやるという意味でも、屋外の方が都合がよかつた。何とか試合終わりの礼までは耐えていたフリーだが、どさりと土の上に転がる。それをとがめるような視線を送り、鶴仙人の前で気をつけをする天津飯も、立つているのがやつとなのかふらふらしている。

「よい、天津飯、話はその辺の木陰で座つて聞け。

フリー！ 休むにしてもこつちへこい！」

はーいと間延びした返事をして、彼女は言われた通り鶴仙人と、その隣に立つ桃白白の近くへ寄つて腰を下ろした。

正座をしていた天津飯も、鶴仙人に再び促され姿勢を崩す。

「まずは餃子、二人の組み手はどうだつた？」

突然話しかけられ、見学していた餃子は少し慌てて、はい！と返事をした。

「す、すごかつた」

「何がどう凄かつたのだ？」

「天さんは、技の数も多くて、しかも、ちゃんと使い分けてた。  
でも、フリーも、ちゃんと受け止めたり、流したり、反撃もしてた。  
二人とも、すごかつた」

「ほう、よく見ているな」

桃白白は素直に感心した様子でそう言つた。

実際、餃子の成長は目覚ましい。

元々超能力という、ある種気に近いものの扱いになれていた為だろうか、氣彈も舞空  
術もあつさり扱えるようになった。

今ではやや拙いが、どんどん波も立派に打てる。

褒められるのは純粋に誇らしく感じるのだが、と餃子は思う。

頭を撫でるために、いちいち帽子をとつて、また被せなおす一連の動作には何か納得  
がいかない。

強いのは重々承知しているのだが、よく分からぬ人だと常々感じる。

氣にするふうもなく、鶴仙人はフーイへ声をかけた。

「お主はどう感じた?」

「しんどいけど楽しかった!」

「違うわ馬鹿者!」

すぱん、と手刀が勢いよく頭に入る。

自分でさすりながら、今度は眞面目に答える。

「天津飯のバリエーションの多さヤバになつて。途中、何回か危ないところあつたし

次にどれが来るとか、選択肢多すぎて全然わかんなかつた」

「それは貴様が頭を使つていなからだ。反射神経任せに感覚でやつとるじやろう」「あー、うん、そう。そうです……」

頷きながら珍しく少し苦い顔をする。

「自分の戦法を考えると同じぐらい、相手の戦法を考えい。

そのためには観察、そして観察のためには集中じや。

今日から瞑想の時間を毎日設けるぞ」

「げえつ」

「返事は!」

「はいっ!」

歯切れの良い返事に頷くと、鶴仙人は最後に天津飯の方を向いた。

「お主はどうじやつた?」

「はい。やはりフリーの反射神経と身体能力に、対応しきれていませんでした。

技の多さだけではどうにもならない。基礎的な部分をもつと強化しなければと思います」

「それは違うぞ」

「すみません、どういうことでしようか?」

自分の至らなさを痛感していただけに、深く反省していた天津飯は、それをあつさり否定され、困惑した。

よいか、と老人のしわくちゃの手が人差し指を立てる。

「お前は目がいい。単純な技なら一度見ただけで真似できてしまう。

その分、相手の動きが良く見えすぎ、次の予測を考えすぎてしまうのじやだから次の手が一瞬遅れ、フリーのような素早い動きに間に合わない」

「な、なるほど……」

「要は考え過ぎ」ということだな。もう少し肩の力を抜け

「わかりました」

深く頷いているその様子は、わかっているのかわかつていないのか。

これも彼の性格なので仕方のない面はあるだろうが。

「さて、三人とも、いよいよ天下一武道会は5日後に迫つておる」

そこまで行つてから鶴仙人は足を一步踏み出し、力の限りこぶしを握り締めた。

強張りすぎてやや震えている。

「亀仙流のやつらが幅を利かせているような大会に！本物の武道を！見せつけてやるんじや！」

「おー！」

師匠の熱量に見合わない、気の抜けた雰囲気でフリーも拳をゆるく突き上げる。

餃子と天津飯も力強く頷いてみせた。

桃白白は、何処か他人事の様子でそれを眺めている。

「さて、それでは飯にするか。中へ戻るぞ」

5人はぞろぞろと連れ立つて母屋の方へと歩いていく。

列が間延びしたタイミングで、偶然フリーと天津飯は横並びになり、他の3人とすこし距離ができた。

その時、何か思い出したようで、そういえば、とフリーは彼に話しかける。

「なんだ」

「私が最後、掴む前さ、あの時なんで殴ったの？」

どどん波でも何でも撃つてたら天津飯が勝つてたよ

「そだつたか？」

「あれ？ 自覚ない？」

そつかあ。と言つて、彼女はしばらく考え込む。

そして再び5人が一塊になり、玄関へ入ろうとしたところで再び口を開いた。  
「天津飯つて、桃白白みたいな殺し屋になりたいんだよね」

「ああ、何だ突然」

「でもさ、天津飯は向いてないとと思うよ、殺し屋」

パキ、とあからさまに空気が凍つた。

その後は酷かつた。

何を言つても何を聞いても、フレイは向いていないものは向いていないの一点張り。

寧ろ、天津飯や餃子、鶴仙人が何故理由を理解していないのかの方が、不思議だとまで言う。

始めは努めて冷静に理由を聞こうとしていた天津飯も、最後には堪忍袋の緒が切れた  
のか「もういい！」と怒鳴つたきり、口を噤んでしまう。

慌てた餃子がどうにかフオローしようとしたが、それにも耳を貸さない。

鶴仙人の仲裁も 責もむなしく、2人は話すどころか目も合わそうとしない。  
それでいて鍛錬はいつも通り、いや、いつも以上の熱量で打ち込んでいる。  
そうこうしているうちに、天下一武道会の日がやつてきた。  
結局5日間、2人は一度も口を利かなかつた。

## 其之二十一 天津飯

天津飯はいらだつていた。

当然だ。長年の夢を、憧れを、わけもなく否定されれば誰しもそうなる。だが、何となく彼本人は、それだけが理由でないことも感じていた。

焦げ付くように気持ちが逸るのは、怒りだけでない焦燥が駆り立てるのは何故だろう。

いつもの彼は、鶴仙流らしく抜け目なくそつがない。

実力者にはそれなりの相手を宛がつて、まずはその力や戦法を量ろうとする。けれど、今日の彼は違つた。思いもよらぬ要求に、らしくなく餃子は戸惑つた。一回戦は、前大会の優勝者、ジヤツキー・チ Yun と自分が当たるようにしろ、と。どんな相手でも負けはしないと、ゆるぎない自信があつたのは間違ひがない。自分の力を試してみたいという気持ちがあつたのも、嘘ではない。ないのだが、もつと激しい思いも胸にあつた。

それにふさわしい力を見せれば、誰も何も言うまい、言わせるまいと。たとえ間違つたことだろうと、正しいことだろうと。

だというのに、にもかかわらず。

「それほどの実力を持ちながら、なぜいつまでも、鶴仙人などにくつついておるのじや」  
ジヤツキー・チュンは、必死に語りかけてくる。

「おぬし、なぜそれほどの技を正しき道に使わぬのじや！」

「なぜ悪に走る……技が泣いておるぞ！ 鶴仙人とは縁を切るのじや！」

殴り飛ばそうと叩きつけようと、立ち上ががつてくる。

そのうえ、向こうからは仕掛けてこない。

ただ、何度も繰り返し同じことを言う。

「安易な影の道から抜け出せ！ 日の光に満ちた世界を走つてみよ！」

お前は、目指す先を違えていると。

ブツ、と天津飯の中で何かがはぜた。

「うるさい!!」

力任せに振りかぶった拳は、粗雑な動きではあつたが型の基本は外していない。

頭にすっかり血が上つた状態にあるにもかかわらず、だ。

それは、どれほど彼が日々の鍛錬に眞面目に、真摯に向き合っていたかをこれ以上ないほど雄弁に示す。

「ツ、どいつもこいつも——！」

「わしは、別に大したことと言つてゐるわけではない。

明るく笑つてのんびり暮らした方が、この世は楽しいといつておるだけじゃよ！」

「それがなんだ!!」

素早い蹴りは、愚直な動きであるにもかかわらずよけきれない。

更に容赦なく猛烈な拳の嵐がジヤツキー・チュンを襲う。

それでも彼は話し続ける。

真つすぐに、天津飯の目だけを見て。

「それとも、鶴仙人のように人に嫌われながら過ごすのが好きか？」

「お前に何がわかる!! 他の誰にもとやかく言われる筋合いはない!!」

拳を握り締め、石畳を割れんばかりに踏みしめて天津飯は吠えた。

「強さに憧れた人と同じ道を目指すことの何が悪い！」

育てて貰った師匠を慕うことの何が悪い！

示された道を目指そうとすることの何が間違いだ！」

「……天津飯、おぬし」

ジヤツキー・チュン——武天老師は、目をわずかに見開く。

そこに立っていたのは、一人の青年だつた。

しかもひどく生真面目で、純粹で、不器用な。

ふつと、背中に気配を感じる。

誰かが彼の気迫を受けて、思わず息をのんでいた。

それは2世紀も前から知っている人物で、今更誰なのか間違いようがない。

「鶴のやつめ」

後に何という言葉を続けようとしたのかは、本人以外知り様がない。

代わりに、彼は天津飯にこういった。

「ただ師に従うことだけが、正しさではない。自分の道は自分自身で決めるのじゃ

……おぬしの師匠がそこまで慕われるだけの価値がある人間なら、お前自身が決めた道を、否定するまいよ」

そうして、あつさりと自分から武舞台を降りてしまう。

「なつ、なぜだ！・なぜわざと負けるんだ！」

ジャッキー・チュンは何も答えない。

何も答えないまま、控室へと去つてしまつ。

再び燃え上がつた苛立ちに任せ、天津飯はその後を追つた。

ぽかんとした顔の悟空たちを置いて、次の試合が始まろうとしている。

そして、ひつそりと、2人の後へと続く小さな人影があつた。

「お前は誰だ、鶴仙人様の何を知つてゐる」

「ほれ、これで分からんか?」

「武天老師!」

帽子をかぶりサングラスをかけ、亀仙人はあつさりとネタばらしをした。

鶴仙人と彼の確執は、天津飯もよく知つてゐる。

さては先ほどまでの言葉は全て出ませかと、食つて掛かろうとした青年に老人は言う。

「しかし、わしは鶴仙人と仲が悪いから忠告したわけではないぞよ。

おぬしとおぬしの技の事を勿体ないと思つてな」

「大層な御託を並べやがつて……」

「それにな、さつきの啖呵でよくわかつたわい。おぬしは悪人にはなりきれやせんようだ」

「なつ、なんだとつ!」

「わけはほれ、あいつから聞くといい」

つい、と指がさしたその先には彼女がいる。

「フリー……!」

「あとは、2人で話し合うといい」

ではな、と姿を消した亀仙人の姿は既に天津飯の意識にない。じつと睨みつけるような少女の目つきが、なおさらいらだたせる。

たつぱりとした沈黙の後、彼女はこう言つた。

「天津飯はさ、なんでそこまで怒つてんの？」

「……お前！」

余りの事に言葉を失い、体が熱くなる。

畳みかけるように、彼女はなおも続ける。

「殺し屋なんか向いてないって私が言つたから？」

でもさ、本当の事だよ、向いてないものは向いてない

「まだいうか！」

思わず胸倉につかみかかる。

けれど、彼女は平然としている。

「違うつて言うんならさ、そんなに怒つてるなら。

このまま、私の事殴ればいいじやん」

「なんだと!?」

へら、と少女は笑つた。

手はだらんと下に垂らし、抵抗するそぶりも無い。

「やつてみなよ、できやしないから」

「言つたな！」

捕まえたまま、拳を振りかぶる。

フレイは瞬きすらせず、天津飯の瞳を見ている。

まつすぐに、見つめている。

相変わらず手足はだらんと下に垂らし、身構えようともしない。

恐ろしいほど無防備で、どこを殴ろうとまともにダメージを食らうだろう。それがなんだ、と天津飯は思う。

フレイは自分を怒らせにかかつている。

そもそもここ数日のいざこざも、原因は彼女にある。

手加減をする必要などない。

言う通りにしてやればいい。

怒りに任せて、思うがまま。

受け身もとらず、自分に全力で殴られれば、きっと流石の彼女も大怪我をするだろうけれど。

ちら、とよぎつた考えのせいで拳がぶれる。

かすつた頬からたらりと血が垂れたが、それだけだ。

皮が一枚切れただけ、すぐに塞がつて血も止まる。

フレイが何か言うよりも先に、彼女を地面におろして、天津飯はどかりとしゃがみ込んだ。

「わかつっていた、何となく  
ぽつり、と彼は言つた。

「お前に向いていないといわれてから、自分でも理由を考えてみた。  
けれど、わからぬふりをしていた

……そして、お前に当たつた。すまん」

「えつ、いや！ 天津飯が謝るのは違うじゃん！ 悪いのは私だし！」

あたふたと慌ててから、肩を落として彼女も座り込む。

「ごめん。そもそも私が言うことじやなかつたかもしれない。

伝え方も悪かつた。理由も上手く言えなくて。

……今日のこれも、5日考えた割に、きれいなやり方じやないし」

「……嘘だろ」

その言葉を聞いて天津飯は顔を歪ませた。

姉弟子は、見ての通り思い悩むタイプではない。

そんな彼女が数日間、悩みに悩んでいたという驚きが半分。

もう半分は。

「5日考えた結果がこれが……！」

「悪かつたってば……ごめん……」

ひねりにひねった結果の説得方法が、かなり力業なうえ、オブラーートも何もないことへの呆れだつた。

「分かつてるとと思うが、俺が本氣で殴つたらただではすまんぞ」

「それはそれで、天津飯が殺し屋に向いてるつてことだし、私が間違つてたつてことでいいかなつて」

「お前なあ……」

試合の喧騒をよそに、2人は並んで空を見上げる。

「……どうして、俺にわざわざ向いてないつて言つたんだ」

「この大会が終わつたら、本格的に将来への事を進めようつて、じつちゃんと桃白白が話し合つてるの聞いてさ。

……完全に、余計なおせつかいなんだけど、私の気持ちでしかないんだけど

「なんだ」

「天津飯に向いてない道で後悔してほしくないなつて……」

「本当に余計なおせつかいだな」

そう言つて、天津飯は笑つた。

フレイの背中を軽くたたいて立ち上がる。

「もう一度、殺し屋については考えてみることにする」

「えつ……」

「言つとくが武天老師の言うことに思うところがあつたからだ。

あれがなかつたらお前の『説得』なんて聞く気も起きなかつたぞ」

「マジ? うわあ、亀仙人のおじいちゃんにお礼言わないと」

真面目な様子で考え込むフレイに、天津飯はまた笑う。

「ほら、前のが終わつたみたいだ。

「次の準決勝一回目はお前の試合だろ」

「そうだつた!」

「……フレイ」

ぐ、と彼が拳を突き出す。

「決勝に出て、優勝は俺、準優勝はお前で決まりだ」

「優勝は私、準優勝は天津飯の間違いでしょ」

ごつ、と彼女が拳をぶつけ、2人は笑いあう。

青年の前には、ただ、まっさらな青い空だけが広がっている。

## 其之二十二 孫悟空ＶＳフーアイ

「言つとくけど、じつちゃんから本氣でやれつて言われてるんだ。

色々あつて、私も全力出し切りたい気分だし」

向かい合つた悟空を指さし、フーアイは宣言する。

「殺す氣でやるから、悟空もマジでやらないと多分死ぬよ」

「ああ、わかつた」

彼が真剣な顔で頷き、構えたのを見て少女も構える。

「ではただいまより、第22回天下一武道会準決勝試合、第一戦を始めます。

——始めッ!!

動いたのは悟空が先だつた。

素早い動きで真つすぐに突つ込み、体当たりをするように拳を突き出す。しかしフーアイはギリギリでよけきると逆に側面からのカウンターを狙う。

その腕に巻き付いた尻尾が、彼女の体を引き倒そうとする。

が、逆にしつかりと地面をふみしめ、尻尾を掴み地面へ叩きつける。

倒れた彼へ追い打ちをかけようとしたところ、下から勢いよく蹴り飛ばされ体が宙へ

浮いた。

「ははっ」

「ふへへ……」

一度距離をとつて向かい合うと、お互にどこか薄っぺらい笑い声が漏れた。

ゾクゾクと背骨が高ぶるのがわかる。心臓が痛いぐらいに興奮する。

彼らは似ている。性根も生い立ちも戦法も違うのに、酷く似ている。そのわけをまだ知る由もないのだが、それでも感じるものがある。

笑う。フーイは笑う。

歯をむき出しにして、見せつけるように笑う。

彼女の笑顔は、サルの威嚇によく似ている。

どちらともなく、同時に動き出す。

二発の弾丸となつて、何度も何度もぶつかり合う。

クリリンやヤムチャに餃子、亀仙人や鶴仙人ですら息をのむような、一進一退の攻防が続く。

恐らく会場の中で何が起きているのか、はつきり理解していたものはほんのわずかだろう。

「かーめー……」

「は！」

「つぐ！」

距離をとり、悟空はかめはめ波を撃とうとするが、その手へ気弾が正確に命中する。気の集中が乱れ、集まり始めていた塊は霧散した。

生まれた隙を、フーアイが見逃すわけもない。

「もらつたツ！・どどん波——ツ！」

素早く撃たれた光線は、真っすぐに目にもとまらぬ速さで突き進む。  
「うわわっ！」

なんとか体をひねつて避けるが、元から技をすかされ、姿勢を崩していた悟空は、さらには無理のある体勢になる。

そこへ、どどん波にも迫るかというスピードで、フーアイが飛び込んでくる。

これ以上は避けようがない。ここで決まってしまうかと思いつや。

「ふつ！」

「えつ！」

悟空がふわつと宙に浮いた。

攻撃が空振りに終わり、少女はぽかんと間の抜けた顔で何もない空間を見つめている。

「な、な、な……」

わなわなと少年を震える手で指さし、鶴仙人は口元を手で覆つた。

天津飯と餃子も思わず体を前のめりにし、食らいつくように覗き込む。

桃白白ですら、軽く目を見開いた。

亀仙流側の反応も、そう大きな違いはない。

何も知らない観客たちや他の選手よりも、彼らの驚きの方がよほど大きかつた。

「アレは 間違いない、舞空術！」

「な、なぜあの小僧が使えるのだ！まさか、今日、この日みただけで……!?」

「いや、違う」

腰を抜かしそうな様子の兄を、桃白白は冷静に否定した。

「3年前、小僧はフーイと共に旅をしている。何度か舞空術も見たはず。

あいつが教えたわけではないだろうが、そもそもが簡単な技だ。

ある程度実力があれば、3年もあれば習得できても不思議ではない」

「……そ、そうか。そうだつたな。ふふん、わかってしまえば何ということはないな」

そう言いながら鶴仙人は親指と人差し指でせわしなく髭の先を弄る。

見えないところで桃白白も2本の指の先を似た様に擦り合わせていた。

フーイが気付き、上を向いた時にはもう遅かつた。

勢いよく頭上から悟空の体が、矢のようになつて降つてくる。

どうにかまともに食らうことは避けられたが、それでも十分ダメージを負つた。が、元気に飛び起きて再び構えをとる。

「そつちがその気なら！」

たつと足を踏み出し、フレイが姿を消した。

気配はそこにあるのに、姿は見えない。

クリリンとの試合で悟空が見せた高速ステップだ。

本人たち以外で気付いているのは天津飯だけだろう。

「……そこだ！」

悟空が鋭く蹴りを放つ、がその足先は彼女の体を通り抜けた。

「残像拳!?」

「ジャッキー・チュンさんの技だ……！」

驚くヤムチャとクリリンの隣で、亀仙人——ジャッキー・チュン本人も口をあんぐりと開けている。

「いつ!?」

どふ、と肘が胸に入つた。

肺が圧迫され、はつと空気が無理やりに押し出される。

呼吸が一瞬止まり、意識がくらんだ。

「たアツ！」

勢いよく蹴り飛ばされ、石畳の上をすべるようにして場外へ落ちる、かと思われたが。

「波アツ！」

落下の直前、勢いよく氣弾を地面に向かつて放ち自分を浮かび上がらせ、舞台の上へ戻つてくる。

「やるじやん」

「おめえもな。けど、疲れてきたんじやねえか？」

「冗談。疲れてるのはそつちでしょ」

また、衝突。

殴つては捌かれ、蹴つては殴られる。

目まぐるしく互いの拳が、足が、全身が入り乱れる。

ほんの少しでもスピードに置いて行かれれば、そのまま縛れるように敗北する。と、悟空が勢いよくフーイの体を蹴り飛ばした。

追い打ちとばかりに両手を構え、気を籠める。

けれど、彼に見えないようにして、フーイも指先に意識を集中させた。

「かくめく、はくめく……」

「どどん」

不意打ちのために、わざとタイミングを合わせる。

貫通力ではどどん波が勝るのだ。実力が拮抗している以上、ぶつかればこちらに分がある。

そう判断し、撃とうとした瞬間。

「波——ツ！」

飛んできたのはかめはめ波ではなく、悟空自身だった。

当然彼女のどどん波は空振りし、ぶつかつてくる質量にも対応できない。

一塊になつて場外へ出た二人だが、下敷きになつて先に落下したのは勿論フリーの方だった。

「……さ、先に落下したのはフリー選手！

よつて勝ったのは悟空選手です！悟空選手、決勝へとコマを進めました——つ！」  
会場に響くアナウンス、見物客たちの割れんばかりの声援。

「ぐ、くそ——つ！！ まさかフリーのやつが負けるとは……！」

「あの小僧、やはりただものではないか！」

師匠たちの悔し気な言葉。

「や、やつた！やつたぞ！悟空が勝つた！」

「ああ、やっぱりあいつはすごいやつだ！」

亀仙流たちの歓喜。

どれもが、天津飯にはどこか遠く感じた。

不思議そうに、気づかわし気に餃子がこちらを見ている。

それもわかっている。

分かつてているのだが、反応を返してやることができない。

天津飯にとつて、フライはもつとも身近な壁だった。

だからこそ、例の件ではあれほどまでに腹を立てた部分もある。

年下の姉弟子であり、その身体能力は他の追随を許さない。

今では五分の戦いができるようになつていたが、それは自分が手数でカバーした結果だ、と天津飯は思つている。

手数でカバーできる分、彼もフライや悟空と変わらない天才なのだが。

自分が持つていらないものを持っている人間がなまじ近すぎると、そういう点には目が行きにくいものだ。

とにかく、天津飯にとつてフライはある種、絶対的な存在である。

それが、負けた。

偶然でも幸運でも何でもない。

紙一重には違ひなかつたが、真正面からぶつかり、真正面から負けた。

心臓の高鳴りを感じる。

全身に熱い血液が巡る。

戦うのだ。あの少年と。

戦つて勝てなければ、天下一にはなれないのだ。

「……天津飯？」

悔しいだのかつこ悪いだと喚いていたフリーイも、彼のただならぬ様子に首をかしげる。

「フリー」

「ど、どうした？」

「俺はあいつに勝つぞ」

言いながら、天津飯はじつと悟空を見つめている。

その顔は、笑っていた。

心地の良い、ワクワクとした興奮で自然と口角が上がっている。

「……妬けるわあ」

と、珍しく彼女は苦笑いをこぼした。

## 其之二十三 大勝利！天下一武道会！

続く準決勝2戦目で、フーアイは注意深く天津飯の動きを観察していた。そして、ちょつぴり焦つた。

見違えるほど技のキレがあがり、隙も遊びもない。

まさしく絶好調という奴で、正直、フーアイでも勝てるか怪しい。

何かが吹つ切れたこと、未知の相手である孫悟空への興奮など、心情的な部分が与える影響が、実力以上に力を引き出している部分もあるが。

当然のように勝ち進み、こうして決勝の二名が決定した。

それにしても、弟弟子の成長は焦燥を煽る。

ましてや、自分が立てなかつた舞台に立つというのだから。

彼女は強くこぶしを握り締め、歯を食いしばつて会場を見つめる。

周りの——正確には鶴仙人と桃白白の目がなければ、悔しさの余り、地面にひつくり返つて暴れかねなかつた。

そして、内心で焦つて いる男がもう一人。

(ヤバいじやん……)

天津飯が成長している事は、桃白白も勿論よく分かつていた。  
分かつていたが、ここまでとは思つていなかつた。

現状の彼らと戦つて負けることなど万に一つもないが、それなりにまともな試合が成立するだろう。

慢心せず修行を重ねているのにもかかわらず、弟子たちの追い上げがすごい。  
とはいえ、黙つて負けてやるつもりなどさらさらないが。

自身の強さが、憧れの兄弟子を奮い立たせたと知れば、天津飯は喜ぶだろうか。  
だが残念ながら、彼はどうやっても知る由がない。

もつとも、今はそれどころではないだろう。

「第22回を迎えた天下一武道大会。

世界各地より集まつた達人、その数183名。

さらに予選を通過できたもの、たつたの8名。

そして試合はコマを進めついに決勝まで残つた2名!!

天津飯選手と孫悟空選手であります!!

「勝ちますよね……」

「あつたりまえじゃ!!」

餃子の言葉に鶴仙人は啖呵じみていい切つた。

石畳の上、向かい合う。

観客が放つ声援は最早どろきとなつて、空さえもビリビリと震わせた。

鶴仙人、亀仙人も手に汗を握る。

餃子は甲高い声で天さん頑張つてと叫んだ。

亀仙流の面々も、負けじと悟空へ激励を飛ばす。

桃白白でさえ、後ろに手を組んだ透かしたポーズをやめ、手すりを掴んだ。

フレイは、見ている。

共に旅をした同じ星の少年を。

共に歳を重ねた同じ師を持つ青年を。

瞬き一つ惜しんで、見つめている。

「それではただいまより、第22回天下一武道会決勝試合をはじめたいと思います！ よろしいですね！」

2人は互いに構えをとる。

天津飯だけでなく悟空にも、やや緊張の色が浮かぶ。

彼は本能的に感じ取っていた。

向かい合う相手はまだ、一度も全力を見せていない。

フレイとの試合で戦闘用の本気まで見せてしまった、自分がいくらか不利だ。

無音が辺りへ広がる。

針の落ちた音すら拾えそうな、身動き一つ許されない静けさ。ギリギリまで水の入ったコップにも似た、はち切れそうな沈黙。引き金を引くように、幕を切つて落とす様に、司会が叫ぶ。

「始め!!」

「どどん波——ツ！」

まず真っ先に、天津飯が動いた。

スピードは速いが、光線は直線だ。

最早見慣れていた悟空は指先の動きを見るや否や、僅かに体をずらして避け真っすぐに突っ込む。

その動きを呼び込むことが狙いだつた。

悟空が飛び込んだその先に、天津飯の拳が置かれている。

尻尾を使ってギリギリでかわすも、その尻尾を今度は捕まる。

が、悟空は捕まれたことを利用して、自分の体を振り子のように動かし、通常考えられない角度から殴り掛かつた。

綺麗に貰いはしなかつたものの、避けるために天津飯は尻尾を手放す。くるりとよけ、着地した悟空へ休みなく襲い掛かる。

彼は、笑っている。

心の底から嬉しそうに、楽しそうに。

獰猛極まりないその笑顔は、しかしどこか無邪氣にも見える。

「う、うれしいぜ……！お前のような奴が、フーリーの他にもいたなんてな……！この俺がここまでわくわくするなんてな……！こんなことは初めてだぜ……！」

クリリンは、思わず見とれた。

圧倒されるだけの観客たちと違い、少しでも見る目のある者は全員がそうだった。

極限まで研ぎ澄まされ、磨かれた攻防は、舞踏に似ている。

そして、奇妙なことに、ぴつたりと呼吸が合っていた。

ある意味では将棋やチエスに近い。

お互いが瞬間瞬間の最善手を出し合った結果、1つの正解に向かつて歯車がかみ合う。

かみ合いながら、自分自身の勝利をもぎ取ろうと、暴力的に絡み合う。

「かーめー、はーめー……！」

天津飯を頭上高くへ打ち上げ、悟空が両手を構える。

「…………やめたっ!!」

が、あっさりと彼は両手を引っ込めた。

着地した天津飯へさらに追撃を狙うが、肘で防がれるように打たれる。

拳がぶつかり合うたびに、何かがはせるような音が辺りに響く。

「ご、悟空のやつバカだな、なんでかめはめ波をやめたんだ……？」

「先を読んだのじゃ……」

クリリンの呟きに亀仙人が答えたのと同じころ、別の場所で餃子も同じことを鶴仙人に問うていた。

「さきを、よむ？」

「あの時点できめはめ波を出したところで、天津飯には通用せん。

余計なエネルギーを消費しないぐらいの知恵があるようじゃな」

踊る。踊る。踊る。

跳ねまわり、足を回し、腕を伸ばす。

互いの実力が、拮抗しているからこそ成立する演舞。

それでも、ほんの少しだけ悟空が速い。

踏み込む速度が、拳の速度が、次の攻撃を導き出す速度が。

ほんの少しだけ、速い。

コンマ一秒の積み重ねがしかし着実に、じわりじわりと天津飯を追い詰める。

「天さん……」

餃子もそれを感じ取ったのか、不安げな声を漏らした。

鶴仙人の表情が、歪みかけたその時。

「大丈夫、勝つよ」

フーアイは試合から少しも目をそらさずにそう言つた。  
「だつて私でも負けそうな天津飯に、私以外が勝てるわけないじやん」

あ、桃白白は別だよ、とだけ付け加えて、彼女は再び口を閉じた。

真剣な横顔に、思わず鶴仙人は言葉を失う。

いつからだろう、赤ん坊と殆ど変わらなかつた少女が、こんな顔をするようになつた  
のは。

ふつと胸を風が透かすような心地がする。

改めて試合へと向き直る。

天津飯は、強かつた。

単にシンプルな事実として、彼は恐ろしいほど強かつた。

技の一つ一つを、足の置き場や呼吸一つに至るまで、鶴仙人は知つてゐる。

それを教えただけではない。形作られる過程の全てを、残らず見てきた。

悟空の怒涛の拳の嵐を、天津飯はどうにか捌き切る。

けれどしつぽの一撃は避けきれず、思わず後ろへたたらを踏んだ。そのすきをついて、強く胸を蹴られる。

思わずそのばへしやがみ込み、口元を拭つた。

「どうやら、まともにやり合つては流石の俺も分が悪いようだな……大したやつだ、本氣でそう思うぜ……」

ここまで追い詰められるとは思わなかつた」

天津飯の渾身の一撃が、悟空を吹き飛ばす。

けれど致命には程遠い。

体勢を崩し、空中へすつ飛んだが、それだけ。

しかし、同時に天津飯は勢いよく上空へ浮かび上がつた。ぐんぐんと飛んで十分な距離をとると、両手で印を結ぶ。

「や、やめろ天津飯!!」

亀仙人が思わず叫んだが、彼の耳には届かない。

「お前ならよけきれるだろう。俺も本気ではやらん、死にはしない」

天津飯には勝算があつた。

それは、悟空がまだ十分に舞空術を使いこなしていない点だ。

証拠に彼は、フレイとの試合で場外負けになりかけ、とつさに舞空術ではなくかめは

め波で自分の体を浮かび上がらせた。

もしかしたらこれは、汚いやり方かもしれない。

悟空が十分に避ける余裕がないところを狙つて、こんな大技を打つのは卑怯かもしない。

それでもいい。とにかく勝ちたかつた。

この試合に、悟空に、何としてでも勝ちたい。

「勝利こそが肝心だ」

唐突に、師匠の言葉が思い出される。

「どんな手を使つてでも、必ず勝て！」

ふつと天津飯は笑つた。

鶴仙人は間違ひなく、この勝ち方を認めてくれるだろう。

ならば、誰に後ろ指を指されても知るものか。

「気功砲!!」

巨大な気弾が、武舞台を破壊する。

もしも、仮の話だが、悟空がしつかりと両足で立ち、構える準備ができている状態なら、恐らくなんとかできただろう。

舞空術で同じように上空へ飛び上がるか、そんなことをしなくとも、ただのジャンプ

で天津飯と同じ高さまで飛び上がれたかもしれない。

そうすれば、勝負は五分以上に少年へ有利だつただろう。けれど、そうはならなかつた。

僅かに押してはいたがそれでも天津飯との攻防で体力も消耗していた。

渾身の一撃は、素早く受け身をとれるほどは生温くなかつた。命を守るために、とつさの瞬間、彼は武舞台から離れざるを得なかつた。

勢いよく背中が観客席の手すりに当たる。

上を見上げると偶然、たまたま真後ろにいたフレイと目が合つた。

得意げに、少女が笑う。

「ぶつ、武舞台が……！　ないつ！！」

クリリンが悲鳴に近い大声をあげる。

武舞台があつた場所には、ぽつかりと大穴が開いていた。

「じよ、場外——！」

アナウンスが辺りに響く。

舞台が無くなつては場外も何もあるまいが、ルールはルールだ。

「天津飯選手勝ちました!! 優勝です——つ!!

天下一は天津飯選手に決定————!!

空へ向かってフーアイが親指を立てる。  
天津飯もそれに応えて、フーアイへ、餃子へ、桃白白へ、誰よりも鶴仙人へ向けて、親  
指を立てた。

## 其之一十四 武道会の後で

「ではまた3年後にお会いしましよう。さようなら——!!」

閉会のアナウンスが流れ、殆どの人間が帰路についたころ。  
同じように選手たちも帰り支度をすませていた。

「ん？」

「え？」

そして、2人の仙人がばつたりと出くわす。

彼らの後ろをついて歩いていた連れ添いたちも、どやどやと顔を見合させた。

「ふんつ」

「ひつひつひ」

腕を組み、嫌そうに鼻を鳴らし顔をそらせた亀仙人と対照的に、鶴仙人は得意げに笑う。

「いやあ、見事だつたではないか亀仙人。

まさか自慢の弟子が準優勝とはなア！」

「はつはつは！　おぬしの方こそ、優勝とはのう！」

まつたく出来のいい弟子じやな、師匠とは大違ひ！」

「なにを！このつるっぱげ！」

「だまれ！この中途半端はげ！」

体裁をギリギリで取り繕い、嫌みを言い合っていたのも一瞬の事。あつという間に单なる喧嘩に変わる。

弟子の前での勿体ぶった師匠像もかなぐり捨てて、やいのやいのと罵り合う。そこだけ切り取れば、老人2人というより折り合いの悪い青年同士のようだ。

「そもそも、おぬしはなんじや！ 弟子が出場するならともかく、じぶもがつ！」

自分まで出場しあつて、つと言おうとした彼の口を慌てて亀仙人が塞ぐ。

必死に人差し指を唇の前で立てる仕草は、亀仙流の面々には見えず、彼らは首をかしげている。

事情を呑み込めない餃子も同じように首を傾け、天津飯とフーリは互いにちらりと視線をかわす。

桃白白は興味なさげに突つ立つていた。

「ええい！やめんか！」

力づくで腕をはたき落とし、鶴仙人は肩で息をする。

口元を拭って襟元を正し、年甲斐の無い奴めと吐き捨てた。

正直、年甲斐に関してはドングリの背比べである。

「まあいい、これで本当の武道というものを、みんなもようく知つたことじやろう」  
ひつひつひとまた高らかに笑い声をあげる。

「フリーのお師匠さんつてわりに、陰湿な感じね」

「そこそとブルマはヤムチャへ耳打ちをした。

ヤムチャ、クリリンは少し顔をしかめて小さく頷く。

そこへぬるつとフリーが割り込む。

ぎよつとする彼らをよそに仕方ないよ、と彼女は言つた。

「だつて鶴仙人のじつちゃんもはしゃいでるんだよ。

天津飯が優勝した時嬉しすぎて、餃子と一緒になつて、万歳しながらジャンプして、

テツ!?

「余計なことを言うな!」

勢いよく拳が脳天に直撃し、頭を抑えてフリーはしゃがみこむ。

天津飯は驚きと喜びを隠せず、クールな表情が緩みかけている。

「なんだよ! ホントの事じやん!」

桃白白だつて思いつきりしつかり、ガツツポーズし、いつて〜〜!!

一切の容赦がない膝蹴りが小さな体を襲つた。

天津飯は最早心の底からにつこりと誇らしげに微笑んでいる。やや冷ややかだつた亀仙流の面々からの視線が、全く生温いものに変化した。

「ごほん、とわざとらしく咳をして、鶴仙人が仕切り直す。」

「さて、それでは天津飯の優勝を祝して食事にでも行くか」

「わーい！」

「わーい！」

餃子が嬉しそうに両手をあげ、フーアイもそれに続く。

「それなら、と天津飯は鶴仙へ言う。

「私に賞金でごちそうさせてください」

「何を言うか。それはお前が、お前自身の手で稼いだ初めての金じや。

「自分の好きに使うがいい」

「ですが……」

「だいたい、フーアイがいるんじやぞ、50万ゼニーポつちじや足りんわ」

「そうそう」

二ツと彼女が笑うと、天津飯も苦笑するしかない。

鶴仙人は軽く彼の背中を叩いて、歩みを促す。

「わしらもメシでもくいに行こうかの。悟空もクリリンも、腹いっぱい食べて力を蓄え

んとな」

「賛成！」

亀仙人の言葉にブルマとヤムチャが声をあげる。

それぞれに出発しようとしたとき、あつと悟空が自分の両手を見た。

「いけねえ！じいちゃんのドラゴンボールと如意棒！」

「ようがないな、とクリリンが笑う。

「おまえくたくただろ、いいや俺がとつて来てやるよ」

「すまねえ、サンキュ！」

そのやりとりを聞いて、桃白白は軽く自分の胸元やポケットを叩いた。

「なんじや、お前も忘れものか」

「すぐに戻る」

「おう」

同じ場所から、同じタイミングで、同じ場所へ向かう。

となると、自然と並んで進むことになる。

思わずクリリンは頬を引きつらせた。

なんといつたって、桃白白は殺し屋なのだ。

それも、世界一を自称している。実際、自分等よりはるかに強いだろう。

ぶつちやけ、怖かつた。

とはいえ、観客席と選手控室は場所が違う。  
すぐに離れる、と思ったのだが。

「あの……」

「なんだ？」

「いえ、なんでもないです」

何故か分かれ道を過ぎても、並んで歩いている。

選手控室へ向かつて。

それを指摘しようと話しかけて、じろりと睨まれ（本人はただ見ているだけなのだが）  
クリリンは口を噤んだ。

じつは、桃白白の忘れ物とは選手控室と、予選会場に仕掛けたカメラだつた。  
天下一武道会にはその名の通り、世界各地の達人たちが一堂に集まる。

武道を志す者にとつては、一戦一戦が宝の山のようなものだ。

たとえ試合が成立しないほど技量の差があつたとしても、知ることには価値がある。

様々な戦闘スタイルを目にすることは、それだけで勉強になるものだ。

とはいえるので大っぴらに回収するわけにはいかない。

まいざとなつたら黙らせるか、と少し物騒なことを彼は考えていた。

一方、鶴仙流と亀仙流の面々は、互いに人を待つ身なので何となく、まだ同じところにたむろしていた。

師匠同士の不仲も何のその、弟子たちはワイワイと自分達の試合の話で盛り上がっている。

流石にそこへ水はさせないので、老人たちはどこか所在なきげに見守るしかない。「悟空もこつちに遊びにきなよ、また試合したいしさ」

「いいのか!?」

「ああ、俺も賛成だ。鶴仙人様にお願いしてみよう」

そんな他愛のない話をしていた時。

——断末魔にも似た叫びが辺りに響く。

「なつなんじや!!」

「クリリンの声だつ！」

悟空がはじかれたように走り出すと、全員がそれに続く。

声がした方に進みながら、きよろきよろとフリーたちはあたりを見回した。

観客席に桃白白の姿はない。

一体、どこまで忘れ物を取りに行つたのだろうか。

どうとう選手控室まで辿り着くと、誰かが倒れている。

一人はサングラスをつけた、天下一武道会の司会者。

一人は小さな体の、坊主頭の少年。

もう一人は、薄いピンク色の服を着た、三つ編みの男。

「えつ……？」

少女は立ち尽くす。

足を止めた少年の隣を、ヤムチャが走り抜けた。

鶴仙人も同様に倒れている弟へ駆け寄る。

彼の胸元には何かが焦げ付いたような跡がある。

「おい、クリリン！ クリリン！」

「桃白白、返事をせんか！」

「ば……ばけものだ……」

辛うじて息があつた司会者が苦し気に、なんとか言葉を吐く。

「そ……そこにあつた袋からへんな球と……ぶ……武道会の名簿を奪つて……に……にげた

……

桃白白さんが……とめようとしたが……あいつの右腕が……爆発して……

「ま、まさか、死んで……う、うそだ……」

「何かの冗談だろ、クリリン」

鶴仙人とヤムチャの動搖しきつた声が、妙にはつきりと耳に届いた。  
死んだ。

桃白白が、クリリンが。

「殺された……」

一度口に出してしまふと、彼らはもう止まらない。

「ち……ちきしよう!!ちきしよう……!!」

「まつ、まで悟空!・まで!!までというに!!命令じやぞつ!!」

悟空は如意棒とドラゴンレーダーを手に、筋斗雲へ乗る。

わき目も振らず飛び出した背中を、亀仙人は見送ることしかできない。

「……」

「や、やめろフリー!・どこへ行くつもりじゃ!・おい!・フリー!!」

フリーは弾丸のように走り出し、外の柱を折り取つて投げた。

必死に呼び留める鶴仙人の声も届かず、彼女は振り向かない。

呆然と、行き場のない沈黙が包む。

何かしなければならないのに、何も思いつかず、身動きが取れない。

しわくちゃの手が、すがるように抱きしめていた体が、僅かに動く。

こほ、と咳の音が響いた。

## 其之二十五 武泰斗の弟子

「フーゾイめ、桃白白を殺した奴にかなうはずもなかろうに……」

俯き、重苦しく呟く鶴仙人の顔は暗い。背中は小さくしほんで見えた。

たつた一人の弟の死に、こらえきれずぱつ、と涙が落ちた。

薄いピンク色の服をきつく握り締める、その手を別の手が軽く払う。

「勝手に殺すな」

そう言つてむくりと桃白白が体を起こした。

「た、桃白白！ 無事だつたのか？」

「無事なわけあるか、マジで呼吸が止まつとつたんだぞ、

クソ、あいつ自爆なんてしようもない真似をしあつてからに……」

いまいましげに顔を歪ませ、ぶつぶつと悪態をつく。

支える兄を押しのけて、立ち上がるうとしたところで、激しくせき込んだ。

口元を抑えた手には、少しだが血がついている。

「い、いかん！ 動くな！」

抱き留めるように押さえつけ、鶴仙人は今度は努めて冷静に、体の様子を探つた。

「あばらが何本か折れとるかもしけん、早いとこ病院に連れて行かんとならん」「ショツクで呼吸が止まつとつただけじゃつたのか……鶴の奴め早とちりしおつて「しようがないじやろうが！」

「俺の頭の上で喧嘩するな」

やいのやいのと言い合つていた亀仙人だつたが、それならばとはつとしてクリリンに駆け寄る。

奇妙な構えをとると、彼の小さな胸をドツと叩いた。

「むんっ！」

「——ふはっ!!」

すると、クリリンも再び息を吹き返す。

ヤムチャの顔がぱつと明るくなり、ブルマとブーアルも歓声を上げた。

「クリリン！」

「む、むてんろうしさ、ま……それにヤムチャさんも……

そうだ！ ドラゴンボールが、うつ……！」

起き上がるうとする彼の額を優しく撫で、無理をするなど亀仙人は優しく言う。「死にかけとつたんだからのう。

しかし、おぬしと桃白白がここまでやられるとは……一体どんなやつじや？」

「それが……」

「な……なあ、こんなのが落ちてたんだけど……」

ペラ、と一枚の紙きれをウーロンが拾い上げた。

それをブルマが横から覗き込み、眉間にしわを寄せた。

「！」

ある種、弟と弟子が死んだと勘違いした時よりも、激しい衝撃をもたらしたらしい。

呟きを聞くや否や、びく、と肩を跳ねさせ、鶴仙人と亀仙人の表情が一変した。

死刑を宣告された囚人のような、あるいは逃れられない悪夢に対面した少年のよう  
な。

あまりの剣幕に、全員が言葉を失つた。

ぶるぶる震える手で紙切れを受け取った亀仙人は、酷く乾いた声で呻く。

「ま……さか……そ……そんな……」

「何かの間違いだ!!」

その声をかき消して、張り裂けそうなほど痛切に鶴仙人が叫ぶ。

「そうだろう！そんなはずがない！」

「……いや、間違いない」

舌が凝り固まつたような息苦しさを感じ、亀仙人は喉を抑えた。

頭が痛む。かりかり、かりかりと、頭蓋骨を内側から鋭い爪で引っかかれるような痛み。

どれほど時が経とうと、どれほどの事が起きようと、決して忘れる事はない。

数世紀も前の苦しみが、今になつてありありと胸を重くする。

「やつの紋章じや……」

「……」

「嘘だというのならおぬしも見てみるがいい」

差し出された紙きれをひつたくり、目の当たりにした鶴仙人は息をのむ。

そして、そのまま握り潰した。

手に指が食い込み、血がにじむほど強く。

「な、なんなのですか、それは一体……」

「……ピツコロ大魔王じや」

耐え切れず口を開いた天津飯の間に、代わりに亀仙人が答えた。

「び、ピツコロ大魔王……!？」

「まさか、以前鶴仙人様がおつしやっていた、その昔世界を恐怖のどん底に叩き落とした大魔王という、あの？」

「そうじや、しかしピッコロ大魔王は二度とこの世に姿を現さぬはず……」

まだ僅かに声を震わせながら、彼は語る。

とんでもなく恐ろしい大魔王が、かつていたこと。

怪物を生み出し、あつという間に平和な世界を死の時代へ変えたこと。  
そして、余りにも圧倒的に強かつたこと。

若い頃の鶴仙人と亀仙人だけではない。

彼らの師匠である武泰斗ですら、歯が立たぬほどに。

「しかし、武泰斗様は、このまま世を思い通りにさせてなるものかと、ある秘術を編み出された……」

『魔封波』という術じや。それを使い、見事、武泰斗様は大魔王を封じ込めた

「己の命と引き換えに、な」

吐き捨てるようにそう言うと、鶴仙人は紙切れを床にたたきつける。

肺を押しつぶすような、むなし笑い声をあげて彼はつづけた。

「はつ、しかし結果はどうだ!? ほんの数百年ぼっちでやつはこの世に蘇りよつた!

亀よ、儂には分かるぞ! ピッコロ大魔王は自力で封印を破つたわけではない!

あの武泰斗様の封印が、自然と解けるはずもない!  
どうせ、どこぞの悪党が海底から引き揚げたのだ! その恐ろしさを知りもせずに

！」

「鶴！何が言いたい！」

亀仙人の怒鳴り声に、彼は張り付けたような薄ら笑いで答える。

「無意味だということだ。正義などというものは」

「なんじやと!?」

「違うというならば言つてみい！あれほどの方が命を賭して成し遂げたことさえ、たつた一人の愚か者のせいでの泡ではないか！負ければ何も残らん！死ねば終わりじや！」

「よせ、それ以上言うならただでは済まんぞ！」

「いいや、言つてやる！無駄死にだ！全くの無駄死だつた！」

「貴様、そこまで腐つたか……！」

怒りのあまり、亀仙人は頭が真っ白になる。

殴り掛かることすら忘れ、その場に棒立ちになつた。

その様子を見て、さらに鶴仙人は引き攣つた笑い声をあげる。

餃子には分かつた。超能力のテレパシーがなかつたとしても分かつただろう。

天津飯にも分かつた。胸が苦しくなるほど、よく分かつた。

そして、彼は全てを理解した。少なくとも、彼自身はそう思つた。

鶴仙流の根源を、そこに見たのだ。

「鶴仙人様は」

「ぱつ、と割り込んできた声に二人がそちらを向く。

「武泰斗様に、死んで欲しくなかつたのですね」

は、と喉を空気が通り抜ける、隙間風のような音がした。

「だから、鶴仙流を作つた、違いますか？」

鶴仙流は『自己を鍛え上げる』というよりも『敵を倒す（殺す）』ことに特化した流派だ。

その為には武道だけでなく、剣だけでなく、重火器や爆発物まで活用する。

何よりも勝利を重んじ、その為には手段を選ばない。卑怯と誹られることすらある。では、何のために敵を殺すのか？

自己の鍛錬と違い、それそのものは目的にはなりえない。

例えば殺人には必ず動機があり、殺害そのものは動機を果たすための手段でしかないのだ。

鶴仙流の根源が、切っ掛けが武泰斗様の死にあるのなら。

世界の平和と引き換える正義のための尊い犠牲にあるのなら。

そこには、創始者である鶴仙流の、たつた一つの強い願いが込められている。

死んで欲しくなかつた。生き延びて欲しかつた。

そしてそれには、正義ではダメだつたのだ。

「どんな手を使つてでも、必ず勝つ。

勝つて生き延びる。何も失わないとための流派。

それが、貴方の作つた鶴仙流だつた」

余りにも真つすぐりに言い切られたものだから、鶴仙人はすっかり言葉を失つた。  
反射的に否定したくもなつたのだが、違うといつたところでその後の言葉が続かなかつた。

天津飯の性根と言葉は余りにも真つすぐりで、心に深く刺さりすぎる。

「フーアイを連れ戻してきます。あいつの行つた先是見当がつく。

できる限り悟空も探してきます。二人が生きていたことを知らせなくては  
ここにいる全員でかかれれば、大魔王にも勝ち目があるはずです」

〔天津飯〕

〔鶴仙人様〕

弱弱しく名前を呼んだ師匠を、はつきりと真正面から彼は呼び返した。

「武泰斗様のことを、俺はよく知りません。ですが、決して無駄死になどではなかつた」

〔なにを……〕

「武泰斗様は亀仙人様と、貴方を育てた。そして、亀仙人様は悟空たちを、貴方は俺達を育ててくれたんですから」

意味は、あつたんです。

そう言い残して出ていこうとする天津飯を、鶴仙人は厳しい声で呼び留める。

「身一つであいつらを追いかけるつもりか？ ほれ、乗つていけ」

投げ渡されたホイポイカプセルには、鶴仙人の飛行機が入っている。  
律儀にも頭を下げて礼を言い、ついて来ようとする餃子に師匠と兄弟子を頼んで、天津飯は出発した。

すっかり姿が見えなくなつたところで、鶴仙人は呟く。

「意味はあつた、か」

「……どうした兄ちゃん」

「なんでもないわ。お前は寝ておけ」

そういうて口を挟んできた弟の額を軽く指ではじく。

「そういえばブルマと言つたか。お前さん、ドラゴンレーダーとやらの予備は持つとらんのか？」

「え、あ、孫くんが良く壊すから、一応作つたのがあるけど」

「貸してもらえんか」

「う、うん……」

ドラゴンレーダーを受け取った鶴仙人を見て、亀仙人は察したのか軽く目を見開いた。

視線をかわし、2人はお互に領き合う。

つい心を読んだ餃子が不安におびえ、震えだす。

桃白白は何かを感じ取り、鶴仙人の胸倉をつかんだ。

「おい！　お前たち何を考えて……ッ！」

と、と首筋に手刀が入り、あつけなく彼は昏倒する。

ごそごそとそのポケットを探り、鶴仙人はホイポイを一つ、取り出した。

「借りるぞ」

「鶴、やるのか」

「おぬしは初めからそのつもりだつたろう」

「……まあな」

「な、なに？　何の話……？」

うろたえるブルマに亀仙人が言う。

「おぬしたちはクリリンと桃白白を連れて、儂の家に隠れてくれ。」

病院なんかの場所は逆に危なくなるかもしかんからな

「ま、待つてくださいよ、武天老師様、まさか……」

「心配するな」

多分、今の自分の表情はあの時の武泰斗に似ているのだろうなと考へて、亀仙人は年  
甲斐もなく、どこか嬉しさを感じていた。

## 其之二十六 龜仙人と鶴仙人

「奴らがドラゴンボールだけでなく、天下一武道会の名簿を奪つたのは……」

「武道会の名簿は、武闘家を始末するためじやろうな」

「ああ、間違いない。やつは再び魔封波を使うものが現れるのを恐れている」

鶴仙人と亀仙人は2人、飛行機を使いドラゴンボールを集めていた。

特に妨害にあうこともなく、既に手元には4つのボールがある。

どうやらピッコロ大魔王たちはボールを集めることより、武闘家を殺すことの方を優先しているらしい。

「しかし、また亀とボール集めをすることになるとはのう」

「また?」

「覚えどらんのか、武泰様との修行で」

「ああ、あの武の字が書かれた石を拾う奴か」

「あれはしんどかつた……」

「地平線に向かつて消えていつとつたからなあ……」

「ぽつぽつと昔話などをかわすが、どこか言葉少なだつた。

しばらくの沈黙のまま、飛行機は草むらへ降りる。

腰が痛いなどと咳きながら、四本の腕ががさがさとあちこちをあさつた。

「のう、鶴」

「なんじや」

「おぬし、どういう心変わりがあつた」

丁度その時、鶴仙人の指先が、硬いものに当たる。

拾い上げたそれは、つやつやと蜂蜜のように光り輝いて、綺麗なオレンジ色の中に小さな星を閉じ込めていた。

七つ集めれば、どんな願いでも叶う奇跡の球。

神が作つたといわれてはいるが、そんなものがいるのならなぜ大魔王をそのままにしておくのだろうか。

立ち上がりつて腰を擦ると、鶴仙人は言つた。

「わしは貴様のような自殺志願者とは違うぞ」

「なんじやと」

「死ぬつもりはない。じゃが……」

しわくちゃの手の中で球がくるくると回される。

磨かれた、というよりも元より完全な状態で生み出されたかのような真円は、鏡のよ

うに彼の顔を写した。

「ピッコロ大魔王の配下は桃白白を仕留めるのに、片腕を犠牲にしたらしい。生きていると知つたら再び殺しに来るに違ひあるまい。

名簿を持つて行つた以上、フーアイと天津飯、餃子も命を狙われる。  
加えて、亀。恐らくわしとおぬしも例外ではない。

奴らの師というだけでなく、武泰斗様の弟子じやからな  
おまけにおぬしは選手としても名が載つておる」

馬鹿な奴め、と嫌みな笑い声をあげる。

亀仙人はしばらくあつけにとられていたが、一呼吸置くと快活に笑い返した。  
「なんじや、どうせ死ぬならというやつか」

「でなければ誰がピッコロ大魔王となんぞ戦うか！」

「しかし、そうだつたとしても、鶴がまさか弟だけでなく、弟子のために戦うとはのう  
……ちよつとおぬしらお互いに好きすぎんか？」

「はあ!」

思わぬ言葉にぎよつとして、鶴仙人は思わずドラゴンボールをとり落しかけた。

「天津飯のやつもじやが、フーアイもわしがおぬしの事を言うとつたら、殺気を向けてき  
よつたし」

「それはお前がわしのことにあることないこと、好き勝手言い寄つたからだろうが！」

「へん、全部本当のことじやし〜」

「な、おい！何を言うかこのうすらんかち！」

顔を真つ赤にして怒り散らす彼に対し、いつもと違つて亀仙人は罵りの言葉を返してこない。

それを感じて、鶴仙人も少し冷静になり、とがらせていた肩から力が抜ける。

「えらく好かれたもんだな、鶴」

茶化す様にニヤリと笑われ、鶴仙人ははくはくと口を動かしたが、結局何も言えなかつた。

腹立ちまぎれにドラゴンボールを投げ渡し、しかし亀仙人は軽々とキャッチする。

彼は手元にある袋に入れると、再びレーダーを確認した。

「……む！」

「どうした？」

「のこり2つがそろつておる……しかも、どうやらこつちに向かつて動いているようじやぞ……」

ピッコロ大魔王が、くる。

ぐくりと喉を鳴らして唾を飲み込み、鶴仙人はそちらの空をじつと見つめた。

「い、いよいよか」

「なんじや、今更震えどるのか」

「む、武者震いじや！」

「そういうことにしといてやろう」

そういう亀仙人も、じつとりと濡れるほど背中に汗をかいている。

三百年経つた今でさえありありと思い出される。

あのシンボル、顔、声、そして強さを。

「いいな、隙をついて向こうの二つを奪う……そして神龍を呼びだし、願うのじや。ピッコロ大魔王の死を……」

「わかつとるわ……しかし、万が一にでも失敗したならその時は……」

視線をかわし、こくりと頷き合う。

「おぬしも身につけたのか、あの術を」

「……何かと使えそうだつたからのう」

その言葉に亀仙人は、場違いな嬉しさを感じずにはいられなかつた。

和解したわけでも、改心したわけでもないが。

かつての兄弟弟子と、またこうして肩を並べることができるのは、思つてもみなかつ

た。

それも、同じ師匠から最後に受け継いだ技を引っ提げて。

「長生きはするもんじやわい」

「それも今日までかもしけんがな……來たぞ」

黒塗りの飛行艇が、太陽にかぶさり地面へ暗い影を落とす。

上部に備え付けられたテラスに現れたのは、見間違いようもない姿。

「ピッコロ大魔王……！」

そして、彼は二人が見ている目の前で、ぐくりと2つのドラゴンボールを呑み込んでしまう。

「く、く……これでは奴を倒さん限り、ドラゴンボールは手に入らんではないか……！」  
「ははは、鶴よ、腹をくくるしかないわい」

空元気に肩を揺らすと、亀仙人は表情を引き締めた。

鶴仙人も一つ深々と、ため息のように息を吐いて意識を整える。

待ち構える二人の元に、大魔王が降り立つた。

「はつはつは……！ 貴様ら、わしがピッコロ大魔王だと知つておりながら、ここで待つていたのか？」

「ああ」

「だつたらなんじや？」

「なるほど、頭がいいとは言えん連中だな。しかし  
にたりと、牙を見せつけるように笑う。

「勇気だけは認めてやる」

しかし

# 其之二十七 ゴー・トウ・ヘル!!

「カリン様」

「……來たか」

天下一武道会の会場を飛び出したフーアイは、カリン塔のてっぺんを訪れていた。桃白白を殺すような相手に自分がかなうはずもない、それは彼女自身よく承知している。

だから、ここへ来た。

じつとりと怒りで瞳を濁らせた少女に対し、カリンの表情は硬かつた。

「仙人様なら知ってるよね、私、物凄く強くならないといけない。それも、今すぐに」「おぬしが戦おうとしておる相手が、いつたい誰だかわかつておるのか?」

「知らないよ。でもどこにいるか、わかる方法は知ってる」

「……ピッコロ大魔王の名を、聞いたことはないか」

バチリ、はじかれたように瞳を大きく見開く。

ぴつころだいまおう、と鸚鵡返しに咳いて彼女は仙猫様へ詰め寄った。

「ピッコロ大魔王つて、あの?」

「ああそうじや。おぬしは知らんだろうが、やつは鶴仙人と亀仙人の師匠、武泰斗が、その命と引き換えに封じたほどの恐ろしいやつじや。生半可な方法では決して勝ち目はないぞ」

「それでモ！」

「落ち着け。だいたい、桃白白は死んではおらん。傷は負つたがまだ生きておる」「……へ？」

唐突に前提が崩壊し、フーアイは思わずぽかんと口を開けた。

籠つていた力が一気に抜けていき、腰を抜かしそうにする。

「生きてるの？」

「桃白白だけではない。クリリンというやつも、ショックで呼吸が止まつとつたから、勘違いしたんじやな」

「は、ははは……あはは！なーんだ！勘違いだつたんだ！」

先ほどまでの暗い決意はすっかり消え去り、ケラケラと笑いだす。

安心からかとうとうその場にすとんと腰を下ろし、くつろいだ様子で手足を投げ出した。

「クリリンも生きてるなら、悟空に知らせてやらないとね」

あ、でもやっぱり二人とも死にかけたんだから、どっちにしろやつつけないとね」

戦いを決意しながらも、口調は軽い。

しかし、すっかりいつもの調子を取り戻した彼女とは違い、カリンの様子は未だ暗かつた。

それに気づいたフリーイは首をかしげる。

「どうしたの？」

「……桃白白とクリリンは生きておるが、しかし……」

彼は、少し迷つた。

迷つたがしかし、結局は彼女を水瓶の前へ手招きする。

黙つて知らせなかつたところで、事実は変わらない。

それに、やつを倒せるとしたら彼女とあと二人、孫悟空と天津飯を置いてはいらないのだから。

「この水は、過去現在未来を映し出す」

酷い話だとカリン自身も思つてゐる。

世界のためとはいえ、まだ幼さの残る彼女たちを死地へ送ろうというのだから。それでも、僅かに可能性があるのならそれにかけるしかない。

不思議そうにしながらもフリーイが覗き込んだ水面に、とある景色が映り込んだ。

鶴仙人と亀仙人、そして見知らぬ怪人の三人が向かい合つてゐる。

緑色の肌にとがつた耳、ぎょろりとした目つき、とがつた歯。

昔話に聞いていた、ピツコロ大魔王本人に間違いない。

「はつはつは……！ どうやら貴様ら、本気でこの大魔王様に戦いを挑むつもりのようだな。」

身の程知らずめ……とは言つても、噂話でしか俺様を知らんのだろうから、無理もないがな」

薄ら笑いのまま、構えようともしないピツコロ大魔王と違い、2人の表情は硬い。

けれどすつきりと背を伸ばし、力の差を感じながらも真っ向から向かい合つている。そして、その背中にははつきりと決意の色が見て取れた。

「貴様と会うのはこれが初めてではない」

「くっくくく……！ デタラメを言いおつて」

「デタラメなどではないわ。3百年前、わしらは師匠と共に貴様と闘つた」

「なんだと!?」

「師匠の名を教えてやろうか……」

「武泰斗様じや！」

声が重なつたのを合図に、同時に後ろへと飛びのく。

亀仙人はホイポイカプセルから、お札を張り付けた電子ジャーを取り出した。

ピツコロ大魔王の顔が驚愕に歪む。

「ま…まま…まさか……！」

「その顔、忘れてはおらんようじやな！」

「武泰斗様が貴様を封じ込め、魔の手から世界を救つた術……！」

四本の手が同時にピツコロ大魔王へと向けられる。

ピツタリと息の合つた動きで、左右対称に彼らは体を動かした。

「ダブル魔封波——!!」

「お……おおお——!!」

大魔王の体が揺らめき、歪み、巨大な渦へと呑み込まれていく。

断末の声を響かせ、再びその体は電子ジャーへと封じ込められる——

——かに、思えた。

今まさに、再び数百年以上の封印へいざなわれようとしているのにもかかわらず。

彼は、邪悪に口角を吊り上げて、確かにニヤリと笑つた。

「魔封波破り!!」

勢いよく両手を振り下ろすと、渦は強烈な暴風へと変わり吹きつける。

電子ジャーは所在なさげにコロコロと転がり、岩に当たるとあつけなく蓋が壊れた。あとには呆然とした2人の老人が残されているだけ。

「ま、まさか……！」

「クソッ……！」

「は……ははは、は——つはつは!!

正直、すこしヒヤツとしたぞ……

大したものだ、二人がかりとは言え、あの武泰斗を完全に超えていた……」

勝ち誇った笑みを浮かべ、一步、また一步と彼らに近づいていく。

怯えることも出来ない。鶴仙人と亀仙人は魔封波の反動で、命尽きようとしているのだから。

全身が底冷えする様な感覚。指先が震え、力が抜けていく。

必死になつて堪えてはいたが、やはり耐え切れず、膝をつく。

「放つておいても死ぬだろうが、褒美としてわし自らが殺してやろう」

容赦なく蹴り飛ばされ、鶴仙人はせき込んだ。

踏みつけにされた彼へ手を伸ばす間もなく、亀仙人は首を掴まれ軽々と持ち上げられる。

「何か言い残すことはあるか？」

「こ……これで……安心できると思うたら、お……大間違いじゃぞ……」

自分を掴む腕を掴み返す気力すらなく、それでも亀仙人は言つた。

「い……いつか必ずだれかが……貴様を倒し、世界を救うてくれると信じて……お……る……」

「ふんつ」

言い切るのと同時に、空いていた方の手がその胸へ大きな風穴を開けた。

ゴミのようにその屍を放り投げると、今度は鶴仙人を見下し、徐々に体重をかける。

「貴様はどうだ？ 何か言い残すことはあるか？」

かすれかけた視界でその顔を捉えながら、鶴仙人ははつきりと言い返す。

「そもそも……お前を殺す者が、必ず現れる……待つていてるぞ……地獄でな……」

「ふふふ、残念だが貴様は地獄へは行けん。魔族に殺されたものは、どこへも行けず永劫に彷徨うのだ」

「…………そうか…………」

彼は、笑った。いつも通りの意地の悪そうな笑顔で。

死が目前に迫り、どこかのたがが壊れてしまっていたのかもしれない。

「ならば、地獄へ行くのはおぬし一人じゃな」

何か硬いものと柔らかいものが同時に潰れた音が響く。

彼の腹部は、靴裏の形にへこんでいた。

その後はあつけない。

ドラゴンボールを奪い取り、ピッコロ大魔王は神龍を呼びだす。

永遠の若さを手に入れた彼は、神龍すらも殺して見せた。

水瓶の淵を握るフーアイの背中へ、聞きなれた声がかかる。

「やつぱりここにいたのか、フーアイ」

天津飯はカリン様へ軽く頭を下げる。呼び留められる暇もなく彼女へ話し続けた。

「桃白白さんも、クリリンも、死んでない。勘違いだつたんだ。

2人を襲つたのは、鶴仙人様が昔話してくれたピッコロ大魔王だ。

詳しい事情は後で話す、とにかく、悟空を見つけたら、みんなのところへ戻つて作戦を……」

「知つてる」

振り返つた少女に、天津飯は怯んだ。

思えば恐らく、桃白白の死を彼女は現実のものとして受け止めきれていなかつたのだろう。

心のどこかでそんなことはあり得ないと、信じ込んでいたのだ。

だからきつとまだ、本気で怒つてはいなかつた。今と違つて。

「桃白白が生きてることは知つてる」

「なら、どうしてそんな」

「鶴仙人のじっちゃんが殺された。亀仙人も」「は……」

嘘だ、と言つた彼に、少女は静かに首を横へふる。

「今度は勘違いじゃない。踏みつぶされて殺された、ゴミみたいに」

全身がぐらぐらと煮え立つ。

腹の底が燃えるように熱くたぎる。

まるで、骨の一本一本が薪に代わるような感覚。

脳が融ける。酷く喉が渴いて、声がかされる。

なのにどうしてだろう、こんなにも体の奥から力が湧いてくるのは。

「殺す。ピッコロ大魔王を」

涙をあふれさせた彼女に何も言えなかつたのは、天津飯も負けないぐらいに悲しんでいたからだ。

悲しくて悲しくて、気が狂いそうなほどに怒つていた。

「カリン様」

フーアイが何か言いかけた丁度その時。

「ど、どうだ！ つ、ついたぞ！」

「ありがとう、ヤジロベー」

見慣れぬ男に連れられて、孫悟空がカリン塔の頂上へとやつてきた。

## 其之二十八 毒か秘薬か超神水

「おぬしら、どうしてもやるつもりか」

フレイ、天津飯、そして悟空は力強く頷く。

幼さに見合わない決意の強さに、カリンは溜まらない気持ちになつた。

彼らに頼るほかないと思う一方で、そんなことはしたくないと同じほど強く思う。

一番年上の天津飯ですら、ようやく二十歳を過ぎたばかりなのだ。

「ピッコロ大魔王の強さはケタ違이じゃ……！」

「おぬしら三人が束になつてかかると、みすみす殺されに行くようなものだぞ」

「やれるだけやるさ！じいちゃん殺されて、クリリンまで死にかけて、ほつとけねえよ

！  
「オレも同じだ。師匠を殺されて大人しくしているなど、そんな恥知らずな真似耐えられない」

天津飯は怒りの余り汗をかき、力んだ拳は、ぶるぶると震えている。

悟空に至つては今すぐにでも飛び出していこうとしていた。

その言葉を聞いて俯き、杖を握り締めてカリンはもう一人の少女へ向き直つた。

「フリー、おぬしは」

「死んだほうがマシだよ」

キツパリと彼女は言い切つた。

涙は既に流し終え、柔らかな頬に痕だけが残っている。

灰色の瞳は、痛ましいほどに真つすぐカリンを見つめた。

「じつちやんを殺したあいつを殺せないぐらいなら、死んだほうがマシだ」

「…………」

最早、止めようとして止められるものではない。

どうにもならないことをはつきりと見せつけられてようやく、カリンも覚悟を決めた。

彼らを死へ追いやる覚悟を。

それでも冷えた汗が、じつとりと毛皮を濡らす。

「どうせ死をも覚悟なら、飲んでみるか……？『超神水』を……」

「チヨウシン水？」

聞きなれない言葉に、悟空が首を傾げた。

「そうじや、すばらしい神の水と書く」

「一体、それは何なのですか？」

「超神水とは、己の中に隠れ持つておる力を全て引き出すことのできる素晴らしい水じや……」

じやから、もしおぬしらが、既に修行によつてすべての力を使いこなしておるようじやと、超神水を飲んでも何ら強くなりはせん……」

「強くなるかどうかは、飲んでみないと分からないつてこと?」

フーアの言うことに、こくりとカリンは頷く。

果たしてまだ自分に隠された力があるのだろうかと、彼らは自分の手のひらをじつと眺めた。

「どつちにしても、とりあえず飲んでみりやいいじやねえか」

身もふたもないヤジロベーの意見は、けれどもつともなことだつた。

しかし、それにカリンが待つたをかける。

「実は超神水というやつは物凄い毒でのう……

すさまじいまでの体力と精神力、そして生命力がなければたちまち死んでしまうの

じやよ……」

その毒に打ち勝つて初めて、隠れ持つておる力を引き出すことができるのじや……

「ど……毒か……やべえな……」

魔族を丸焼きにして食べてしまふ彼ですら、余りの事に冷や汗をかく。

しかし――

「そつか、それでそれはどこにあるの」

――フーアは戸惑いもせず、早く寄こせとばかりに手を出した。  
思わずヤジロベーが目をひん剥いて怒鳴る。

「おい、聞いてたのか!? 毒だぞ!」

「だから何? 要するに耐えればいいんでしょ」

「おめえなあ……大体、今までに一体何人生き残つたんだよ」

その質問と共に四対の視線を受けて、カリンは口ごもる。

しかし、やがて沈黙に耐え切れず、重々しく語つた。

「これまでに超神水を飲んだものは14人おつた……いずれも腕に覚えのある強者ばかりじやつた……

じやが……生き残つた者は……一人もおらん……」

「いっ!?

「ひとりも!?

悟空の呟きをかき消すほど大声をあげ、ヤジロベーは両手を大げさにふつて、冗談じやねえと叫んだ。

「生き残つた奴が一人もいねえのに、なんでそんな、隠れた力を引き出す水だつて分かる

んだよ!

そんなのただの毒じやねえのかよ!」

「い、いや、ちがう。超神水は大昔より伝えられた、確かなものなのじや  
2人の言い合いを聞きながら、悟空は黙つて考え込んでいる。  
やがてはつきりと、こう言つた。

「オラ飲む!」

「は!?」

「オレもだ」

「へ!?

続く天津飯の宣言に、ヤジロベーは腰を抜かしそうなほど驚く。

「てめえらはバカかよ! そんのは勇氣があるつてことにはならんのだぞつ!  
あほだぜ!!自殺もんだ!!

お前、フーアつて言つたか! お前もそう思うだろ!?

「だから、私はさつきから飲むつて言つてるじやん」

「そ、そだつた……」

同意を求めたもののすっぱりと断られ、彼の人生でも珍しく頭を抱えて考え込んだ。  
やがて三人に向かつて向き直る。

縁もゆかりもない他人の生死にここまで真摯になれるのだから、性根はかなりのお人好しなのだろう。

「よ——つくかんがえてみろよ！生き残る可能性は殆どゼロだ！ゼロだぞ！」

「運よく生き残ったとしても、全然前と変わつてねえかもしねえんだぞ！」

「だつてよ、と今度は悟空が正面から言い返した。

「このままじやどつちにしたつてあのピッコロつてやつに勝てねえよ、殺されちまうぞ！」

「だからよーばかだなおめーは……知らん顔してりやいいんだよ。

「ピッコロなんか関わり合いにならなきやいいんだ」

その言葉を聞いて、きっと少年は目つきを鋭くした。

「いやだ！クリリンは友達だ！亀仙人の爺ちゃんには世話になつたんだ！仇を討たな  
きやな！」

「悟空の言う通りだ」

天津飯も隣に並ぶように一步並び出る。

「鶴仙人様は俺の武道の師でもあるが、同時に育ての親でもある……

それをむざむざ殺されて、黙つてなどいられるか！」

「大体さ」

にぱつとフリーが笑つてみせた。

「生き残れるかつて、つまり執念とか決意の話じゃん

それなら今、私、この世の誰にも負けないよ」

残りの二人も無言のまま肯定する。

どれほど切実に訴えられても、聞く耳など絶対に持たないだろう。

その様子を目にして、ヤジロベーは腕組みをして顔をそらせた。  
「……いいさ、スキにしな……どうせおれは悟空たちが死のうが知つたこつちやねえも  
んな……」

内心複雑であろう彼に気づくこともなく、悟空ははつきりと頷いた。

「うん！ のむ！」

「……よし……」

カリンは重々しく頷き返す。

それは確かに三人に向けた言葉だつたのか、それとも単なる漏れ出た呟きだつたのか、  
か、彼本人にもわからない。

けれど、水を取りに行く直前、確かにこう言つた。

「死ぬでないぞ……」

しばらくして、急須のようなものを手に戻つてくる。

三つの湯飲みになみなみと、超神水が注がれた。

すばらしい神の水というのに似合わず、墨のように黒い。

揺れる水面は光すら呑み込むのではないかと思うほど、一切の色を見せない。覗き込む自分の顔すら映らない。

「や……やめてもよいのだぞ……」

これから先何年か、修行を重ねればピツコロと鬪えるようになるかもしけんのだしな……」

「そんなに長い間、あいつを放つてはおけませんよ」

そういうと引きつった笑みを浮かべて、天津飯は一気に器の中身を飲み干した。悟空とフリーもそれに続く。

「うぎやあああ〜〜〜ッ!!」

耳をつんざかんばかりの悲鳴がカリン塔に響いた。

# 其之二十九 恐怖！ピッコロ大魔王

「わ……私は……国王の座を追われ……」

「……国王は……ピッコロ大魔王と……なつてしましました……無念です……」

都会の街頭モニターで、僻地の人々が集まる広場で。  
一人で暮らすサラリーマンの部屋で、学校の教室に備え付けられた画面で。  
お客様でぎわう食堂で、高速道路を走るスポーツカーで。

世界中のありとあらゆるテレビとラジオから、そのスピーチは流れ出した。  
勿論、ブルマたちが隠れて逃げ込んだカメハウスでも。

如何にも優しげな顔をした国王が、悲痛に表情を歪ませ、画面のこちら側へ向かつて  
叫ぶ。

「こつこんな奴が王になつては世の破滅だ——っ！」

だつ誰かこの無法者をやつつけてくれいっ！！

「余計なことは言うなと言つたはずだ」

によつきりと緑色の不気味な腕がその首元に伸び、軽々と持ち上げる。

「まだ死にたくはないんだろう？」

ぱつと前触れなく手をはなすと、何かにぶつかる鈍い音がする。

特に気にする様子もなくレンズへ向き直り、ピツコロ大魔王は語った。

「世の者どもよ、よーく見ておくんだな。

この私が貴様らの新しい国王となつたピツコロ大魔王様だ。

私の力は先ほど見せた破壊された街並みの様子で、充分に理解されたと思う  
もつたいたいぶつた様子でゆっくりと歩き、悪趣味な椅子へ優雅に腰を下ろす。  
足元では国王——いや、元国王が苦し気に胸元を抑え、床にはいつくばつていた。  
「さて、では早速新国王の抱負でも聞かせてやろか……

まず、私の嫌いな言葉を教えて置いてやろう。それは『正義』と『平和』だ  
とある一家のリビングで、善良な家族が互いを抱きしめあうように身を寄せ合う。  
「言つておくが私は何も国民を縛り付けようなどとは決して、考えてはおらん  
むしろ、好きなように自由に振舞えと言つていいのだ」

一方でどこかの廃ビルの一室で、ならず者が嬉しそうに武器を取り出した。

「悪人どもよ！やりたいことをやれい！」

正義を振りかざす者は悉く我が魔族が退治してやる！」

屋外の巨大なテレビジョンにうつされた姿を、多くの通行人が呆然と見上げている。  
「必ずや悪と恐怖に満ちたすばらしい世界となる」

誰かがどこかで引き出しから銃を出し、覆面を被ろうとして、やめた。

拳銃だけを片手に外へ出る。

「私の政策はそれだけではないぞ、実はさらにはばらしい死の恐怖を味わえるのだ……！」

今、一体いくつの地区があるか知つておるかな？ そう、43地区だ。

そこで私は1から43までの数字を書いていたくじを用意させた……」

その言葉と共に箱を持った、ブテラノドンのような外見の怪物が画面に現れる。

「今日、5月9日はこのピッコロ様が王座に就いた記念すべき日だ。

そこで毎年5月9日のピッコロ記念日にくじを引くことにする……

引いたくじの番号の地区をこの大王様自ら消し去りに行つてやる！

なあにこの私が放つ爆裂魔光砲は一瞬の出来事だ、苦しむ暇もない……」

取り繕つた表情を崩し、ピッコロ大魔王は狂つたような咲笑をあげた。

「私はただ人間どもの恐怖に引き攣る顔が見たいだけだ、は——つはつは！

このピッコロのやり方がきにくわんやつは、いつでもこのキングキャッスルにこい！ ミサイルを撃ち込んでも構わんぞ！！ ただし、間違いなく早死になるがな

！」

勝ち誇つた声が世界中のスピーカーからあらゆる人々の耳に入り込む。

それから逃れている、否、真正面から立ち向かおうとしているほんの一握りの人間が、高い高い塔の上で耐えている。

吐きそうなほどたうち回り、呻き苦しみながら、彼らはまだ息をしていた。指先が石造りのタイルを引っ搔く。食いしばった歯がきしんで冷や汗が全身を濡らした。

「あ……ああう……！」

「がああ……う……」

「ぎ、ぐぎぎ……」

「も……もう6時間近く苦しんでるぞ……」

見守つているヤジロベーの方が、すっかり気が氣ではなかつた。

呻き声が途切れるたびに、飛び上がりそうなほど肝を冷やすのだから。

それでも間違ひなく、三人ともまだ生きている。

いつそ死んでしまつた方が楽なのではないかといふほど、苦しんで。

「本当に死んじまうんじやねえか……？」

何度目かわからない呟きを彼が繰り返したその時。

——ドクリ、と力強く心臓がなつた。

最初に目を見開いたのは悟空だつた。

ぎよつとして思わずヤジロベーはたじろいだ。

続いてフリーイガ、最後に天津飯が立ち上がる。

先ほどまでの苦悶の表情もすっかり去ってしまって、寧ろすつきりとした様子で三人は、不思議そうに自分自身の手を眺めた。

「わかる……わかるぞ……！」

「ああ、俺もだ……今までの俺ではない……」

「変な感じ。力があふれてるけど、落ち着いてるっていうか」

（こ）……これはたまげたわい……

こやつら……このわしにも想像がつかぬような大物になりおった……

思わず慄くカリソとは違い、ヤジロベーは怪訝そうなのを隠そそうともしない。

「ほんとかよ……俺には別に変ったようには見えねえけどな……」

「ほんとさ、すげえや！」

「……そんなにすげえならさ」

悟空の返事に、彼は腕組みをした。

「さつきから名前が出てる桃白白つてやつと、クリリンつてやつにも飲ませりやいいじやねえか。

怪我してるって言つても、仙豆つてので治つちまうだろ。

超神水だつて、今まで一人も生き残れなかつたつて割には、おまえたち三人とも生きてるし……」

「それはダメ」

言葉を遮るほどキッパリと、フリーイが提案を跳ねのける。

「なんでだよ」

「桃白白さんとクリリンは、ピツコロ大魔王には死んだと思われている」

彼女の代わりに、天津飯がそう答えた。

「これは大きなアドバンテージになる……もし、俺達が負けて死んでしまつた時にな

ニヤリと笑つた彼の横顔はほんの少しだが引きつっていた。

「フリーイと悟空も感じるだろう、あの凄まじい妖気を……」

「ああ、ピツコロ大魔王があつちにいる……」

「な……なんと！ わかるのかそれが……！」

思わず感嘆の声をあげたカリンへ、悟空は握りこぶしを見せて、自信たっぷりに言う。勇気に満ちた、相手に安心を与える、力強い笑み。

「オラ、退治にいつてくる！ 今度は何とかなりそうな気がするんだ！」

「オラたち、でしょ」

ひよいと手すりに飛び乗つて、フリーイも笑つた。

悍ましく底冷えのする、邪悪な瘴気を、恐れる様子もなく背に受けて。

「大丈夫だよ、カリン様。ピッコロ大魔王は私たちが、こなごなに踏みつけてくるから」

ヽ・ヽ・ヽ・ヽ

「さてと、どの地区が記念すべき第一回目の消滅を迎えるかな……」

がさごそと楽し気に、ピッコロ大魔王は箱の中を漁る。

やがて、一枚の紙きれを取り出した。

「ほう……ここからちかいな」

そして、書かれていた数字をレンズに向かつて見せつける。

「29番地区！ 西の都だな。すぐに行くぞ！ せいぜい遠くまで逃げるんだな！」

「なんですつて!!」

見ていたブルマが画面にかじりついた。

「西の都！？と、父さんも母さんもいるのよ！？」

がたがたとテレビを揺する彼女を、ヤムチャが止める。

苛立たし気に台を勢いよく蹴りつけて、ブルマはへにやへにやと床に座り込んだ。  
「一体どこに行つたのよ、亀仙人のおじいちゃんも鶴仙人も！」

天津飯は!? フーアは!?

天井に向かって泣き叫び、ぎゅっと自分の膝を抱える。

「何してるのでよ、孫くん……」

# 其之三十 処刑開幕・戦闘開始

「なんだ、あれは」

今まさにピッコロ大魔王が西の都を消滅させようと、出発しかけたその時。一台の飛行機がキングキヤツスルの上空へ現れた。

互いに視認できるほど近くまで寄つてくると、ガラス張りのヘッド部分が静かに開く。

乗り込んでいるのは三人。

三つの瞳を持つ一番年かさの青年は、体も逞しく鍛えられている。

尻尾が生えた少年は小柄で、山吹色の胴着が印象的だ。

そしてもう最後に一人、短く髪を整えた灰色の瞳の少女。

彼女は恐れることなく、寧ろあふれんばかりの殺意を持って大魔王を指さす。瞬間、光線が瞬いた。

「おつと」

けれどピッコロはかえつて嬉しそうに目を見開き、地上へと飛び降りる。

乗り込むはずだった飛行機の燃料タンクに引火したのか、その頭上で花火のような爆

炎が上がる。

それを背後に振り向きもせず、少年少女を楽しげに見上げ、呼びかけた。  
まるで子供を公園へ誘うかのようだ。

「くるがいい、今日は特別に遊んでやる」

ふわりと3人は地面へ下り立つた。

「ほう、舞空術が使えるのか、少しは腕に覚えがありそうだな。

しかし、その中途半端にかじった武道のおかげで命を落とすことになるのだ

「気の早い野郎だぜ、もう勝つた氣でいやがる」

そう言つて天津飯が挑発的に笑う。

「近頃のやつはクチの聞き方を知らんな、それが国王に言う台詞か？」

と、ピッコロは何かに気づいたらしく、面白そうに腕組みをする。

馬鹿にしきつた猫なで声で、わざとらしく感嘆を漏らした。

「こいつは驚いた……そこの小僧は、確かに息の根を止めたはずだつたがな」

「オラ運がいいんだ！　おめえ、顔が変わつたか。若返つたつちゅうのは本当らしいな」

「ふふふ、その通りだ……どういうことかわかるか？」

この前貴様をコテンパンにした相手が、さらに圧倒的なパワーを身につけたというこ  
とだ」

とはいえ、と体に力を籠める。

「三対」というのは平等ではないな。よ——し、私の新しい部下を紹介してやろう」  
ぐぐ、と腹の中から胸を、喉を通つて何か巨大な塊が、柔らかく、内側から彼の体を  
圧迫する。

そしてやがて、その何物かが口元までこみ上げ、吐き出され、生み出される——

——瞬間、喉元を再び光線が狙つた。

命中こそしなかつたものの、多少よろけて驚いたのか、吐き出そうとしていた卵を  
ピツコロ大魔王はごくりと呑み込んでしまつた。

愕然として胸元を抑えるその様子に、ケラケラとカン高い笑い声が響く。

「貴様！」

「何？怒つてる？大魔王の癖に、相手が正々堂々としてくれると思つてゐるわけ？」

笑う。フライは笑う。

歯をむき出しにして、見せつけるように笑う。

彼女の笑顔は、サルの威嚇によく似ている。

「いいだろう、死ぬ覚悟はできてゐるようだな」

「冗談」

三人は三様に構えをとる。

そして、声をそろえた。

「「死ぬのはお前だ！」」

真っ先に飛び出したのは悟空だつた。

蹴りでも拳でもなく、スピードに乗つたまま真っすぐに頭突きをかます。

ピッコロは腕を交差させてこれを防ぎ、逆に後ろへ向かつて弾き飛ばした。

そこへ、フレイの飛び蹴りが頭部を狙う。

しゃがんで蹴りを避け、その足首を掴んで悟空へ向かつて投げる。

二人の衝突を見届けたところへ、天津飯の掌底が打たれた。

不思議なことだつた。

合図もせず目線すら送らないのに、彼らはピッタリと動きを合わせて連携が取れてい  
る。

悟空がぶつかればフレイが崩し、天津飯が刻む。

フレイが突撃すれば天津飯が碎き、悟空が打ちのめす。

天津飯が切り開けば悟空が押し通り、フレイが貫く。

それは、恐らく、互いが互いと全力で武を競い合つた経験があつたからだ。

肩を並べるよりもぶつかり合つた方が、より深く分かることもある。

天津飯のタックルをどうどうピッコロは避けられず、ふたりは一塊になつて建物の壁

へとぶつかつた。

がれきの中へと埋もれ、土煙が姿を隠す。

今度は逆に天津飯の体を掴もうとした僅かな動きを見逃さず、彼は煙幕に紛れて後ろへ飛んだ。

入れ違いになつて、悟空が再びすつ飛んでいく。

スピードと体重の乗つた拳が、勢いよく顎を殴り抜き、再びがれきの山に沈んだ。  
と、土煙の中から気弾が弾幕のように打ちだされる。

その全てが気弾で、あるいは腕や足であつさりと捌かれた。  
辺りには小さなクレーターがいくつも出来上がるが、悟空たちはダメージらしいダメージも負っていない。

「ふ……ふふふ……」

圧倒的だつた。

圧倒的なまでの力を彼らは手にしていた。

初めての体験だつただろう、大魔王が、より強いものにいたぶられるなど。

にもかかわらず、血のにじんだ口元を拭い、ピツコロは笑つている。

「やつてくれたな……このピツコロ大魔王のプライドをこれほどまでに傷つけた奴は、

お前たちが初めてだ……」

「思いつきり来いよ、力を全部出せ……」

油断なく構えたまま、悟空が言う。

「おめえの本当の力を見せてみろ」

「ほう……よくわかったな……さすがだ」

ゆらり立ち上がり、彼は血管を浮き上がらせ、汗を流す。

感慨深げに自分の手のひらを見つめ、やがて強く握り込んだ。

「フルパワーで戦うと私の寿命が縮まるんでな…………」

できれば使いたくなかったのだが……そうは言つておれんようだな…………  
くつくつくつ…………」

そうして、息を整え、改めて悟空たちと向かい合う。

「念のために聞いておこう。お前たちは確かに強い。

だが、フルパワーの私はさらに桁違いだ……間違いなく後悔することになる

そこで、だ。と彼は手を差し出した。

「チャンスをやろう、私の部下になる気はないか?

そうすれば今までの無礼は水に流そう…………

とくに、お前

すつととがつた指先がフーイを指さす。

「貴様には悪の才能がある。どうだ、悪と暴力が統べる世界。心躍るだろう？  
いまのいいこちやんな、正義と平和の世の中なんぞより、ずっとずっと楽しめるはずだ」

「……」

申し出を聞いて、少女は俯き、黙り込んだ。

大魔王は笑い、少年は見守るように見つめている。

共に育ち学んだ天津飯には分かつた。

恐らく、ピツコロの言うことは正しい。

「確かに私は」

と、彼女は言った。

「あんたら魔族が支配する世界でも、楽しく生きていくかもしれない」

なぜなら彼女は生来の乱暴者で、正しさや道徳について酷く鈍い。

「暴力をふるうつてことにためらいとか無いし、誰かを傷つけてもあまり気にしない。  
いや、むしろちょっと嬉しいかも」

ただし、それは。と、彼は疑いもせず、次の言葉を待つた。

「ただし、それは」

気の奔流を抑えきれないのだろう。

全身の毛が泡立つて、今にも爆ぜそうだつた。

短く切られた黒い髪が逆立つように乱れる。

しわくちやの手が、器用に整えてくれた髪だ。

ごつごつとした手が、不器用に撫でてくれた髪だ。

「傷ついたのが、あの人達以外なら、ね」

「……そうか」

それは残念だ、どちらとも残念ではなさそうに大魔王は呟く。

握る手に力を籠め、全身の奥底から力を表へと汲みだした。

そして彼のまとう雰囲気が——否、世界が一変する。

空気が割れる。

大地が震え、風が狂い、木の葉は消し飛んだ。

迫力はそのまま洪水となつて目の前の相手から、呼吸すら奪おうとする。

「ならば死ぬがいい、このピッコロ様の強さを噛みしめ、己の無力を呪いながらな」

## 其之三十一 大魔王のフルパワー

瞬きをするほどの間もなく、ピッコロ大魔王の姿が消えた。

と、気付いた時にはすでに悟空の後ろへ回り込んでいる。

すかさず飛びのいて逃げた体を追いかけもせず、彼は笑っている。

じつとりと、嫌な汗が全身を覆つた。

息苦しさを振り払うようにフーアイが殴り掛かる。

素早い動きで突き出した拳は、しかし難なく受け止められた。

驚いて後ろへ下がつた彼女を止めようとすらしない。

「このつ」

「ふつふつふ……さつきまでの威勢はどうした？」

余裕綽々の挑発に、彼女の額へ青筋が浮かぶ。

苛立たし気に放たれたパンチのラッシュは、文字通り嵐のようだ。

並の武闘家なら、勢いになすすべもなく飲み込まれ、サンドバッグにされるだろう。

だが、ピッコロは、その一撃一撃を、丁寧に、わざわざ手のひらで受け止める。

子供の遊びに付き合うように。

「なんだ、そんなものか？ では、今度はこちらから行くぞ」  
かぎ爪が空を裂く。

そう、言つてしまえば单なる素振りで、フーアには当たつていなか。  
当たつていなかのだが。

「ぐうつ」

至近距離にいた彼女だけでなく、悟空と天津飯までもが腕を交差させ衝撃に耐える。  
氣を抜けば後ろへと吹つ飛ばされてしまいそうだつた。

踏みしめた地面に足の跡がくつきりと残る。ビリビリと全身がしびれる。  
鋭い風に腕や頬がうつすらと切れ、たらりと血が流れた。

「す……素振りで……の威力か……！」

思わず呻いた天津飯の隣に、ピッコロはいつの間にか立つていて。

「まだまだこんなものではないぞ？」

「はっ！」

咄嗟に蹴りつけようとした足をジャンプで軽くよけ、そのまま頭を蹴り飛ばす。  
間をおかずつっこんできた悟空にこぶしを握り締めると、思いつきりその顔を殴つ  
た。

「悟空！」

天津飯が立ち上がり、振り向いた時には、丸いクレーターと、その中央に穴があるばかりで彼の姿は見当たらない。

恐らく小さな体は地中へとめり込んでしまったのだろう。

「なつ……」

「ふふ……木つ端みじんだ、これで残りあと二人……」

飛び掛かった天津飯の体を掴み、瓦礫の山へ向かつて投げつける。

ガラガラとさらにその後ろの建物までも崩れ、完全にその姿は見えなくなつた。

「あと一人……おまえで終わりだ！」

鋭い手刀がフリーに向かつて振り下ろされる直前。

「か……」

「め……」

「は……」

「め……」

二か所から同時に掛け声が聞こえてくる。

「波——ツ！」

「なにい!?」

地中から、瓦礫から、二つの姿が飛び上がつた。

「つつあ！」

呆気にとられた彼の足を、折り取らんばかりの勢いでフーアイが蹴り飛ばす。倒れないまでも体勢を崩した彼へ、再び悟空と天津飯が構えをとる。

「かーめーはーめー」

「どどん——」

「波——!!」

「その技は通用せんぞ！」

での早いドドン波が先にピツコロ大魔王へ届く。

はたき落とす様に払いのけた目の前にかめはめ波が迫り、それもはじこうとして、失敗した。

かめはめ波が曲がったのだ。

不意をつかれ、思いつきり後頭部をかめはめ波で殴られる。

「やつた！ 成功だ！」

「なんてやつだ、かめはめ波をまげた！」

嬉しそうに天津飯が感嘆の声をあげ、地面に降り立つ。

悟空は追い打ちをしようとするフーアイを止め、ピツコロ大魔王へ怒鳴った。

「立て！ 対して効いてねえはずだ！」

「き……貴様化け物か……！」

その言葉を合図に、再び三人は襲い掛かつた。

フルパワーのピッコロ大魔王の強さは実際に圧倒的だつた。

一対一の勝負なら、三人のうちの誰も敵わなかつただろう。

素早く重い攻撃は全てが致命傷になりかねないにもかかわらず、まともに攻撃したところで少しも効きはしない。

しかし、三人がかりなら話は別だつた。

一人が傷を負えば、残りの二人がその倍の傷を負わせる。

時にはダメージ覚悟で動きを捉え、もう一人、あるいは二人の攻撃を成功させることすらする。

攻撃の途中で邪魔をされ、思うように動けない。

同士討ちを狙わせるが、どういうわけかお互いにお互いの動きを完全に理解しているようで、上手くいかない。

じわじわと蜘蛛の糸が全身に絡みつくように、動きが制限されていく。  
蓄積し始めたダメージと疲労が、鈍く焦燥をくすぐらせた。

——何故だ、なぜまだ倒れない？

自分よりもずっと弱い、ただの人間が。

何度も殴りつけ、踏みつけ、叩きのめそと。なぜまだ瞳を燃やし、立ち上がつてくる——

「ハアツ…ハアツ…」

息は乱れ、最早混ざり合つて誰のものかもわからない。

それでも自分達が押しているという、実感が悟空たちにはあつた。

これほど全身全霊の全力で動いているのに、意識は妙に鮮明なのは怒りのせいだろうか。

それとも、単なるアドレナリンによるものか。

しかし、体の動きはわずかに鈍つていく。

「フツ！」

「ぐつ！」

「うつ！」

瞳から放たれた光線が、悟空の足と、フーアイの腕を貫いた。

硬いものが碎ける嫌な音が響く。

「ふはははっ！やつたぞ!! 片足ではもう素早い動きは不可能だ！

片腕では力も入りにくかろう、あの小賢しい連携も上手くはいくまい！」

「けつ！ 片足さえありやあ十分だい！」

「丁度いいハンデだよ」

「はつはつは強がりを言うな！」

意気揚々と構えたピツコロ大魔王へ、天津飯が前に出る。

2人を庇うのかと笑ったピツコロは、それならばと彼が避けられない事を前提に、より大きく振りかぶる。

そして衝突する直前、天津飯はあつさりと上へ飛んで避けた。

「なにつ！」

その陰から、フーイに投げられた悟空の膝蹴りが襲う。

スピードに質量の乗つた攻撃をまともに食らい、さすがの彼も後ろへのけぞつた。

「く、くそつ」

口の端から血を流し、ピツコロ大魔王が震える。

苛立ちと怒りの余りに。

「ゆ……ゆるさん……ゆるさんぞくく!!」

拳にすら血管が浮く。

腹の底から唸り声をせり出し、彼は力を溜めた。

異様な雰囲気に景色が歪む。

「ま、 まざいつ！」

とつさに天津飯は舞空術が苦手な悟空へ走り寄る。

緑色の手のひらが三人を捉えた。

「終わりだ——ツ!!」

フレイも上空へ逃げようとした瞬間、腕の痛みに顔をしかめる。疲れと激痛から、集中力が乱れるのを感じる。

「あ」

彼女の上昇が止まる。

そもそも、フレイ自身、恐ろしく舞空術が苦手だつた。

気弾、という表現は余りにもちやちがすぎる。

ピッコロ大魔王本人すら覆い隠すような、悍ましいほど強大な力の奔流が辺り一帯を襲う。

一瞬、世界が光に包まれた。

次の一秒。

全てを覆い尽くし飲み尽くし、地面そのものが破裂する。

それほどの爆発が巨大な雲をすら作り上げる。

風が視界を開いた時、地上には何もなかつた。

城も、兵も、ビルも、家も、人も。  
何もかもが塵と消えていた。  
ピツコロ大魔王、ただ一人を残して。

# 其之三十二 300年の勝利

「ふふふ……は——つはつはつはつはつ!!

おわつた!! どうとう終わつたぞ!!

こなごなに消し飛んだ——つ!!」

見渡す限りの真つ平らな更地の大地に、人影らしい人影はどこにもない。空の雲すら飲み尽くすような爆発の後で、残つたのは高らかに笑うピッコロ大魔王ただ一人。

足が不自由な悟空は当然として、フレイも集中力を失い、落下しかけているところを彼は見ていた。

残るは天津飯一人だったが、彼は自分が逃れようとするだけでなく、悟空とフレイへも手を伸ばしていた。

自分の事だけを考えていればいいものを、大方、2人を助けようという無駄な努力と共に倒れしたに違いない。

そのはずだつた。

「やつほつほ——！」

「なにつ！」

能天気な呼び声に彼は思わず上を見上げ、信じられない光景に目を見開く。声の主である、両手を顔の横に当て、軽い調子でふざける悟空。

彼を抱え、空を飛ぶ天津飯。

そして、悟空と同じく抱えられたフーアイ。

「ベロベロバ——だ!!」

「ま、まさか……！間に合つたのか、足手まといを2人も連れて！」

ピツコロ大魔王の目線はむしろ、悟空よりも天津飯に向かつて注がれる。

冷や汗を吹き出しながらも、しかし彼は笑つたが、その飛行はふらついていた。

無理もない、ただでさえ激しい戦闘の後、必死の思いで急上昇したのだ。

しかも、小柄とはいえ人ふたりの体重を支えているのだから。

「しかし！その甘さが命取りだ！くらえいつ！」

再び邪悪な手のひらが三人を——いや、天津飯を狙う。

先ほどまでの爆発とは比べ物にならないが、それでも命を奪うには十分な威力のこもつた氣弾が襲う。

咄嗟に二人を巻き添えにしまいと、手を放そうとした天津飯の、その腕をフーアイは掴んで、逆に下に向かつて全力で投げ落とした。

勢いよく急下降する天津飯たちは気弾の範囲外から完全に逃れた。が、しかし、身代わりになつた彼女に避けるすべはなく、防御も間に合わない。無防備な姿に、高エネルギーの塊が真っ向から衝突する。

「フーィ！」

上手く着地した天津飯たちとは違い、少女はぐつたりと力を失い、地面に向かつて落下する。

どうにか舞空術をつかい、地面とぶつかる直前ほんの少しだけ浮いた。いくらか衝撃は和らいだようだが、もはや限界なのか立ち上がりろうとして、動きが止まり、土の上に倒れる。

そのままピクリともせず、だんだんと彼女の気が小さくなっていく。

「狙いとは違つたが、まあいい」

「き、貴様よくも！」

「おつと、他人の心配をしている場合かな？」

歯を食いしばり、怒りに形相をゆがめた天津飯は弾丸のようにつつこんでいく。しかし、直線的な動きはあつさり見切られ、避けられた。

「しまつた！」

攻撃の直後、最も無防備なその腹部を全力の蹴りが襲う。

逞しい体があつけもなく吹っ飛んで、ゴムマリのように何度も地面の上をバウンドする。

そのまま、指先一つ、ピクリともしない。

「天津飯！」

「次は貴様だ小僧！」

大声を張り上げ、ピッコロ大魔王が構えをとる。

先ほど、このあたり一帯を更地に変えたのと同じ構えだ。

フレイも、天津飯もない。片足は折れ、舞空術も決してうまくは扱えない。  
最早あの爆発からのがれるすべはない。

それにもかかわらず、悟空はむしろ笑った。

「もう一回やつてみろよ！　おめえだつてさつきので、ずいぶん力を失くしてはるはずだ  
！受け止めてやる！」

腕を交差させ、防護の姿勢をとる。

残る片足に力を籠め、地面を踏みしめる。

どうやら本当に受け止めるつもりらしい。

「ほざけつ！俺様の爆力魔波をなめるなよ……！」

余裕たっぷりに宣言され、ピッコロは吠えた。

全身に力を籠め、拳を震わせる。

バチバチと体を電撃のような気の膜が覆う。

「消えてなくなれいっ!!」

——ヴオツ——

空気が焼けるような、焦げ付いた嫌な音がする。  
目がくらむ。

一拍ののち、爆音が閃光に追い付く。

悟空の言葉の通り、再びあたり一帯を消し飛ばすほどの威力はない。

それでも、あとにはスポンジを裂いてつくつたような、えぐり取られた地面の穴だけが残っていた。

「はあ……はあ……や……やつとおわったか……  
ガ……ガキめ……てこずらせおつて……」

勝ち誇つて微笑むピッコロ大魔王は、しかし肩で息をしている。

全身を汗が濡らし、湯気が立ち上つてすらいた。

どうにか呼吸を整え、ひと心地突こうとした瞬間。

「き……筋斗雲く……！」

「!!」

か細い声にこたえ、雲がどこからともなく現れる。

「ま……まさか……」

「う……うひひひ……な……なんとかこらえたぞ……」

雲の端を掴み、小さな体が再び地に足をつけた。

あまりのことにはじき、息が詰まる——そうだ、間違いなくその瞬間、ピッコロ大魔王は恐怖を感じた。

それも、己の理解を超えたものに対する、不可解への恐怖を。

「あ……ありえん……」んなことがあるはずはない……

「……このピッコロ大魔王様に太刀打ちできる人間などおるわけないのだ……」

「ふつふつふ……悟空だけじやないぞ……」

背後からの言葉に思わず振り向くと、地面から何かが起き上がるろうとしているところだつた。

「目を疑いたくなる。それは確かに先ほど、叩きのめしたはずの天津飯だつたのだから。

体中のあちこちに血をにじませ、目に見えて消耗してはいるが、確かに二本の足で

しつかりとたつていてる。

その瞳も、未だ闘志を失つてはいない。

「とはいって、俺も殆ど力は残っちゃいない……」

「オラもだ……そろそろ決着がつきそうだな……」

「ああ、俺達が死ぬか……ピツコロ、貴様が死ぬかだ……」

「…………」

一瞬、ピツコロは考えた。

そして、気付く。

未だ立ち上がるうとしないが、はつきりと息のある少女の存在に。

そこからは早かつた。

「なつ」

素早い動きで彼女の頭を掴む。咄嗟に攻撃しようとした悟空へ、彼女の体を向けて盾にした。

捕らえられ、急に降り動かされたフレイは、細く呻き声をあげる。

氣は今にも吹き消えてしまいそうなほど小さい。

「よ——し、うごいてみろ! こいつの頭が砕け散るぞつ!」

その言葉に、悟空も天津飯も、一様に止まる。

腕一本まともに動かせない。

「くつ……許さんぞ、ピツコロ……!」

「おおつと、喚くのは勝手だが、わずかでも動いてみろ……こいつの頭ぐらい一瞬でこなごなにできるぞ！」

「ちつきしよう……！」

拳を握り締める悟空に、ピッコロは手の力をわずかに強めた。

「ぐうう……あああ……」

「やめろ——つ！——やめるんだ——つ！！」

思わず少年は叫ぶ。

やがてだらんと腕を下に垂らし、脱力した。

睨みつけていた天津飯も、フーアの苦しげな声を聞き、構えを解く。

「い……いうことをきくからよ……」

「いい心がけだ……くつくつく、貴様たち人間の弱点はその精神的な甘さにある……  
非情になり切れん奴が悪に勝てるわけがなかろう」

「…………」

「そうだ、そこのお前」

び、と黒いかぎ爪が天津飯の方を指す。

「……なんだ」

「そつちのガキを殺せ」

「なつ！」

「ふつふつふ……できなければ、コイツが死ぬだけだ。手を抜くなよ」

「…………」

ちらりとフーアの方を見て、天津飯は指先を悟空へと向けた。

少年は、何も言わない。

何も言えず、ただ黙つて天津飯を見つめている。

「…………悟空」

「大丈夫だ、天津飯」

安心させようと、脈絡もなく悟空は笑つてみせた。

しかし、思いもよらず天津飯も笑う。

「ああ、大丈夫だ」

力の集まつた天津飯の指先が自分の方を向くのと同時に、ピツコロ大魔王は意識の外にあつた自分のすぐそばで、気が膨れ上がるのを感じた。

一瞬生じた迷いは、思いもよらぬ攻撃が二方向から飛んできたためだけではない。

その一方が、人質だつたせいだ。

人質は、殺してしまえば何の意味もなくなる。

だからこそ彼は一瞬迷い、その刹那が命取りになつた。

「「どどん波——ツ!!」

二つの光線が、彼の胸を貫いた。

思わず手をはなすと、先ほどまで瀕死だつたとは思えない素早さで、フーアイの体が離れる。

「き、きさま……！油断を誘うために、わ、わざと、気を……！」

「今更気がついたのか、馬鹿め」

「く、くそ……！こんな、こんな……！」

震え、よろけ、崩れ落ちそうになりながら、ピツコロは穴を開いた自分の胸を抑える。

「このままではすまんぞ！」

「諦めろ」

なおも力を振り絞る大魔王へ、天津飯が冷たく言い放つた。

彼とフーアイは、先ほどのどどん波ですっかり氣を使い果たしていたが、しかし。

「かくめくはくめく」

悟空が構える。

自身の全てを、ここで使い果たそうとする。

ピツコロ大魔王を倒すために。

「波——ツ!!」

「お前の負けだ」  
「おおおお——!!」

光弾はその体を天高く持ち上げ、やがて貫通する。  
そして、ピッコロ大魔王は爆ぜた。

自身の持つエネルギーに耐え兼ねたように。  
あるいは、注意を惹くことで、産み落としたばかりの我が子を底うように。  
破片すら残さず完全にこの世から消え去る。  
彼は、間違いなく死んだのだ。

「地獄へ落ちろ」

空を見上げ、フーアイはそう言つた。

## 其之三十三 もう大丈夫

フレイの最も古い記憶は、暗闇の中のものだ。

そして、本当に小さい頃から今でも、時たまその夢を見ることがある。

何か丸い、狭苦しい球体の中に押し込められ、ろくに身動きもとることができない。段々と酸素が薄くなり、呼吸と意識も薄れてい。

今始まつたことではなく、少し前からそうなつてしまつていたが、それが具体的にどれほど前かはわからない。

何もものを考えることができない。ただ頭の中に刷り込まれた文言だけがループする。

「縺雍m縺励▽縺上○、縺ツ縺九↙ 縺励m」

しかし夢の中のフレイは、最早その言葉の意味を思い出すことができない。

そして目の前に現れた青い、ため息が出そうなほど美しく、どこまでも青く光り輝く星。

じつと見入られた瞬間、そこへ向かつて吸い込まれる。決して逃れられない。球体はがたつき、不安定な軌道を描いて星へ向かつて落下する。

窓の外でごうごうと耳障りに炎が焼けつき、焦げたにおいが鼻をくすぐる。

何かがはじけ、部品の一部が飛んでいくのがちらりと見えた。

揺れは収まるどころか増していく。あまりの熱さに肺がむせ、息を止める。死ぬのだ、と彼女は感じた。

命令に失敗するなんてものじやない。本来行くべきはずだつた星もルートも遠く外れて、こんな見も知らぬ星で。

何かをすることも出来ず、燃え尽きて死ぬのだ。

嫌だと思つても、怖いと泣いても、もがき暴れることすらできない。

やがて、いよいよ意識が遠のいていき、視界が黒くくらむ。

心臓の鼓動が途切れる、次の瞬間――

――そこでいつも目が覚める。

その後の事はあいまいで、次に古い記憶は初めて気弾を出した、4歳ぐらいの頃のものだ。

けれど実感として理解していることもある。

あの悪夢から拾い上げ、<sup>フレイ</sup>自分を与えたのは、桃白白であるということ。

それができるほど、彼は強かつた。名前を呼ばれ強さに憧れるうち、燃える球の記憶は夢でなければ思い出せないほど遠のいた。

事実、桃白白が近くにいるときにあるの夢を見たことは一度もない。

そして、悪夢にうなされ目を覚まし、わけもわからず泣いていた幼い時には、鶴仙人が起きだしてきた。

夜中にそんな大声で騒ぐなと叱りながら、それでも泣き止まない彼女に困った顔をして、優しい手つきで頭を撫でる。

「大丈夫じや、そう泣くな。ただの夢じやろう」  
「でも、でも……」

「昔、確かにあつたことかもしけんが、終わつたこと。もう大丈夫じやよ、何も心配することはない」

だから泣くなと、眠そうに自分の目をこすつて。

それからは恐怖に目を覚まし、不安に震えそうなときにはいつも鶴仙人に泣きついていた。

だんだんと歳を重ねるにつれ、最早夢で起きたぐらいでは泣きも喚きもしなくなつたが。

それでも夜中、一人の寝室で静寂の中、眠りが途切れた時にはいつも思い出す。  
もう大丈夫だ、と。

けれど同じ声で、心底心配そうに、フレイがうつかり死んでしまうのではないかとい

うほど不安げに叱られるのだからたまらない。

どれほど強かろうが関係なく大事に扱われることは、こそばゆい気恥ずかしさと、愛されている実感に近い感情を抱かせる。

しかし、フリーとしてはどんな怪我も負うつもりはなかつたし、彼の目の前からいなくなるつもりも毛頭ない。

だから彼女は、いつか自分から言つてやりたかった。

悟空が神様のところへ会いに行こうとするのに、ついて行こうとしたフリーは、カリン様から全力でとめられた。

「なんで！」

「おぬしは悟空ほど清い心の持主ではないじやろう」

「なんで！」

「その点に関しては俺も同意見だ……カリン様と」

「おい、ちよつと、天津飯!!」

ぎやあぎやあと騒ぐ彼女に、そういうところだと弟弟子は宥めようとすらしない。

「それに、今のフリーをあわせたら、殺しにかかるんとも限らんからな……」

「ん？ カリン様、何か言つたか？」

「いや、何も言つとらんぞ」

勘のいい悟空へ必死にカリンが誤魔化している背後で、まだフリーと天津飯は言い合っている。

「大体、どうしてそんなに暴れるほど会いたいんだ。

お前は神様なんて信じてるガラじやないだろう」

「いるなら、今度のピッコロ大魔王のこと、一回ぐらいぶん殴つてやんないと、気が済まないじやん！」

「そういうところだぞ」

恐ろしい文言が聞こえ、やつぱし……と溢し、カリンは自分の判断の正しさに確信を持つた。

「…………まあ、まだフリーも気が立つとるじやろう。落ち着いてからなら考えてやらんこともない」

「本当！」

「言つとくが、神様を殴るなんぞという、罰当たりな考え方をすっぱりなくしてからの話じやぞ」

「えー」

「えーじゃない！」

とにかく、と彼は悟空へ銀の鈴を渡す。

鈴を受け取った少年は如意棒をカリン塔の屋根へと突き刺し、さらに天高くまで登つて行つた。

小さな背中に向かつて、天津飯とフーアイの二人が叫ぶ。

「頼んだぞー！ 悟空ー！」

「神様に宜しくねー！」

そうしてしばらくののち、天が黒く染まる。

夜とも嵐とも違う墨のような空は、神龍が現れたとき特有のものだ。

「なつ、思つたより突然だぞ！」

「早く行こう、場所はカメハウスでいい!?」

「ああ、鶴仙人様と亀仙人さんの遺体も、桃白白さんとクリリンもいるはずだ……あつ！」

突然大声を出した天津飯に、飛び出しかけていたフーアイは何事かと振り返る。

「ドラゴンボールの願いは一つだけ、死んでいたお二人は生き返るだろうが、桃白白さんとクリリンの傷はそのままじゃないか？」

「あつ！」

あれから丸二日近く経つてゐるとはいゝ、死にかけるほどの大怪我だ。

数日ぐらいで自然に治るとも思えない、では病院に行けるかというと、今の今までそういう状況でもなかつた。

「仙豆を持つていけ、二つぶだけじやぞ」

「ありがとう！カリン様！」

「急ぐぞ、フーア！」

「うん！」

うなづき合うと別れの言葉もそこそこに、天津飯とフーアは同時に塔の上から飛び降りた。

舞空術で多少距離を稼ぐと、飛行機に飛び乗り全速力でカメハウスを目指す。

一方その頃、カメハウスでは鶴仙人、亀仙人の遺体と共に回収したドラゴンボールが光り輝き、神龍が姿を現していた。

何度も目にするその姿に、ブルマが喜びと安堵の声をあげる。

「死んだんじやなかつたのね、神龍……！」

「孫悟空が神に頼んでくれたのだ。そして生き返った」

「ど……どういうこと!?」

「孫悟空は次の天下一武道会に備え、天界で修行をしている。武道会で会つて詳しく聞くが良い」

「え、じゃあフリーイと天津飯も?」

「いや、その二人は……」

「丁度その時、音を後ろへと置いていくような速度で、一機の飛行機がカメハウスに向かって突っ込んでくる。

「な、なんだ!？」

思わずその場にいた全員が慌てふためいたが、おりてきたのは見慣れた姿だった。

「フリーイ! 天津飯!」

「ブルマ! どうなつた!? 鶴仙人のじつちゃんは!!」

「落ち着け、今からだ」

柔らかく太い声で、神龍は少女に言う。

「さあ、願いを叶えてやろう。願いはわかつておる。ピッコロ大魔王に殺された者たちを生き返らせよう」

そして、奇跡は降り注ぐ。

世界中へ、分け隔てなく。

砂漠の乾いた貧しい村で、心優しい青年が。

山奥の街で、村一番の嫌われものの乱暴ものが。

滅ぼされた都で、一度は消し飛んでしまった大勢の人々が。

そして、海にポツンと浮かぶ小さな孤島で、二人の老人が。  
目を覚ました。

「これは……」

鶴仙人は自分の手のひらを見つめ、体に手を伸ばす。  
生きている。

息をして、自分自身に触れている。

確かに踏みつけられへこんでいた胴体にすら、傷一つない。

隣では同じように亀仙人が、呆然とした顔で自分の頭を撫でている。

「まさか、生き返っ

事実を噛みしめるよりも先に、小さな体が腕の中へ突っ込んできた。

じんわりと温かく、ずつしりと重い。余りにも勢いが良かつたため、鈍く痛みすら感じじる。

「フリー」

名前を呼ばれ、顔をあげた彼女は灰色の瞳に、溢れんばかりの涙を湛えている。

そんな顔を見たことは一度もない。こんな、悲しくてやりきれない、切なげな顔は。  
けれど。

ギュッと抱きしめ、腕の中の体が確かに熱を持っている事を感じ、フリーは笑った。

「ピッコロ大魔王は、私と天津飯と、悟空で倒したよ。死んだんだ、もういない。もう終わった」

「なんと……」

「これで何にも、心配しなくていいんだよ」

耐え切れずに涙がこぼれ、頬を濡らす。

ぐしやぐしやに崩れた、格好のつかない笑み。

「もう大丈夫。もう大丈夫だから、だから……ツ！」

「……そうか」

優しく彼女を抱きしめる、老人の瞳にも涙が浮かぶ。

「今戻つたぞ、フリー」

「うん……うん！おかえり、じっちゃん！」

耐え切れずに泣き出した天津飯と、餃子も彼の体へ覆いかぶさるように抱きつく。

誰のものかもわからなくなるほどに、大声をあげてわんわん泣き出した弟子たちを、  
鶴仙人は優しく一人一人抱きしめた。

## 幕間 つかの間の平和

## 其之三十四 一難去つて

ピッコロ大魔王は倒され、殺された人々も皆生き返った。

傷を負った桃白白とクリリンも仙豆により傷が癒え、今ではすっかり元気を取り戻している。

文句なしの大団円を迎えたフリー達だが、一つのつぶきならない問題が発生していた。

それは――

「……」

「た、桃白白……」

「……」

「わるかつたつて……でももう3日も一言も喋つてないのは、ちょっとやりすぎじゃ……」

「……」

「ひつ、ご、ごめん……」

——結果的に置いてけぼりにされた桃白白が、ものすごく怒っているということだつた。

フーアイはこんなに彼を怒らせたことはないため、何をどうしたものかわからず、ほどほど困り果てていた。

人を怒らせるなど殆どない、眞面目でいいこの天津飯も同様である。

普段なら仲裁役の鶴仙人に関しては、今回に限つては彼自身が一番桃白白を怒らせているため、全く役に立たない。

唯一怒らせていない人物は餃子だつたが、餃子は餃子で桃白白ほどではないにせよ、それなりに怒つていた。

鶴仙人達にだつて言い分はあるのだ。

別に仲間外れにしようとして置いて行つたわけではないし、そもそもその時桃白白は死にかけるほどの重傷を負つていた。

餃子に関しては実力不足、というか実戦に挑むにはいささか経験不足の感が否めない。

大体、2人まで一緒に挑んで万一負けてしまつたら、本当に反撃の手段が無くなってしまうではないか。

だから、常識的な判断にのつとつた当然の結論として、彼らはカメハウスで休ませて

おくという風に決めたのだ。

しかし、では翻つて自分が同じ立場であつたらと考へると、そりやあもう烈火の「ご」とく激怒するであろうという考へは鶴仙人たち三人にもあつたため、それ以上強くは言えなかつた。

ちなみに三日目に突入した餃子はやや機嫌を持ち直している。というよりは、己の実力不足にやはり思うところがあつたのだろう。天下一武道会前よりも、一層の気合を入れて修練に励んでいる。

天津飯はもう一人で危険な戦いへ赴かないことを、指切りげんまんで約束させられていた。

一番気の毒なのはフーアイで、天津飯といざこざしていた時の数倍は落ち込んでいる。あの手この手で謝意を示し、宥めたり透かしたりしているが今のところまともに返答はもらえていない。

これが大層應えたらしく、目に見えて落ち込んで、ただでさえ小柄な体は一回りも二回りも小さくなつたようだつた。

修行中も食事の時も、ちらちらと伺うように視線を送り、時たま恐る恐る話しかけては連れなくされ、また口を噤む。

この日も結局、そんな風にして日も落ちてしまつた。

「……おやすみ！」

縁側で晩酌をたしなむ背中に向かって呼びかけては、逃げるよう而去つていつてしまふ。

その姿をちらりと見やると、再び手元に視線を戻し、桃白白は徳利から直接酒を呷つた。

アルコールが一気に喉を滑り落ち、その後を追いかけるようにして腹の底へじんわりと熱が広がる。

山奥の鶴仙流の道場には、周りに民家らしい民家も無い。

月明りだけがうつすらと庭の土を照らし、僅かに混ざった珪砂がかすかにきらきらと、光を反射する。

裏の山のどこか遠くの方で、狼らしい遠吠えが二三響くのが聞こえる。

林の合間から、音もなくフクロウが飛び去つて行つた。

何事もない夜更けだ。桃白白は何となく自分のあばらのあたりに触れ、本当に何の痕跡も残つていなことを確かめる。何度も繰り返した動作だが、未だに納得がいかなかつた。

ドラゴンボールといい、カリン塔の仙人と言い、おまけにあの亀仙流の小さな少年は、神様のところで修行しているというのだから。

齡300に近づいて初めて知ったことだが、どうやら思っていたよりも世の中というものは、奇跡や魔法が有りふれてゐるらしい。

「つまみもなしか」

もうすっかり耳に馴染み切つた、生まれた時から聞いている声がする。

本当ならばもう二度と、聞けなかつたはずの声だ。

「これくらいで酔いはせんわ」

「胃が荒れるぞ」

「はつ！」

なんだかたまらなくなつて、桃白白は久々に腹の底から笑い声を吐き出した。

自分をこんな風に心配してくる相手など、間違ひなく世界に一人きりだろう。誘いもしないのに隣に腰を下ろし、兄は勝手に徳利を奪つて盃へそそぐ。

「俺の酒だぞ」

「けちけちするな、稼いどるくせに」

言うが早いが一度に飲み干し、鶴仙人はほうつと息を吐く。

わざわざ持つてきた皿の上には、子供達がいるときには決して食卓には上らないものばかり、丁寧に盛り付けてあつた。

指でつまもうとした手を軽くはたかれ、少し恨めしそうな顔をした桃白白へ押し付け

るよう箸が渡される。

黙々とつまみをくい、酒を飲む。

こうして共に酌み交わすのは一体何年、いや何十年ぶりの事だろうか。

ちびりちびりと舐めるように盃を傾ける兄を見て、ああそういえばこういう飲み方をするのだつたなど、思い出す様に弟は思う。

ふたりで飲んでいるにもかかわらず、徳利の酒のへり方は一人の時とそう大差ない。

「……すまんかつたのう」

しばらくして、ぽつりと鶴仙人は言つた。

「本当にな」

しみじみとした謝罪の言葉に対し、ばっさりと切り捨てる弟はどうも冷たい。

「人に死ぬなと言つていて、自分は堂々と死ににいくなどどういう神経をしとるんだ」

「いや、うむ……あれはだな……うん……」

「天津飯から聞いた話だと、兄ちゃんが死ぬところを仙人に見せられたフリーイは、怒りのあまり気も狂わんばかりだつたらしいぞ」

「そ、そ、うか……」

「それに、天津飯自身もそう変わらんかつたんだろうな、あの様子じや」「うむ……」

口ごもり、言葉を濁してひたすら酒で唇を濡らす。

「……自分が死んでもどうにかなると思ったのか？」

真つすぐににらまれ、たじたじになりながら鶴仙人は観念してうなづいた。

彼の弟子たちは、それはもう恐ろしく強い。

桃白白は勿論の事、フレイも天津飯も、今やすっかり鶴仙人では勝てないほどに力をつけていた。

餃子もまだ武道をはじめて日が浅い。これからいくらでも伸びしろはあるだろう。

死ぬことは恐ろしかったが、そういう意味ではあまり、死んだ後の事の心配はしていなかつた。

「……それに、まあ……」

「なんだ？」

「……なんでもない」

「当ててやろうか」

ぐいっとまた徳利の中身を傾け、一度に飲み干す。

喉から食道を通つて、内臓がかあつと温まるのを感じた。

夜は冷え始めるころだというのに、体は熱いぐらいだ。

「フレイはフレイで、天津飯は天津飯でまだまだ抜けているところがある。

天津飯の甘ちゃんは今に始まつたことではないが、フーアも戦闘を楽しんで相手を舐めとるからな……

しかし、師匠が無残に殺されたとなれば、そんな生温さなど、一度で吹つ飛ぶだろう

「…………」

「当然俺も、全力で殺しにかかる」

「…………」

「違うか？」

ちよびり、と酒を舐めようとして、鶴仙人はすっかり盃が空になつてゐる事に気が付いた。

何かを言うよりも先に、桃白白によつて次の一杯がみなみと注がれる。

「…………そういう考えがなかつたとは言わん」

「別に兄ちゃんのそういうところは嫌いじゃないがな」

最後の一滴まで注ぎ切ると、空の徳利をことりと縁側に置いた。

「それで託された側は、なかなかたまらんぞ」

「…………すまんかつた」

「俺もせんとは言えんから、あまり責められんがな」

「おい」

しかめつ面になつた兄にやりと笑い返すと、桃白白は立ち上がる。  
次の瞬間にはいつもの仏頂面に戻つていたが、つい数時間前までの殺氣だつた気配は  
すっかり消えていた。

ぐつと背筋を伸ばすと首を回し、寝室に向かつて歩き出した。

「フリーと天津飯のやつもそろそろ相手してやらんとな」

「……なにか、無性に楽しそうに聞こえるんじやが……」

「氣のせいだ。儂はもう寝る。明日は一日でかけるが、あさつてには戻つてくる。そし  
たら修行だといつといてくれ」

「おお、わかつた」

何か聞きたい氣もしたがこれという質問が思いつかず、鶴仙人は弟の背中を見送つ  
た。

## 其之三十五 また一難

さて、桃白白は言葉通り翌日はまる一日外出していたが、次の日の朝にはすんなりと戻ってきた。

怒っているどころか妙に機嫌のいい様子に、天津飯だけでなくフーアイも胸をなでおろす。

鶴仙人だけは彼の雰囲気の違いを感じ取つたが、氣を使つて（ひよつたともいうが）口を噤んだ。

異変が起つたのはその日の午後。裏山の開けた空き地に、フーアイ、天津飯、桃白白の三人は集まつていた。

世界一の殺し屋として名高く、それなりに忙しく世界中を飛び回る桃白白が、頻繁に鶴仙流の道場へ帰つてくるのは、何も里帰りが目的ではない。

一番の理由は弟子であるフーアイの指導だが、弟弟子である天津飯、最近では餃子にも主に実践的な面に関して指南している。

いつのころからか、弟子たちと桃白白の組み手は習慣になつっていた。  
だから、これ自体は決して特異なことではない。しかし――

「さて、今日の組み手だが……面倒だ」

そう言つて、彼は挑発的に手招きをする。

「二人まとめてかかつてこい」

言われた方は煽りに乗るどころかむしろきよとんとして、顔を見合させた。

構えることもせず、しばらくまざついていたが、やがてフリーの方がおずおずと口を開く。

「いや、でも、私と天津飯つて一応ピッコロ大魔王を倒してゐるし、一対一ならともかく、2人同時つて言うのはちよつと……」

「なんだ、来んのか」

「だからさあ」

「ならこちらから行くぞ」

次の瞬間、フリーのいた場所には、桃白白が代わりに立つていた。

天津飯が自分の目を疑うのよりも早く、裏山の一際巨大な古木がミシミシと音を立て、地響きを響かせながら倒れ落ちる。

裂け目のすぐそばには、フリーの姿。

状況を整理し、彼女が桃白白によつて吹き飛ばされ、その衝撃で木が折れたのだと気付くのにはさらにもう少しかかった。

その上、普段どれだけ強烈な攻撃を受けようと、叩きのめされようと、20秒もすれば元気に起き上がり、次の攻撃に移る姉弟子が、一向に立ち上がる様子がない。

どつと天津飯の全身を冷や汗が濡らす。心臓の高鳴りで自分の鼓膜が破れそうだ。

咄嗟に構えるが、次の動きに踏み出せない。

金縛りにあつたように手足が堅く、重く、吸う空氣すらすらしりと質量をもつ。

桃白白は手を後ろに組み、いつもと変わらない様子でそれを眺めている。口の端がほんの少し笑っているように見えたのは、自分の錯覚だ、と天津飯は思いたかった。

何故だろう、自分は一応とは言え世界を救つたヒーローであるはずなのに、まるで蛇に睨まれた蛙そのものだ。

「天津飯、お前もまだ来んのか」

「——ツ！」

このままではやられる。そう彼は直感した。

殺氣を向けられたわけでもないし、桃白白は手を後ろに回したまま構えすらしていな

い。

しかし、何かが彼の直感を激しく揺さぶる。

それが幼いころからある種のすりこみだと、彼本人は気付いていない。

「ハアッ！」

意を決して、というよりも緊張に耐え切れず、地面を蹴つた。

不自然に力んだ足先がほんの少し滑り、充分にスピードが乗らない。

それでも、並の相手ならなすすべもなく氣を失うしかないような一撃。が、残念ながら桃白白は決して並の相手と呼べる存在ではなかつた。

あつさりと腕を掴まれ、綺麗な一本背負いで地面にたたきつけられる。

巨大な拳で全身を殴られるような感覚に、背骨が反り返り、空気が押し出され肺が空になつた。

立ち上がりようにも、上手く手足に力が入らない。衝撃で痺れてしまつたらしい。

さらに恐ろしいのは、と、あることに気づいて天津飯は身震いする。

何処かを怪我した。という感覚がまつたくないことだ。

着ている服で肌をすりむいていないのは勿論の事、骨にひびが入つた嫌な痛みや、後で痣になる打撲の独特な熱をまるで感じない。

つまり、相当に手加減されている。

「おい、フリー、いつまで寝て いる気だ」

立ち上がれない天津飯にあつさり背を向け、桃白白は少女の方へ向かつていった。瞬間、木々が揺れ、突風のような動きで何かが突っ込んでくる。

さらりと避けた彼のその軌道に向かつて、無数の氣弾が飛ぶ——のを、無数のドドン波が正確に打ち抜き、その場で爆発させた。

巻き込まれたフーアイは溜まらず後ろへ逃げた、その先で先回りした桃白白にぶつかる。

「えつ」

胸倉をひつつかまれ、投げ飛ばされ天津飯の隣にあつさりと転がる。

今度はどうにかすぐさま起き上がったが、明らかにその頬は引くついていた。

弟弟子の方も顔からすっかり血の気が引いている。

「なんだ、こんなものか？ そうだな、ではこうしよう

今日の組み手は儂から一本取れば終わりだ。何、二人がかりなら簡単なことだろう

？」

そう言つて、桃白白は笑つた。

心底楽しそうに。

獲物をいたぶる猫というのは、鼠から見ればああいう顔に見えるのだろうか。

「いや、これもう、組み手つていうか、ただのいじめじや……！」

思わず溢したフーアイの鼻先数ミリを、どんどん波がかすめる。

「おつと、手が滑った」

それは手が滑つたからどんどん波を撃つてしまつたということだろうか、それとも手が滑つたから命中させるつもりが外してしまつたということだろうか。

「ほれほれ、攻撃してこんといつまで経つても終わらんぞ」

「……天津飯」

「……なんだ」

「骨は拾つてね」

「……ふつ」

兄弟子譲りのニヒルな彼の笑顔だつたが、過去最高に格好がつかない。

「それは俺の台詞だ、フーゾイ」

かくして、鶴仙流道場の裏山では、うら若い男女の断末魔の叫びが数時間にわたつて聞こえたとか。

雲よりも高い塔の上、その様子を千里眼で眺め、思わずため息をつく人影——いや、猫影が一匹。

短い腕と丸い指先で髪をなでなで、威厳たっぷりのしぐさも今日は何処か困惑氣味である。

「にやんともかんとも……」

「どうした、カリリン様」

「いや、コチラの話じや」

流石はフレイの師匠なだけはあると、仙猫はらしくなく嘆息した。

強さを求めるカリン塔に上るのは数知れず、上り詰めるものは数えるほど、さらに超神水に挑んだものは両手と少しくて足りてしまう。

超神水に打ち勝つたものとなれば、これは最早片手でも余るほどの人数だつたが、桃白白はつい先日その晩の末席に名を連ねた。

カリンは止めた。いくら孫悟空、天津飯、フレイの三人が三人とも生き残つたとはいへ、彼らを除いた超神水の生存率は、やはり0%である。

いくら兄弟子、師匠と言えど、生き残れる保証などどこにもない。むしろ、死ぬ可能性の方がはるかに高いのだ。

その上、世界一の殺し屋といえど、齢は300に迫ろうとしている。昨日今日鍛えた武術ではなく、かなりの年月をその研鑽へ捧げていた。

生き残つたとしても、大幅なパワーアップはとても望めない。

しかし、桃白白の意思は強固だつた。強固すぎて、拒むカリンを殺そうとするそぶりすら見せた。

カリンの名誉のために断言しておくが、彼は決して脅しに屈したわけではない。

それほどまでに強い決意があるのならば、武の仙猫としてこれを否定することは出来

なかつたのだ。

加えて、文句なしの極悪人である桃白白が死んだとしても、それはそれであまり困ることはないなども、ちょこつと、爪の垢程度は思つた。

とにかく、超神水を飲んだ桃白白は地面へ這いつくばりはしたものの、のたうち回つて無様にうめく様子すら見せるようなことはせず、歯を食いしばり無言のままに乗り越えた。

カリんですらその目を疑い、ヤジロベーすらたじろぐほどの力を手に入れて。

その執念の理由、先の戦いでの己のふがいなさと言えば聞こえはいい。

しかし結局、本音のところは、はるかに年下の弟子や弟弟子に負けたくないという、なんとも格好のつかない格好つけであつた。

命を懸けられるなら、それも本物である。本人は少しも死ぬ可能性など信じていなかつたようだが。

嬉々としてフリーと天津飯をいたぶり、もてあそぶ桃白白の様子にカリんは心底微妙な顔をする。

頑張れよーと、届かない声援が、天高くからうら若い二人に送られた。

## 其之三十六 天津飯の夢

「私は、鶴仙人様のように鶴仙流を教える立場になりたいと思つています」

ピッコロ魔王の一件に関する後片付け（主に桃白白の腹いせ）もすっかり済んで、人心地ついた夕食の後。

居住まいを正し、天津飯は緊張に面差しをやや硬くして、天津飯はそういった。

純粹に初耳だつたのか、意外そうな顔をする餃子。どこか納得した面持ちのフーリと桃白白。

一番驚いていたのは鶴仙人である。殺し屋を目指すのはやめたという話自体は、あの天下一武道会の日に聞いていた。

しかし、こういう着地を遂げるとは思いもしていなかつたらしい。

「あの日、鶴仙人様と亀仙人さんのお話を伺つて、私は鶴仙流の真髓を理解しました。鶴仙流の技術も、志も、後世に受け継がれていくべきものだと、強く信じています。未だ若輩の身ではありますが、ゆくゆくは鶴仙様の後を継ぎ……」

「まで、までまで」

就任演説かと聞き間違えそうな文言の数々に、老爺は思わず口をはさむ。

「おぬしは、それでいいのか」

余りにも枯れた考へではないか、と彼は思つた。

育てる側に回るという、天津飯の言つてゐる事はつまり裏方に回る、という宣言でもある。

若いうちにはもつとギラギラとして、我こそは世界一と欲深く傲慢に、頂点を目指すのもまた特權ではないか。

それをなにも、今の内からそんな、ある意味他者に時間を捧げるスタンスをとらずともよいだろう。

「いいもなにも、これが私の新しい夢であり、目標ですから」

しかし、天津飯はにつこりと笑つて、はつきりと言い切つた。

鶴仙人の微妙にズレてしまつた思いやりなど、どこ吹く風である。

いいんじやない、と横からフーアも援護を出してくる。

「殺し屋には私がなるし、そうしたら私が桃白白役で、天津飯がじつちゃん役になつて丁度いいじやん」

しかし、となおも口ごもる鶴仙人に桃白白がとどめを刺す。

「兄ちゃん、自分が引退した後の事考へてないだろ」

引退、という二文字が鶴仙人の頭に重くのしかかつた。

鶴仙人は仙人を号しているだけはあり、他の人々に比べればはるかに長生きだ。

武泰斗様が死んでから、鶴仙流を作り上げ幾年月。本当に余りにも長い間、現役で師匠をやり続けたせいで自分もいずれ引退するべきだという事実を、すっかり忘れてしまっていたのだ。

腕組みをして考え込む。最早、フーアイと桃白白、天津飯の三人は鶴仙人が足元にも及ばないほど強く育つていた。

餃子がその列に並ぶのも、そう遠い日の事ではあるまい。彼らは間違いなく、鶴仙流の宝であり、希代の達人だ。

引退したのち後を任せると、これ以上の逸材はないとも思う。

そうなれば、後継者となるのに天津飯以上に相応しい人物はいなかつた。

まずはフーアイ、これは論外である。

彼女は天性のセンスと身体能力にまだまだ頼り切っており、技一つ一つの練度は天津飯にやや劣る。

それでも実践となれば姉弟子の勝率が上回るのは、彼女の動きと判断能力がどこまでも実戦向きだからだ。

しかし、それではとても人にものを教える立場など成り立たない。

次に桃白白、彼は現時点で既に、鶴仙流を教える立場にある。

あるが、やはり自身の弟子と同じで、というかフレイの方が師である桃白白と同じと  
いうべきか、彼の鶴仙流はどこまでも実戦向きであつた。

これでは武術としてはともかく、武道としての鶴仙流を指導する立場としては不十分  
である。

餃子に関しては、正直イレギュラーという面が強かつた。

才能は勿論申し分ないものの、彼の得意は超能力に特化している。

指導者となればあらゆる分野を不足なく体得している必要があるため、正直向いてい  
るとは言いづらい。

そこにきて天津飯といえば、真面目さとひたむきさでは他と比べるまでもない。

基礎の上に技術を積み上げていくスタイルは、理想そのものと言つてもいいぐらい  
だ。

加えて本人が努力家であるために、土台からしっかりと他人へ伝える才能に長けてい  
る。

出来ない人間に教えられるのは、自分のできないを克服した人間だけなのだ。

「……わかった。おぬし自身で決めた道じや。後継者としても、天津飯ならば申し分な  
い」

「それでは」

「これからはより一層、修行は厳しくなるぞ。当然その覚悟はあろうな」  
「はい！」

力強く頷く天津飯の笑顔は、晴れやかそのものだ。

ちらりと彼の頭に、ジャツキー・チ Yun に言われた言葉がよみがえる。

——おぬしの師匠がそこまで慕われるだけの価値がある人間なら、お前自身が決めた道を、否定するまいよ——

当然だ、と天津飯は頭の中で在りし日の強敵に言い返した。なにせ、自分に武道という道を示したのは、鶴仙人その人以外の誰でもないのだから。

……尊敬ゆえに師匠の人としての未熟さに気づけていないところは、彼もまだまだ子供である。

一方で鶴仙人自身も、胸に来るものを感じていた。

鶴仙流は一つの武道、武術として間違いなく優れている。先人、後世の誰に恥じ入るものでもない。

しかし、それが受け継がれるかどうか、というのはまた別の話なのだ。

自分の手を離れてもなお、残るものがある。残そうという、志のある者がいる。

「……」

「……兄ちゃん、泣いてるのか」

「うるさい！ 泣いとりやせんわい！ これは目にゴミがだな……」

「鶴仙人様……！」

「ええい！ 貴様も泣くな天津飯！」

「も、つて言つた、やっぱ泣いてるじやん」

「フーア！」

「なんだよ！ じつちやんが自分で、もつて言つたじやん!!」

ぎやいぎやいと騒ぎ出した姉弟子たちに、本当に仕方がないなと餃子はため息をつく。

外見に似合わず、シニカルなところがある男なのだ、彼は。

しかし、隣で感極まつて目を潤ませている天津飯には、優しく微笑んで見せる。

「良かつたね、天さん！ 僕も手伝うよ」

「ああ、頼りにしているぞ、餃子」

# 其之三十七 私を天まで連れてつて

「やつほー」

「うおつ」

突然声をかけられ、カリンは飛び上がって驚き思わず杖を取り落とした。

そもそもそのはず、ここは天をも突かんカリン塔の頂上、彼の背後は華奢な柵の他には、雲と空が広がっているばかりのはずなのだ。

が、その何もないはずの空中に彼女はいた。短く整えた黒髪に、灰色の目。舞空術をすっかり使いこなし、ふわりと柵を外側から越えると、杖が床に落ちる前にキヤツチしてカリンへ手渡す。

「カリン様さあ、悟空が神様の」

「ええい、いきなり本題に入るな！ 前置きと言う言葉を知らんのか、おぬしらは！」

動搖混じりに怒鳴り気味で叱られ、少女——フリーイはきよとんと首を傾げた。

思えば数か月前、彼女の師匠である桃白白がカリン塔を訪れた時もそうだつたと、カリンは思い返す。

長年伝説として語り継がれてきたカリン塔に挑む者は多いものの、垂直に柱を走つて

頂上に辿り着いたものも、それが軽いジョギング感覚だつたものも初めてだつたしかもカリンを見るや否や、開口一番「超神水とやらをよこせ」と言い放ち、その一点張りである。

カリンは与り知らない事ではあるが、桃白白は殺し屋になるまでは一介のサラリーマンとして社会生活を歩んでおり、その独特的のノリに反して案外、一般常識や礼儀というものはよく心得ている。

依頼人にはそれなりに気を遣う事もあるし、料金設定に関する丁寧な説明や、20周年を記念して仕事の割引を行うなど、一般的な感覚は身についているのだ。多少ズレていることに目をつぶれば。

ちなみに、彼が仙猫にたいしてそれらを発揮しなかつたのは、後輩たちの成長に対する焦りの表れに加え、ひとえにそうするべき必要性を感じなかつたからである。無礼にも程があつた。

「おぬし、ら？」

「おつと……」

そんな内心を知らず、フリーは首をかしげ、カリンは慌てて自身の口を塞いだ。

桃白白がこの塔を上つたことを、フリーは知らない。彼としても知られたくないだろう、弟子の強さへの悔しさに、超神水を飲んだなど。

脂汗を流し床にへばりつきながらも、うめき声一つ漏らさなかつた彼のプライドに、カリンとて何も感じなかつたわけではない。

あそこまで必死な姿を見れば、誰だつて多少、忖度もしたくなるというものだ。

「な、なんでもない、気にするな。それより何の用じや?」

「だからさあ、なんで教えてくれなかつたの、悟空が神様のところで修行するつて「その件か、わざとではないぞ、わしも後から知つて驚いた」

「なんだ、そつか。でもさ、ズルいよねあいつ一人だけ」

フリーは口をとがらせ柵に腰かけ、足を投げ出すと、ぶらぶらさせる。

そういう態度をとるところだぞ、といつもは指摘する天津飯も今日はいない。

「カリン様、前に言つたこと覚えてる?」

「……お主が心を入れ替えたら神様に会わせてやるのを、考へんでもないという話か」

「めちゃくちやハードルあがつてるじやん。神様殴るとか考えるのやめるつて条件だつたじやん」

もうすっぱりそういうのやめたからさあ、とねだる声は駄々つ子そのもので、今度は簡単に引き下がらないことをこれ以上なく表していた。

「本当か? あれほどまでの怒りが、ほんの数か月で収まるとは思えんが……」

「あの後よく考えたんだけど、ピッコロ大魔王は私達で殺したじやん」

「うむ」

「鶴仙人のじつちゃんと亀仙人のおじいちゃんも生き返ったし、桃白白とクリリンも元気になつたし」

「そうじやな」

「じゃああの話はそれでもう終わりでしょ」

言い切つた顔には、迷いや未練など毛頭ない。

あつけらかんとしたその様子に、カリーンは言い知れずうすら寒いものを感じた。

殺されたけれど殺したし、生き返つたから許すというのは、言い換えれば殴られたけど殴つたし、傷も癒えたから許すというようなものだ。

道理としては通つてはいるものの、ではそのように考え、実際に感じることが出来る者はどれだけいるだろう。

普通と感覚が違うのは彼女自身の特性か、あるいは彼女のルーツが戦いながら生きる民族にあるからだろうか。

「とにかく、私はもう、そういうのやめたから。神様が本当にいるならピッコロ大魔王をどうして野放しにしてたんだぶつ殺すぞとか、もう思つてないから」

「一回殴るといいつつ、やはりそこまで思うとつたんじやな……」

「今はもうちつとも考えてないから!」

「……はあ」

心の底から深々とため息をつく。彼女のいう事ももつともなため、へたに言い返すこともたしなめることも出来ない。神様にだつて神様なりに理由があつたのだが、彼女にそれは通用しないだろう。

「天津飯のやつなら、安心して神殿へ送れるのだが……あやつは今日はどうした?」

「それがさ、あいつ、鶴仙流をついで自分が師範になる! つていいだしたもんだから、じつちやん、感激してやる気満々でさ、修行の量がもりもり増えちやつて、まだ今日の分終わつてないんだよね。終わらしたらすぐ来るよ」

あんまりな言いように、カリンは思わずずつこけた。

「おぬしら、ちょっと気安すぎやせんか……」

限られたものだけがその名誉にあずかる、武の聖地カリンのその伝説、カリン塔の頂がまるで、学校の補習が終わつたら、集合場所に使われるコンビニみたいなノリである。

「どううか、今日の分という事はまさかおぬしら、日帰りするつもりなのか? 神殿へ?」「え、うん、だつて悟空と組手しに行くだけだしきよ」と首をかしげる彼女に、何をどう説明したものかと悩んで、悩んで仙猫は諦めた。こればかりは感覚の話になつてしまふので、言葉と理屈でどれだけ伝えたところ

で伝わるものでもないだろう。

「神様のところで修行したいわけではないのじやな」

「カリン様は神様がどれぐらい強いか知つてる?」

「……あのな、フーイ、神様は強いとかそういうものでは……」

「じゃあ、別にいいよ。修行ならじつちやんがつけてくれるし」

ぐるりと膝を手すりに引っ掛け、さかさまになつて少女は笑う。

「私の師匠の桃白白は、この世で一番強いもん!」

見事な一回転を決めると、すたりと床に着地をして雲の切れ目の遙か彼方を眺める。カリンもつられてそちらを見ると、一機の飛行機が聖地カリンに到着しようとしているところだつた。

恐らくは今日の分の修行を終えた天津飯だろう。

「私は悟空の対策がしたいだけ。一回負けたから、二度目は嫌なの」

だから、神様のところへ行かせてくれるよね、と彼女は何の気負いもなく鈴をねだつて手を差し出す。

その手のひらの小ささに、カリンは今日何度も分からいため息を、腹の底から深々と吐いた。

# 其之三十八 殺の師弟

「ねー、桃白白」

「なんだ？」

「次の標的がいる町へのルートなんだけどさあ」

ピッコロ大魔王が倒され、既に季節も3度巡ろうとしていた。次の天下一武道会も来月に迫っている。

ここ2年ほど、フリーは桃白白の助手兼見習いとして彼の仕事に同行していた。とはいものの特に手伝うことなどあるはずもなく、道中の修業がむしろ同行の目的となつていてる。

定期的に鶴仙流の道場へ帰っては鶴仙人からも指導を受け、天津飯や餃子と修業し、加えて数ヶ月に一度だが、孫悟空との組手のために神殿も訪れるなど、忙しく日々を過ごしていた。

全く迷惑な話だが、ゲリラ的にクリリンやヤムチャの元も尋ね、組手という名の襲撃も行つてゐる。それが彼らにどれほどの影響を与えたのか、彼女は一切気にも留めない。

「地図の途中で道が途切れてるんだけど」

「なに？ 見せてみろ」

武器の手入れを行つていた手を止め、桃白白は立ちあがつて振り返る。

地図を差し出しこちらを見つめる灰色の瞳は、こちらの視線ともうあまり高さが変わらない。

にわかにそのことに気が付いて、彼はほんの少しギョツとした。

考えてみれば、少しもおかしなことではない。初めて彼が荒野で彼女と出会つてから、既に15年以上たつている。

「ん？ どうした？」

「いや……背が伸びたな、フーゾ」

今更だよ、と少女は首をすくめ、自分でも改めて目の前の相手との身長を比べた。

恐らく、頭一つ分ほども変わらないだろう。彼女自身もそのことに初めて気が付いたのか、得意げな笑みを浮かべる。

その幼さの残る笑顔は、いつまでたつても少しも変わらない。

だがしかし、彼女は数年前に比べれば別人と言つていゝ程、腕を上げていた。

神殿で修業を重ねる悟空に比べれば地力こそ劣るもの、いざ試合となれば互角の勝負を繰り広げ、立ち合いの神様とミスター・ポポを驚かせた。

逆に天津飯との勝負では、地方では確実に彼女の方が上回っているにもかかわらず、今一つ押しきれず最近は引き分けになることが多い。

それはひとえに、悟空の土台となつた亀仙流は己自身を高めることを目的とし、その結果、相手に打ち勝つ強さを手に入れるのと違い、フーイと天津飯の鶴仙流は相手を倒す（殺す）事を目的とし、そのためには強くなろうと修業を積んでいるところにある。

強いことと、勝つことは必ずしもイコールではない。時には一振りの強靭な大剣が、髪の毛よりも細い一針に敗れることもある。

極論、試合において、相手よりも強くある必要はないのだ。勝てさえすれば勝ちなのだから。

そういう意味で鶴仙流は、勝負と言う場においてエキスパートであるといつてもよかつた。

「ま、成長期つてやつだからね、その内桃白白の背も越えちゃうよ」

「そうか」

「ちよつと！ 撫でる感じで頭押さえつけないで！ 縮む！ 縮むから！」

「なあに、成長期だから大丈夫だ」

「何も大丈夫じゃない！」

「大体お前、これ地図が違つとるぞ」

「え、マジ!?」

ぱつと手を離され地図を受け取ると、二枚を見比べ、本当に全然違うところのやつ  
じゃん、とフーリは呻く。

再び地図を調べに後ろを向いたその背中には、やはり変わらず『KILL 前を殺す YOU!』  
の文言が踊っている。

それを見て桃白白は少しばかり考え込んで、寄り道を決めた。

ヽ・ヽ・ヽ・ヽ

その日、天下一武道会の舞台はあいにくの大雨だつた。

無数の雨粒が空を覆い隠し、景色をくすませる。

集まつた人々はめいめいに傘を差し、その顔もよくは見えない。

そんなんか、一人の少年——いや、青年が現れる。

3年前とは見違えるほどに背が伸び、けれど屈託のない明るい性格と真っ直ぐな性根  
は少しも変りなく。

一人、また一人と彼の周りに人が集まり、数年の時を経て彼らは再会を果たした。  
そして、雨が上がる。

「しかし、悟空にも驚いたが、フリーも随分と」

と、亀仙人は彼女の姿を頭の先からつま先までながめ、だらしがない表情を浮かべる。

「色っぽくなつたのう……ッ！」

言い終わるか終わらないかの間に、全員の視界からその姿が消える。

悟空たちの視線につられ、ブルマがそちらを見ると鶴仙人がその胸倉をつかみ壁際に押し付けていた。

「殺すぞ」

おもつたよりドスの効いた声に亀仙人も少しビビる。

「なんじやい、まだなんもしとらんじやろうが！」

「何かするつもりだつたのかこのスケベジジイ!!」

「なんじやとこのむつりジジイ!!」

「だれがむつりだ、だれが!!」

おおよそ公衆の面前で口にしていい文言ではない。

だんだんとただの罵り合いに変化していき、ぎやあぎやあと騒ぎ合う師匠たちに、弟子たちは各自苦笑いを浮かべる。

空気を換えようと、クリリンはそういえば、とやたらに大きな声で天津飯に言つた。

「フリーから聞いたんだけどさ、お前、今は鶴仙流の師範代を目指してるんだって？」

「正確には目指していた、だな」

口角の片方を吊り上げ得意げに笑うと、彼は自分の胸を親指で指さす。

「つい先日だが、免許皆伝を授かつて正式に師範代として認められた」

亀仙流の側からおーっと歓声が上がった。師匠たちとは違い、弟子たちは実に和氣あいあいとした雰囲気である。

ということは、と今度はヤムチャが尋ねる。

「天津飯が免許皆伝つてことは、フーアもか?」

「うん、そう!」

彼女は待つてましたとばかりに、これ見よがしに胸を張つて、ピースサインを作つた。

「ま、私は天津飯と違つて、指導の許可はまだ下りてないんだけどね」

「へえ、鶴仙流はそういうところがかなりしつかりしてゐんだな」

「じつちやん、眞面目だからさ」

しかし、その眞面目な師匠は若いころのせせこましい話題まで持ち出してもめている。

初めは正当性のある怒りだったはずだが、だんだんと反れてすっかり同レベルの争いに変化していた。

「そいや、その服……」

と、フーアイを指さし、途中まで言つてクリリンは口をつぐんだ。  
以前組手をしたときは、彼女の格好はすっかり変わつてゐる。

長い丈のシャツとズボンは暗く鮮やかな紅色で、袖の無い上着と深いスリットの入つたスカートは瞳と同じ灰色に染められている。

胸元には丸に殺の字、確認はしていないが、おそらく背中には以前と同じ『KILL 前を殺す YO U!』の一文が書かれてゐるに違ひない。

つまり、色こそ違うものの、桃白白の服と全く同じデザインだつた。

同じ流派の師匠の服なのだから、それほどおかしい事ではない。実際、以前の服は鶴仙人の着ていたものと全く同じだつたし、事実、天津飯は今もその道着を着てゐる。  
しかし、散々フーアイから桃白白の話を聞かされており、若干の苦手意識を今でも持つてゐるクリリンからすれば、この二人のペアルックはなかなかインパクトが強い。

一方、そんなことには一切気付かず、フーアイは、そう！ そななんだよ！ といつもよりワントーン高い声を上げた。

「この服ね、桃白白とお揃いなんだー！ いいでしょ、この前、免許皆伝祝いだつてプレゼントしてもらつてさあ！」

今にもクルクルと踊りだしそうなほど喜んでいる光景は微笑ましい。

一方、プレゼントした本人は、少し離れた後ろから微動だにせず、手を後ろ手に組ん

で頑なな無表情を保つてゐる。

怖さよりも空氣を読んで、クリリンは彼からそつと視線を離した。

なんにせよ、仲が良いのはいい事なのだから。

大体、亀仙流の道着をわざわざ自分で用意してきたクリリンも、あまり人の事が言えた義理ではない。

選手集合のアナウンスが流れ、ようやく鶴仙人と亀仙人は互いに離れる。  
会場に紛れ込んだ邪悪な影に、今はまだ誰も気づいていない。  
全てを見通す神様と、その弟子以外は。

## サイヤ人襲来編

### 其之三十九 故郷からの使者

荒く、肺を傷つけるような風が吹きすさぶ荒野。

動くものと言えば転がる小石程度で、苔のようにへばりついた短い草の他には、生き物らしい生き物もない。

削られた岩肌と砂ばかりの景色、一つの人影が失意にうなだれている。

彼はマジュニア、或いはピツコロ。かつてピツコロ大魔王と呼ばれた存在の、息子のようなものだった。

父親を倒した天津飯、フーイ、そして悟空の三人を倒すことを当面の目標とし、世界征服を掲げている。

5年前の天下一武道会で再戦を果たし、惜しくも悟空に敗れたものの、いまだ諦めず、一人修業を重ねている。

しかし、今、ピツコロの心を占める者は彼ら3人ではない。  
脅威であることに間違いはないものの、彼ら相手にピツコロが今のような状態に陥るなどありえない。

まさか、恐怖のあまり震えて動けなくなるなど。

凄まじいパワーだった。これまでの地球では、一度も感じたことのない程の。殺すつもりで放つた攻撃はまるで効き目を為さず、あまりの事にわが目を疑った。そればかりか、反撃を加えられる直前、何か気を引くことがあつたのか、その男はピッコロを置いて何処かへと飛び去つたのだ。

つまりかつて世界の全てを恐怖と絶望へ叩き落した大魔王、その後継者が、取るに足らない存在として、捨て置かれたのである。

「……」

拳を握りしめ、自信を奮い立たせると彼は立ちあがる。

何としても、あの男の目的を突き止めなければならぬ。

そして、必ず倒さなければならない。

世界征服のために。そして、彼自身のプライドのために。

＼・＼・＼・＼・

「おひさー！」

「お久しぶりです」

「こんにちは」

どやどやとフリー、天津飯、餃子の三人がカメハウスの建つ島へ降り立つ。

亀仙人とクリリンに加え、呼びかけで集まつたブルマ、悟空親子の面々も彼らの姿に再会を喜んだ。

「本当にひさしぶりだなあ！　天津飯、道場の調子はどうだ？」

「それがさあ、クリリン。こいつ、鶴仙流を広めたいって、いまの道場よりもうちよつとアクセスいい所に別館建てようとしてるんだよ」

フリーから茶化すように言われ、天津飯は少し眉間にしわを寄せる。

しかしクリリンは素直に感心した様子で、すごいなあと感嘆の声を上げた。

「将来の事、真面目に考えてるんだな」

「……まあな」

少し照れたように鼻を搔く彼へ、そういえばとクリリンが耳打ちをする。

「ランチさんがそつちに行つたと思うんだけど……」

「ああ、鶴仙流を学びたいといつていたから、今は他の門下生と一緒に修業を積んでもらつてる」

「えっ!?」

思わずギョッとして大声を出してしまい、クリリンは慌てて自分の口を塞いだ。

彼の記憶では、以前の天下一武道会のあとしばらくして、ランチは天津飯の後を追つ

て鶴仙流の道場へ向かつたははずだ。

それは彼女曰く天津飯の『ワイルドさに惚れた』からであつて、鶴仙流を学びたいとか、そういう事ではなかつたと思うのだが。

「本当に、ランチさんがそう言つてたのか？」

「鶴仙流の道場に来て『ここに住ませてくれ』と言つていたからな」

それを聞いて彼はあちやあ、と額をうつ。

恐らく、ランチは天津飯と一緒に暮らしたい、という意味でここに住ませてくれと言つたのだろう。

勘違いとはいえそれで鶴仙流に弟子入りするランチも、随分と健気なものだ。

「武器の扱いには慣れているようで、見どころがあると鶴仙人様もおっしゃつていたぞ」「天津飯、お前……」

「どうした」

「いや、にぶいって罪だよなあ……」

「？」

腕を組み一人で唸つてゐるクリリンの後ろで、フリーは悟飯にちよつかいを出してい

た。

頬っぺたをつついて、父親の悟空に軽く手を払われてゐる。

す

「しつかし、小さい時の悟空にそつくりだね」

「そうか？ 髪の毛なんかチチそつくりだけどなあ」

「いや、そこはそุดけど、顔つきがさ」

「そういえば、しつぽも——と言つたところでブルマと亀仙人の表情が引きつる。  
「ね、ねえこの子、と……とくに妙なことがあつたりしない？」

「妙なこと？」

ピーンとこない様子で悟空と悟飯はそつくり同じように首を傾げた。

「た……例えは満月の夜な……何か変化はないか……？」

「満月の夜？ さあなあ……おらんち早く寝ちまうから……なんで？」

「い、いやなんでもない！ そ、それならええんじや！」

そつと胸をなでおろす亀仙人のよこで、フーアイも同じように首をかしげている。

背後で聞いていたクリリンは話題を変えようと、明るい調子でそういうえば、と悟飯を指さした。

「な、なあ悟空この子もお前みたいに強いのか？」

「それがなあ、かなりの力は持つてると思うんだけどさあ……チチのやつ鍛えてやろう  
とすると怒るんだ……

世の中平和になつたんだから、これからはお勉強の時代よ！って……

「それはもつたいない」  
「もつたいない」

にゆつと顔を出した天津飯から三つの目で見つめられ、悟飯の肩がびくりと跳ねる。  
更にその後ろから自分と同じぐらいの真白い顔の餃子が浮かびながら顔を出し、さら  
にぎゅつと力強く父親の足を掴んだ。

「悟飯君君自身はどうなんだい。強くなりたいとは思わないかい。鶴仙流なら、ひよつ  
とするとお父さんに勝てるぐらい強くなれるかもしねないよ」

「いやいや、何を言うか！ のう、悟飯、悟空のように強くなりたければ、亀仙流に弟子

入りすればよい。なんなら、今日からでも構わんぞ？」

妙に明るく爽やかな声で勧誘する天津飯と、割り込んで優しげな声で話しかける

亀仙人だが、半分は冗談なことが大人たち皆には分かつていた。

無論、半分は本気である。

幼い悟飯はこんなふうに他者から対等に扱われることが初めてで、戸惑つた様子で父  
親を見上げた。

それを見てブルマも微笑まし気にからかいの言葉をかける。

「あらあら、悟飯君は人気者ねえ」

「やめてくれよ天津飯にじつちゃん、オラがチチに怒られちまうよ」

息子と同じ顔で困る悟空に、面々はからからと笑い声をあげた。

実に和やかな平和の昼下がり、そこへめがけて一筋の暗い影が近づいている。その事に気が付き、フリー、天津飯、クリリン、そして悟空の四人は一斉に同じ方向をにらんだ。

只ならない雰囲気に、ブルマや亀仙人はつられて同じ方向を向いてみるが、何も見えず、ただ青い空が広がっている。

その間にも、彼らは何か、背筋が泡立つような言い知れない不安を感じていた。  
「な、なによ、どうしたの孫くん」

「なにかこっちにやつてくる！　なにか……！」

「なにかつて……ヤムチャかしら……」

「いいや、違う」

首を横に振り、警戒した様子で天津飯は乗つて来た飛行機をホイポイカプセルへおさめる。

「め、めちゃくちゃなパワーを感じる……！」

「一体、何だつていうんだ……!?」

フリーとクリリンすら呻いたその時、青い空の彼方に一つの黒い点のようなものが現

れた。

だんだんと大きくなっていくそれはどうやら人間の形をしていくようで、とんでもない猛スピードでこちらへ近づいてくる。

「きたつ!!」

空気を切り裂く音が鼓膜をつんざく。

降り立つたその気配に、彼らはぞくりと肩を震わせた。

確かにそれは、人の形をしている。

ひざ丈まで伸びた黒い髪は毛並みのようで、狼か、さもなければヤマアラシを思わせた。

身にまとっている服は鎧のようだが独特の形をしており、世界のあちこちを回つて来た悟空やフーリイであつても、見たことが無い意匠をしている。

顔の横にはなにか機械のようなものを取り付け、視線は鋭く厳しい。

そして、不思議なことだが、どこかその面立ちは悟空に雰囲気が似ていた。

「成長したな……だが一目でわかつたぞ、カカロットよ……父親にそつくりだ……」

そう、彼は言つた。

真つ直ぐに、孫悟空へ向かつて。

# 其之四十 悟空の生まれ、フーアイの由来

「へつ!?

「な……なんだよこいつ……何言つてんだ?」

戸惑うクリリンを氣にも留めず、突如現れた謎の男は悟空へ向かつて言葉をつづける。

「カカロット、この星のありさまはなんだ。人類を死滅させることが貴様の使命だつたはずだ。

「一体何を遊んでいた……!」

「ちよつと、ねえあんた」

動けない面々に変わつて、前に出たのはブルマだつた。

見知らぬ相手に臆した様子も無く、腰に手を当てて軽い調子で言う。

「どこのだれか知らないけど、帰つて帰つて! んもう、昼間つから酔っぱらつてちやダメじやないの」

あつけにとられていた悟空の表情が歪み、鋭く叫ぶ。

「ブルマ! 近寄るなつ!」

「えつ？」

彼女が振り返った、その瞬間。

バチ、と鞭のようなもので肉を叩く、硬い音がした。

「ブル……！」

「つつか……！」

と、ブルマは地面に尻もちをついた格好で固まり、代わりにクリリンがカメハウスの壁の前で停止している。

そして、そこに向かつて両手をかざす餃子。

咄嗟に彼女を庇つたクリリンがカメハウスへ突っ込むのを、餃子が超能力で何とか防いだのだ。

「さ、サンキュー、餃子……」

「クリリン、大丈夫か」

「大丈夫……いてて……」

超能力がとけると、彼はあからさまによろついた。

かなりダメージを受けてしまつたようで、立つているのがやつらしい。

「ほう、妙な力を使う奴がいるようだな」

「貴様っ！」

「そ、孫くん……！」

怒りに目をとがらせ男の方へ向き直った悟空へ、ブルマが呼びかける。

震える指先は、男の腰のあたり——茶色く細長い、尻尾を指さしていた。

その場にいた全員が息を呑む。とりわけ、悟空とフーイは目を見開き硬直してしまつた。

「し、しつぽだ……こ……こいつにもしつぽがある……！」

「ふふふ……やつとこの俺の正体が分かつたようだな」

「正体……!?」

要領を得ない悟空の返答に、初めて男が動搖する。

「カカロット……きさまそんなことまで忘れてしまったのか……!?」

「オラはそのカカなんとかっていうおかしな名前じやねえぞ！ 孫悟空だ！」

「そんなことは聞いとらん！ おい！ 幼いころに頭を強くうつたこととかあるのか!?」

「……ある！ オラは覚えちやいねえがうんと小せえ頃に頭を打つた……！ いまでも傷

が残ってる……」

「くっそ～～！ やはりそうだつたか……!!」

すっかり取り乱し、イラついた様子で男は舌打ちをする。

そして悟空をにらみつけると尻尾を腰に巻き、強い口調で言い放つた。

「教えてやる！ まず貴様はこの星の人間ではない！ 生まれは惑星ベジータ！」

誇り高き全宇宙一の強戦士族、サイヤ人だ!!

そしてこの俺は……貴様の兄！ ラディツツだ!!」

彼が語るところによれば、悟空はもとはサイヤ人としての名前をカカロットといい、この地球にすむ人間を絶滅させるために送り込まれたらしい。

そうして空き地になつた星を他の異星人に高く売るのが、サイヤ人の生業だつた。

サイヤ人には満月を見ると大猿へ変化する特性があり、戦闘力の低い星ならば、赤ん坊に近い子供でも簡単に制圧できるのだ。

「サイヤ人はもともと少数民族だつたうえに、惑星ベジータが巨大隕石の衝突で爆発してしまつたのだ……

ほとんどすべてのサイヤ人は宇宙の塵と消えた……俺たち3人と、この星に送られたお前以外はな」

驚愕と共に神妙な表情で聞いていた悟空たちだつたが、最後の一言を聞くとやや戸惑つた雰囲気に変わる。

そして、一斉にフーイの方を見た。

空気の変わりようを感じたラディツツは、怪訝そうな顔でフーイの方へ視線を移す。真正面から見つめられ、如何にも仕方なさそうな、不満げな様子で彼女は口を開いた。

「あのさ、そのしつぽがサイヤ人の特徴なんだよね」

「ああ、そうだ」

「それで、あなたの仲間3人と、悟空以外は全員死んじやつたんだよね」

「だからそういうてるだろう」

「でもさ……」

「言いにくそうに一度口をもごもごとさせてから、遂にフーアイは言つた。

「私も、元は悟空と同じ、しつぽが生えてたし、多分月を見て大猿になつたこともあるんだけど……」

「な、なにイ!? ま、まさか、ありえん！」

「……はつ、まさかっ!? ポッドの故障で居所が分からなくなつて飛ばし子か！」

突然何かに気付いた様子で大声を上げるラディイツツに、彼女は首をかしげる。  
「何それ、どういうこと?」

「カカロットが地球へ送られたのとそう変わらない時期に、もう一人この銀河系へ飛ばし子が送られている。」

しかし、ポッドが激しく損傷したというシステムの緊急信号を最後に、発信が途絶えていた。

てつきり死んだものだと思つていたが……」

そこまで言うと彼は再びフーアイを眺め、にやりと笑った。

心の底からの純粹な喜びを感じるのになぜだろう、酷くうすら寒い感覚を同時に覚えるのは。

「まさか地球に辿り着いていたとはな……！　ふはは、なんて幸運だ！」

「おい女、ちようどいい、お前も俺と一緒にこい！」

「はあ!?」

余りの横暴さに、つい彼女は素つ頓狂な声を上げる。

やはり気にする様子も無く、というか視界に入っていないのか意識の外にあるのだろう、ラディツツは再び悟空へ向き直った。

「なあ、カカロット。実はついこの前、非常に高値で売れそうない星が見つかってな！ 攻めたいのだが3人ではちょっと苦戦しそうなんだ……」

そこで思い出したのがお前の事だ。まだ戦闘力が完全ではないが、3人に加わってくれれば何とかなる……そこの女も加わればさらに確実だ』

苦々しい弟の顔を見て、彼は親し氣に明るい調子で言う。

有無を言わさない、脅しの色合いも十二分に含めて。

「目を覚ませカカロット！　楽しいぞ！　サイヤ人の血が騒がんか!?」

しかし、悟空は殆ど即答でその誘いをはねのけた。

向かい合っているだけでも恐ろしさを感じる程、歴然とした力の差を感じながら。

「バカを言つてろ！ そんなことオラ死んだつて手を貸すもんかっ！」

「ふ……なるほどな…… 女、お前はどうだ？」

「私にはフリーって大事な名前があつてね。それを呼びもしないやつとお仲間なんてお断り」

「そうか……ところで」

ふつと、視線が移る。

悟空とフリーの背後、縮こまつて震える小さな姿。

それに気づいたブルマが咄嗟に少年を手元に引き寄せ、覆い隠す。

「さつきから気になつていたのだが、後ろにいるのはお前の子ではないのか？」

「ち、ちがうつ!!」

「とぼけても無駄だ。あのシツボはなんだ？ サイヤ人の血を引いている証拠じやないか」

背筋が凍える。喉が酷く乾いて、口の中で舌が張り付く。

今にも膝が笑いだしそうな緊張。

「父親のお前がなかなか聞き分けが悪いんでな、ちょっと息子を貸してもらうとするか……」

言い終わるよりも早く、動いたのは彼から見てちょうど死角にいた天津飯だった。  
砂浜を音もなく踏んで飛び、頭上から真っ直ぐに足を穂先とし、全身をやりのようにして鋭く落下する。

その動きに呼応して悟空も拳を突き出す、が――

――天津飯は蠅のように叩き落とされ、そのまま氣を失った。  
膝蹴りを食らつた悟空は軽く宙に浮いて、ひっくりかえりうめいている。

「天さん！」

「おとうさ――ん！」

「おつと」

餃子はわき目も降らず兄弟子へ飛びつき、泣きそうになつて息があるかを確かめていた。

倒れた父に駆け寄ろうとする悟飯の腕を掴んで捉えると、ラディツツは子猫か何かのようになつて息があるかを確かめていた。

「カカロットよ、子供は預かつておく。生きて返して欲しければ、そこの女を連れて俺たちの仲間になるんだな……」

ラディツツの要求は一つ。

仲間になる証として、明日のこの時間までに百人の地球人を殺し、この場所にその死

体を積んでおくこと。

「明日を楽しみに待つてゐるぞ。弟の子供だ。出来れば俺も殺したくはない、ふつふふふ……」

そうして最後にもう一度、フーアの方をちらりと見た。

「なんだ、何か言いたいことでもありそうだな」

「……いいや、別に、何も」

笑う。フーアは笑う。

歯をむき出しにして、見せつけるように笑う。

彼女の笑顔は、猿の威嚇によく似ている。

それを鼻を鳴らして馬鹿にすると、悟飯を連れてラディッツは飛び去つて行つた。

# 其之四十一 共闘

「ち……ちくしょう…………!! ふ…………ふざけやがつて…………!!」

ラディツツが悟飯を連れ去り、あとに残された悟空は這いつくばつて地面を殴つた。  
悔しさの余り涙を流し、全身を震わせる。

フリーは飛び去つた姿がすっかり見えなくなつてからようやく、天津飯の方を向いた。

「餃子！ 天津飯は？」

「い、息はしてる……けど、多分しばらくは目を覚まさない……」

「弟子の面倒ばつかり見て自分の修業さぼつてるからっ！」

「フリー！」

「わかってる！」

思わず叩いた憎まれ口を責められ、怒鳴るように言い返すと彼女はしゃがみ込んで髪の毛をかきむしめた。

天津飯が動いたのは自分が死角にいることを理解していたのと、友人である悟空の息子を見捨てられなかつたから。

そして何より、フーアイがラディッツの標的に加わったからだ。  
だから、彼女は動けなかつた。

彼とフーアイの間に親しいつながりがあると分かれば、悟飯のように人質にされる恐れ  
があつた。

ぎりぎりと音が鳴りそうなほど歯を食いしばり、喉の奥からうめき声を出す。  
「どうやつてぶつ殺してやろうかあいつ…………！」

「……シッポだ……」

何とか起き上がり、悟空が言う。

「あいつの弱点は多分シッポだ……シッポを強く握れば力が抜けてしまうはずだ。  
オラがそうちつた……」

「なるほどね、でも私達一人だけじゃ、ちょっと厳しいよ」

「俺もいくぞ」

フーアイの言葉に手を挙げたクリリンだが、その額には脂汗が浮いている。  
いいや、ダメだと悟空は厳しい調子で申し出を拒絶した。

「さつきあいつに殴られたダメージは結構なものだつただろ」

「大丈夫さ、餃子が庇つてくれたからな」

何かを言いにくそうにする悟空を無視し、つかつかと歩み寄ると、容赦なくフーアイは

クリリンを突き飛ばす。

驚いた様子でなすすべもなく尻もちをついた後、彼は立ちあがろうとして、にぶくうめいた。

「寝ときな。ブルマを庇つたせいでろくに防御も出来てなかつたでしょ」「このぐらい……！」

「無理してついてきたつて、何もできずに殺されるだけだよ」

「その通りだ」

聞きなれない声に、一斉に全員が声のした方を振り返る。

そこに立っていたのは、独特の魔の雰囲気に異様なたずまい、忘れもしない顔。

悟空との対決は前回参加した天下一武道会でのことで、再会は実に5年ぶりとなる。

「ピッコロ……！」

「お、おめえどうしてここに……!?」

思わず身構える面々をよそに、彼は少しも緊張する様子がなく、自然な足取りで悟空たちの方へ近づいた。

「奴の後をつけて來たのだ、お前らふたりで行つても奴は倒せん。この俺が一緒に行つてやる」

「どういう風の吹きまわし？　急に地球の平和を守ることに目覚めたとか？」

ニヒルに笑つて軽口をたたくフリーに顔をしかめ、ピツコロは馬鹿を言うな、と鋭く怒鳴つた。

「平和やお前と孫悟空、ましてその息子などどうでもいい……俺の狙つてゐる世界征服には奴が邪魔なだけだ！」

貴様らと組み、やつを片付けたら……もちろんその後は貴様たちをブチ倒して今度こそ世界を頂くつもりだ！」

「……そうはさせねえ」

静かだがしつかりとした口調で、悟空が答える。

「そうはさせねえけど、三人が組むつてところまではいい考えだ……

その方法しかねえみてえだな……」

「そういうことだ……我慢するんだな、俺様だつて貴様らと組むなんてヘドが出そうだぜ」

三人は互いに互いを見つめると、頷き合いもせずに各自に出発の心構えを整えた。

悟空はブルマからドラゴンレーダーを受け取り、筋斗雲に乗り込む。

「ふざけるな、俺様のは貴様らのような情けない舞空術とは違うんだ。

フリーのやつこそどうなんだ、まさか飛行機何ぞというふざけた乗り物でついてくる

つもりりじやないだろうな

「ご心配痛み入るけど、私だつて舞空術は鍛えてるから。二人共振り切つておいてつ  
ちやうかもよ？」

「ほざいてろ」

笑う。悟空は笑う。フーアも、ピツコロも笑つた。

空を切り裂いて、三人は飛び出していった。

周囲の期待とは裏腹に、死の予感をじつとりと腹の奥に抱えながら。

ゞ・ゞ・ゞ・ゞ

「わ——ん！　わ——ん！」

「うるさいぞ！　いつまでもめそめそしおつて！

お前も勇敢なサイヤ人の血を引いているんだぞ！」

カメハウスから遠く離れた草原、穏やかな景色が広がっているそこには場違いなもの  
がある。

一つは持主が殺され、無残に置き座られた軽トラック。

もう一つは、巨大なクレーターとその中央に鎮座する丸い、乗物のような何かだった。

「この中に入つてろ！」

泣きわめく悟飯に顔をしかめ、面倒くさそうにその球状の物体へ放り込むとラディツツは軽く息を吐いた。

食事でも調達しに行こうとする彼は、悟空たちが自分の意志に背くなど思つてもいい。い。

圧倒的な力と恐怖、これを前にして逆らう存在がいるなど、疑いもしないのだ。それは、実にサイヤ人らしい考え方だつた。

自分達がどれほどの相手に対しても決して諦めず、牙を研ぎ続けることを、すっかり棚に上げてしまうのも含めて。

「むつ？」

クレーターから一步足を踏み出した途端、スカウターから警告音が発され、彼は眉をひそめる。

少なくともこの地球上に彼が警戒しなければならないような、戦闘力の存在がいるはずはないのだが。

そんな風にのんびりと構えていたラディツツは、しかし、ボタンを操作し、詳細情報を確認して絶句した。

「戦闘力710！ 近いぞ！ どこだ！」

きよろきよろと首を動かし、発信源を確認すると今度はため息をつく。

「あのガキだと!? くそ……故障か……！ 脅かしやがって」

コツコツと耳元の機械を軽くつつくとボタンを押し、一度電源を入れなおす。肩の力を抜いたのもつかの間、悪態をつき終える暇もなく、再び電子音が甲高く響いた。

「まだだ！ 戰闘力710……ちいっ、やはり故障だ……！」

ん、反応がもう一つ……！ ここに向かってくる！」

スカウターが指示示す方角に目を向け、さらに詳細を確認しようとする。

ひとつ、ふたつ、みつつ。近づいてくるスピードもかなりのものだ

「一つはカカロットと同じ戦闘力……しかし、あいつが来るはずはない。

勝てる見込みが0に近いのはよく分かつたはずだ……第一この場所がわかるわけがない……」

再びため息をつくとあれこれと設定を弄つてみた。

けれど、反応も数値も少しも変動せず、相変わらず警戒音はなり続いている。

余りのうるささに軽く頭痛すら感じられた。

「参つたな……完全に故障だ……」

スカウターは非常に便利な道具で、彼らの作戦行動はこの通信機兼探知機の存在あり

きで行われる。

それが故障ともなれば、かなりの面倒を強いられることは考えるより先にいくつも想像がついた。

こんな僻地の星でたまつたものではないと、そう思つた瞬間、視界の端で人影を捉える。

ひとつ、ふたつ、みつつ。

そのうちの一つは、遠くからでも見間違えることはない。

カカロツト、腑抜けてしまつた弟だ。

しかし、差し迫つた驚きはそこではなかつた。

「故障じやないのか……!?　いや、違う……！　絶対に何かの間違いだ！」

焦つた表情で振り返り、彼はポッドを——その中に閉じ込めた悟飯を見る。  
額に冷たい汗すら浮かべて。

「あんなガキの頃から戦闘力710などということはありえん……！」

その間に悟空たちが自分のすぐそばに降りたつたのがわかり、ラディツツは軽く頭をふつてそちらへ向き直つた。

残りの二人はカメハウスにいた、もう一人の生き残りと、荒野で出会つたナメツク星人。

「なるほど、もう二匹は貴様らだつたか。どうやつてここを知つた  
「教えてやるもんか！」

厳しい表情の弟に、よからう、とラディツツは酷薄な笑みを浮かべる。  
「では違う質問をしてやる……貴様ら、一体ここへ何しに來た」  
「決まつてるだろ！」

悟空はこぶしを握り締め、力強く言い放つ。

それまで無言だつたフリーイも彼に向かつて鋭く指をさした。

奇しくもそれは、どことなく今よりもずっと幼かつたころ、2人で旅をしていた時を  
思わせる。

「オラの子を取り返しに來たんだ！」

「お前を殺しに來たんだよ」

## 其之四十二 恐怖と矜持

「ゞちやゞちや言い合うのはそれぐらいにしておくんだな」

三人のやり取りに言い捨てる、ピツコロはターバンとマントを脱いだ。  
見た目に似合わず、重々しい音と軽い土煙を立てて地面に落ちる。

悟空は感心した様子で、フーイは半ばあきれた様子で、へえつと声を漏らした。  
「ピツコロ……おめえも重いやつ着て鍛えてたのか？」

「ああ、貴様のようにな……」

「そうか……お前も必死で鍛えてんな……とりあえず味方だつてのは頼もしいよ」

そう言いながら悟空もずつしりと重たいインナーと靴を脱ぐ。

(むつ！ 戦闘力がアップした……！)

スカウターを見ていたラディイツツも数値の変化にやや反応を示した。

彼にとつては雀の涙程度の変化ではあつたが。

三人の視線は自然と、腕を後ろ手に組んだままのフーイに移る。

しばらく怪訝そうに各々を見返していた彼女だが、無言に耐え切れなくなり、何  
？ と悟空へ聞いた。

「フリーは脱がねえんか？」  
「脱ぐか！」

怒鳴った彼女に今度はピツコロの方が怪訝そうな顔をする。

「重りも脱がずに奴と闘うつもりか？」

「そもそも着てないよ、そんな服。

热血ド根性の亀仙流と违つて、鶴仙流は効率重視なんだよ！」

「なつ」

その言葉を聞いてピツコロは後ろへよろけそうなほどに、強い衝撃を覚えた。

彼には親はなく、師も無い。したがつて彼は教育や体系だつた教えなども当然受けたことがなく、加えて人里にも受け入れられなかつたため、常識と呼べるものなども当然身についていない。

つまり、物事に対しても判断するための『普通』の基準がなく、非常にまっさらで素直なのだ。

ある意味では赤ん坊と全く同じと言える。単純な年齢の話であれば、そのものと言つてもいい。

要するに、彼にとつては前回の天下一武道会で目にした悟空の重りを使つた鍛え方が普通であつて、彼と同等の実力者であるフリーも当然同じ鍛え方をしているものだとば

かり思つていたのだ。

仮にも神様のかした修行であるし、悟空は以前もそう言つた鍛え方をしていたことを口にしていた為、勘違いしてしまうのも無理はない。

加えて、聞き捨てならない言葉が二つもあつた。

「今の発言を取り消せ！　俺は亀仙流などというちんけな流派ではないし、まして熱血ド根性でもない！」

「亀仙流じやないのは言われなくとも知つてるよ……　熱血ド根性は、まあそりでしょ。熱血ド根性だよ」

「なんだと!?」

天下一武道会などという正々堂々の勝負の場で白黒をつけようとするあたりが、フレイの基準からすれば熱血である。

悟空たちが邪魔なのであれば、暗殺でも毒殺でも何でもして、さつさと殺してしまえばよかつたのだ。そうすれば今頃地球はピッコロ大魔王の天下だつただろう。  
わざわざ常日頃から重たく邪魔な重りをつけて過ごして修行を積むあたりも、ド根性以外の何物でも無かつた。

ちなみに悟空は亀仙流をちんけと言われ、明らかにムツとしていた。  
思わず言い合いに参加しかけたその時。

「うるさいぞ貴様ら！さつきからごちやごちやと！」

余りにも締まりのない雰囲気にラディッツがキレた。

「その程度の戦闘力でやつてくる身の程知らずが、戦いの前にふざけやがつて。もういい、カカロツト、貴様はただの足手まといだ……」

「まー、そう怒ることないじやん」

宥めるように手を穏やかに押し下げるジエスチャ―をしながら、ひょうひょうとフーアは彼へ近づく。

足取りは軽く、構える様子も少しもない。まつたくもつて無防備だ。  
苛立ちを隠す様子もなく、ラディッツは彼女を睨みつける。

「お前もだ。ただでさえ貴重なサイヤ人の女が生き残っていたと思えば――」

ひゅつとフーアの姿が消え、次の瞬間には高い位置に飛びあがり正確に顎を狙つて蹴りを繰り出す。

が、そのまま攻撃の途中の不自然な姿勢で空中で静止し、停止する。

すっかり我が物にした残像拳をおとりに、横から低い姿勢で腹部を狙つて手刀を差し込んだ。

二次元的にも三次元的にも、完全に死角をついた一撃、ピッコロや悟空の予想すら超えた、不意打ちだった。

そのはすだつたのだ。

「——こんな腑抜けだつたとはな」

「ぐつ」

あつさりと手首を掴まれ、慌てて抜け出そうとするが、びくともしない。

もがく彼女をすつかり見下し、ラディイツツは人形でも投げるような軽さで地面へ叩きつけた。

「フリー！」

「カカロット、貴様は我が一族の恥だ！ 死んでしまえ!!」

殴りつけるような怒鳴り声に、悟空とピッコロは咄嗟に構える。

にもかかわらず二人の間を抜けて飛び込んできたラディイツツはあつさりと背後へ回り、2人が反応するよりも早くしたたかに背中を肘で打つた。  
その背後からさらに、倒れていたはずのフリーが思いつきり地面を蹴つて突進するもの、あつさりと払いのけるように殴り返された。

三人は各自に攻撃を食らいながらもとつさに飛びのいて向き直るが、体のダメージ以上のショックに息をのみ、汗をかく。

「ほう、防御力だけはなかなか高いようだな……女の不意打ちのセンスも悪くはない。そんな小技に頼るなど、雑魚の証拠だがな」

「よかつたじやないか、フリー、褒められているようだぞ」

「うるさいよ、ピツコロ」

引き攣つた笑みで軽口をたたき合はるのは、最早笑うしかないほどに力の差をありありと感じているからだ。

「警戒でも予測でもなく、シンプルにスピードで不意打ちに対処されるとか、自信無くすわ。

どうなつてんのこいつ。宇宙一強いんじやない？」

「……ふ、ふははは！ 僕が宇宙一だと、馬鹿を抜かすな」

心底おかしそうに、腹の底から高らかに笑い声をあげる。

「俺の他に生き残った二人のサイヤ人は、さらに戦闘力が上なんだぞ」

悟空、ピツコロ、フリーの三人は思わず表情を失つた。

それを見たラディイツツはよほど愉快だったのかさらに上機嫌になり、笑い続ける。

「サイヤ人の恐ろしさを今頃知つてももう遅いぞっ！」

折角の忠告を聞かずには向かうような愚か者には死あるのみだ……」

「く、くそつたれ……こいつよりも強いのが更に二人……どうなつてやがる……」

「くはく、ま、参つたな……聞かなきやよかつたぜ……」

初めて聞く悟空の弱音に、ピツコロが無理やりに息を吐いて笑い声に近い音を出し

た。

「わくわくするだろ、孫悟空……」

「へへ……わりいな、今度ばつかりはわくわくしねえよ……おつそろしくつてよ、ガタガタしてらあ……」

「馬鹿だね、そういう時は、嘘でもわくわくするつて言つとくもんだよ」  
乗り掛かる恐怖に呼吸が詰まりそうになりながら、それでも悟空は地面を踏みしめて怒鳴る。

「それよりオラの息子はどこだ！　どこに隠しやがった！」

「隠したわけではない、ギヤーギヤーうるさいから閉じ込めただけだ。貴様らの後ろに穴があるだろう。

まだ生きているとは思うがな」

それを聞くと悟空は舞空術で軽く浮き、クレーターの中心を確かめる。

そこには確かに乗物らしき球体の物体があり、その中から悟飯の気が確かに感じ取れた。

「めいっぱいに力強く言う。虚勢とも空元氣ともいえるかもしかなかつたが、それは彼にとつて父親の役割であり、矜持だつた。

「待つてろよ悟飯！　父ちゃんがすぐに助けてやつからな！」

優しい言葉を心底馬鹿に仕切つた高笑いでかき消して、ラディツツは言う。

「デタラメを言うんじゃないぞ！ 助けられるわけがなかろう！」

その前にお前たちが死んでしまつてはな！」

静かに地面へ下り立つと、悟空は構える。

それに倣うようにフレイも構えをとり、ピッコロも、ぶしを握つた。

「よ——し、やるぞ！」

## 其之四十三 ピツコロとフーアイの秘策

掛け声と共に三人は三様にラディツツへ挑みかかる。

悟空が鋭いステップで踏み込めばピツコロが同時にケリを放ち、フーアイの氣弾が合間に縫うように差し込んだ。

ピツコロが先頭を切つて殴り掛かればフーアイの手刀が首筋や手足の腱を狙い、悟空が大技を放つ。

土煙を断ち切つて上空からフーアイの全身が矢となつて落下し、悟空の拳が弾幕のように激しく撃ち込まれ、ピツコロがその背後を狙つて真つすぐに体当たりをくらわした。しかし、だ、そのすべてをこともなげに避けるどころか受け止めて、ラディツツはあつきりと彼らを打ち据える。

それも、背後に回られた瞬間に、わざわざその背後へと回り直して。

「クソッ、性格悪すぎ！」

ののしりながら、フーアイの指先が、頭上高くへ上がつたラディツツの手のひらを狙う。攻撃の瞬間をつくのもまた、彼女の得意技だった。

自分の思う通りのリズムを狂わされると、手練れでもあつさりと調子を崩すものだ。

が、今回はその作戦も失敗に終わる。

それはただ、余りにもシンプルな理由。

ラディツツの速度は彼女を大きく超えていた。

どどん波の気を溜めきるよりも先に、彼の両手から氣彈、と呼ぶには激しすぎるエネルギーの塊が放たれる。

武術という粹を超えた、兵器とでも呼ぶべき力。

単純な破壊力だけでも、都を一瞬で更地にしたかつてのピッコロ大魔王の爆力魔波に勝るとも劣らないだろう。

それが収縮し、研ぎ澄まされ、たつた三人を狙うのだから。

「やべえっ！」

狙っていたがゆえに彼の動きを注視していたフーイと、僅かに残り二人よりも反応速度で勝る悟空はギリギリのところで光柱を避けた。

が、反撃に移ろうと反転したてだつたピッコロは、ギリギリのところで間に合わない。胴体こそ無事だつたものの、片腕に直撃する。

そして、当たつたその部分は文字通り消し飛んでいた。

跡形すらなく、ハサミで紙を切つた後のようにさっぱりと。

爆風に吹き飛ばされ、それでも悟空とフーイは何とか立ち上がりラディツツのいたは

ずの場所へ顔を向ける。

しかしそこには何もなく、ただのんびりとした青い空と、白い雲があるばかり。

「ここだ！」

背後からの声に振り向くほどの時間もなく、勢いよく蹴られ、殴られた背中。地面へめり込み、顔がするるほど打ちのめされる。

「くつくつく……三人がかりでこれじやあまるで話にならんな……」

何とか立ち上がるも、既に満身創痍に近かつた。

フリーも悟空も、生まれてこの方、真剣勝負でここまで子ども扱いであしらわれたことはない。

ピッコロにしても、大魔王の全てを受け継ぎ、世界の全てを牛耳るつもりで今日まで生きてきたのだから。

「孫悟空……フリー……貴様ら新しいとつておきの技なんかないのか……」

「へへ……すまねえな……はつきりいつてねえよ……」

「戦車の運転ならできるようになつたけど……今からでも持つてくる？」

「ちつ、手を抜きやがって……オレは眞面目に修行して、新技開発したつて言うのによ

……」

「……へえ、どんなやつ？」

ぼそぼそと言葉をかわす悟空たちを、馬鹿にして煽りはするものの、ラデイツツが手を出す様子はない。

所詮、格下のやることと侮っているのだろう。

少なくともそれを責められないだけの、圧倒的な力の差が彼らの間にはある。

「……新技はないけど、作戦ならあるよ」

にやりとフーイが笑い、彼らは各自に跳んだ。

「魔貫光殺砲!!」

奮い立たせるように技名を叫ぶと、ピッコロは構えをとる。

その間にフーイと悟空は力を振り絞つてラデイツツへと挑みかかった。

汗を振り絞るような激しい連撃とコンビネーションが続く。

真つすぐに向かってくる悟空の攻撃と、正確に急所を貫こうとするフーイの攻撃は、相性がいい。

けれどそれは、敵とある程度対等であつて初めて通用することだ。

ピッコロを交えた三人でも子供扱いだつたのだから、一人減つたとなれば勝負は輪をかけて一方的になる。

殴られ、蹴られながらも彼らは必死に耐えた。

その間に、ピッコロは残された片手で極限まで気を集中させる。

体が吹つ飛ばされた瞬間、その隙を使つて彼らは独特的の印を結ぶ。

悟空は手のひらを腰のあたりに構え、フリーは素早く両手を動かした。

「か……め……は……め……」

「馬鹿な！ 戰闘力が上がっていく！ こいつら……戦闘力を一点に集中させて高めることができるのか……！」

スカウターの数値に慄いたラディツツは、ふつとピッコロの方へ眼を向け、思わず喉を引きつらせる。

「こ、こつちは戦闘力1020……30……し、信じられん、まだ上がっている！」

「波——つ！！」

先ほどまでとはけた違ひの力に、ラディツツは思わず背を向けて避ける。

しかし、悟空のかめはめ波は軌道を変え、彼を捉えて離れない。

舌打ちと共に停止すると、片手を向け——しつかりと腰を入れ、受け止めた。

散らされたエネルギーで爆炎が上がるものの、ラディツツ本人は全くの無傷だった。せいぜい、受け止めた手がしごれた程度だろう。

「な、なんてやつだ……」

「今度は俺がプレゼントしてやる！」

鋭い気弾が悟空を撃ち落とした瞬間、フリーとピッコロが同時に技を放つ。

「氣功砲——ツ!!」

螺旋に彩られたまがまがしい光線と、命を消費する決死の一撃が放たれる。眩い光を放つほど爆発に、ラディツツの体が視界から焼き消えた。

仕掛けはこうだ。

ピッコロの新技は貫通力に優れ、直撃すればラディツツですら一撃で仕留めるのはまず間違いないらしい。

引き絞った一撃は格段の威力を持つ。

ホースと水をイメージすれば分かりやすいだろう。

ホースの口を遮るものが何もない時、水の勢いもそれほど強くない。どぼどぼと滑らかに足元に落ちるだけだ。

一方、指で押してホースの口を狭めれば、思い外、遠くまで勢いよく水は飛んでいく。しかし、似たような特性をもつどんどん波をつかうフリーは、その弱点を見抜いていた。直線的な一撃は避けやすく、それほどの距離の移動も必要としない。達人であればあっさりと、首の動き一つで回避してみせる。

そこで、フリーは一計を案じた。面の攻撃である氣功砲を組み合わせるのだ。これはもともと、鶴仙流のために彼女が考案した戦法だった。

どどん波だけであれば、防ぐよりも避ける方が容易い。しかし、面の攻撃である気功砲は、避けるのは難しく防ぐ方が無難だ。

結果、相手は一瞬防御するか避けるか迷いが生じる。

そのタイムラグさえあれば、点の攻撃はその速度を生かして必ず命中する。事実、ラディツツにもその迷いは生じ、結果として魔貫光殺砲を避けきることは出来なかつた。

フレイの作戦は成功したのだ。

そう、彼は完全には避けきることができなかつた。

意味がなかつたわけではない。事実、ラディツツはそれなりのダメージを負つている。

恐らく片腕は使い物になるまい。

問題は、片腕しか仕留められなかつたことだ。

「……ち、くしょう……」

呻きながらフレイの体が緩やかに落下した。

全力の気功砲ではないから命を失いはしないものの、それでも渾身の力を込めたのだ。

「お、俺の魔貫光殺砲を、避けやがつた……な……なんてヤローだ……」

「きさくまら許さん……許さんぞ……！」

もうお遊びはこれまでだ……一瞬で消してやる！」

怒りに任せ殺意を爆発させたラディツツに、ピッコロすら死を覚悟したその瞬間。

「お……おおおお……う…………！」

「ゆ……ゆだんしたな……」

立ち上がった悟空が、彼の尻尾を掴んでいた。

# 其之四十四 霹靂

「き……きさま……いつのまに……」

「ピッコロ！ い、今だつ！ もう一回今のやつを……！」

「でかしたぞ悟空……！ しつかり尻尾を捕まえておけ……！ この技はあと一回が限界だ……！」

「……馬鹿、だから、そういうことを相手に聞こえるように言うなよ……」

尻尾を掴みながら呼びかける悟空へ、ニタリ笑つてピッコロが再び構える。地面にへばりつくようになどり、悪態をつきながらもフーアイすら笑っていた。力を抜き、ようやくまともに一呼吸をしたその時。

「……カカロツト……貴様、たつた一人の兄を殺す氣か……！」

何をバカなことを、とピッコロは思つたし、フリーもそう感じた。

殺す気も何も、先に仕掛けてきたのは向こうなのだ。  
しかし。

「う、うるせえ！ お前みたいに酷い奴は兄貴じゃねえって言つただろ！」

「も……もうやめた……！ オレは心を入れ替えたぞ……おとなしくこの星から引き揚

げる……」

悟空は、明らかに動搖していた。

「おい、嘘だろ悟空！ でまかせにしたってほどがあるじゃん！」

「そうだ、騙されるなよ孫悟空！ そいつがそんなことをするはずはない！」  
「た……頼む……信じてくれ弟よ……お…俺は酷いことをしてしまった……  
だ、だが約束は必ず守る……」

「…………」

恐らくは、駄目でもともとという奴だろう。

尻尾はその気になれば自分の意志でたちきれるが、そうしてしまふと再び生えてくる  
まではそれなりに長い期間、大猿になることができない。

ラディツツは先ほど、魔貫光殺砲を一撃打つまでの間に、かなり長い時間氣を溜める  
必要があることも見ていた。

だから、尻尾を切らずに済むならギリギリまで粘つてみようと、そんなくだらない命  
乞い以下の言葉を。

それでも悟空は、耳を傾けずにいられない。

「尻尾をはなすなっ！ やつの作戦だ！」

「そんなしようもない台詞、真面目に受けつとつてんじゃないよ！」

「お……お願いだカカロツト……！信じてくれ／＼っ！」

「…………」

するりと、両手が尻尾から離れる。

「バカッ！」

「孫悟空!!」

瞬間、彼は勢いよく蹴り飛ばされ、軽々とふつとんだ。わざわざその体を追いかけて踏みつけ、ラディツツは勝ち誇って笑う。足の下で悟空は、なすすべなく呻いた。

「き……きたねえぞ……！」

「は——つはつは！　こりやあいい貴様のようなマヌケは珍しいぞ！

やはり貴様は戦士にはなれんぞ！

俺は違う、俺は一流の戦士だ……！　見本を見せてやろうか？え？」

わざわざゆつくりと力を籠め、存分にいたぶりながらラディツツは弟に悲鳴をあげさせること。

当然ながら彼が自由の身となつてゐる状態では、魔貫光殺砲を撃とうがまた避けられて終わりだろう。

ピッコロは手出しができず、苛立ちで青筋を浮かべながら、奥歯がつぶれそうなほど

強く噛みしめた。

フリーも必死に立ち上がろうとするが、上半身を起こすことすらままならない。骨や肉の潰れる嫌な音と、悟空の断末魔じみた悲鳴だけが何もない草原にこだまする。

「うぎや——つあうう…わくくつ」

「は——つはつは！つぎは貴様らの番だぞ！」

——ピくくツピピピ——

愉快そうなラディツツの声を断ち切つて、スカウターから甲高い電子音が響いた。それは、見知らぬものでも聞き間違えようのない、明確な警戒音。

発生源の詳細を確認するよりも先に、つい彼はクレーターへ顔を向けた。  
正確にはそのクレーターの中央、ポツドのなかの、幼い少年へ。

「なつ」

腹の底に響くような重たい破壊音と共に、悟飯はポツドを内側から突き破つた。力強く地面を踏みしめる彼は、泣いている。

泣いているが同時に、とてつもなく怒っている。

「お父さんを……いじめるな——つ!!」

小さな体は弾丸のように、真っすぐにラディツツへ向かつて突進していく。

大人たちが思わず全員目を奪われたのは、いや、見ている事しかできなかつたのは、彼があまりにも早すぎたせいだ。

あのラディイツツですら反応ができないほどに。

猛スピードと小さいとはいえた人一人分の質量を食らい、彼は軽く吹っ飛んでたらを踏んだ。

その瞬間に悟飯と悟空は目が合い、安心からか少年は正気を取り戻してしまう。肩から力が抜けると、そこにいるのは年相応に引っ込み思案な、ただの子供でしかない。

既にスカウターの警戒音は消えていた。

「……このガキ……感情と共に戦闘力がガラツと変わりやがる……」

攻撃を食らった腹部を手で押さえ、呻きながらよたよたとラディイツツは彼へ近づいた。

一切の容赦なく、寧ろ悟空たちとの戦闘ですら見せていなかつたほどの本氣で、悟飯を強く殴りつける。

小さな体は簡単に吹っ飛んで、地面へあたり一度バウンドすると目を回して気を失つた。

「な……にを……！ やめろ……！ やめてくれ……、あ、あいつは……！」

「まだ子供だからとでも言いたいのか、冗談じやない……あのガキは貴様らよりも戦闘力は上だ！」

喉を引きつらせたラディッツは、額にじつとりと汗をかいている。

そうだ、間違ひなく彼は恐怖していた。

悟飯は明らかにまだ、戦い方どころか物事さえわかるか怪しいほどの幼さだ。

にもかかわらず、今既にここまで強いのであれば、将来は一体どうなる。

あと10年もすればナッパ、いやベジータすら超えるほどに力をつけるかもしれない。

気に食わない、全く気に食わないと自身を馬鹿にする二人を思い出し、ラディッツの表情が歪んだ。

何よりも腹立たしいのは、とこぶしを握り締める。

恐らく悟飯がどれほど強かろうと、父親の甘さを受け継いでいては、決して戦士にはなりえまいということだ。

それは生かしておけば、いつの日かラディッツ達の前に立ちはだかるだろうという意味でもあつた。

「パワーの上手い使い方を知らない今のうちに、殺しておく……！  
心配するな、すぐに会わせてやる。あの世でな……」

悟空はそこまで深く、ラディッツの考えを読み取れたわけではない。

ただ彼にとつて重要なのは、恐ろしい敵が息子を、確かな決心の元に殺そうとしている事だつた。

それ以外の事は、どうでも良かつたのだ。

背後から抱きつかれたラディッツは振り払おうと必死にもがいたが、悟空の体はびくつく。

ともしない。

「きつ貴様……！ま、まだそんな力が……！」

「ピ、ピツコロはやくあの技を……！」

「そうくるだろうと準備していたぞ！ だがもう少し時間がかかる！

なぜ尻尾を捕まえなかつたんだ……！」

「そ……その気になれば尻尾は自分で切ることができる……！」

「し……知つていたか……！」

暴れるラディッツは、本来はその気にならずとも悟空の事など簡単に振り切れるはずだつた。

しかし一度目の魔貫光殺砲と氣功砲でそれなりにダメージを受けていたこと、先ほど

の悟飯の一撃をまともに食らつたことで、かなりパワーが落ちてしまつてゐる。

「はなせカカロツト！ バカめ！ くつついていては貴様もただではすまんぞ……！」  
「へへ……オラも一緒に死んでやらあ……！」

その言葉と決意に戦慄し、彼は無理を承知で残つた片腕に力を溜める。

どうせ力づくで引きはがせないのならば、一か八か氣弾での一撃にかけるしかない。  
「はあ、はあ……くつ、食らえ、カカロ……ツ？」

しかし、その覚悟を嘲笑うように手のひらを真つすぐに、光線が貫いて、彼の氣力を  
一瞬で散らした。

「は、ははは……ばあか、大人しく、死んどけ……！」

「お、女くくツ!!」

人差し指だけを何とか持ち上げ、真つすぐに指さす彼女にラデイツツが吠える。  
「待たせたな……覚悟はいいか……」

「やれ——ツ!!

「魔貫光殺砲!!」

螺旋をまとい、真つすぐに光柱がラデイツツと悟空を貫いた。

## 其之四十五 目指せ界王星

ラディツツの死亡を見届けると、すぐにフーアは氣を失つた。

彼女が次に目覚めた時には、既に悟飯はピッコロによつて連れ去られていた。  
更に強いサイヤ人が1年後に攻めてくるという話を聞き、悟飯を取り返そうとするク  
リリン、天津飯をフーアは止めた。

「悪ぶつてるけど熱血ド根性野郎だから多分大丈夫」  
「むしろピッコロの心配をした方がいい」

などの一切説明になつていない説得に、彼女が天津飯に叱られるという一幕はあつた  
ものの、最終的に悟飯の訓練はピッコロに任せることに。  
そして面々はカリン様の伝言に従い神殿へと集まつていた……！

天をも貫かんカリン塔のさらに上部。  
雲を海と見下ろす、その高さでは昼間でも空はどこまでも深く、暗く、藍色に輝いて  
いる。

神殿の景色は、神秘的ではあるが妙に温もりを感じる生活感があり、どこか異星の高

尚な宇宙人の住まいだといわれれば、そうだと受け取れそうな雰囲気があつた。

「天津飯ならまだしも意外だな、フリーイ……お前がここへ修行に来るとは」

「別に、神様に教わりに来たわけじゃないよ」

フリーイの不遜な態度に餃子はやや呆れたが、それは少しも顔には出さなかつた。

ピツコロに似ているだとか元は同一人物だとかは関係なく、この善人ぶつた態度や正しさへのこだわりが、あまり好きではないのだろう、と彼は知つてゐる。

神様はその寛容さゆえか、それとも度々の邂逅によりすっかり慣れてしまつたのか、すこしも表情を崩さない。

「ならばまた手合わせに訪れただけか？　しかし下界の修行では1年で……」

「悟空はどこに行つたの？」

言葉を遮られ、少し口を噤んでから神様は結局、持ち前のやさしさと誠実さで、質問へ正直に答えた。

「あの世から続く蛇の道の遥か彼方先にある、界王星というところじや……そこには全宇宙の神々の頂点に立つ界王様がいらっしゃつて、悟空はその方に修行をつけて貰つておる」

「そつか、それならそこへ連れてつてよ」

ライブの運転を頼むかのような気安さに、話を聞いていた他の面々だけでなく、言

われた神様もこれには驚いて目を見開く。

真っ先に怒鳴ったのは、半ば無理やり修行に参加させられているヤジロベーだった。  
「お前、話聞いてたか!? 界王ってやつがいるところはあの世の果てにあるんだよ、あの世！」

いつぞやのカリン塔でのやりとりを思い出させる、扱く真っ当なツッコミである。  
しかし、とうのフーアイは不思議そうにきょとんと首を傾げた。

「でも悟空はそこに行つたんでしょ？」

「悟空のやつは死んだだろうが！」

「……ヤジロベーの言う通り、界王星へは死んだ人間しか行くことができない」

正確には、界王星はれつきとした星であり、死んだ状態でなければいけないというわけではなく、きちんと物理的な実体と座標を持つた場所である。

しかし、そこへ行き着くための蛇の道はあるの世、それも地獄の真上に伸びているという特性上、基本的には死んだ状態でなければ辿り着けない。

生きたままあの世にいくとか、はたまた瞬間移動で移動するのなら、関係の無い話ではあるが。

「そつか」

それを聞いて流石のフーアイも納得し、諦めたかとヤジロベーは鼻を鳴らした。

話を聞いていて、余りの事に冷や汗をかいていたヤムチャとクリリンも同様である。が、天津飯と餃子だけは警戒していた。この姉弟子が物分かりがいいのは、桃白白の言うことと自分の意にそぐつたことだけである。

そして、案の定。

「じゃあ私も今から死ぬわ」

「「!?.」」

さらりと宣言するとおもむろに手刀を自分の首へと向ける。

あのミスター・ポポですら驚愕してかたまる中、弟弟子たちの動きは早かつた。

餃子が両手を向けて金縛りをかけ、天津飯が後ろから思いつきり後頭部をはたく。しりもちをついて恨めしそうに彼を見上げるフリーを、2人は思いつきり怒鳴りつけた。

「いつたいなあ！」

「痛いじゃない！何を考えてるんだお前！」

「馬鹿フーィ！ とんま！ ぼんくら！」

「待つて、思つたより餃子の罵倒がキツイ」

観念した様子で立ち上がるとホールドアップの体勢になる。

けれどその表情は明らかに不満たらたらで、納得がいっていないのが目に見えてい

た。

「死なないと連れてつてくれない神様のケチが悪いんじやん」

唇を尖らせたその背中を天津飯は強めに殴つた。

勿論、餃子はそれをアシストした。

「だから痛いって！　金縛りのせいで衝撃が逃げないから地味に重いんだよ！」

「……何をそんなに焦っているんだ」

真剣な表情で見つめられ、ついフーアイも言葉に詰まる。

あれやこれや言い訳を考えようとして、口を開いては、また閉じるのを何度も繰り返して、結局は黙りこくつてしまつた。

重苦しく俯いた彼女に、天津飯はきつい口調で詰め寄る。

「鶴仙人様や桃白白さんに、今日ここへ来ることを知られまいとしたことと何か関係があるのか？」

「……天津飯だつて餃子だつて、協力したつてことはうすうす分かつてゐるんでしょ」

観念した様子でどかりと腰を下ろし、胡坐をかけて彼女はぽつぽつと話し出した。

「怖いんだよ……正直言つて、ラディツツつてやつの強さは桁違いつてもんじやなかつた……

あれよりももつと強い奴が攻めてくるつて考えると……」

「だからと言つて、お前がそのために命を投げ出して、鶴仙人様や俺達はどうなる。桃白  
白さんは？」

「それでも」

真つすぐに彼女の方は天津飯と餃子を見返した。

不安を陰に負つた面差しは、けれどゆるぎない頑なさを湛えている。

「じつちやんや、あんたたち、それに桃白白が死ぬよりもずっといい。  
悟空も同じことを思つたはずだよ。だから死んだんだ」

重苦しい沈黙が場を包む。

ドラゴンボールで生き返るといつても、だからといって軽々しく命を捨てられるもの  
ではない。

死に対する思いというものは、何よりも本能的な抗いがたい恐怖なのだから。

それでも、それを超える何かが、人を突き動かすことがある。

この場にいる全員が、そのことをよく思い知つていた。

「……それほどの決心があるのなら」

「ぱつ、と神様が言う。

「一人だけならば、例外を認めよう……ただし、行き先はあの世だ、命の保証は出来ん  
……」

告げる彼の手は震えている。

冷静に考えてみれば、悟空一人が強くなつたところでどうにかなる話ではないのだ。  
無理を押し通してでも、戦力を増やしたほうがいい。

冷えた頭がそんな風な屁理屈をこねるがしかし、神様は己の心には正直だつた。  
酷なほどに純粹な献身に報いたいと、そう思うのは神であるが故の事だろうか。  
しかし、譲れない一線はある。

顔を明るくしたフーアイが勢い良く手をあげたのを無視し、彼は言つた。

「しかし、フーアイだけはダメだ……」

「なんで！」

「お主は余りにも邪悪過ぎる……本来、この神殿にすら立ち入るべきではない……」

「はあ!?」

「今まで、すでに多くの人をお主は手にかけている……中には悪人もいたが、何の罪もない者もいた……」

初めて聞かされる話にヤムチャ、ヤジロベーはぎよつとしてまじまじとフーアイを見た。

クリリンは思わず、震えながら彼女を指さす。

「ほ、ほんとかよフーアイ……」

「そりやあ、殺し屋だからね。別に隠してたわけじやないよ、言つてなかつたけど」

こともなげに言い返す態度に、神様はかつてのピッコロ大魔王の言葉を思い出す。

彼ははつきりと、フーアイに告げた。貴様には悪の才能がある、と。

そして誘いを拒絶こそすれ、その言葉 자체は彼女も否定しなかつたのだ。

一方で、師を傷つけられ、殺された時の痛々しいまでの怒りや、先ほどの一途な献身も嘘ではない。

恐らく彼女にとつて大切なのは桃白白をはじめ、鶴仙人と天津飯、餃子のたつた4人だけなのだ。

「でもそんなこと言つてる場合じやないとと思うんだけど、神様」

明らかにイラついた様子のフーアイを力強く押しのけ、天津飯が前に出る。

ちよつと、と怒った彼女を片手で制して、彼は言う。

「神様、フーアイ以外なら問題はないのですね」

「ああ……」

「ならば俺が行きます」

「天さん!?」

素つ頓狂な声をあげる餃子をよそに、フーアイは天津飯の胸倉をつかんだ。

「あんたが言つたつて何にもならないでしょ！ 私達がラディツツと闘つている間、

ずっと寝てたくせに！」

「だからだ！」

怒鳴り声をかき消すように、さらに大きな声で彼は叫ぶ。

「フーアイ、悟空と同じ気持ちなのはお前だけではないぞ」

今度は天津飯の方が真つすぐにフーアイを見返した。

不安を陰に負った面差しは、けれどもぎりぎりの頑なさを湛え、それをニヒルな笑顔でごまかす。

「お前たちに地球は救われた。今度は俺がお前を助ける番だ、姉さん」

それを聞いたフーアイは、掴んでいた手で胸板をどんどん突き飛ばす。

よろけもしない天津飯へ不満げに眉間に皺をよせ、いかにも憎々しげに言う。

「ほんと、生意気な弟」

けれどその口元はほんの少し笑っていて、声音もどこか柔らかかった。

## 其之四十六 銀の弾丸

「ねー、ブルマー！」

突然フロントガラスの真ん前に現れたフーアイは、驚く彼女の反応には目もくれず言い放つ。

「重力を強くする装置つて作れる？」

天津飯を送り出した後のフーアイは、決しておとなしくしていたわけではなかった。界王星や界王について神様が知りえるだけの情報を、片っ端から根掘り葉掘り聞きだして、どうにか地球でも似たような修行を積めないものかと思案する。

界王様本人は勿論地球には呼べないためその技術は無理だが、環境ぐらいなら再現できるのではないかと思つたのだ。

「それで重力を10倍ぐらいにする装置が欲しいってわけね」

「そうそう」

ラボで向かいあい、話を聞いてブルマは紙に向かつて何かを書きつける。

ブツブツと何事かを呟いていたが、どの単語一つをとってもフーアイには彼女が何を言つているのかさっぱりわからなかつた。

やがてよし、と声をあげるとフリーに向かつて向き直る。

「うん、任せて、一週間ぐらいあれば何とかなると思う」

「本当!?

「ただし」

にやつと笑った彼女にフリーはこてんと小首をかしげる。

「ただつてわけにはいかないわねえ」

「お金なら、多少は準備できてるけど」

「要らないわよ、お金なんて」

「じゃあ何を……」

と、言いかけた手を取つてブルマはずんずんと歩き出す。

余りの勢いにフリーも無抵抗で、引っ張られるままについて行く。

そう言えば、と彼女は思い出した。

ブルマはあのサイヤ人にも、臆することなく文句を言つていたし、随分前のレツドリボン軍との対決でも、騒ぐ割には体は動いていた。

なんだかんだと危ない現場に顔を出すことも多い。図太いというか、肝が妙な座り方をしているというか。

「えーっと、これでもない、あれでもない……」

「なにしてるの？」

自分の部屋のベッドに座らせ、クローゼットを漁る背中にフーアイは声をかけることしかできない。

応答があるはずもなく、あちこちに服が散乱する。

色もデザインも様々だつたが、動きやすそうだという点ではどれも一貫していた。

「うん、これがいいわ」

やがて全身のコーディネートを一式そろえると、ブルマはそれをまとめてフーアイへ投げてよこす。

「えつ」

「それに着替えて、準備ができたら言つてね」

「何？」

ドアノブに手をかけ、ちょっと上半身をひねつてふりかえると、ブルマは人差し指を口の端に当て、ウインクをした。

愛らしさと活発さのある魅力的な笑顔だつたが、本人はきっと自覚していないだろう。

「デートよ、デート」

扉を閉められ、あとにはぽかんとした顔のフレイだけが残された。

＼・＼・＼・＼

翌日、神殿に再び姿を現したフリーイは心なしかげつそりとしていた。

クリリンたちは修行の手を止め、どうかしたのかとどやどや寄つてくる。

どつかりと胡坐をかいて腰を下ろすと、彼女は全員に向けて親指を立てた。

「とりあえず、1週間で出来るつて。完成したら取りに行つて、またここに持つてくる」

「そんなに早くか」

「さすがブルマさん」

「それまでは私も神様に修行受けるから。不本意だけど」

「おい」

流石のヤジロベーも責める口調で声をかけたが、言われた神様本人は苦笑するばかりで特に責めようとはしなかつた。

それより、と

そのままの姿勢でウォーミングにストレッチをはじめるフリーイへ、餃子が尋ねる。

「フリーイ、何かあつたか？」

「何かって？」

「顔、疲れてる」

「あー……」

うめきに近いものを肺から押し出し、彼女はべつたりと上半身を床へくつづける。「ブルマに買い物付き合わされてさあ」

「なにつ!?」

近いところから大声を出し、寄ってきたのはヤムチャだつた。

「ど、どこへ買い物に行つたんだ」

「知らん」

「し、知らん……？」

「あちこち回られたから覚えてないよ……あ、でも」

ぱつ、とフーアイが出した店名にヤムチャの顔があからさまに青ざめる。

「先月連れていくつて約束した店だ……」

「へー、いつ一緒に行くつて？」

「……昨日」

クリリンと餃子がうわあ、と思わず声を漏らした。

「ま、まあでも、しようがないですよヤムチャさん。

地球の危機なんだし……ブルマさんもわかつてくれてますよ」

「そ、 そうかな…… そうだな……」

慰められ、 慰めている亀仙流の2人は置いておいて、 フーアイは餃子を手招きした。  
近寄ってきたその耳に、 こそこそと何かを吹き込む。

聞かされた餃子は驚いた様子で、 姉弟子の目を覗き込んだ。

「本気か？」

「本気も本気。」

「でも……」

「大丈夫、 上手くいくつて。 大体、 このまま真っ当に修行積んだって餃子じや戦力にならないよ」

「……」

「痛つ！ ごめんつて！」

金縛りをかけ、 無言で正拳付きをドスドスかましてくる弟弟子に彼女は慌てて謝る。

鶴仙流で対処法を学んでいる彼女に、 本来超能力の類は一切効かない。

しかし、 餃子の超能力だけは別だつた。 同じく鶴仙流で学び、 鍛え、 生来の才能もずば抜けていた彼の超能力は一級品以上だつた。

餃子にだつて分かつていた。 このままでは足手まといにしかならないことぐらい。

それよりはフーアイのいう作戦の方がいくらか目があるかも知れないと、 眉間にしわを

寄せて悩んだ。

やがてこくりと頷くと、フーアイは頼んだよとこぶしを突き出す。

そこへ餃子は拳をぶつけて、2人はにやりと笑つた。

一週間後、宣言通りに作られた重力操作装置を持ち込んだのは、フーアイではなくヤムチヤだつた。

ブルマと何かやり取りがあつたらしく、その表情は微妙に締まりがない。

こほんと咳ばらいを一つして、神様はさて、と全員の顔を見渡した。

「界王星の環境を再現するのであれば、既にある程度強い者でなければ、苦しいだけで修行にはならない」

「そうだそだ！」

ことさらに同意を示したのはヤジロベーで、もとはと言えば彼はサイヤ人と鬭うなんてまつびらごめんなのだ。

ここへ修行に来るのですら渋々なのに、さらに厳しい修行をかされるなど冗談ではない。

「相応しいのは、そだな、フーアイと……」

つい、と視線を向けられ、思わず彼は自分自身を指さした。

神様とフーアイの2人がこくりと頷き、他の全員も納得した表情を浮かべている。

「俺が……？」

額に汗を浮かべ、驚きと喜びの入り混じった表情で、クリリンは呟いた。

# 幕間 ランチと鶴仙人

「はあ……」

鶴仙流の道場の台所、日課の皿洗いをしながら金髪のランチは深々と溜息を吐いた。天下一武道会で天津飯に出会い、居場所を突き止め、厳しくも険しい山登りを経てここまで辿り着き。

勘違いから弟子入りし、既に数年が経とうとしている。

初めに思っていたよりは、ここはずつと暮らしやすい。

大抵の都市でお尋ね者の彼女にとつては、警察も来ない辺境の地というのはそれだけでありがたかった。

懸賞金目当ての賞金稼ぎ共ですら、ここが世界一の殺し屋、桃白白の本拠地であるため決して手を出そうとはしてこない。

修行も厳しいが、天津飯の事を思えば頑張れた。気のコントロールというやつは未だに分からぬが、銃火器の扱いだけならかなりのものだと、お墨付きをもらっている。誰にかと言えばそれは――

「暗い顔じやな、ランチ」

この鶴仙人という老人に、だ。

「なんだよじーさん、皿洗いならしつかりやつてるぞ」「見とればわかる。茶を淹れに来たんじや、ちょうどいい。さつさと済ませてお前もこい」

慣れた手つきでやかんを火にかける。ちやぶちやぶという水の音が耳に涼しい。

棚を漁つて茶筒を出す丸まつた背中を見ていてふつと、ランチはこの台所が妙に使いづらい原因に気が付いた。

シンクもコンロも、ついでに言えば調理台も彼女には少し低すぎるのだ。

そしてそれは多分、目の前の彼に合わせてあつらえたせいだろう。

「どうせなら茶菓子も出してくれよ」

「む……まあ、いいだろう。天津飯たちもいない事だしな」

末尾の一言を聞いて、知らず知らずランチは再びため息をこぼした。

そう、天津飯はいないのだ。突然修行をしなおすといって、行き先も告げず姿を消してからもう半年たつてしまつた。

ついでにフリーと餃子もいない。大抵の門下生たちは最近できた麓の道場にいるため、ここで暮らしているのは現状鶴仙人とランチの2人きりである。

最後の一枚の泡を流して落とし、水切りラックの上に置く。

いつもなら、5人分、時には6人分の食器でいっぱいになるかごの中も今は何となく寂しい。

丁度やかんから湯気が吹き出し始め、場所を入れ替わるように鶴仙人がお茶の準備を始めた。

茶菓子をきちんと小皿へもり、楊枝まで添えるところが何ともまめだ。

取り出された小さなお盆は、最近急に出番が増えた。

せいぜい2人分の茶器しか乗らないため、いつもはもつと奥のあたりでちょこんと収まっている。

そのまま自分で運ぼうとする鶴仙人の手から、ランチがするりと奪い取った。

「いいよ、私が運ぶ」

これも間違いない天津飯の影響だつた。

居間の大きな丸テーブルの向こう側、開けた縁側も今は静かだ。

いつもは大抵誰かが組み手をしているか、さもなければテーブルの前にみんな揃つてやんやと何かを話している。

茶をする音だけが響く沈黙も、さして気まずいものではない。

フリーがいる間はてつきり口やかましい老人だとランチも勘違いしていたが、本来鶴仙人は嫌みだが冷静で、さほど声を荒げない人物だつた。

皿の上の茶菓子が半分になつたあたりで、ふつと彼が言う。

「ためいきは天津飯が原因か」

熱いお茶が喉につつかえ、ランチは激しくせき込んだ。

「どうした？」

「どうした？ ジやない！ なんだ、きゅ、急に、て、天津飯のはなしなんか……」

「落ち着け、ひとまず湯飲みを置いたらどうじや、溢すと火傷するぞ」

言われるがまま、慄然とした表情でランチは湯呑をテーブルに置く。やや呆れた顔で鶴仙人は、そんなに驚くことかと首を傾げた。

「おぬし、別に隠しひとりやせんんだろう」

「ま、まあそうだけどよ……」

「ふい」と顔を背け畳に目を落とす。

いくら好意を隠していないとはいえ、面と向かつて言葉にされると流石に動搖してしまう。

若いのうとしみじみ呟いて、鶴仙人は自分の湯飲みにお代わりを注いだ。

「まあ天津飯のやつはきづいとらんようじやが……」

そう、そこなのだ。

これほど好意をあらわにし、鶴仙人はおろかあのフリーですら気付いているというの

に、天津飯本人はまるで意識する様子がない。

それでもそばにいれば多少なりとも意識はされるだろうと、この道場で暮らすためにランチは修行をこなしていた。

天津飯から直々に指導を受ける喜びも初めの1年ぐらいあつたのだが、最近ではもっぱら鶴仙人に指導されている。

原因是、いまの鶴仙流の形態にある。

今までよりも多少条件をゆるくし、より多くの門下生をまずは麓の道場で受け入れ、天津飯が指南を行う。

そして、その中でも才能があると判断されたものは、山の頂上にあるこの道場で鶴仙人から直々に修行を受けることとなる。

麓では多くの門下生たちがこの頂上を目指してはいるが、今のところ認められたのはランチ一人きりだつた。

一言でいえば、彼女には真っ当に才能が有つた。それも武術の才能というよりは、戦闘の才能である。

暴力をふるうことを躊躇わない事、多対一での立ち回り、傷を負わない逃げ方、それらを数々の悪事からランチは自然と学び取つていた。

そこに目をつけた鶴仙人から、武術というより戦闘の訓練を受けているというわけ

だ。

「はつきり言おう、儂はお前を買っている。天津飯との交際についても、反対するつもりはない。むしろ、応援したいと思つておる」

「本当か!?

がたん、とテーブルがひっくり返りそうなほど、ランチは強く手をついた。

余りの勢いに腰が引けている鶴仙人へ、鼻がくつつきそうなほど顔を近づける。

無理もない、鶴仙人は天津飯の育ての親であり、彼が最も尊敬し信頼する人物なのだ。仮にいざ付き合うとなつたとしても、反対されればきっと天津飯は恋の方を諦めるだろう。

逆に認められたということは、結婚の了承を得たのと同義と言つていい。

「ほ、本当だ……た、ただし、無論、天津飯の意思が一番じやが……」

「当たり前だろ」

当たり前のなのが、そこが一番の問題なのだ。

「やつは眞面目過ぎるところがあるからのう……

いまのままでは、仮にお前の好意に気づいたとて、応えるどころか遠ざけかねん

「じゃ、じゃあどうすれば」

「方法が一つだけある」

ぴつと人差し指を立てて、鶴仙人はやたらと深刻そうな口調で続ける。

「つまり、真面目な天津飯にはまず、ランチという存在を強く意識させる必要がある。

そのためには」

立てていた人差し指をどーんとランチへまっすぐに向けた。

「修行して、お主が強くなることじや！」

おおつと案外素直な彼女は歓声を上げる。

しかしすぐに首をひねって、どういうことだと聞いてきた。

「天津飯は眞面目であるがゆえに、強い者のことは必ず意識する。それも、同門とあればなおのこと」

「なるほど、フリーのやつの事はいつも気にかけてるもんな」

「……いや、それはまあ……うむ、そういうことじや」

思わぬ方向に話が飛び、思わず口をもぐもぐさせて戸惑つたものの、彼は何とかそのまま押し切った。

勿論、天津飯はフリーの事を恋愛対象として見てなどいない。

彼が姉弟子を気にかけるのは、強いからというのもあるが、殆ど本当の姉弟と変わらないほど長い時間を過ごしたことや、何より彼女自身の性格も影響しているのだが、あって鶴仙人はそこには深くつっこまなかつた。

咳ばらいを一つして、仕切り直す。

「となれば、天津飯が今留守にしているのは逆に好都合。

修行からかえり、お前が見違える強さを手にいれていれば……」

「なるほど、いちころつて寸法だな！」

力強くガツツポーズを決めると、言うが早いかランチは庭へ降りていく。

「そうと決まればじーさん、ちょっと走り込みに言つてくる！」

目にもとまらぬ速さで姿を消し、後には雄たけびの名残だけが残された。

やや呆気にとられながらも、目論見が上手くいったことにやれやれと老人はほくそ笑む。

天津飯が留守にして半年、明らかにランチはモチベーションが落ちてしまつていた。身が入らないままでは修行など意味がない。だから一計を案じたというわけ。

しかし、鶴仙人としてもただ彼女の恋心を利用したわけではない。天津飯自身の意思が一番だが、ランチの思いを応援するという言葉にも嘘はないのだ。

氣風がよく、鶴仙流の門下生でもあり、精神的にも肉体的にも強さのある彼女なら、他になよなよしたか弱い女などよりもよほど、天津飯の相手として安心だと、鶴仙人は思つてゐる。

くしゃみをした後の黒髪の方も割と肝が据わつてゐるし。犯罪者であることも、彼ら

にとつてはマイナスにならない。

盆の上に湯呑と小皿、急須を乗せ、台所へと片付けに向かう。

妙にがらんとして感じるのは、やはり単に人が少ないせいだろう。

鶴仙人とて馬鹿ではない。天津飯たちが、何かを隠している事は察している。あえて無理に聞こうとしないのは、彼らの強さと優しさを知っているからだ。

それに、と老人は独り言つ。

あのピッコロ大魔王以上の脅威などあるまい。ならば、それを打ち破った彼らに心配など無用のものだ。

彼は知らない。ピッコロ大魔王が子供に思えるほどの脅威が、迫っていたことなど。

そして今まさに、それ以上の厄災が、地球に向かっている最中であることも。

自慢の弟子が遠いあの世の果ての星で、親父ギヤグに苦労していることなど、知る由もない。

## 其之四十七 信用と信頼

「それで」

と、桃白白は言つた。

昼間だというのに空は墨を流したように黒く染まり、太陽も月も、星すら見えないのに不思議と暗くはなく、手元は見える。

地平線の向こうのどこかでは、光の柱と共に神龍がその姿を現している事だろう。

「一体何が起きるんだ？」

結局フーアイ達では、師匠2人に黙つておくことはできても隠しきることは到底無理だった。

世紀単位で年季が違うのだから、仕方がないといえば仕方がない。

神様からもう教えられることはないといわれ、結局自主的に修行を積むしかなくなつてから数か月。

フーアイは結局諦めて、クリリンと共同でトレーニングする以外は、桃白白に相手をしてもらつてゐる。

桃白白にも重力操作装置を自由に使わせるという条件で。

そして、つい先ほど悟空と天津飯から知らせがあつた。

明日、サイヤ人達がこの地球に到着すると。

「言いたくない」

と、フリーは答えた。腕組みをしてきっぱりとした表情の彼女に、桃白白の片眉が上がる。

10倍の重力でもすっかり軽々動けるようにはなつている。

不安は腹の底でまだずつしりと溜まつてゐるが、1年ほど前に比べれば随分と軽くなつた。

それに、天津飯と悟空は今の自分達よりもさらに強くなつてゐるはずだ。未だに納得のいかない話ではあるが。

「私達でどうにかするから大丈夫」

何を言われても今回ばかりは、決して譲るつもりはない。

以前のように酷く機嫌を損ねることになつたとしても、それで酷くいじめられたとしても、だ。

チリチリと、頭の隅を燃える球体の記憶が焼く。

だいたい、そもそも発端は悟空の問題なのだから、亀仙流の面々と、流れ弾を食らつたフリー達はまだしも、桃白白と鶴仙人が巻き込まれる必要はない、と彼女は思つてい

る。

さあ、一体どんな風に何を言われるかと構えていると。

「そうか」

と、桃白白はあっさり引いた。

えつと思わず彼女はぽかんと口を開ける。

「なんだ、その顔は」

「いや、うん、えつと」

「無理やりにでも首を突っ込むと思つたか？」

正直にこくりと頷くと、はつと軽く笑い飛ばされた。

「もうガキでもあるまい、いつまでも心配して貰えると思うなよ」

「そう言われるとなんだかなあ～！」

地団太を踏みたいようなもだもだとした気持ちを、わきわきと手を動かしてどうにか誤魔化す。

「……まだもうちよつと子供扱いしていいよ？」

「確実に20は過ぎどるだろうが、この前なんぞ儂の紹興酒を勝手にひと瓶あけおつて

「う、ごめん」

しまつた、と言わんばかりに顔を歪ませる彼女に、桃白白がでこピンを一つ食らわせ

る。

冗談めいた仕草に笑おうとしたが、間近で真っすぐに見つめられ、フーアイは思わず細い瞳を覗き返した。

「死んだら殺すぞ」

「……わかつてゐよ」

「ならいい」

いつも通りの平淡な表情に戻り、後ろ手に手を組んで帰るぞ、と声をかける。

間延びした返事と共に、その背中について行こうとして、はた、とフーアイは気が付いた。

「あつ、そだ！」

サイヤ人達は恐らく、あのラディツツが持つていたスカウターを使って自分達を探そうとするだろう。

しかし、個人個人を見分けられている様子はなかつた。戦闘力とかいう数字をもとに判断しているのであれば、自然と狙われるのは桃白白になつてしまふ。

「明日はなるべく気を抑えて、もういつそ無にするぐらいの感じで」

「……お前、きづいとらんかったのか」

その言葉にフーアイは首をひねる。

彼の表情をよほど見慣れていないと分からぬ程度だつたが、その口元と声音は若干得意げな色を含んでいた。

「普段、儂は氣を一般人程度に抑えてある」

「……うそお……」

言われてみれば確かに、ラディツツも高い戦闘力を当たつただろうから、桃白白と接触していないのはおかしかつた。

しかし、言うは易しというやつで、本来の力から過剰に氣を落とすには、かなり緻密なコントロールを必要とする。

事実、今、とある作戦のため餃子は超能力の訓練に加え、氣をゼロまで落とす特訓の真っ最中なのだ。

もちろん、フレイにはそんな器用な真似などちつともできない。

「まだしばらく勝てないかも……」

自慢の師匠兼長年の壁の実力を改めて目の当たりにし、フレイは珍しく弱音を吐いた。

聞かせるつもりもなかつたのだろう。本当に小さな呟きだつたが、桃白白の耳には届いてしまつた。

今度は桃白白が、そうでもあるまいと、ぽつり溢す。

「ん？ 何かいった？」

「いや？」

彼の呟きは誰に拾われることもなく、とぼけた返事も素直に受け取られ、それ以上の事は何もない。

空はいつの間にかすっかり元の明るさを取り戻していた。

今頃は悟空も生き返つて、天津飯と一緒に地球を目指している事だろう。

そして酷くあつさりと、当たり前のようには次の朝が訪れる。

東の都では、その日も忙しく人々があちこちを歩き回っていた。

往来を走る車、電話片手に足を急がせるサラリーマン、人生で最も大事な日と言わんばかりのおしゃれをした女性。

いつも通りの日常がきては過ぎていくものだと、信じて疑わない。疑うという発想すらないのだろう。

そこへ、二つの球体が空を切り裂き、落下する。

ビルを崩し、道路を押しつぶし、着陸というより墜落してきたその乗物を、乗物と認識できたものがその場に何人いただろうか。

数分もしないうちに、東の都は更地と化した。

それは丁度数年前、ピツコロ大魔王によってキングキヤツスル一帯がそうなったのと

よく似ていた。

一瞬の光に全てが包まれ、あとに残るものは何もない。

人も、建物も、道路も、何もかも。

ただ違うことが二つある。

一つは、ピッコロ大魔王の生み出した爆破は、せいぜい空を覆う程度の爆炎を伴う程度だつたのに対し、今回のそれは地球の表面が宇宙空間からも観測できるほど、明確に光つたということ。

もう一つは、行つたものの戦闘力をさらに超える戦闘力の同行者がいるということ。

「……来たか」

「ぐくりとつばを飲み込むクリリンの背中を、バシッと強くフーアイが叩く。

思わずせき込んで恨めしげに見上げるが、全く意に介した様子もなく、彼に向かつて彼女は行くよ、と声をかけた。

「行くつて、あいつらのところにか？」

「違う違う、他の連中と合流しなきや。もしこつちに来たら、ちょっと街が近すぎるし」「確かに……でも、じゃあ、どこへ？」

そう聞かれちよつと悩んだ様子を見せるフリーに、クリリンも少し考えて提案する。

「なあ、ピッコロたちのところへ行こうぜ、あそこは開けてるし、町からもかなり離れて

るはすだ』

彼女はこくりと頷き、二人は荒野に向かつて出発した。とてつもなく強大な邪悪が、迫りくるのを感じながら。

# 其之四十八 遊戯開催・戦闘開始

「くつくつく……いたいた……！」

「1匹増えてお強そうなのが4匹……」

「どうやら俺達の事はよ——くご存知だつたらしいぜ……」

ピツコロたちとフーアイたちが合流した遙か頭上、二つの人影が降りてくる。

一人は背の高いピツコロよりもなお、一回り二回りは大きいかといふいかにも屈強そうな男。

頭を綺麗に剃り上げ、細くひげを蓄えている。いかにも粗野な印象で、見るからにタフなパワータイプ。

もう一人はやや小柄で、フーアイと背丈は同じぐらいだった。年齢もそれほどは変わらないだろう。

人相は悪かつたがどこかすつきりとした面立ちは、なにか高貴な印象すらうける。

二人は腕の太さ一つとっても二倍ほどの差があつたが、どちらがより強いかは一目瞭然だつた。

「なるほど、お待ちかねだつたようだな」

小柄な男がそういうと、硬い面持ちでピッコロが答える。

「そういうことだ……」

ゞ・ゞ・ゞ・ゞ

小柄な男——ベジータと、粗野な男——ナツパが語るには、ピッコロはナメック星人という特殊な種族らしかつた。

戦闘力も並外れているうえ、何か不思議な魔法使いじみた能力も持つてているらしい。

彼らはピッコロがドラゴンボールを作つたという予測を立てていたが、それも半分ぐらいいは正しかつた。

ただ、フライたちからすれば、目の前の栽培マンとかいう化け物が種と水だけで一瞬で現れたのも、充分に魔法じみて感じられたが。

植物にも似た緑色の体に、むき出しの脳みそを思わせるグロテスクな頭部。一応の意思や知性はあるらしく、にやにやと薄気味悪く笑つている。

臨戦態勢をとりながら、クリリンはごくりとつばを飲み込む。

「こ、こいつら結構できるぜ……！」

「4対6か……お前たちにはちと酷かもな」

「なら、これで5対6だ」

しゅた、と長い髪の男がすぐそばへ下り立つ。

「遅くなつたな」

「ヤムチャさん！」

「なんだ、フリー、餃子は来てないのか？」

「この場にはいないよ」

ぱつと顔を明るくするクリリンと対照的に、フリーはただ首をすくめてそう答えた。

ベジータは不在の人物の名前に一瞬注意を惹かれたが、取るに足らないと思ったのだろう、すぐに興味を無くしてしまう。

そして栽培マンと相対する地球人たちの人数を見比べると、何を思ったのか、片方栽培マンに向かた。

途端、破裂音と共に栽培マンが一匹、バラバラに碎け、あたりに肉塊がぼとぼと落ちる。

突然の事にベジータ本人以外は全員あつけにとられて目を見開いた。

「な、なんだ!? 仲間割れか!」

「どうしたんだ、ベジータ」

「これで丁度5対5だ」

にたりと彼は笑う。

それは丁度、新しいおもちゃを与えた子供のような笑顔だつた。  
おもちや同士をぶつけて壊し、破片が飛び散るのを楽しむ子供。

「どうだ！ 貴様ら、こつちの兵と1匹ずつ順に闘つてみんか！ ゲームだ！」  
「ゲームだと？ くだらんやつどもだ……！ そんなまわりくど……」

怒つてどなり始めたピッコロの視界の真横を、光線が飛ぶ。

1本、2本、3本、4本。

びしゅん、と空気を焼き切る独特の音が鼓膜をかすめた。

コルク栓を抜いたような綺麗な穴が、栽培マンの眉間に1つずつ綺麗に空いている。  
音もなく崩れ落ち、そのままピクリとも動かなくなつた。

「ふうん、急所は人間と変わらないんだ」

ぽつ、と呟いたフーリイにクリリンが言う。

「な、なあ……」

「何？」

「あいつらの誘いに乗つて、1人ずつ相手したほうがよかつたんじやないか？」

「そうしたら悟空と天津飯がくる時間稼ぎも出来たんだし……」

「あ……」

しまつた、と額を打つ仕草に、彼はため息と共に肩を落とす。

ピッコロは行き場のない衝動と怒りを腕に込めて力み、力んだままかたまつていたが、やがてそつと両腕を組んだ。

悟飯とつい顔を見合わせてしまい、ヤムチャは苦笑する。

「バ、バカな……！」

一方、この場で一番驚き、慄いていたのはナツパだつた。絶命した栽培マンたちをきよろきよろと見回し、余りの事に額に汗をかいて青筋を浮かべている。

「栽培マンの戦闘力は1200だぞ……！」

パワーだけならラディッシュに匹敵する……！」

「やつの戦闘力はそれを超えるんだろ、単純な計算だ」

「しかし……！ そんなデータはなかつたぞ！」

「そう騒ぐことでもあるまい、この場にいる女はやつ一人、つまり」

「そうかあ！」

2人の視線がフリーに集中する。

太く四角い指で無遠慮に指さされ、彼女は少し不快そうに眉間に皺を寄せた。

「おまえだな、もう一人生き残つてたサイヤ人の女つてのは！」

「そうだけど」

「ぎひひひひ！　こりやあ面白くなつてきたぜ！」

「なあ、オレにやらせてくれよ、ベジータ」

「スキにしろ」

ベジータの答えを聞くが早いか、ナツパは構え、腰を落として力を籠める。すつと、全ての音が鎮まつた。

鳥や動物たちは、どうの昔にこの荒れ地から逃げ出している。にもかかわらずさらに音がやんだということは、つまり風が止まつたのだ。

太く、荒く、ゆっくりと吐く息に合わせ、気配が高まつていく。

腹の底から揺らぐような震えが、足元を襲つた。

大地が、震えている。

収まりきらなかつたエネルギーが、雷電のように彼の全身を包んだ。

「……」応ついとくけど

ぞくぞくと産毛が逆立つのを感じ、フーアイは言う。

これが恐怖なのかあるいは歓喜なのか、彼女本人にもわからない。

ただ確かなことは、相手がこちらを舐めていたのに負けず劣らず、こちらも相手を舐

めていたということだ。

「同族同士、仲良くやろうってのは無理?」

「はつ、今更そんなつれねえこと言うなよ」

「やつぱそうかあ」

軽く頭を搔いて、彼女も構えをとる。

ピツコロとクリリン、ヤムチャも各々に呼吸を整え、敵を見据えた。

それをみた悟飯が、慌てて何とか構えらしき姿勢を作る。

「5対1だけど文句はないね?」

「そうでなきや簡単すぎて詰まらねえ」

「言つたな……」

らしくない冷や汗を一筋垂らし、ピツコロが地面を踏みしめた。

笑う。フレイは笑う。

歯をむき出しにして、見せつけるように笑う。

彼女の笑顔は、サルの威嚇によく似ている。

それをみたナツパはますます満足げに笑みを深め、拳を強く握った。

「こいよ、ガキども。遊んでやる」

「うるさいよ、おっさん」

# 其之四十九 パワー・パワー・パワー!

「はあああ……!!」

飛び出したのはフレイが早かつたが、ぶつかる瞬間のトップスピードはナツパが上回っていた。

大ぶりな動きと共に、気をまとつた巨大な拳が襲い掛かる。

咄嗟に彼女は勢いよく、地面に腹がくっつくのではないかというほどしゃがみ込む。低い姿勢で脇を抜け、鋭く足払いを食らわせる。

が、体勢を崩すどころか、痺れたのは彼女の脚の方だつた。

「ツて～！ 鋼かなんかで出来てんの!?」

「がははは！ そんなものよりずっと硬いぞ俺の体は！」

「だろうね！」

軽口をたたき合うくせに、互いの殺意は身を焦がしそうなほどに熱い。

フレイは踏みつぶそうと掲げ下ろされた足の裏を、転がつて避けた。かすつただけでも、人相がすっかり変わつてしまつていただろう。頭蓋骨など軟らかすぎる。

逃げた彼女を視線で追つたその背中に、ピッコロの気弾が螺旋を描いて襲い掛かるが、あっさりと躱される。

それを皮切りにヤムチャとクリリンも挑みかかつたが、ダメージを受けるどころか避けようとするしない。

殴り掛かつた拳を掴まれ逆に投げ飛ばされ。

点滅し嵐のように襲い掛かる気弾も、蚊が止まつた程度にしか感じていなかろう。

大男の周りをかわるがわる飛んだり跳ねたり、まるで熊と小鳥のようだ。

「ちつ……このピッコロ様が、まるで子供扱いだぜ……」

彼ら全てをおどりに使い、死角からフーアイの手刀が振るわれるも、あっさり体ごと腕でなぎ倒された。

空中を吹き飛ばされながらも打たれただどん波は、しかし一発が鎧に穴を開けるだけにとどまる。

何とか足を下に着地し、しかし衝撃は殺しきらずつま先が地面を削った。

はつと気づいて上を見上げれば、上空から追撃が衝突してこようと構えている。

彼女は逆に勢いよく上空へジャンプし、ナツバが考えていた接触のタイミングを僅かにずらした。

攻撃の直前、無防備な懷へ飛び込み、片手を突き出し無防備な腹にピタリとあてる。

「爆掌波ツ！」

「な、ぐああツ……！」

極限まで圧縮した気を掌の中で爆発させ、相手に向かつて放つ。

射程距離は極端に短いが、その短所を補つて余りあるほどの威力がある。大抵の相手なら、触れられた部分はミンチよりももつと粉みじんになるだろう。しかし、だ。

「く、そツ……は、痛えじやねえか……！」

奇妙だが頑丈な鎧の、脇腹部分は碎け、ぽつかりと穴が開いていた。その下の分厚い皮膚にも赤く血が滲んでいた。だが、それだけだ。

呆気にとられていた彼女の喉を掴み、勢いよく地面へ叩き落とす。

土煙の中で、咳と血が混ざるべたついた音がした。

「さ、さつきの技、威力だけなら氣功砲ぐらいあつたよな……」

「ああ……それを間近に食らつて……あのナツパつてやつ、不死身かよ……」

慄くクリリンに、ヤムチャの乾いた声が重なる。

呆然としている彼らに気づいたのか、ナツパは殊更に大きな声でわらつた。

「おいおい、頑張つてるのはサイヤ人だけじやねえか。

ちつとは食いごたえのある技を出してくれよ、ザコ地球人の皆様がたよ～！」

「……ちよつと皆、離れててくれ……」

意を決した表情で、クリリンが天に向かつて右手を向ける。

その動作を見たフーアイはすぐさま起き上がり、ナツパから距離をとつた。  
しかし、構えを向けられている当の本人は、それを見るとむしろ面白そうに仁王立ちする。

「はああ～～！」

掲げられたクリリンの手のひらの上に、薄い円盤状の気弾が大きく広がつた。  
低いような高いような、どちらどころのない、耳障りな振動音。

「気円斬！」

「ふつ！　くだらん技だ！」

真正面から飛んでくるそれを、ナツパが受け止めようとしたその時。

「ナツパ避けろ——っ！」

「？」

先ほどまで不干涉を貫いていたベジータが、突然叫ぶ。

それに驚いたナツパは咄嗟に首をひねつて気円斬を避けた。

頬をかすめ、切り裂いた円盤は真つすぐに飛んでいき、巨大な岩山の上半分をばつさ

りと斬り落とす。

ベジータは動搖する様子すら見せず、ぼそりと悪態をついた。

「あのバカめ……！どういう技か見切れんのか」

「く……そ……！」

クリリンはびつしょりと汗をかいて思わず呻く。

こちらを舐めている、確実に次の攻撃を受け止めるであろう一瞬が一番のチャンスだつたのだ。

しかし、有効打を与えたのには間違いない。畳みかけようと素早くつつこんでいく。

一方、たらりと垂れる血の一筋に、ナツパはあからさまに表情を変えた。

もしも正面から食らっていれば、あの岩山と同じ姿になつていただろう。

明確な脅威と恐怖は、はつきりとサイヤ人の中で怒りに換わる。

「お、おのれ～～～！」

よくもこの俺に傷をつけやがったなあ……！」

真つすぐに飛んできた地球人を、彼はかとんぼか何かのように、平手打ちで叩き落とした。

勢いよく張り手を食らつたクリリンの耳から、赤い汁が垂れる。

恐らくは鼓膜が片方破れたのだろう。

思わず押さえて屈みこんだ腹を、穴が開くのではないかというほど強く蹴り上げる。

「消えてなくなれ——っ!!」

氣をまとつた拳が襲い掛かる瞬間、背後から氣弾が飛んでくる。

先ほどの事があつたため、氣配を察知したナツパは、今度はためらわずに避けた。と、彼のすぐ真横を通り抜けていつたそれは、急に方向転換して彼の顎をしたたかに殴りつける。

「うがつ……！」

さほどダメージを受けた様子もなく、怒りに青筋を浮かべたまま振り返つた。今にも爆発しそうな殺気を向けられたヤムチャは、しかし引き攣つてはいても笑つている。

「どうだ？ 繰気弾の味は」

「てめえ……、どうやら真っ先に死ななきや氣が済まねえようだな……」

ナツパはダン、と強く地面を踏みしめ、ヤムチャに向かつて向き直つた。

矛先がクリリンから入れ替わった時点で、彼の狙いは半分成功したといつていい。

残りの半分は、上手くいくとは本人にも思えなかつた。

背後でピッコロがこぶしを握るのを感じる、即興のコンビネーションが成功するのを祈るしかない。

「新狼牙風ふ……」

が、しかし。

彼が技を繰り出すよりも早く、サイヤ人は一瞬で目の前に迫つてくる。咄嗟に防ごうと腕を交差させたが、誰かが避けろと叫んだ、気がする。「あぐう……！」

拳が切り裂かれ、腕がぼとりと地面に落ちた。

痛みに呻き、しかし逃げなくてはと足を動かそうとする。

けれどそれも、無駄なあがきでしかない。

「一匹目！」

胸部をはじけるように破壊され、ヤムチャは絶命した。

唖然とするクリリンたちだが一方、ベジータは面白そうに笑っている。

「なかなかてこずつてるじやないか、ナッパ」

これはまだ、前哨戦。

# 其之五十 作戦と思ひ付き

「良いか、フリー。鶴仙流の真髓は、緻密な気のコントロールにある。

しかしそ前は全くそれができておらん！」

全く、の部分に一際力を入れて鶴仙人はそう言つた。

読み取らなくてもわかるほど、あからさまに不満げなフリーの表情を見てさらに言葉を続ける。

「言うておくが、どん波や氣功砲のような、収束と爆発だけが氣のコントロールではないぞ

全身の気を自在に操ることができて、初めてコントロールできているといえる。

最も肝心なのは舞空術じや」

「舞空術？」

「そう難しい技ではないが、お主が使いこなせておらんのはそこが理由よ」

ふわり、と鶴仙人の体が宙に浮く。

いや、浮くという表現は余り正しくない。フリーも天津飯とは違い、彼はピタリと空中に停止した。

見た目だけならインパクトもさほどないが、彼女にとつては衝撃を与えるのに十分だつた。

完全に停止するということは、ある意味全速力で走ることよりもよほどの力と纖細さを求められる。

「過不足なく、満遍なく気を巡らせることができれば、これぐらいは容易い。

おぬしがこれをできんのは、ひとえに集中力の無さ、あるいは集中のし過ぎ、意識の偏りが原因じや。

それを鍛えるには瞑想が最も効果的なのだ」

＼・＼・＼・＼

「——はツ！」

ばちり、とフーアは目を覚まし軽く頭を振る。

(……一瞬意識が飛んでたのか、結構ヤバかつたな)

口の中には鉄さびの嫌な味が広がり、口元を拭つた手の甲にはべつたり赤い染みがついた。

呼吸に支障はない。どこかの骨が折れているということもなさそうだ。

なんとか受け身が取れていたのは、師匠に散々容赦なく返り討ちにされてきたおかげだろう。

とはいえ、体中のあちこちが今にも裂けそうなほど痛かつたが。  
(でも、さつきの……全身の気を、コントロールする……)

そういうや、ラディツツが気になることを言つてなかつたつけ……  
戦闘力が高まつてどうこうとか……戦闘力、気を高める……巡らせる……)  
かり、と何かがひらめきの切つ先をかすめて散つていく。

「……考え方してゐる場合じやないか」

起き上がり、辺りを見回すとヤムチャが倒れていた。

落ちた両腕はバラバラに転がつてゐる。

破裂したように赤く染まつた胸部は、一目見ただけで生きてはいないことがすぐにわ  
かつた。

その奥では残つたメンバーがナツパと相対している。

目の前で兄弟弟子を失つた、しかも庇われたクリリンのショックは相当なもので、明  
らかに動搖していた。

ナツパは楽し気にわざわざゆつくりと、歩みを進めていく。

ピツコロは身構え、何事かクリリンと悟飯に告げていたが、悟飯はともかくクリリン

の耳に届いているかは不確かだつた。

柔和で気のいい普段の表情はすっかりなりを潜め、怒りと憎しみに顔が歪む。激しい感情に突き動かされ実力以上の力を發揮する人間は確かにいる。

しかし、フーアの見立てでは彼はそうではなかつた。

クリーリンの戦い方は、天津飯と似てゐる。

多彩な技を使い、いかに相手を翻弄し、優位に立つか。

それには冷静さが不可欠なのだ。だから。

「よ——し! ギアあげてくれか!」

無暗に明るく素つ頓狂な声を出し、宣言通りに勢いよくナツパに向かつて突つ込んでいく。

雰囲気を乱され、不意をつかれた彼は真つすぐな突進を背中へまともに食らつた。

失敗は、本来ならここで追撃をするはずのピツコロたちすら、あつけにとられてスピードについて行けず、棒立ちになつてゐることだが。

「つ……ちい!」

振り向きざまに手刀をふるつたナツパだつたが、フーアは上に跳んで逃げる。

そのまますたつと宙返りを綺麗に決めると、ピツコロたちのすぐそばに着地した。

「まだ動けたのか」

「投げ飛ばされるのにはなれててね」

にやりと笑ったピッコロの軽口に、フーアも軽口で返す。

「それで、作戦は？」

「……奴は攻撃に移る僅かな一瞬に隙がある……」「

「オッケー、ならおとり役は私つてわけか」

「そういうことだ、せいぜい死ぬなよ」

殊更明るく振舞う彼女に、クリリンは少し下を向き、また向き直ってなあ、と声をかけた。

「なに？」

「サンキュー、おかげで少し頭が冷えた」

「何のことだか」

クラウチングスタートのように低く体勢を作った彼女の隣で、クリリンもまた足を前

後に開き、片腕を腰のあたりに構え、もう片方の手を胸の前に置く。

「俺にもやらせてくれよ、折角お前と修業したんだからな」

「いいけど、足手まといにはならないでよね」

「おい、お前ら、来ねえのか！」

ナツパが急かすように怒鳴る。どうやら待っていたらしい。

案外律儀なのか、いや、こちらをまだ舐めているだけか。

それとも戦闘を楽しみ尽くさなければ気が済まない、サイヤ人の性さがによるものか。

「せつかちはモテないよ、おっさん！」

思い切りよくかけだした彼女のスピードは、走るというより射出に近い。

再び真つすぐに飛び込んできたその体を、今度はしつかり受け止めようと開いた腕は、しかし宙をかすめた。

空中に不自然な格好で停止した彼女に、実体はない。残像拳だ。

「でりやツ！」

無防備な体を勢いよく蹴り飛ばし、隙を作る。

クリリンが気を溜めるのに十分な隙を。

「かくめくはくめく……」

「こいつ！」

自分を攻撃してきたフリーに注意を惹かれていたナツパは、ほんのすこし反応が遅れた。

「波——ツ!!」

真っ向から食らい、光に包まれ押し飛ばされるように巨体が上空へ吹き飛ばされる。

しかしそれも遙か彼方とはいかず、せいぜい数十メートル程度のものだ。  
 そのうえ、鎧こそ多少ボロボロになりはしたが、その割にナツパ本人はびんびんしている。

「だめか……これでやられたら楽だつたんだけどな……」

「体の方が頑丈なら、鎧なんて要らないんじやないの……」

クリリンとフーアは啖いたが、とにかくこれで準備は整つた。

ある程度距離が離れていればそれだけ、ピッコロがタイミングをはかりやすい。

そんな思惑など知らず、ナツパは二人に向かつて真つすぐに突つ込んでくる。

動作自体はフリーと似ているが、気迫が桁違いだ。彼女が弾丸なら、こちらは隕石と言つたところか。

しかし。

「!?

その拳が届く直前、背後から飛んできたピッコロが勢いよくその横つ面を殴る。

予想もしない方向からの攻撃に、なすすべなく巨体が吹っ飛んだ。

いつの間にかその先へ移動していたクリリンが、鋭く殴りつけて真つすぐに飛ばす。本来の戦闘力ならばこの中で最も高い、悟飯に向かつて。

「悟飯、まだ！ 撃て——つ！」

しかし、少年は動けない。

思えば彼は今までの戦闘で、一度も攻撃に参加していない。

無理も無いことだ、まだ幼いうえ本来彼は、戦いに向いた性格をしていないのだから。初めての殺し合いで力を発揮しろというのは、余りにも酷だつた。

「悟飯!!」

「こ……わい……お……!!」

「クソガキめ——っ!!」

ピツコロの叫びとほとんど同時に、見切りをつけたフリーのどどん波が飛ぶ。それに続いてピツコロとクリリンも気弾を放つたが、既に体勢を立て直していたナッパにはすんでのところで避けられた。

タイミングが僅かにだが遅かつたのだ。

切れた唇から垂れる血を拭い、彼は笑っている。

焼けこげそうなほど、熱い殺氣をこちらへ向けながら。

作戦は失敗した。同じ手は通用しまい。

相手はクリリンの渾身のかめはめ波を食らつてもぴんぴんしている。

「やつてくれたじゃねえか……！」

「てめえら、さらに寿命を縮めたな……！」

仕切り直すように、再び彼はしつかりと構えをとつた。

深く息を吸い、吐く。

気が空気をこすり、焼いて、稻妻のようにバリバリと輝きながら全身を覆う。原理と呼べるものは恐らくない。

ただ全身に力を込めているだけだろう。

抑えきれなくなつた気が、体の内から漏れ出でているのだ。

カリ、とフレイの頭に何かが引っかかる。

全身に力を籠める。

気を高める。

気をコントロールする。

気を全身に巡らせる。

「あ——」

間の抜けた彼女の声に、とうとう死を覚悟しおかしくなつたのかとピッコロは笑つた。

けれど、そうではない。

「……あんまりこういう、その場の思い付きで土壇場の一か八かとか、好きじや無いんだけど」

やるしかないか、と投げやりな言葉の割に、彼女は心底楽しそうにそう言つた。

# 其之五十一 ばいばい拳

「何を思いついたつて？」

「うまくいけば、あいつをぶつ飛ばせるかも」

クリリンの問いにフーアイは明るく答えた。

しかし、その額にはべつとりと脂汗をかいている。

当然だつた。命がかかつたこの場でとつさの思いつきを試すなど、正気の沙汰ではない。

「うまく行かなければ？」

「何も起こらない」

「何でもいい、とにかくやれ」

今度は自分がおとりになろうというのか、ピツコロが彼女の前に出た。「どうせこのままじゃ、孫悟空たちの到着も待たず、全員死ぬだけだ……」

「オッケー……期待しといて」

「するさ、嫌でもな……」

そう言うとピツコロとクリリンはナツパに向かつて飛び出していく。

フリーは目を閉じ、瞑想の感覚を手繰り寄せた。

全身の気を自在に操る。コツは、舞空術だ。

意識を広く持ちながら集中すること。

ゆっくりと息を吸い、吐く。

体の中心から指の先まで、意識を行きわたらせる。

しかしどこかに偏らせるわけではなく、全体を把握する。

「なんだ？　あいつは、立つたまま寝てやがるのか？」

それまで静観していたベジータだったが、彼女の不可解な行動に眉間へ皺を寄せた。

「いやまた……何か様子がおかしい……」

氣を巡らせる。過不足なく、満遍なく。

そして、その後は彼女の得意分野だ。

収束と爆発。どどん波に始まる、数々の氣弾技の基本。

「……お、おねえさんの気が……」

勝負の外で震えていた悟飯が目を見開いた。

フリーの気は限りなくゼロに近くなる。

いや、実際にはゼロになつたわけではなく、体の中心部へ余りにも集中し、外へ一切漏れ出ないためにそう感じられるのだ。

次の瞬間。

——ドン、と何かが破裂したような衝撃波が襲う。

「な、なんだ!?」

ピツコロとクリリンから思わず目を放し、ナツパは目を見開いた。

ベジータは足元へ放っていたスカウターを拾い上げ、スイッチを入れる。

「ば、バカな!? 戦闘力が、跳ね上がつていやがる!? さつきまでとはまるで別人だぞ

!?

もう一度深く息を吸い、地面を踏みしめた彼女はしつかりと構えをとつた。

余りにも上手くいきすぎて、一番信じられないのは本人だというのに、そんなそぶりは少しも見せない。

驚き懼く彼らへ向かって、堂々と言い放つ。

「——ばいばい拳」

「し、しんじられん……」

遠くあの世の果てにある界王星で、戦いを見守っていた界王その人は思い切り腰を抜かした。

口をわなわなと震わせ、力の入らない手で彼女を指さす。

「あ、ありやあ界王拳じゃないか……！」

次の瞬間には全員の視界から消え、あつという間にナツパの目の前へ移動する。分厚い胸板へ力強く正拳突きを食らわせ、巨体を軽々と吹っ飛ばした。

軽くせき込みながらもナツパは空中で体勢を整え、素早く速攻を仕掛けてくる。フーアイはそれを細い腕でしっかりと受け止め、逆にその腕を殴りつけた。瞬間、ビリビリと大気の震えが全員の肌を舐める。

「今度は流石に腕が痺れるぜ……」

「これでようやく互角とはね、涙が出そう

「うれし涙か？」

「まさか」

ナツパは心底楽しそうに言う。

目の前のこれがもしや、伝説のスーパーサイヤ人かと胸を躍らせて。

「気付いてねえのか、お前自分の顔をよく見てみろよ

笑ってやがるぜ、この世にこれ以上、面白いことはないってぐらいにな」

「はつ、そつちこそ」

ほとんど同時にお互い距離をとり、再び思い切りよくぶつかり合う。

ピッコロたちはただ下から見上げている事しかできなかつた。

バチバチと二つの光弾が、はじけ合つては混ざり合う。

「……フリーのやつ、何が一か八かだ……思いつきり化けやがった……」

「す、すげえ！ これなら、あのナッパつてやつに勝てるかもしねないぞ！」

余りのパワーアップにピツコロは冷や汗を流し、クリリンはごぶしを握り締めて喜んだ。

しかしそんな声も今は意識の遙か彼方。

2人のサイヤ人は誰よりも近い位置でお互いの力を感じ、血をたぎらせる。

フリーが大ぶりな攻撃を軽業のようにかわし、指先から光を放つ。

油断なくナッパもそれを避け、丸太のように太い足をふるう。

ダメージを負いながらもなんとかそれを受け止め、逆に思い切り彼女は熊のような巨体を地面へ投げつけた。

土煙が上がり、その中から再びタックルが飛び出してくる。

踊る、踊る。フリーは踊る。

彼女の動きに優雅さはない。ただ、余りにも軽やかなので踊っているようにしか見えない。

華やかさはまるでない。研ぎ澄まされた刃のような、というにはまだまだ粗削りに過ぎる。

しかし。

飛び込んできたナツパの、攻撃にうつる際の一寸の隙を見逃さなかつた。  
真正面から喉を片手で掴み、ニタリと笑う。

「爆掌波！」

バーン！ と勢いよく手のひらが爆ぜる。

射程は短くとも気功砲と変わらぬ威力、それも大幅にパワーアップした氣で発せられたものを急所にくらつたなれば、ただではすむまい。

首がもげていてもおかしくない攻撃だつたが、けれどそうはならなかつた。  
それどころか、ガシリとその手首を太く分厚い手が掴む。

「めちゃくちゃやりやがる……流石に今のは一瞬死んだかと思つたぜ」「なアッ？」

勢い良く投げられた体は、岩山を一つ崩すほどの勢いで岩肌へとつっこむ。  
なんとか起き上がるうとするのよりも先に、ナツパの追撃が襲い掛かつた。  
「な、なあ、なんか様子がおかしくないか？  
フリーの奴、どんどん弱くなつてゐるような……」

クリリンの見立ては当たつてゐる。

彼女のばいばい拳には欠点があつた。

理由は、思い付きのぶつけ本番だつたため悟空のように修業を積んで身につけた界

王拳とは違い、精度が低いこと。

そもそも彼女は気のコントロールが、鶴仙人に言わせれば完全に下手くそだった。界王拳で戦闘力が2倍になるというのなら、ばいばい拳は1・5倍と言つたところだ。

その上、不完全な力技であるせいで、体への負荷は界王拳よりも大きい。

最初はナツパの攻撃を受け止めていたフリーイだつたが、だんだんと捌くことを重視し始め、さらには避けようとする動きが多くなつていった。

息は乱れ、鼓動は無暗に高鳴つていく。肺と心臓がオーバーワークに悲鳴を上げていた。

「……そういうやさ、聞いてないことが一つあつた」

「なんだ、冥途の土産の催促か？」

馬鹿言わないで、と軽く答えてフリーイはピツコロの方をちらりと見た。

彼女の意図を合点した彼は、額へ徐々に気を溜め始める。

それを気取らせないように、攻撃の合間を縫つて彼女はさらに話を続けた。

「……なんでドラゴンボールを狙つて地球に来たの？」

やつぱりラデイツツを生き返らせるため？」

「……ラデイツツか」

ふつと、ナッパは悩む、というには僅かすぎるほどほんの少しだけ、笑みを消した。  
けれど瞬きの間にその戸惑いも消し飛んで、ただ暴虐に酔つた楽し気な色だけを満面  
に浮かべる。

「それも悪かないが、我らがベジータ王子が不老不死をこの所望なんでな。  
永久に戦闘を楽しむことにしたんだ、俺達は」

「へえ、不老不死」

自分から聞いた割には興味なさげに相槌を打つて、フーアイは印を結ぶ。

「残念だけど、ここでその夢もおしまいかも」

「……!! あれはまさか、ラディツツを殺した……おい！」

ベジータの声も今度は間に合わない。

螺旋に彩られたまがまがしい光線と、命を消費する決死の一撃が放たれる。  
目もくらむような閃光に、ナッパの体は包まれた。

「はあ、はあ！ 当たつた！ 手ごたえがあつたぞ！」

「ど、どうだ馬鹿野郎……！」

ばいばい拳による氣の強化もすっかり消え去り、フリーはへろへろと地面に降り立  
つ。

それでもまだ最低限戦えるだけの体力を保ててているのは、修行の成果と言つたところ

だつた。

やがて土煙が消え、その中から現れる。  
まだしつかりと二本足で立つナツパが。

## 其之五十二 覚悟の差

「ふ、不死身かこいつ……!?」

目の前の光景にフリーは腰を抜かしそうなほど慄き、ピツコロもクリリンも自分の目を疑つた。

ナツパは氣功砲と魔貫光殺砲の直撃を食らつた、そのはずだ。にもかかわらず、彼はまだしつかりと二本の脚で立つてゐる。

「やりやがつたな、クソガキイ……！」

とはいへ、彼も無事だつたわけではない。

鎧はすっかり碎け散り、岩のような全身がむき出しになつてゐる。あちこちがひりひりと痛み、かすれそうな声を大きさでごまかす。

感情が高ぶるままに、荒ぶる気が漏れ出し、巨体を覆う。

先ほどまでよりもさらに単調で、大ぶりな攻撃。

しかし、氣を殆ど使い果たしているフリーにとつては一撃一撃が全て命取りとなる。

「……ッ！　たア！！」

「ぐおおつ！？」

クリリンが飛び出し、隙だらけのその背中に跳び蹴りを食らわせる。

素直にそのまま地面へ突つ込むように倒れたナツパだったが、起き上がりざま腕を振るつて気弾を投げ飛ばした。

「うつとうしい！邪魔だッ！」

「わあああ——っ!!」

自分の身の丈ほどもあるエネルギー波をまともに食らい、クリリンは空中へチリのようく吹き飛ばされる。

返す刀で真横に迫っていたピッコロを、肘うち一発で沈めてしまつた。

絶望的な戦況に、彼がすつかり息を乱していることなど、最早フリーは気付くことすらできない。

「おつと、このナメック星人、死んじやいねえだろうな……こいつにはドラゴンボールのことをしやべつてもらわんとな……」

ゴミをつまむように持ち上げると、息があるのを確認して興味なさげに地べたへ放る。

「しかし、お前がここまでやるとはな……流石サイヤ人つてところか……」

一步一步と、地面を踏み固めるようにナツパはフリーへと近づいた。

よろけるふりをして彼女は背後へ片方の腕を隠し、小さな橢円形を作る。

技のコピーは何も、天津飯だけの専売特許ではない。

長い間共に修行してじっくりと観察できれば、あるいは練習する時間さえあれば、フレイにも技の真似事ぐらいはできた。

「なに？ 今更仲間にしてくれるつて言うの？」

「へつ、馬鹿言つてんじやねえ」

変わらずお互いに笑つてはいるものの、フレイはその背中にびっしょりと汗をかき、ナツパの額には青筋が浮かんでいる。

「このナツパ様相手にここまでやつたんだ。死ぬ準備はどつくにできるんだろう？」

一気に手の中の気円斬を膨らませ、ナツパに向かつて投げつける。

これほどの至近距離であれば、まず外れるはずがない。  
しかし。

「は、最後つ屁が地球人の猿真似とは、がっかりだぜ」

素早く気弾をぶつけ、ナツパはその軌道を無理やり書き換えた。

ブウンと耳障りな振動音をたてながら、輝く橜円はまるで見当違ひの方向へ吹き飛んでいく。

「だが、正直ここまでやるとは思つてなかつた、褒めてやつてもいいぞ

どうだ？ 嬉しいだろ？」

「がはツ……！」

重たい正拳突きを胸に受け、フーアは前へ折れるように身をかがめた。

肺から無理やりに押し出された空気が、口の中から塊になつて溢れ、呼吸が止まる。

「うぐ、げほつ、げほつ！」

「せめてもの慈悲つてやつだ……一思いに殺してやる」

「ぐう……あ……」

だらりと脱力した彼女の腕を掴んで持ち上げ、狙いやすいよう目の前へ掲げた。腰にこぶしを構え、軽く息を吐いた。

心臓が貫かれるその直前、彼女の指先がピクリと動く。

まるで、何かを操るように。

「ナッパ、後ろだ!!」

「なにイ!?」

背後から猛スピードで気円斬が迫つてきている。

間違いなく、気弾ではじいたのにもかかわらず、だ。

「へへっ……ベジータのやつ、余計なこと言いやがつて……

けど、避けられるもんじやないよ、操気円斬は……ツ！」

舌打ちをし、ナツパは必死に頭を回す。

彼女を殺してから避けるのでは、恐らく間に合わない。  
かといってあれをまた弾いたところで、彼女が生きてまたこちらを狙えばまるで意味  
がない。

咄嗟に思いついた手段を、彼は少しも迷うことなく実行に移す。

腕を引つ張りそのまま、フーアイ本人を操氣円斬の目の前に差し出した。  
ボロボロの彼女は、最早その手を振りほどくだけの力もない。

「どうだ！ あれを止めなきや、てめえも真つ二つだぞ！」

「……いい判断だ、けどね、ちょっと覚悟が足りないんじやない？」

ぎち、と太い腕を爪が食い込まんばかりに掴み、フーアイは笑う。  
驚愕に目を見開き、振りほどこうとしたのはナツパの方だった。  
しかし、最早もがくことすら手遅れだ。

「まさか自分で」とツ！

「まさかあ」

ふつと一瞬、彼女は大きく足を振る。

ナツパの視界で彼の手首を支点にし、フーアイがきれいに逆立ちをした。  
瞬間、視界を真っ赤な血しぶきが覆う。

裂けたのは彼の胸と、彼女の腕一本。

「覚悟の勝利つてやつだね、死なない覚悟の」

にたり笑うと、フリーは残った片手で髪をかき上げる。

転がるナッパの体へちらりと一瞥をくれ、深くため息をついた。

彼の胸はぱっくりと裂け血が溢れてはいるものの、両断するには至つてない。

「操つたせいで回転がぶれて切れ味が落ちたかな……」

にしても、こっちの腕はぶつた切られてんだから、そつちも大人しくぶつた切られと

けつての」

「……死なない覚悟、と言つていたが」

ふつと声がした方へ振り替える。

一步踏み込めばすぐにでも手が届くほどの距離に、いつの間にかベジータが立つっていた。

腕を組み、嘲笑うかのような薄ら寒い笑みを浮かべている。

「その傷では、俺が手を下すまでもなく、すぐにも死んじまうんじやないか？」

「御親切にどうも」

フリーは自分の手に残りわずかな気を集め、熱源を発生させた。

ぼたぼたと血をこぼす断面へそれを当て、無理やりに焼いて止血を行う。

「ぐ、があ……ッ！　は、はあ……はあ……」

自分の汗で全身ずぶ濡れになりながら、まだ彼女は笑っている。  
もしそれが張りぼての虚勢でも、ここまでいけば本物だった。

「これで、問題無し、ってわけ」

「ほう、見上げた根性だな」

「——かはつ」

「無意味だがな」

容赦のない手刀を鳩尾に受け、フライは糸が切れた様に崩れ落ちる。

とどめを刺そうとしたベジータの背中へ、薄い円盤がすぐそばまで迫った。  
しかしそれを見もせずにあっさりと横へ避け、振り返ると彼は笑う。

「ほう、もう起き上がったのか。貴様らも根性だけは見上げたものだな」

ピッコロとクリリンが立ち上がり、乱れた息のままそれでも構えている。

向き直ったベジータは踏み込もうと足を開き、そのままの体勢で止まつた。  
つけたままだったスカウターが、けたたましく警戒音を鳴らしている。

「戦闘力5000ほど、それが2つ……！」

「ご、悟空と天津飯だ……！」

吆きを拾つてクリリンは歓喜の声をあげた。

しかし2人の到着が迫っている事は、必ずしも彼にとつてプラスには働かない。

「一番手強かつた女は虫の息だが、お前たち4匹で手を組まれると流石に骨が折れそうだ……早めに殺しておくか」

ぎち、と踏みしめられた砂がつぶれるような嫌な音を出す。

クリリンは思わず目を見開いて歯を噛みしめ、ピッコロの方をちらりと見た。  
あくまでもベジータの目的がドラゴンボールである以上、ピッコロだけは命が助かるはずだ。

はずだつたのだが。

「おつと、安心しろ。そつちのナメツク星人も間違いなく殺してやる……」

お前の故郷、ナメツク星に行けばもつと強力なドラゴンボールがあるはずだからな。  
くだらない噂だと思っていたが、カカロットがもし本当に生き返ったとなれば、あの伝説は真実だつたわけだ』

それを聞いて怯えかたまつていた悟飯も、とうとう手足に力を込めてしつかりと立つ。

どころか、2人を庇うようにベジータの前へ歩み出た。

恐怖が消えたわけではない。むしろ震えながら、それでも少年は声を張り上げる。  
「ピッコロさんにげて——つ！」

おとうさんたちが来るまで、なんとかボクが食い止めるよ！

だつてピッコロさんがしんじやつたら神様も死んじやつて、ドラゴンボールが……

！」

「…………へつ…………くだらねえこと言いいやがつて…………てめえだけで食い止められるわけないだろ……」

「ほう、この俺を食い止めるだと？」

笑わせやがるぜ」

と、と何かがはじけるような軽い音と共に、ベジータの姿が消える。

しかし、次の瞬間攻撃を受けていたのは彼の方だった。

片腕で何とか受け止めるも、ビリビリと振動が腕どころか肩まで伝わって鈍いしびれを与える。

「…………そうか、ラディツツに大きなダメージを食らわせたのは、お前だつたな」

拳を掴んで逆に投げ飛ばすと、手のひらにエネルギーを集中させる。

食らえば、死ぬ。

武道の心得など一切ない者であつても、そのことを即座に悟るだろう、それほどの凶悪さ。

「まずは貴様から始末するとするか」

網膜を焼くような、強烈な光が悟飯を襲う。

クリリンが咄嗟に動くよりも先に、飛び出した人影が一つ。大きな背中が幼い彼の視界を塞ぐ。

だれもそれを予見できなかつた。

クリリンも、悟飯も、神様も、本人ですら。

かつてピッコロ大魔王と呼ばれたその残滓、後継者は、一人の子供を庇つて、命を落とした。

## 其之五十三 勝利のために

「ピ……ピッコロさん、めんなさい……か……かたきうてなかつた……も……もう逃げる力もなくなつちやつた……」

怒りに覚醒し、渾身の力で魔閃光を放つた悟飯だったが、ベジータにはあつさりと気弾でかき消された。

最早立っているだけの体力もなくなり、がくりと膝をついてうなだれる。

一步、また一步とベジータが近づいてくる。向けられた手のひらは高密度のエネルギーで眩いほどに輝いていた。

先に攻撃を受け、打ちのめされたクリリンは立ち上がりたくとも体が動かず、その光景を見ている事しかできない。

「うらぎり者のカカロットに、息子が殺されるところを見せてやれないのが残念だ……」  
ヴァットと空気を焼く独特の音と共に、気弾が放たれる。

死の予感と悔しさに悟飯が目を固く閉じ、クリリンが顔を背けたその瞬間。  
小さな少年の姿が搔き消えたかと思うと、すっかり無事な姿で雲の上に座っている。  
瞬きの間に彼を乗せ、気弾の範囲から逃がしたのだ。

「…………き…………筋斗雲…………!?」

スカウターの反応にベジータは上空を見上げる。

そこには、二つの人影があった。

「お、おとうさん…………！」

「天津飯も…………！」

「ついに現れたな…………!!」

楽しげに笑うベジータと違い、2人の表情は硬い。

いや、目の前の惨状に胃の奥を熱くたぎらせ、今にも張り裂けんばかりに怒っていた。

天津飯は勿論の事、あの悟空ですらこめかみに血管を浮き上ががらせている。

「わざわざ何をしに来やがつたカカロット…………それから、なんだ、もう片方は雑魚の地球人じやないか

まさか、この俺を倒すためなどというくだらんジョークを言いに来たんじやないだろ  
うな？」

あざけわらう彼を無視して、悟空は静かにピッコロへ近づき、その首筋に手を当てた。  
脈はない。一滴の熱も感じられない。

「ピッコロ…………」

「ピッコロさんは僕を庇つて死んだんだよ…………」

もう一つ、倒れている人影に目を向ける。

両手をもがれ、体を削られた見知った顔は、触れなくともすでに息が無いことがすぐにわかつた。

「や……ヤムチャ……」

天津飯はフリーのおちた片腕を見て奥歯が砕けそうなほどに強く噛みしめる。

どうにか柔らかい声音を作り、呼びかけるが反応は返つてこない。

ひゅうひゅうと、今にも途切れそうな細い呼吸だけがせめてもの救いだつた。

「……そして神様も……」

（戦闘力がどんどん上がつてやがる……！）

ベジータは二人へ向けて軽く気弾を放つたが、捕らえるよりも先に彼らの姿が消えた。

ほう、と彼にしては珍しく感嘆の声を漏らす。

クリリンと悟飯を悟空が避難させ、天津飯は仙豆を三つに分けてそのうちの二つを二人へ手渡した。

「せ、仙豆なら、フリーのやつに食わせてやつてくれ……」

でなきや、もしもの時のためにとってよ……オ……オレ達が元気になつたつて役には立たない……」

「余計な心配するなよ、食わねえんなら捨てちまうぞ！」

「それに、あいつがすっかり元気になつたら、また無茶をするだろうしな  
「はは……す……すまん……」

悟空たちから口々に言われ、クリリンは仙豆の欠片を口に運ぶ。  
天津飯は悟飯も食べたことを確認すると、緊張した面持ちで、フーアイの片腕を拾い上げた。

「頼むぞ、仙豆……」

焼けた断面に断面をピタリと合わせ、彼女の唇を押し開け欠片をなんとかつつこむ。  
口の中へ入つてきたものを無意識に歯と舌で確かめ、咀嚼しフーアイは呑み込んだ。  
とたん、柔らかく皮膚が変質し、やがて滑らかに整い、傷跡は見えなくなる。

期待していたとはい、信じられない光景に天津飯は息をのんだ。  
恐る恐る軽く指先をはじくと、反応してびくりと動く。

「…………よかつた……」

「……てん、しんはん……？」

虚ろに瞼が開き、灰色の瞳が彼の顔を捉える。

「すまない、遅くなつた」

「ホントだよ……一人、私がかたづけちゃつたじゃん……」

まだ呼吸は浅い。

死にかけていた直後だというのに、フリーはいつものように笑っている。自信たっぷりで得意げな笑顔は、すっかり見飽きてしまったものだ。

「もう片方……一人がかりで頑張り、な……」

「……ああ」

腕の回復に体力を使つたのか、それとも三分の一の仙豆では足りなかつたのか。再び気を失つた彼女を抱え、悟飯とクリリンに預ける。

「お前たち2人はコイツをつれて離れていてくれ」

「そんなこと言うなよ！ 動けるぐらいにはなつた、フリーを他所へ寝かせたらすぐ戻つてくる！」

4人で仇を討とう！

「……いや、やつとはオラたち二人で戦う。おめえたちは離れててくれ、巻き添えを食らわねえようにな」

「お、お父さん!?」

食い下がる悟飯だつたが、余りの氣迫にクリリンは彼を引きずるようにその場から離す。

しつかりとフリーを背負い、大きな岩陰へひつこんだ。

2人の姿が見えなくなると、悟空と天津飯はベジータへ向かつて向き直る。

「悟空……お前は一対一で闘いたがっていたが、そんなことを言つていられる相手ではない。」

分かつてゐるな

「ああ……」

拳を握り締め、大地を踏みしめる。

怒りのあまりに表情も歪み、悟空は腹の底から押し出すような声で唸つた。

「許さんぞ……！ 貴様～～～！」

天津飯も彼に合わせ、気を解放する。

重力が逆立つたように小石や砂が浮かび、地響きが足元を揺らした。

スカウターの数値は留まるところを知らず、上がり続ける。

上昇が停止したのを見て、最終的な戦闘力を確認すると、ベジータはスカウターを外し握りつぶした。

しかし一呼吸するとすぐに余裕ぶつた調子を取り戻す。

確かに、急激な上昇はスカウターの故障を疑うほどの異常事態ではある。

けれど2人の力を足したところで、ベジータの戦闘力には及ばないのだ。

「くっくっく……」

喜ぶがいい、貴様らのような下級戦士とみそつかすの地球人が超エリートに遊んでもらえるんだからな……

サイヤ人は生まれてすぐ戦士の素質を検査される……  
その時数値の低いクズ野郎が、貴様たちのように大したことのない星へ送り込まれるのだ……」

けれどそれを聞いて、寧ろ悟空と天津飯は微笑んで応える。

「そのおかげでオラはこの地球に来れたんだ、感謝しなきやな」

「ああ、フレイが俺達と鶴仙流で学ぶこともなかつた」

「それによ……落ちこぼれだつて必死で努力すりや、エリートを超えることもあるかもよ」

「くつくつく……面白い冗談だ……では、努力だけではどうやつても越えられぬ壁を見せてやろう……」

ようやくベジータも肩幅に足を開き、構えのような格好をとる。

風が細く荒野を流れ、空の上には穏やかに雲が浮かんでいた。

日は落ち始め、あたりが燃えるように赤く染まる。

夜が迫っていた。消されてしまつた月の、暗い夜が。

＼・＼・＼・＼

天津飯は界王星で修行を積み大幅に力をあげたものの、結局界王拳を身につけることは出来なかつた。

気のコントロールそのものは完璧だつたのだが、余りの負荷に体が耐えきれなかつたのだ。

しかし、彼と違ひ界王拳を身につけた悟空ですら、2倍の界王拳ではまるで歯が立たない。

彼の言葉通り、ベジータの力は余りにも圧倒的だつた。

無理を承知で体が壊れる可能性にも構わず、3倍の界王拳でなんとか押し切る。

天津飯のサポートもあり、ベジータを寸前のところまで追いつめた。

けれどどういうわけか、彼は月も消えてしまつた地球で大猿に変身する。

そして、彼の生み出したブルーツ波を目に浴びた悟飯もまた、大猿へ姿を変えた。

＼・＼・＼・＼

フーアは神殿で、餃子に耳打ちをした。

「サイヤ人との闘いの時、あいつらに金縛りをかけてよ」

姉弟弟子たちが立てた計画は、ごく単純なものだ。

限界まで気を抑え、気配を消し、餃子は決戦の場所のどこかで隠れて置く。スカウターがどの程度まで気を拾えるのかは、ブルマが回収したラディツツのもので確認すればいい。

そして、ここぞというタイミングで、金縛りをかける。

一瞬でも動きが止まれば、それは必殺の一手中に違いない。

この計画を確実に成功させるべく、彼女たちは二つの取り決めを作った。

一つは、天津飯と悟空が現れるまでは、決して使用しない事。

もう一つは、守るためではなく、殺すために使用する事。

「一度姿を現して術を使つたら、多分次の瞬間には殺される」

「うん……だから、使うのは天さんたちがきてから」

「そういうこと。もう一つのは……」

「勝利こそが肝心だ」

鶴仙人の口調を真似てそう言つた餃子に、フリーは力強く頷いた。

「そう、一瞬守つたところで、負けたら結局殺される。そしたら意味がないタイミングがなければ、使わないまま終わつたつていい」

「でも……」

「大丈夫」

「ばん、と大きな音をたてて餃子の背中を叩き、せき込んでいるのも構わず彼女は言った。

「私は死んでも死なないし、天津飯が死んだら殺してでも叩き起<sup>ス</sup>す！」

「……フリー、言つてること全部めちゃくちゃ」

「末弟は余計な心配すんなつて言つてるの」

と、にわかに真剣な表情へ変わり、フリーは彼を真正面から見つめた。

「この二つは絶対守ること。だいたい、餃子だつて一緒に考えたことじやん」

「うん」

「負けたら死ぬだけなんだから

「勝つしかない」

「そういうこと、鶴仙流の本懐でしょ？」

（・・・・・）

餃子は、フリーと考えた作戦を忠実に実行していた。  
物陰で息をひそめ、気を限りなくゼロにまで近づける。

彼女が殺されかかった時にも、手は出さなかつた。

一瞬守つたところで、殺せなければ死ぬだけなのだから。

そして、その瞬間は訪れる。

大猿に変身した悟飯が氣絶し、山のような巨体がベジータに向かつてのしかかる。いくら彼でもこの質量に下敷きにされればただではすむまい。

死闘により何度も死にかけ、体力が尽きかけていればなおの事。

しかし、本来の彼のスピードなら、充分避けきれたはずだ。にもかかわらず。

「か、体が……動かな……！」

彼の視界は、小さな白塗りの顔をとらえられただろうか。

氣を失つていた悟空と天津飯にも分からなかつただろう。

けれど、うつぶせに倒れ、起き上がることも出来ないままのクリリンは、確かに見ていた。

餃子が両手をベジータにむけ、とどめの一撃を生み出したのだと。

しかしそれでも残念ながら、彼を殺しきることは出来なかつた。

飛び去る球体を撃ち落とすほどの力もなく、戦士たちは逃げかえる彼の姿をただ見送るしかなかつた。

# 其の五十四 手がかり

「あく……」

荒れ果てた荒野で多くのものは皆、力尽きて倒れ、氣を失い、あるいは未だ動けないままでいる。

その中で最初に立ち上がったのは、一番の重傷だつたためずつと眠つてしまつていたフーアイだつた。

体力もすっかり回復し、かえつて今ではすっかりぴんぴんしている。

首を軽く回し、あたりを見回す。どうやら戦闘は終わつてゐるようだつたが、ベジータの死体は見当たらぬ。

軽く息を吐くと、思い出したように斬り落としたはずの片手を確かめた。

流石に気は上手く練れなかつたが、動作や感覚に異常は感じられない。

継ぎ目らしきものもなく、すっかり元通りに治つていた。

「だいぶインチキだな、これ……」

「フーアイ、大丈夫か!?」

「餃子！」

飛んできた弟弟子の姿に、彼女は自分達の勝利を確信した。  
にや、と笑つて分かり切つてゐる事を聞いてみる。

「首尾は？」

「上々」

同じようににや、と笑つた彼へ拳を突き出し、2人はこつんとそれをぶつけた。  
でも、と餃子は肩を落とし、うつむく。

「殺せてはない、逃げるの、止められなかつた」

「あー、まあそれはしようがない。でも、仲間はもういないんでしょ?  
サイヤ人の生き残りは、私と悟空以外3人だけだつて言つてたし  
最悪、追いかけてつて殺せばいいよ」

「追いかけるつて、どうやつて?」

「んぐ……」

腕組みをし、彼女が唸つていてるとパラパラとプロペラ音が響いてきた。  
頭上を見上げると、大きな飛行機がこちらへ向かつて降りてくる。

「悟飯ちや——ん!!」

着陸し、扉が開くや否や飛び出してきたのはチチだつた。

彼女の声に応えるようにして、悟飯や悟空、天津飯やクリリンたちもやつとの思いで

起き上がり始める。

人数は足りて見えたが、そのうちの一人が始めいなかつたヤジロベーである事に気づき、フレイは尋ねた。

「……餃子、ピッコロは？」

「死んだ……悟飯を庇つて」

「……マジ？」

思わずぽかんと口を開けた彼女に、餃子はこくりと頷く。

何か言いたい言葉がいくつも浮かんだ気がしたが、結局どれも形にならず、諦めて口を噤む。

神殿が浮かんでいるはずの遥か彼方上空を、フレイはぼんやりと見上げた。少し離れたところで、ヤムチャの死体を見つけたブルマが泣き叫んでいる。「ドラゴンボール、使えなくなっちゃつたかあ」

「……でも、可能性ある」

「え？」

餃子はそういうと、近くへ寄つてきていたクリリンの方を見た。

「なあ、クリリン」

「あ、お、おう……そ、だな……雲をつかむような、話だけど……」

「ベジータも、きっとそこにいく」

「どういうこと？」

突然背後からの声にクリリンたちが振り向くと、いつの間にかブルマがそこには立てていた。

目を赤く泣きはらし、擦つてはいたが意志の強さを感じさせる輝きは少しも失われていない。

寧ろ、殺氣かと勘違いするほどの、鬼気迫る表情でクリリンと餃子に詰め寄った。

「詳しく述べて」

餃子とクリリンによれば、ピッコロと神様の生まれ故郷である、ナメック星にもドランボールがあるとベジータは言つていたらしい。

つまり、そこへ行つて神龍に願うことができれば、ヤムチャもピッコロも、そして神

様も生き返るというわけだ。

そして、恐らくベジータ本人もそちらへ向かうことだろう。

「つまり、ヤムチャたちは生き返るわ、ベジータは仕留められるわで一石二鳥つてわけか！」

「……ふうつ……素人は単純でいいわね……そんな夢みたいなことできるわけないでしょ……がっくりよ」

嬉しげな声をあげたフリーと違い、ブルマは表情を暗くして下を向いた。

「だいたいクリリンくん……その何とかって星がどこにあるのか、どうやって知るわけ？」

「あ……」

「ま……任せてくれ……」

飛行機の中へ運び込まれる途中、話を聞いていた悟空が言う。  
彼をタンカに乗せていた亀仙人とヤジロベーも、その言葉を聞いて思わず足を止めた。

「オラが心で界王様に場所を聞いてやる……界王様なら絶対に知ってるさ……」

「それはそうだろうが、病院への行きしなで良いじゃろう」

こつ、と杖をついてカリンは全員の視線を自分へ集める。

「怪我人は急がんと、もう仙豆はないんだぞ」

その言葉で我に返り、餃子は天津飯の元へと急いだ。

悟空に負けず劣らず重症の彼を、超能力でそつと運び入れる。

途中、フリーとすれ違う時にはぱちりと目が合った。何とか意識はあるらしい。

「ボロボロじゃんかよ、天津飯」

「おまえほどじや……ないさ……こつちは、両腕とも、ついてるんだからな……」

「言うねえ」

けたり、と笑つて彼女はすっかりくついた片手を、見せるように軽く上げる。

「ありがと」

「……ふふ、どういたしまして」

彼の姿が飛行機の中へ消えていくのを見届けて、フレイはそういえばとナツパに近づいた。

このまま一人きり、野晒にしておくのも何か悪いような気がする。

埋めるか、燃やしてしまうかしようと近づいて、何か違和感を覚えた。どうしたことかと顔を寄せ、肩に手を触れてはつと気が付く。

「……うそお」

信じられぬ思いのまま、しかし首筋に触れて確信した。

片手で顔を覆い、思わず呻く。

「まだ生きてんの……」

「フリー、行くぞ！」

餃子に声をかけられ、彼女はそちらを振り返った。

ちらりとまたナツパへ視線を戻し、どうしたものかと考える。

指先へ、気を集め。まだ本調子ではないのか、いつもよりも時間がかかつた。

「フーイ！」

急かす声に応えず、指先で眉間を狙う。

生きているといつても、虫の息だ。流石にこの状態で頭を撃てばとどめを刺せるだろう。

十分に気が溜まつたその時、彼女は声を張り上げた。

「餃子！ 預けてた飛行機のホイポイカプセル、こつちに頂戴！ 私、このまま直接道場に戻るから！」

「どうして！」

「ナツパがまだ生きてる！」

それを聞いて全員に戦慄が走る。

クリリンが息も絶え絶えになりながら構え、それに習おうとする悟飯を背後へ隠しチチもこぶしを握った。

悟空と天津飯が起き上がりろうとして、亀仙人と餃子に押さえつけられている。

「大丈夫！ 死にかけてるし、意識もない！」

「ならさつさと殺しちまえ！」

ヤジロベーが剣を抜きながら物陰に隠れ、張り裂けんばかりに叫んだ。

「駄目だよ、ナメック星に行くんでしょ！」

彼女の返事を聞き、ぎょっとしてブルマ達は顔を見合せた。

「こいつには、色々聞かなきやね」

足元の男に落とした視線は、酷薄でどこかサディスティックにすら映る。天津飯が何か言っているのが聞こえたが、フーアには詳しい内容までは分からなかつた。

餃子はクリリンの顔をじつと見つめ、やたらとはつきりした声で言う。

「天さんのこと、お願ひ」

「えっ!？」

驚く彼をそのままおいて、餃子はフーアのところへ飛んで行つた。

さつさと出発しろのジエスチャーを受けて、亀仙人たちは出発する。

最後まで天津飯は叫んでいたが、心苦しそうに餃子は耳を塞いでいた。

「手伝ってくれるの?」

「フーアだけだと心配」

「あはは、サンキュー、正直私もそう思つてたとこ」

受け取つたホイポイカプセルから自分の飛行機を出し、フーアは「そごそと中を漁る。

持ち出してきた包帯はともかく、鎖とロープに、餃子は何のためにそれを積んでいた

のか聞こうとして、やつぱりやめた。

意識の無い巨体を無理やり起こし、軽く消毒して手当てをする。余り丁寧に行つていいのはわざとだ。

その上からロープと鎖を使いグルグル巻きにし、二人がかりで後ろの席へ押し込んだ。

「こいつ強い、暴れたらどうする?」

「そりやあもう、私達より強い人を頼るしかないでしょ。ちょっとカッコ悪いけどね」

ハンドルを握り上昇させると、彼女は通信装置のスイッチを入れた。

## 其之五十五 薄氷を踏む

目を覚まし、自分が目を覚ました事実そのものにナッパは驚いた。

じくじくと焼けるように胸の傷が痛むあたり、死んだというわけでもないようだ。咄嗟に立ち上がるとして、腕と首筋を掴まれる感触と共に動きが封じられた。

立ち上がるうとどれほど力を込めても、どうしても腰が持ち上がらない。

「ブオ～～～ン ジョル～～～ノ～～～」

やけに間延びした、気の抜けるような意味不明の挨拶。

背後に立つてこちらを押さえつけている者だろう、声からすると、ナッパと同じぐらいの年齢の男のようだ。

普段であれば聞き流すか、軽口で返すぐらいの事はするのだが、どうにも言葉が出ず押し黙ってしまう。

傷は深く、体は万全ではない。どころか、正直普段の十分の一も力が入らない。

状況もわからず、背後と急所をとられている。

感じる息苦しさが不安から来るものだと、ナッパは理解することも認めることも出来なかつた。

「関節技を力押しで外そうとするのは感心せんな、腰と傷に響くぞ」「てめえ……何者だ？」

「世界……いや、お前にはこういった方がわかりやすいか」にたりと嫌みで得意げな笑みを浮かべたのが、見なくともわかる。

「地球一の殺し屋、桃白白！」

「なんだとッ!?……ぐあッ！」

大声と共に無理やり立ち上がるうとし、余りの痛みで前のめりに体を折る。ほんの10cmも尻が持ち上がらないうちに、だ。

払いのけようとして、尻尾がちぎられている事に気が付く。

ナツパの予想は、勝手な行動がバレてフリーザ軍の誰かに捕縛されたということだった。

部屋の内装は見慣れぬものであるし、着せられている服も彼の感覚からすればそういう独特で、奇妙に思える。

当然、フリーザ軍のものとはまるで違うが、しかしそうでなければ説明がつかない。

ベジータが負けるわけはないし、そうなれば今頃ドラゴンボールが手に入っているはずで、当然地球人は皆殺しなのだから。

「だからやめておけと言ったろう？　こう押さえつけられると、体はそろそろ動かんのだ」

「……どうなつてやがる……てめえは地球人の生き残りか？いや、ベジータはひでえ奴だが、いくらなんでも死にかけの俺をほつとくわけはねえ」

「ベジータは逃げ帰つたよ」

つい、と部屋の隅から見知つた女が姿を現す。

「フーイ……！」

「おー！ 名前覚えてるんだね、ラディツツとは大違ひ」

「なんで生きていやがる、しかもその腕は……」

「正直、こつちにに関しては、私も相当びっくりしてる」

そういうながらひらひらと片手を動かして見せた。

その腕は確かに目の前で、彼女自身の技によつて斬り落とされたはずだつたが、今見る限りすっかり元通りにくつづいている。

「なんで生きてるつてのに関しては、さつきも言つたけどベジータが負けて尻尾巻いて逃げたから」

「ありえねえッ！」

押さえつけられたまま、噛みつかんばかりにナツパは叫んだ。

「奴は惑星ベジータのエリート中のエリート、天才戦士だぞ！！

それがてめえらみたいなみそつかすと、ザコ地球人に負けるわけはねえ！」

「なら——」

と、背後の男が言つた。

ひとり、と首筋を掴んでいた方の手へ、じんわりと気が集まる。

ばかりでなく、親指が移動し、軽く首の前の方を押さえた。

関節技が効いたように、地球人とサイヤ人の間に余り身体構造の違いがない。だから桃白白の指が捕らえたそこは、頸動脈が通つていた。どれほど頑丈なナツパであつても、傷をつけられれば数分と持たず死ぬだろう。凍えるほどに頭が冷える。

「——この状況はどう説明する？　フリーは生きている。お前たちがカカラツトと呼ぶやつもだ。

障子をあけて少し外へ出てみるか？　街の明かりがいくらかは見えるはずだ。地球人の、平和な街がな

「そして、あんたは捕まつてる」

座つているナツパへ視線を合わせるため、フリーはすぐ目の前へしゃがんだ。「雑にだけど、手当をしてここまで運んできたのは私。服を着せてあげたのもねけどただの親切じやない、わかるでしょ？」

「俺を捕虜にしたつもりか？」

「正解。ただし、半分だけ」「何?」

怪訝そうな顔をした彼へ、にやりと笑つて彼女は続ける。

「おっさん、どう考えたつて、大人しく捕虜になつてくれるたまじやないじやん  
だから、交換条件」

「交換条件だと?」

「そう。ナツパのおっさんは、私達に情報を提供する。あと技も教えてくれたら嬉しい  
かな」

その代わり、こつちは命の安全を保障するし、ちよこつとならこつちの技も教えてあ  
げる。なんなら、ベジータを殺さない約束だつてしまつていい」

非公認だけど、と小さく付け加えたフリーの呴きはナツパには届かなかつた。  
が、彼はいささか呆れたような表情で、ねじ曲がつたような声を出す。

ベジータの命の保証などという部分に関しては、言及する価値すらない。  
「技ア? このナツパ様に、お前がか?」

「おつと、そんなこと言つていいの? 戦闘中にガツと私の戦闘力があがつたアレ、知り  
たくない?」

「……」

そう言われ、戦闘中のあの光景をナツパは思い出した。

肌に感じた爆ぜるような衝撃波。

彼自身は詳しい数値を確認していないが、スカウターを覗いていたベジータは随分と驚いていたはずだ。

『さっきまでとはまるで別人だ』と。

しかし、だ。

「俺にそいつを教える気があるのか？　お前なんか紙屑みたいに引き裂いちまうぞ」「ま、勿論後々にはなるよ。けど、約束したらちやんと教える。ああ、あとそれに……」

じつと、灰色の瞳がナツパの目を覗き込むように見つめる。

薄っぺらに優しく微笑んで、彼女は言つた。

「不老不死つてのはダメだけど、ラデイツツは生き返らせてあげる」

「な……に……！」

思わず口をぽかんと開けてしまうナツパを見て、フレイは予想通りだとばかりに話を続ける。

戦いの最中ラデイツツの名前を出した時、ほんの少しの間だつたが、笑みが消えたのを彼女は見ていた。

そして復活についても、『悪かない』とも言つていたのだ。

「あのベジータって方は知らないけど、おっさん自身はラデイツツに生き返つて欲しいんでしょ？」

「不老不死ほどじゃないにしてもさ。叶えるよ、私達に協力してくれるなら」

「…………もし」

と、ナッパは言う。

既に目覚めてすぐの混乱はすっかり消え去つていたが、ベジータが負けたということに関しては、まだ十分納得しているわけではなかつた。

しかし、事実として彼は囚われの身であり、今すぐに助けが来るという状況でもないだろう。

フリーイがこれほどまで回復しきつているのなら、あの戦いから少なくとも1日や2日は経つてしまつてゐる。

「断るといつたら？」

「殺す。頷いても、妙な動きをしたらその瞬間に殺す」

さつぱりと言い切るよりも先に、フリーイの指先が彼の眉間を狙つた。

同時に、首筋に燃えるような熱さを感じる。背後の男が掌へエネルギーを集めているのだろう。

しかしナッパは多少わざとらしくではあつたが、にやにやと余裕ぶつて笑つてみせ

た。

「よく言うぜ。一度しくじったガキの分際で」

「この前は瀕死と重症だつたけど、今度は万全と重症。それに今なら、こんなに至近距離で狙える」

見せつけるように、明かりのともつた指先をフリーはくるくると回す。

「しかも、後ろの人は私の師匠で、私よりずっと強い」

呼応するように、より一層首筋の熱が勢いを増した。

ナツパの頭によぎるのは、フリーが撃つてきた爆発する手のひらの技だ。

これほど力の落ちた状態で直接喰らえば、よくて瀕死と言つたところか、悪ければ首が千切れ落ちる。

「けつ、地球人頼みかよ。戦闘民族サイヤ人の名が泣くぜ」

「なんとでもいいなよ、使えるものは親でも使えつてね……あれ? ちょっと違つたかな」

こてんと首をかしげる様はどうしてか無邪氣で、少女のようにも映る。  
しかし指先の方はナツパから少しも狙いを外そようとしない。

「……ばいばい拳つったか、あの技は」

「そうそう、ま、正直まだ未完成だけどね」

「未完成での威力か……」

ゆっくりと、息を吸い、吐く。

ナツパははつきり言つて、あまり色々なことを考えるのが得意ではない。

彼本人もそのことは多少自覚している。どれだけ考えたところで良い案が浮かぶとも思えなかつた。

ぐだぐだと悩んでいるよりも、すっぱりと決めて行動に移すのが彼の好みだ。  
大体、回復してしまえば今度こそフーアイ達など、あつさりと殺してしまえるのだから。  
多少情報を与えたところで、彼らにベジータが殺せるところなど、ナツパにはちつとも想像ができなかつた。

質問の内容と沈黙を肯定ととり、指先をしまい、手を下げて彼女は尋ねる。

「そういえば、ラデイツツの時も、この間も、死にかけて元気になつたら、なんか体が妙に動くんだけど、心当たりつてある?」

「なんだ、そんなことも知らねえのか? サイヤ人は死にかけて復活するたび、戦闘力が跳ね上がるんだ」

「えつ……?」

# 其之五十六 宇宙の話をしよう

「もしもしーし！」

受話器から聞こえてきた声に、クリリンはちょっと待てよとスピーカー機能のスイッチを入れる。

病室に集まっていた面々は、いささか硬い面持ちで音声へ聞き入った。

無理もない、彼女の言葉次第では、再び死闘が始まるとも限らないのだから。

憮然とした表情で、ヤジロベーが受話器に向かつて言う。

「で、どうなつたんだよ、あのナッパつてやつは、死んだのか？」

「いや、ぴんぴんしてるよ。大分力は落ちてるみたいだけどね。ご飯はもりもり食べてたけど」

「つてことは……」

「一応協力体制？ つて感じ？ 面白い話も色々聞けたよ」

それをきいてクリリンと亀仙人、カリーンはそつと胸をなでおろす。

一方で、寧ろ一層表情を険しくしたのは天津飯とヤジロベー、そしてチチの三人だつた。

その中でも天津飯はもつとも不満氣で、全身をギプスに覆われながらもなお激しく声を荒げる。

「俺は反対だ。正氣か？ フーア、そいつはお前の腕を斬り落としたんだぞ！」

「いやあ、斬り落としたのは自分でやつたよ？」

「そいつが原因なのは変わらないだろう、殺されてもおかしくなかつた」「なんだん！ 悟飯ちゃんをこんなひどい目に合わせた奴と、どうして仲良くしなきやならねえんだ！」

かつかつと電話へ近づき、殺氣立つて肩を怒らせチチが叫ぶ。

余りの気迫に実の父親である牛魔王でさえ、気圧され何も言えなくなつていた。

その姿にカリーンは、なんとなく数年前、ピッコロ大魔王と対峙した時の悟空たちを思い出す。

げに恐ろしきは手負いの獣、それよりもなお恐ろしいのは子連れの獣なのだ。

「全く、ピーピーうるさいヒヨコたちだ」

受話器のむこうから、ちよつと、と責めるようなフーアの声がしたかと思うと、聞こえてくる声は野太い男のそれにかわる。

「心配するな、俺だつて仲良しこよしをやるつもりはねえさ。

ベジータのやつにお前らが皆殺しにされるまでの間だけだ」

「な、ナツパ……！」

あざけるような口調と、ざらついた声色はもはや聞き間違えようがなかつた。

慄くクリリンと悟飯の反応に、亀仙人たちも思わずつばを飲み込む。

電話越しにもその強さと邪悪さが、こちらを威圧してくるような息苦しさ。

「ああもう、勝手に電話とらないでよ！」

と、ごく普段通りのフリーイの声がして、何かがこすれたり当たつたりするノイズが響く。

恐らくは無理やり電話を奪い返したのだろう、ふうつと短く息を吐く音がして、そういうわけだから、と彼女は何事もなかつたかのように仕切り直す。

「ほ……ほんとに一緒にいるんだな……」

「え、そりやそうだよ。悟空も天津飯もぶつ倒れてて、私と桃白白以外の誰がナツパのおっさん見張るのさ」

「……はは……おっさん……」

クリリンは力なく、乾いた笑い声を出す。

お互にお互いの息の根を止める寸前までいつた相手のはずだが、それがすっかり近所のおじさん並みの扱いである。

いや、思い返せばそもそも、殺し合っている最中からそういう節はあつたなど、気が

付いてクリリンはなんだか気が遠くなつた。

ベジータの死を勿体ないと言つた悟空といい、サイヤ人の共通なのだろうか。同じことを思つたのか、額の汗を拭きながら亀仙人が続きを促した。

「それで、面白い話とはなんじゃ？」

「えつと、まず、一番大事な話なんだけどさ、ナツパ達にはまだ仲間がいるらしい」

がたたたッ！と立ち上がるものは全員立ち上がり、椅子が揺れる。

あのカリン様ですら血の気が引いて毛むくじやらの顔が青くなり、悟飯もぎゅっと手を握締め拳を作つた。

電話口の向こう側で、仲間じやねえ！ と叫ぶ声が聞こえる。

「あー、でもそんなに慌てなくていいよ。助けに来るほど仲良くなはないみたい。

というかむしろ最悪で、なんなら地球に来るのもベジータの独断だし、もしバレたら結構ただじやすまないつて

「……な、なあ、フーィ……」

ヤジロベーがパイプ椅子のヘリを武器のように握りしめ、震える声で言つた。

「おみやあの言い草だと、その仲間つてのは、ベジータより強いように聞こえるんだが

……」

「うん、そうだよ」

「い——ツ!」

悟空や天津飯でさえ言葉を失い、ただただ驚愕している。

ヤジロベーは腰を抜かし、へなへなとその場へ座り込んだ。

それが聞こえていないわけはないのに、フリーは未だ能天氣な声で続ける。

「それがさあ、聞いて驚かないでよ」

「もう十分驚いとるわ! なんでおみやあはそんなに冷静なんだ!!」

「いや、マジで腰抜かすって」

「だから……ツ!!」

「なんと、銀河どころか宇宙中で軍勢を連れて暴れまわって、支配している星は数百個呼び名は宇宙の帝王、名前はフリーザ! だつてさ」

「…………」「…………」

聞こえてきた文言の規模の大きさに、誰も何も言おうとしない。

ぽかんと口を開け、バカのように虚空を見つめた。

長い長い沈黙に、あてが外れたのかあれ?とフリーが言う。

「驚かない?」

「いや……驚かないというか……」

「……本当の話か? それ……」

「大真面目だけど……あれ？ 信じてない？」

「でも信じて貰わないと困るんだけど……」

一度言葉を切つて、彼女は低い声を出した。

「なにせ、そいつら地球に来るかも知れないんだから」

彼女とナツパの言い分けはこうだ。

そもそもスカウターとは、フリーザが率いるフリーザ軍の備品であるらしい。

その為、ベジータとナツパがラディイツツのスカウターから会話を聞いてドラゴンボールの存在を知ったのと同じように、フリーザもドラゴンボールの存在を知った可能性がある、と。

「ただ、地球よりはナメック星の方が近いし本家大本だから、多分そつちに行くだろうつて」

「な、なら地球の事は関係ないんじゃ……」

「けどさ、考えても見てよ。宇宙まるごと自分のものみたいに振舞つてるやつが、ドラゴンボール一回で満足すると思う？」

しかも、地球のドラゴンボールが使えない事、連中は知らないんだよ？

あとついでに言うと、地球は結構高く売れそうな星に入るらしい」

「…………つまり？」

「フリー・ザが来ない理由が、宇宙的に地球がクソド田舎つてこと以外ない」

今度こそ、本当に面々は血色と言葉をすっかり無くしてしまった。

亀仙人は後ろによろけてしまい、牛魔王にその背中を支えられる。

そのなかでぽつりと、悟空が呟いた。酷く嬉し気に、そして楽し氣に。

「つまりそのとんでもねえフリー・ザつてやつを、倒さないといけないってわけか」

「そういうこと」

にやり、と彼女も笑う。

「しかもドラゴンボールで願いを叶える前、ナメック星でね」

ヽ・ヽ・ヽ・ヽ

「そうだ、ブルマ。ナツパがポッドのリモコンの使い方教えてくれたからさ、そつちに伝えるから」

「大丈夫！ ゆうべちゃんとこのリモコン調べたんだから！ フーイもテレビで動くところ見といてよ」

「あ、そう？」

電話口の自信満々な声に、フーアは桃白白に向かってテレビを指さした。

黙つて彼は画面のスイッチを入れ、チャンネルを合わせた。  
憮然とした表情で、ナツパはテレビを見つめる。

「おいおい、大丈夫かよ」

「まあ、ブルマが天才なのは間違いないし……」

——ひとつは現場から突然飛び立つて……

流れる音声を聞きながら、彼は今更ながら、ベジータが地球を去ったのは事実なのだと改めて知った。

しかし受け入れられるかはやはり別の話で、なんとなく座りが悪い感覚を抱えたまま、ぼんやりと画面を眺める。

と。

——ドーン！——

「へっ！」

「はっ！」

「お、おいおいおい！！」

爆発し、木つ端みじんになつた自分のポツドの映像にナツパは思わずテレビへ掴みかかつた。

「おいてめえ!!自爆しちまつたじやねえか!!  
「うわあ、粉みじん……」

思わず口を覆つたフレイの手から電話をもぎ取り、受話器へ向かつて鼓膜が破れんばかりに叫ぶ。

「この、クソアマ～ツ!!帰れなくなつちまつたじやねえか!!何が天才だ、ぶつ殺してやる!!」

「それより、ナメツク星に行けなくなつちやつたんじや……  
「なにがそれより、だ!!」

フレイはすぐそばで怒鳴り散らすナツパを意にも介さず、腕を組んで唸つている。

桃白白はマイペースに耳を塞いでいた。

ナメツク星への道のりは、前途多難である。

## 其之五十七 部隊編成

ミスター・ポポの手引きでブルマは神様が乗ってきたナメツク星の宇宙船を発見した。

操縦を任せられそうになり、固辞した彼女だつたが悟空たちの説得と、ヤムチャの復活がかかつてることもあり、結局はしぶしぶ了承する。

問題は、ナメツク星へ旅立つメンバーだつたが……。

「そつたらこと悟飯ちゃんがすることねえべ!! 何かあつたらど――すんだ!!」

髪を振り乱しチチは叫んだ。

例えようもない不安が焦がすように全身を包む。

胃の奥は煮えたぎるように熱くなり、張り裂けそうな激情で脳は濁り言葉が上手く出でこない。

「2か月だで!! 今まで1年以上も気をもんでたうえに!!」

本当は、気をもんでいたという言葉ではまるつきり收まらなかつた。自分のまるで与り知らない所で悟空が死んでしまつたかと思えば、悟飯は誘拐されてしまつたのだから。

生きているのか死んでいるのかすら分からず、ようやく顔を見れたと思つたら、目を覆いたくなるほどの酷い怪我を負つていた。

そのうえ今度はその傷も癒えないままに、他でもないあのピツコロのためにまた戦いに赴こうというのだから。

「ピツコロなんてかんけいねえべつ!!」

彼女の知るピツコロはこの世の全てを悪と暴力の無秩序へ叩き落そうとした、恐ろしい大魔王であり、悟空を殺そうとした相手でしかない。

悟飯を庇つて死んだと言われたところで、信じられなかつた。

チチは知らないし、分からぬ。1年間がもたらした、彼らの絆の事など。それどころか、彼女にとつては息子を奪い、引き剥がした張本人ではないか。

「塾は！お稽古は！もうずいぶんほかの子に遅れちまつてるだぞ！」

酷く喉が渴くような感覚と共に、なからば祈るようにチチは叫んだ。

そう、悟飯はまだたつたの5歳だつた。

悟空とチチが出会つたころの年齢のまだ半分も生きていない。

そのうえ彼が引っ込み思案で気の優しい子だという事を、彼女はとてもよく知つていた。

まるで戦いになど向いていない、けれど眞面目で良い子な、可愛い我が子。

「おめえはちいさなこどもだ！こどもはこどもらしくひとりやええつ！」

ただ算数や文字の書き方に頭を悩ませていればいい。手足を必死に動かすのは、お稽古の練習でいい。

本当に恐ろしい事からは周りの大人に守られて、明日の夕飯の心配だけしていればいいのだ。

死んでしまうということと真面に向かい合い、命を懸けて戦いに赴くなど間違つていいのだ。

そのモミジのような手のひらで抱えるには、彼自身の命は余りにも重すぎる。  
ましてや、他人の命など。

それなのに。

「うるさい……！」

普段の大人しい悟飯からは考えられない程大きな声で怒鳴り、彼は母親を無理に黙らせた。

膝の上に乗った布団を固く握りしめ、眉間にしわを寄せて手元へ視線を落とす。  
包帯の白が目にいたい。

「お……おかあさん……いまは……いまは本当にそんなことを言つてゐる時じやないんだよ……」

みんな……みんな……僕たち地球のために必死で闘つて……死んでいつたピツコロ  
さんたちを生き返らせて……またサイヤ人たちと戦わなきやいけないんだ……  
僕だつて……僕だつて戦えるんだ……！なにか、なにかやらなきや……！」

既に彼はもう、ただの小さな子供ではなくなつてしまっていた。

「わかつておかあさん……ごめんなさい」

最後に一言だけ謝る彼は、後ろめたさを感じているのかまだチチの顔を見ようとはしなかつた。

けれどその眼には硬い意志の光が宿り、一步も引かない。

一度こうと決めたらてこでも動かない頑固なところは、むしろ父親より母親によく似ている。

「おめえの負けだ……気持ちよく悟飯を宇宙に飛ばさせてやるだよ」

無理を悟り肩を落とした彼女の背中を、やさしく牛魔王が支えた。

（・）（・）（・）（・）

「じゃあ、あとはフリーもいれて、4人でナメック星へ出発だな」

「いや……ちょっと待ってくれ」

電話をかけ直そうとしたクリリンを、そういうつて止めたのは天津飯だつた。

指一本も動かせない状態でなんとか首を傾け、彼はブルマの方を見る。

「なあブルマ、サイヤ人のポッドを調べれば宇宙船を作れるのか?」

「ええ、何とかなると思うけど、でももういいじやない。神様が乗つて来たやつがあるんだから、大体、のこつてた一つは壊れちゃつたんだし」

「……壊れちゃつたと言うか、壊しちゃつたと言うか……」

「うるさいわね! 悪かつたわよ!」

うむむ、と唸り横から口をはさんだ亀仙人に向かつて、ブルマが怒鳴る。

天津飯は軽く咳払いをして、いいや、と彼女の言葉を否定した。

「まだもう一つ残つているはずだ……悟空が乗つてきた奴がな」

それを聞いて面々はあつと声を上げる。

弾むような声でブルマはそうよ、そうだわ! と飛び上がつて喜んだ。

「同じサイヤ人なんだから、孫くんも小さいころ、あれに乗つて來たはずよね! さすが天津飯!」

「それなら、フリーイが乗つてきた奴もあるんじやねえか?」

悟空の言葉に、天津飯は少し言いにくそうなそぶりを見せた後、軽く目を伏せる。

「それは期待できないな……ずいぶん昔、まだお互い子供だった頃本人から聞いた話だ

「そういや、ラディイツツもそんなようなことを言つてたような……」  
が、あいつが乗つて来たポッドは故障しながら地球に墜落したらしい」

少し気まずそうにクリリンは頭をなでて、何かに気が付き怪訝そうな表情を浮かべた。

「けど、どつちにしろ一から宇宙船を作るより、神様が乗ってきた奴に乗る方が簡単じゃないか?」

「いや、宇宙船は二ついる……先発組と、後発組だ」「どうしたこと?」

天津飯の案はこうだ。

兵は神足を貴ぶというが、今回の作戦はまずスピード勝負という面があつた。

からだ。

彼がどんな願いを抱いているにしろ、もしも宇宙征服だとか、ベジータ達のような不死老不死を目的にしていれば願いがかなつた時点でゲームオーバーになつてしまふ。

その為には、軽い改造と準備で済むナメツク星の宇宙船が魅力的だつた。早く出發すればするだけ、早く到着できるのだから当然だ。

けれどあの宇宙船は例えるなら普通の旅行船のようなもので、修行やトレーニングを

積むには向いていない。

かなり長い間放置されていたという事もあり、重力操作装置による重力にも、耐えられそうになかった。

しかし、桁外れな強さを持つフリーザに対抗するためには、当然フリー一人では話にならない。主戦力である悟空たちは大幅なパワーアップが必要となる。

その為には当然、トレーニングの環境がいる。それには初めからその為に宇宙船を作るほうが都合がいい。

そもそも、次の仙豆が育つには1か月必要なのだ。10日後の出発では乗組員の方が間に合わない。

「神様の宇宙船で出発すれば、戦力不足で負けるだけだ……」

しかし、一から宇宙船を作ったのでは間に合わず、フリーザに先に願いをかなえられる可能性がある。今この時すでに、手遅れになっているかも知れない

「だから2チームに分けるというわけか……」

感心しきりに腕を組む亀仙人。天津飯は本当はもう一つ必要なグループを思いついていたのだが、その事は口にしなかつた。

「じゃ、じゃあ私は宇宙船を作らなきやね！代わりにフレイが先発でいけばいいじゃな

い！」

「……ブルマさん」

「な、なによクリリンくん」

「フーイにブルマさんの代わりが出来ると 思います？」

その言葉にうつとブルマは呻いた。

フーイは別に頭が悪いというわけではない。感覚に頼りすぎるところはあるが、とつきの機転は効く方だし、悪知恵は働く。

なんなら乗り物には詳しいほうで、飛行機の操縦は勿論、戦車でドライブだってできるらしい。

ではブルマのようにメカニックの代わりが出来るかと言うと、可能性は完ぺきにゼロだつた。専門知識が全く足りない。

そもそも、今日初めて見た宇宙船の整備や改造が出来るブルマが天才すぎるだけで、代わりなど見つかるわけがなかつた。

「で、でもほら、私がいなかつたら誰がポッドを調べて宇宙船を作るのよ」

しかし、なおも諦めねず、彼女は食い下がる。当然だ、宇宙の帝王、地上げ屋などの異名を持つ凶惡な宇宙人が攻めようとしている星に、好き好んでいきたい人間などいない。極々一部を除いて。

誰だつて命は惜しいのだ。

それを聞いた悟空が、何という事もないよう口にボロリと言う。

「ブルマの父ちゃんに頼めば作ってくれるんじやねえか？」

「……確かにパパならできるだろうけど……」

ブルマのチチ、ブリーフ博士は何を隠そうホイポイカプセルの生みの親。世界一大企業カプセルコー・ポレーションの創始者であり、娘同様、押しも押されぬ大天才だつた。

では彼を代わりにナメツク星へ、とはさすがの彼女も言えなかつた。

勿論愛情もあるが、彼は天才が故に浮世離れした、はつきり言つてしまえば異常に能天気なところがあり、そのうえ好奇心旺盛なので得体の知れない所へ送るのは不安すぎるのである。

ある意味、非常に娘が父親に抱くのに相応しい、身内特有の感情と感覚である。

「……しようがないわね、わかったわよ。そもそもほつといたつて、そのフリーザつてやつは地球に攻めてくるかもしれないんだし」

長々と考え込んでいたがしかし、ふん、と腰に手を当てて彼女はどうどう腹をくくつた。

## 幕間 踊る阿呆ども

「たアッ!!……ふんぎやつ!!」

フレイの鋭いハイキックを、桃白白は同じようにハイキックで弾く。

そのままからめとるように脚を回し、下に下げるに片足を囚われた彼女はなすすべなく、尻もちをついた。

容赦なく追撃で踏みつけようとする足首をしつかりとつかみ、上空へ向かつてぶん投げる。

くるりと空中で一回転し、着地しようとした桃白白の頭部を正確に狙つたどん波は、柔らかく上半身をそらされ彼の目の前を通り過ぎて行つた。

はじまつた二人の『組手』を見ている、というか目の届かない所へ行かないように強制的に見させられているナツパだつたが、気づくことがあつた。

彼女の体捌きは明らかに、この桃白白と呼ばれている地球人から学んだものである。

軽業のような動きはよく似ていたが、明らかに彼の方が無駄が少なく技巧は上だ。熟練の達人と言う奴だろう、他の星でも稀にだが見たことはある。

(こんなド田舎の地球に、探せばいるもんだぜ……)

そういう連中はいつでもナツパのことをひどく楽しませてくれたものだ。

弱い者いじめもそれはそれで面白くはあるが、戦闘の喜びはやはり、最低限強さがあるもの同士でないと味わえない。いくつかの顔を思い出し——大半はすでにおぼろげになつてしまつていたが——、比べる。

恐らく、桃白白はそのどれにもひけをとらないだろう。勿論万全であれば負けるはずのない程度ではあるが。

かといってフレイグ大きく劣っているかと言えば、そんなこともない。

そもそも生まれついてのスペックが、地球人とサイヤ人では圧倒的に差があるので。力押しやタフさなら、彼女の方が上だろう。カバーしているのは桃白白の気、と呼ばれる戦闘力のコントロールだと思われる。

(……しつかし、なんつーか……)

ナツパは胡坐をかき頬杖をついて、落ち着きなさげに膝を揺らす。

斬られてさえいなければ、尻尾もせわしなくゆらゆらと揺れていたことだろう。

残像拳を読まれ、拳を横から止められ、そこまではフレイグも読んでいたのか、逆にその腕を押しのけ、こじ開けると顎へめがけて蹴り上げる。

その腕を掴み、今度は桃白白が彼女の体を上空へ放り投げた。

(………)

間髪入れず下から撃たれたどん波を、舞空術でなんとかすんでのところでかわす。

膝の揺れは激しくなり、じわじわとこめかみに血筋が浮いてきた。

まだ胸の傷は痛むはずだが、だんだんとそんなことはどうでもよくなり始めている。

生来、彼は我慢強いタイプではない。

フレイは笑っている。

先日の戦いの時とは違い、まるで親にあやされる子供のように無邪気な笑顔だ。勿論、攻撃そのものはまるで容赦がない。不意打ちも奇襲もなんもありで、どの技も全力だろう。

しかし、相対する桃白白も笑っているだろうことがナツパにはわかつた。

普段と変わらぬ読めない無表情にもかかわらず、彼にはそういう確信があつた。

「だ——ッ!!」

突然上がった雄叫びに、二人は思わず手を止めそちらを見た。

イラついた表情で、ナツパは縁側におり、どすどすとこちらへ近づいてくる。

すわ裏切りかと思つたが、どうやらそういうわけでも無いらしい。

「ど、どうした？ おっさん」

「もう我慢できねえ！」

ぐつと足を肩幅に開き、拳を握りしめる。

胸の包帯は痛々しかったが、どつと漏れ出た気は中々のものだ。  
けれど先日のものに比べればどうということもない、フーアイはよく知っていた。  
戸惑いながら、彼女はもう一度尋ねる。

「だから、どうしたのさ？」

「お前らだけで楽しみやがって！ 僕にもやらせろ！」

「……は？」

思いもよらぬ返答に、桃白白とフーアイは同時に顔を見合せた。  
そして、同時にナツパの方へ向き直る。

「馬鹿か？」

「なんだと!?」

桃白白のあまりにも端的な罵倒は、ナツパの青筋をよりはつきりと浮かび上がらせ  
た。

はつきり言つて、二人にとつてはナツパの申し出を受け入れた方が得だつた。  
どれほど強からうと彼は重症であり、油断ならないのに違いはないが、真正面から相  
手をするなら脅威と言うほどでもない。

組手とはいえ激しく動いたなら、当然傷に響き治りは遅くなるだろう。裏切りの可能性があり監視の必要がある以上、完全復活は遅くなるに越したことはなかつた。

そして、それはそのままナツパにとつての不利になる。

丁寧に説明してやる義理もないでの、桃白白は目の前の大男を見上げたまま黙つていたが、やがて彼の言わんとしている事に気が付いたのだろう。

ナツパは胸の包帯へ傷を落とし、はん、と軽く鼻を鳴らす。

「こんな傷、へでもねえ。お前ら相手ならちようどいいハンドだぜ」

「……うんまあ、まるつきり間違いでも無いけど……」

事実、力の差はある為微妙な顔をするフーア。

なんとなく引っかかるものを感じた桃白白だったが、にわかに原因を思い出して同じように微妙な顔になつた。

もう十年以上も前の事だ。

その日まだ幼かつたフーアは体調を崩していた。

原因ははつきりとしなかつたが、小さな子供が突然熱を出すことはそう珍しくもない。

寝室に寝かされ、大人しくしろときつく言いつけられていたのだが、少々タイミングが悪かつた。

ちようど数か月ぶりに桃白白が道場へ帰つて いる日だつたのだ。

寝込んで いる彼女の心配は しないでもなかつたが、命に別状があるほどでもない。

それまでフリーにかかりきりだつたこともあり、これを機会に桃白白は天津飯へ一度みつちり修業をつけることにした。したのだが。

「わ～～～ッ!!」

その事を知つたフリーは火がついたように泣き出し、四肢をばたつかせて暴れまくつてだだをこねた。ついでに熱もあがつた。

自分も組み手をするのだと 言つてきかなかつたのを、鶴仙人が怒鳴りつけ叱りつけ、天津飯たちを送り出したのだ。

帰つて 来た時に妙に兄がげつそりして いたあれは、決して見間違ひではなかつただろう。

「……」

「た、桃白白？」

く。  
しばし目を閉じ、記憶を思い返していた彼だつたが、フリーの呼びかけで再び目を開

彼女とナッパを見比べ、ついでに何度か会つたことのある孫悟空の事も思い浮かべ

た。

あの少年もそういえばなんどかこちらへ手合させをねだつて来た覚えがある。  
サイヤ人というのはみんなこうなのだろうか。

「フーィ」

「なに？」

「ひとまずお前にこいつのことをどうこう言う権利はない」

「なんで!？」

不本意そうな彼女を手を振つて追い払い、ナツパと向かい合つた。

軽く息を吸い、吐く。桃白白が殺し屋として最も優れているのは、この普段通りの空氣のままに、殺意や闘志を宿せるところかもしれない。

心から嬉しそうに、ナツパはぐつとこぶしに力を籠めた。

「お、やるのか?」

「この桃白白様に向かつて、ハンデ、などと寝言を言われてはな

前の方へ垂れていた三つ編みを指ではじいて後ろへ流すと、桃白白は指をくいくい、  
と動かす。

「こい、小僧。遊んでやる」

「がははつ！ 小僧だと？ 地球人は大口叩くのがお得意なようで」

安心しろ殺しやしねえよと、言つたナツパはまだ舐めている。  
自分の傷も、地球の事も。

# 幕間 教えて！鶴先生！

「ああくそつ」

「何してやの？」

かれこれ30分ほどもイラついた様子で自分の指先を見つめるナツパへ、見かねて  
フレイが声をかける。

先日の組手で胸の傷が開いてしまったため絶対安静のはずだが、本人は余り大人しく  
している様子がない。

大人しくしていることが出来ないというか、暇が我慢できないタイプなのだろう。  
「……いや、なんでもない」

「そつか、てつきりどん波の練習だと思つたんだけど」  
氣恥ずかしかつたのか、ナツパは荒々しく舌打ちをする。

怒鳴られてもあまり憲りる様子も無く、むしろ楽し気に彼女はニヤニヤと笑つた。  
内心では、30分ほど前からずつとニヤニヤしつぱなしだつた。

「教えてあげようか？ そういう約束だつたし」

「…………」

「いい? どどん波を撃つときは……撃つときは……」

得意げな口調で話し始めたとたん、だんだんとフーアイのトーンが下がっていき、最後には自分の指先をじっと見つめている。

なんだなどとナツパが彼女の手を覗き込むと、あつというまに小さな気弾が明りのようく灯った。

本来なら真っ直ぐそのまま射出されるはずの光線は、いつまでたつても現れない。

「…………」

「おいなんだ、早く言えよ」

「こう……ガツとやって、ビヤツと……」

「……ガツとやって、ビヤツ……?」

言われるがまま指先をたて、言葉通りのことをイメージしようとするナツパだったが、勿論それでうまくいくはずもなかつた。

不信そうなジト目で彼女の方を見る。

「てめえ、教える気あんのか?」

「あるよ! あるんだけど……!」

ああでもない、こうでもないとフリーは何事か口の中でも「も」と言葉を組み立てていた。

が、結局はやがて諦めて自分の師匠へ助けを求める。

「桃白白！」

「どうした」

「どんどん波の撃ち方ナッパに教えて！」

「なんだ、そんなことか」

武器の点検と手入れを手早く済ませ、よつこらせと立ち上がりつつかりフーリ移動した。

なにせ鶴仙人と並んで鶴仙流を教える師匠なのだから、これで安心とすっかりフーリも生徒の気持ちでナッパの側へ座り直す。

ぴつと指を一本立てて、桃白白はその切つ先へ気を集めた。

「いいか、どんどん波は指先に気を集中させ、絞り切つて真つ直ぐにだす。

お前も気弾は撃てるんだろう、手のひらに気を集めて、それを指先に圧縮するつもりでやってみろ」

「おう」

今度は理解できる説明に、ナッパも素直に領いて実行に移す。

たっぷりと手のひらに溜められた気が、じわじわと指先へ移動した。

と、極限まで圧縮された気弾が指先に出現する。バチバチと凶悪そうな余波までま

とつて。

「……なんか違くない?」

フレイは首をひねった。

どどん波は指先から光線を放つ技であり、撃つ前に指先にたまる気は、たとえるなら蛇口が開ききる直前、入口で今にも落ちそうになつてゐる水滴のようなものだ。

対して、ナツパのものは明らかにバスケットボール程度の大きさがあり、蛇口の口ではなく、一つの球体として完結している。

それはフリーザのデスボールと呼ばれる技と非常によく似ていたが、ここにいる誰も知らないので彼は眉間にしわを寄せるだけだった。

「何が違うってんだ?」

「指先つて銃口なんだよ、ちよつとだしつぱにするから、集めきつて閉じちゃつたらダメなの」

「……だしつぱで……」うか?」

「うつわ、違う違う! ボールがどんどんでかくなつてるだけじゃん、それ!」

「だから何が違うんだよ!」

頭ごなしに理解を投げず、一度実行してみようとする当たりナツパはよい生徒ではあつたが、いかんせんフレイの説明では要領を得なかつた。

二人は示し合わせたように、桃白白へ視線を戻す。

彼は再びどん波を撃つ準備をしていた。指先に灯った光と、ナツパの圧縮された気弾を黙つて見比べる。

「…………」

「おい、桃白白」

明らかに違う、違うのだがどう説明したものか。

振り返つてみれば彼は実践部分の、いわば技の使い方を教えるのが担当で、技そのものの伝授は余り経験がない。

鶴仙流の技は彼になじみすぎていて、例えるなら指はどう動かすものか聞かれているのに近かつた。

「…………」

「…………どうした？」

ナツパが自分の手元から注意をそらした瞬間、彼の氣弾をどん波が正確に貫く。

威力を多少調整したのか球体は光線によつて縁側へと押し出され、十分に離れたあたりで大爆発を起こした。

周囲の気が倒れ、庭が二回りほど広くなる。

突然の事にフリーも、ナツパもぽかんと目を見開いて口を開ける

「お、おお……」

「…………」

「いや……」

「…………」

「……せめてなんか言え！」

涼しい顔で無言を貫く桃白白に、どなるナツバ。

フリーイだけは何となく察している。言いたいことが無かつたり、言いたくないことがあつたり、都合が悪くなると意味深にだんまりを決め込むのだ、この男は。

「……じつちゃん連れてくる？」

「じつちゃん? 誰だそりや」

「私と、桃白白の師匠。簡単に言うとどどん波作つた人」

「兄ちゃんか……大丈夫か?」

「フリーイザたちの話の事?」

フリーイがラディツツから始まる一連の流れとフリーイザの危険まで説明した際、鶴仙人はひっくり返つてしまつた。

曰く、一つ一つの事項は納得できるものだが、感情が追い付かなかつた、らしい。自分の常識を超えることを真正面から受け入れようとしたすぎたのだろう。

そのこともあり、ナツパをはじめとした三人は、道場の本堂ではなく離れて過ごしている。

ちなみに、これを聞いた亀仙人は石頭のクソ真面目と、誰にも聞こえないようにポツリ零した。

「……いや、そつちじやないが、まあいい。お前が直接呼びに行け」

「了解」

彼女の背中を見送りながら、桃白白はちよつと、いや大分、やだなーと思つていた。もちろんそんなことはちつとも顔には出さなかつたが。

数分後、フーアイは一人の老人を伴つて離れへ現れた。

奇妙な飾りのついた帽子が特徴的で、背は低く、明らかに年老いて体中にしわが深く刻まれている。

サングラスに隠れて目元は見えないが、鼻の形と顎の輪郭は桃白白によく似て見えた。

なるほど、そういえば先ほど兄と呼んでいたなと思い出して、脇に立つてゐる水にぬれた猫のようなフーアイに、ナツパはギョツツとする。

何事かと桃白白の方を見れば、彼も気を付けの姿勢で明らかに少しだが、緊張していた。

「……桃白白、フリーから話は聞いたぞ」

「うむ……」

「儂が言いたいことは分かつておるな」

「うむ……」

「そこに直れい! 修行のし直しじや馬鹿弟子ども!」

怒鳴り声と共に、彼ら二人はきちんと正座でその場に座る。

くどくどと始まるお説教は内容としてはごく単純なもので、要するに免許皆伝まで修めた二人が、鶴仙流の奥義であるどん波の説明もろくにできないとはどういうことだ。

怒涛の勢いとうなだれて反論もせず、大人しく聞いているその様子を、ナッパはぽかんとしてみているしかない。

これははどういうことだろうか。彼ら二人共がひれ伏すほどの、圧倒的な実力者だとでもいうのだろうか、このちっぽけな老人が?

「で、そこの。ナッパといったか」

じろ、とサングラスの下の眼に鋭く射抜かれ、思わず彼はびくりと肩を揺らした。

怖れたというわけではない。教師に説教を食らっている生徒を見ていたら、突然教師がこちらに呼び掛けて来たようなもので、無関係であつてもやはり少し背筋は伸びてしま

まう。

「どどん波を教えるのはいいが、そもそも基本的な気のコントロールは理解しているのか？」

「コントロールつてのは、ようは空飛んだり、エネルギー弾を撃つたりする、あれだろ？」  
「間違つてはいないが、本質でもない。ちょうどよいから、基礎の基礎から教えてやろう」

「あ？」

なにが悲しくて、このナツパ様が地球人からエネルギーの扱いを教わらなくてはならないのだと、彼は苛立ちをあらわにする。

が、ほとんど同時に四つの視線が魔貫光殺砲よりもするどく彼の顔を貫いた。彼らは言つている、いいから黙つて話を聞けと。

あまりにも鬼気迫るような、必死な、それでいて戦場で見るのとはまるで種類の違う表情についつい気圧されてしまう。

加えて。

「おぬしは戦闘力のコントロールを学びたいのだつたな。戦闘力のコントロールとはすなわち気のコントロール。これを身につければおぬしも戦闘力を自在に操れるようになる」

そう言われてしまうと、ナツバとしても聞かない理由はない。仕方なくフーアと並んで胡坐をかき、一度話だけは聞いてみることにした。

# 其之五十八 ドロツプ・オア・ベツト

「フリーザの野郎を殺せるなんて思つてゐるなら」

と、ナッパは言つた。

「お前らはアイツのことを何もわかつちやいない」

話を聞いていた界王もそうだと割り込んでくる。

「フリーザには決して手を出すでないぞ！」

お前たちだけではない、地球や他の星の皆のために言つておるのだ！」

「けどよお、界王様。フリーとナッパの話だと、そのフリーザつちゅうやつは、ほつとい  
ても地球にくるんじやねえか？」

「ぐつ、それは……」

痛いところをつかれたのか、押し黙り頭を下げる。

彼らの予測は恐らく正しい。ナメック星のドラゴンボールを手に入れれば、フリーザ  
は必ず地球のドラゴンボールも狙つてくる。

仮にドラゴンボールがすでに使えなくなつていてことを知つたとしても、そうですか  
と黙つて帰る連中でもない。

環境のいいこの星は、あつというまに原住民を皆殺しにされ、高値で何処か他の星のものに売り飛ばされことだろう。

「それにさ」

事態の深刻さを理解しているのかいないのか、分からぬよう明るい声で悟空はつづける。

湧き上がつてくるわくわくがにじみ出でてしまつてゐるのは、自覺しているのかしていなかつた。

なんとなく次にくる言葉が分かつてしまい、天津飯たちは呆れの混ざつた微笑みを浮かべた。

「そんなんに強えやつがいるつてなら、オラ、闘いてえ」

「がつはつはつは！ 威勢がいいじやねえか力力ロツト！」

思いもよらぬ返答に、ぽかんと口を開けて呆然とした界王を置き去りに、歯切れのいい笑い声が電話口から響く。

「なんのかんのと言つてたが、お前も結局サイヤ人つてわけだ！」

「へつ、そうかもな」

酷く満足げな口調に、冷たく聞こえる程あつさりと返しながら、しかし悟空も笑つていた。

「よおし、決めた！

本気でフリーザを殺るつてなら、情報提供なんてケチなことは言わねえ  
このナツパ様もお前らと一緒に闘つてやる」

「えっ?!」

ぎよつと声を上げたのはクリリンたちだけではない。

「なんだフリーイ、心強いだろう?」

親指で自分を指さす仕草は多少格好つけすぎな感がある。

が、フリーイが渋い顔をしているのはそれが理由ではない。

彼女はそもそも、ナツパをナメック星へ連れて行くつもりは全くなかつた。

理由は単純、ベジータと合流して手を組まれたら、今度こそ手が付けられないからだ。  
だからここ数日、彼の傷が悪化するようなことも特に止めなかつたし、治療も変わらず最低限だつた。

パワーダウンすればするほど助かるからだ。

しかし、ナメック星についてさらにこちらの戦力として扱うとなれば、話は全く変わつてくる。

まずナツパには傷の治療に専念してもらわなければならぬし、そのうえでベジータの何倍も上を行くフリーザに対抗するため、共にトレーニングを積ませた方がいい。

が、その場合ベジータと手を組まれた時の危険度もグツと上がる。

とはいへ、本来なら殺し合いをしていた相手、検討するまでもない提案のはずだ。

話をややこしくしているのは、と彼女の悩みを察した桃白白はナツパを眺めた。ほんの数日共に過ごしていただけだが、分かりやすい彼の人物像はすでにすっかり分かつていて。

粗野で残虐、間違ひなく悪党である一方、基本的には気持ちのいい男で、案外真面目で面倒見の良い部分もある。

つまり、この提案を使って悟空たちを油断させ、背後から襲おうなどという小細工を考えるタイプでは全くない。

彼が力を貸すと言えば、本気で協力してくれるだろう。

そして、その実力は確かなものであるし、気のコントロールを理解していなかつたという伸びしろもある。

裏切るかどうかは、ベジータと状況次第と言つたところか。

まさしくハイリスク、ハイリターン。

眉間に谷のような深いしわを寄せるフリーの顔など、桃白白は見たこともなかつた。額に脂汗すら浮かべ、絞り出すように彼女は問いかける。

「いいの？」一応仲間つて言うか、所属してることでしょ。

裏切ることになるわけだし、ナツパはそれでいいとしても、ベジータ的にはどうなのさ」

「なんだそんなことか。どうせ戻つたところで、命令違反で殺されかねねえ。

それに、ベジータのやつだつて協力するはずだぜ。フリーザのやつには長年の借りがたっぷりとあるからな」

「ベジータもか……」

電話の向こう、病室でクリリンがしみじみとつぶやいた。

メリットとデメリットを天秤にかけ、亀仙人たちが唸つてはいる一方で、悟空はピンと来ていなくて、悩むという発想すら湧いていない。

「ひやー！ ナツパだけじゃなくベジータもか！ よっぽど強いんだな、そのフリーザつてやつは

こうしちゃいられねえ、ちょっとでも修業しねえと！」

「お、おい悟空！」

「なにしてるだ悟空さ！ 起き上がるのにも一週間かかるつて、お医者様にいわれたばつかしだべ！」

「などたと聞こえて来た物音とチチの声に、ナツパはまた楽しげに笑つてはいる。悩む材料がまた増えたことで、さらに頭が重くなつたような気がしたフリーは、とう

とう桃白白のほうをちらりと見る。

「……ダメだと言ったときのことも考えてみろ」

言われて彼女ははつとした。

この提案を断つた場合、ナツパは間違いなく腹を立てるだろう。

こちらになにかたくらみがあるのでと疑い、裏切りにつながる可能性もある。

そうでなくとも、今のなんとなくなし崩し的な、ぬるい関係は一瞬で崩れるに違ない。

「そもそも、一切賭けもなしに勝てる程ぬるくはあるまい」

「…………それもそうかあ」

「あん？ どうかしたか？」

観念すると同時に深々とため息をついた彼女を、ナツパは不思議そうに見ている。

「いや、なんでもない……改めてよろしく、ナツパのおっさん」

「おうよ」

「あと、そうと決まつたら傷が治るまで絶対安静だから」

「なんだと!?」

握手でも出来そうな雰囲気だったが、きつぱりとしたフリーの言い草にナツパは目を剥いた。

治療用のメディカルマシーンもないような星での絶対安静とは、傷が治るまで寝たきりだという事だ。

そしてそれは彼に言わせれば、死ぬほど暇というやつだつた。

喚く彼の胸の傷を容赦なく正確に殴り、桃白白が黙らせる。

「で、どうするつもりだ、フーアイ」

「……とりあえず、ちよつと行くどこが出来た。多分、行き返りの時間も入れて3、4時間ぐらいかな。長くとも半日はかかるない」

「そうか」

「おい、どこに行くつてんだ？」

痛めつけるだけでない意図が伝わつたのだろう、ナッパは殺氣立つた顔で胸を押さえているものの、桃白白に何か怒鳴ることはしなかつた。  
しかし不満げな表情を隠す様子も無く、フーアイに問う。

「神殿」

「シンデン？　まさか神頼みでお祈りしに行くつてんじゃないだろうな？」

「まさか。本当に神様が住んでる——住んでたとこだよ、死んだつてかおつさんたちが殺しちゃつたけど」

「……何言つてんだ？」

「また今度話すよ、そのうちね」

じや、と桃白白にあとは任せて彼女は飛び出していく。

とりいそぎ彼女がしなければならないことは、本調子を取り戻した、だけでなく死の淵からの復活でさらにパワーアップしたナッパ以上の強さを手に入れることだ。

そうでなければ万一のことがあつた時、彼を止められない。気が変わつたの一言で、こちらを虐殺できる相手であることに変わりはないのだ。

「精神と時の部屋、か……悟空から話聞いただけでも、最悪って思つたけど」

背に腹は代えられない、と彼女は前へ向き直つた。

一度鍛え直してばいばい拳を磨き、最低でも今の悟空と天津飯の実力に追いつかなければならぬ。

負ければ今度こそ、地球ごと何もかも失うのだから。